

# 富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

- 一番町共同ビル(仮称)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2014

富山市教育委員会

# 富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

- 一番町共同ビル(仮称)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2014

富山市教育委員会



調査区遠景（南から）



調査区遠景（西から）



調査区近景（南西から）



調査区近景（東から）



SD01 [上層面背割水路]近景（東から）



SD03 [下層面背割水路]近景（西から）



SD03 [下層面背割水路]石積み近景（西から）



「万治年間富山旧市街図」万治年間（1658～1661年頃）



「御調理富山絵図」寛文六（1666）年



「御城内外御焼失御絵図面」天保年間（1830～1844年）



「越中富山御城下絵図」安政元（1854）年

富山城下「一番町」周辺の絵図（富山县立図書館蔵）  
絵図の中央付近に東西に延びる「背割水路」が描かれる。※赤枠：本誤合区の位置

## 例 言

- 1 本書は、朝日印刷株式会社と株式会社北陸銀行による一番町共同ビル(仮称)新築工事に伴う富山城下町遺跡主要部の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、朝日印刷株式会社と株式会社北陸銀行の発注を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センター監理のもと、株式会社アーキジオが実施した。
- 3 本調査の概要は次のとおりである。

・調査期間	発掘作業 平成25（2013）年11月21日～平成26（2014）年 2月28日
	整理作業 平成26（2014）年 3月 1日～平成26（2014）年 8月29日
・調査面積	423m <sup>2</sup>
・監理担当者	野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）
・調査担当者	酢谷恭子、基峰 修（株式会社アーキジオ）
- 4 発掘調査から報告書の作成において、次の各氏・機関よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

浦畠奈津子 神島伸郎 坂森幹浩 能登有紀 林 勝彦 南谷長俊 渡辺 晃  
清水建設・石黒建設・近藤建設・前田建設共同企業体 富山市郷土博物館
- 5 出土遺物・原図・写真は富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。
- 6 本書に掲載した絵図資料の使用については、富山県立図書館・富山市郷土博物館の許可を得た。
- 7 自然科学分析は、動物遺存体分析を納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター嘱託）が行い、その他の分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。分析結果は第4章に掲載した。
- 8 本書の執筆は、第1・2章、第5章第5節を野垣、第5章第3節を開 容子（株式会社アーキジオ）、第4章第2～4節を除くその他を酢谷の協力を得て基峰が行った。各々の文責は文末に記した。編集は基峰が行った。

## 凡 例

- 1 方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 座標は公共座標（世界測地系第VII系）を使用し、南北をX軸、東西をY軸とする。
- 3 遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで表記する。

SD（溝）	SE（井戸）	SK（土坑）	SP（ピット・柱穴）	SX（その他遺構）
-------	--------	--------	------------	-----------
- 4 縮尺は全体平面図1/200、遺構平面図及び断面図1/80・1/40、遺物実測図1/4を基本とし、縮尺の異なる遺物はスケールで個別に表記した。
- 5 出土遺物の番号は、遺物実測図・遺物観察表・図版とともにに対応する。
- 6 土層及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準拠した。
- 7 掘図中のトーンは次のことを表す。

■：地山 ■：赤漆 □：黒漆 ■：油煙・炭化

## 目 次

巻頭図版

例言・凡例

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 発掘作業と整理作業の経過 .....	1
第3節 調査日誌抄 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	6
第3章 調査の方法と成果 .....	10
第1節 調査の方法 .....	10
第2節 基本層序 .....	11
第3節 遺構 .....	12
第4節 遺物 .....	35
第4章 自然科学分析 .....	73
第1節 概要 .....	73
第2節 古環境及び植物利用について .....	73
第3節 木製品について .....	93
第4節 動物遺存体分析について .....	104
第5章 総括 .....	109
第1節 町屋構成造構の構造と性格 .....	109
第2節 肥前陶器（朝鮮唐津）瓶について .....	115
第3節 越中瀬戸印花丸皿について .....	117
第4節 背割水路出土の土人形「仲抱き」について .....	120
第5節 本調査の総括と周辺調査との比較 .....	123
引用・参考文献 .....	128
図版	
報告書抄録	

## 図 目 次

第1図	富山平野の地形分類図	4
第2図	富山城縄張現況比較と本発掘調査区位置	5
第3図	江戸時代の絵図にみる本調査区の位置	9
第4図	基本層序	11
第5図	下層遺構全体平面図	13
第6図	SD02(背割水路) 平面・立面図	14
第7図	SD03(背割水路) 平面・立面・断面図	15
第8図	SD03(背割水路) 断面図	16
第9図	SD03(背割水路)内上水施設 平面・断面図	17
第10図	SD05・06 SE03・04 平面・断面図	18
第11図	SE06 SK31・32 平面・断面図	20
第12図	SK08・09・10・13・14・16・17・18・22 平面・断面図	22
第13図	SK23・25・26・27・29・30・33 SP03 平面・断面図	24
第14図	SX03・04・05・09 平面・断面図	26
第15図	SX07・08 平面・断面図	27
第16図	SX10 SK21 SP04・05・06 平面・断面図	29
第17図	上層遺構全体平面図	31
第18図	SD01(背割水路) 平面・立面・断面図	32
第19図	SD01(背割水路) エレベーション図	33
第20図	遺物実測図1 [下層面:肥前磁器]	42
第21図	遺物実測図2 [下層面:肥前磁器]	43
第22図	遺物実測図3 [下層面:肥前磁器、肥前系磁器]	44
第23図	遺物実測図4 [下層面:肥前系磁器、唐津、唐津系磁器、瀬戸系磁器、瀬戸・美濃]	45
第24図	遺物実測図5 [下層面:瀬戸系磁器、瀬戸・美濃]	46
第25図	遺物実測図6 [下層面:瀬戸系磁器、瀬戸・美濃]	47
第26図	遺物実測図7 [下層面:越中瀬戸]	48
第27図	遺物実測図8 [下層面:越中瀬戸、土師器、信楽系磁器、丹波系陶器]	49
第28図	遺物実測図9 [下層面:越前、瓦質土器、輸入陶磁器、不明陶磁器]	50
第29図	遺物実測図10 [下層面:土人形、泥面子、土製品他、羽口]	51
第30図	遺物実測図11 [下層面:羽口、鉄滓、石製品]	52
第31図	遺物実測図12 [下層面:石製品、錢貨、煙管、金属製品他]	53
第32図	遺物実測図13 [下層面:漆器、下駄]	54
第33図	遺物実測図14 [下層面:下駄]	55
第34図	遺物実測図15 [下層面:その他木製品]	56
第35図	遺物実測図16 [下層面:その他木製品]	57
第36図	遺物実測図17 [下層面:その他木製品]	58
第37図	遺物実測図18 [下層面:その他木製品]	59
第38図	遺物実測図19 [下層面:その他木製品、瓦]	60

第39図 遺物実測図20 [上層面：統制磁器、九谷磁器、信楽系磁器、不明磁器、土製品他、錢貨、 金属製品、木製品、瓦] .....	61
第40図 主要珪藻化石群集 .....	76
第41図 花粉化石群集 .....	78
第42図 植物珪酸体群集 .....	80
第43図 大型植物遺体群集 .....	82
第44図 SK-26 (No.530)出土メロン類種子の大きさ .....	83
第45図 SK-26 (No.530)出土メロン類種子の長さ .....	83
第46図 硅藻化石・植物珪酸体 .....	88
第47図 花粉化石 .....	89
第48図 大型植物遺体 (1) .....	90
第49図 大型植物遺体 (2) .....	91
第50図 大型植物遺体 (3) .....	92
第51図 赤漆片のX線回折図 .....	96
第52図 木材 (1) .....	99
第53図 木材 (2) .....	100
第54図 木材 (3) .....	101
第55図 木材 (4) .....	102
第56図 漆塗膜 .....	103
第57図 出土動物遺存体 .....	108
第58図 江戸大下水の構造 .....	110
第59図 出土下駄の分類 .....	112
第60図 遺構の変遷 .....	113
第61図 江戸時代後期 (19c前半)の町屋構成 .....	114
第62図 肥前陶器 (唐津)瓶 .....	116
第63図 見込み内底面に十六弁菊を印花する主な越中瀬戸丸皿 .....	119
第64図 主な土人形「仲抱き」と生産地 .....	121
第65図 描かれた土人形「仲抱き」 .....	122
第66図 背割水路 (二期)の底面構造と現地表面の標高 .....	124
第67図 絵図にみる背割水路の変化 .....	125

## 表 目 次

第1表 遺構一覧表 .....	62
第2表 下層面：陶磁器・土器遺物観察表 .....	63
第3表 下層面：土製品他遺物観察表 .....	68
第4表 下層面：鋳治関連遺物観察表 .....	69
第5表 下層面：石製品遺物観察表 .....	69
第6表 下層面：金属製品遺物観察表 .....	69
第7表 下層面：木製品遺物観察表 .....	70

第 8 表	下層面：瓦遺物観察表	71
第 9 表	上層面：磁器遺物観察表	72
第10表	上層面：土製品他遺物観察表	72
第11表	上層面：金属製品遺物観察表	72
第12表	上層面：木製品遺物観察表	72
第13表	上層面：瓦遺物観察表	72
第14表	分析試料一覧（土壤・種実遺体）	73
第15表	珪藻分析結果	77
第16表	花粉分析結果	79
第17表	植物珪酸体含量	80
第18表	微細植物片分析結果	81
第19表	種実同定結果	83
第20表	樹種同定結果	93
第21表	分析試料一覧（漆塗膜・顔料分析）	95
第22表	上層面出土動物遺存体集計表	107
第23表	下層面出土動物遺存体集計表	107
第24表	擾乱出土動物遺存体集計表	107
第25表	遺跡出土の主な土人形「狛抱き」	121

## 図 版 目 次

図版 1	下層面遺構（1） 調査区全景（上から）　調査区全景（北西から）
図版 2	下層面遺構（2） SD03「背割水路」全景（南西から） SD03北側石積み西部（南から）　SD03北側石積み中央部（南から） SD03南側石積み中央部（北から）　SD03南側石積み西部（北から）
図版 3	下層面遺構（3） SD01・SD02・SD03「背割水路」断面（東から） SD03内上水施設（東から）　SD03内上水施設（北から） 上水施設設置によるSD03石積みの改修（南東から）
図版 4	下層面遺構（4） SD02「背割水路・中央の石列」の検出（西から） SE03完掘（東から）　SE04下部側板完掘（南東から）　SE06完掘（東から） SK23断面（東から）　SK25断面（東から）　SK29断面（南から）
図版 5	下層面遺構（5） SK26完掘（東から）　SK30遺物出土状況（南から）　SX03完掘（北から） SX07完掘（西から）　SX10・SK21完掘（南東から）　曲物底板出土状況（北東から） 調査区北壁層位（南から）

図版 6	下層面遺構 (6)									
	調査区 [B区]全景 (西から)		調査区 [B区]近景 (西から)							
	SD03 [背割水路]南側石積み根石 (西から)		SD06 完掘 (南から)							
図版 7	上層面遺構									
	調査区全景 (東から)		SD01 [背割水路]完掘 (東から)							
	SD01 北側石積み東部・胴木 (南から)		SD01C-C'断面 (東から)							
図版 8	下層面遺物 (1)									
	SD02・03 SD03									
図版 9	下層面遺物 (2)									
	SD03	SE06	SK16	SK18	SK25	SK30	SX03			
図版10	下層面遺物 (3)									
	SX07	SX10	SD02・03	SD03	SK30	包含層				
図版11	下層面遺物 (4)									
	SD03	SE03	SK16	SK18						
図版12	下層面遺物 (5)									
	SK26	SK30	SX10	SD02・03	SD03					
図版13	下層面遺物 (6)									
	SD03	SK30	SX04							
図版14	下層面遺物 (7)									
	SX04	SD03	SD02・03	包含層						
図版15	下層面遺物 (8)									
	SX07	SX09	SD02	SD02・03	SD03	SK29	SX03	包含層		
	B区搅乱									
図版16	下層面遺物 (9)									
	包含層	SD02	SD02・03	SD03	SK09	SK13	SK16	SK30		
図版17	下層面遺物 (10)									
	SD02	SD02・03	SD03							
図版18	下層面遺物 (11)									
	SD05	SK25	SK30	包含層	SD02・03					
図版19	下層面遺物 (12)									
	SD02・03	SD03	SD03内上水施設	SK18	SK26	SX03	SX04	SX07	包含層	
	曲物底板									
図版20	上層面遺物									
	SD01	SX01	包含層							

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

富山城下町遺跡主要部は、平成25年度に富山市教育委員会が実施した試掘調査で確認した遺跡である。城下町のうち旧北陸街道沿いの町屋主要部を埋蔵文化財包蔵地として、平成25年7月に『富山市遺跡地図』に搭載した。本調査区の北部はもともと「富山城跡」の範囲に含まれているが、実態は城下町にあたることから標記のとおり呼称する。

平成24年11月に設計会社から当該地での朝日印刷株式会社・株式会社北陸銀行の共同ビル建設について、埋蔵文化財取扱いの問合せがあり、事前協議の場をもつことになった。建築計画は地上9階建ての鉄筋コンクリート造とされた。今後の工事のスケジュールを確認するとともに、試掘調査をすること、その方法・時期等について協議を行った。

平成25年5月22日に工事主体者である両社から文化財保護法93条に基づく届出が提出されたことを受け、試掘調査を6月6・7日に行った。対象面積756.16m<sup>2</sup>の範囲に4本のトレンチ（総延長64.2m）を設定し、遺構・遺物の所在状況を確認した。対象地の東半部は、約20年前まで6階建ての鉄筋コンクリート造の建物が建っていたため、ほぼ全域で地下約2mまで搅乱が及んでいたが、北東部の一角のみ遺跡の残存がみられた。西半部は、比較的残りが良く、近代とみられる背割水路を確認したほか、その下層に江戸時代後期を中心とする溝や土坑が所在していた。遺跡所在面積は合計465m<sup>2</sup>であった。

試掘結果を受けて工事主体者側と協議を行ったが、建物が敷地のほぼ全域を占め、建物構造上も遺跡の保存が不可能なことから、損壊を受ける423m<sup>2</sup>について記録保存のための発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、工事主体者が民間発掘調査会社へ委託し、埋蔵文化財センターが工事主体者からの監理依頼を受け調査の監理にあたった。

発掘調査は、朝日印刷株式会社・株式会社北陸銀行から発注され、同年11月15日から平成26年8月29日を業務期間として株式会社アーキジオが受託した。11月15日に富山市教育委員会、朝日印刷株式会社、株式会社北陸銀行、株式会社アーキジオの四者で協定を締結し、調査に着手した。

## 第2節 発掘作業と整理作業の経過

平成25年11月15日から準備作業と調査範囲の設定を行い、21日から発掘作業に入った。調査区は2地区に分かれ、西側調査区をA区（387m<sup>2</sup>）、東側調査区をB区（36m<sup>2</sup>）とした。降雪前にできるだけ調査を進捗させるため主体となるA区を先行して実施した。排土置場の関係から、A区の調査完了後、埋戻しを行い、その後B区の調査に移った。

A区の表土掘削は11月21日から23日まで行った。上層の背割水路を検出した面でいったん掘削を止め遺構検出・遺構掘削作業を行った。上層面における遺構は、背割水路が中心で、搅乱が多くみられた。測量までの作業を12月25日に終えた後、引き続き下層への調査に取りかかった。下層までの遺物包含層は厚く、粘土質であることにくわえ、冬期間の作業であったため掘削に困難を伴った。包含層は相当量の遺物を含むことから、遺物の出土状況を考慮しながら重機と人力を併用して慎重に掘削を行った。

平成26年1月14日から下層面の遺構検出と遺構掘削を行った。作業効率上、最初に背割水路を集中的に掘削し、その後、他の遺構の掘削を行った。これらの作業と併行して写真撮影・測量を行った。

2月11日には市民を対象とした現地見学会を実施し、背割水路を中心に紹介した。真冬の開催にもかかわらず、400名以上の参加者があり、関心の高さがうかがえた。

現地見学会終了後に空中写真撮影を実施、精査を経て2月17日にA区の調査を完了した。

A区の埋戻し後、B区の調査に入った。B区は下層面近くまで搅乱が及んでおり、遺構検出面まで重機による掘削を行った。遺構数は少なく短期間で完了した。2月24日に埋蔵文化財センター所長による終了確認を経て、2月27日には撤収を終えて、工事主体者へ現地を引き渡した。

発掘作業中はおよそ2週間に1回、工程会議の場を設け、協定を結んだ四者にビル建設にあたる共同企業体を含めた五者が、調査の進捗と以後の予定、調整事項を協議しながら進めた。

その後、整理作業を実施し、平成26年8月29日に発掘調査報告書(本書)を刊行した。 (野垣)

### 第3節 調査日誌抄

平成25年

〔11月〕

21日：バックホウでの表土掘削を開始。

23日：表土掘削終了、発掘道具及び機材搬入。

25日：基準点測量及びグリッド杭打ち。

人力による掘削及び遺構検出を開始。

30日：SD01(背割水路)検出、掘り下げの開始。

〔12月〕

3～9日：SD01(背割水路)掘り下げ、断面図作成。

16～18日：SD01(背割水路)平面図作成、断ち割り。

20～23日：土坑等検出と掘り下げ、断面図・平面図作成。

25日：上層面清掃、全体写真撮影、上層面調査終了。

26～28日：バックホウでの堆土移動。

平成26年

〔1月〕

7～8日：ダンプによる堆土搬出。

9～13日：包含層掘削。

14日：下層面遺構検出の開始、グリッド杭打ち。

16～18日：SD03(背割水路)検出、掘り下げ開始。

20～27日：SD03(背割水路)掘り下げ、断面図作成。

28～31日：土坑等掘り下げ、断面図作成。

〔2月〕

1～6日：溝等掘り下げ、断面図・平面図作成。

7日：SD03(背割水路)清掃、全景写真撮影。

11日：現地見学会開催、空中写真撮影。

13日：調査区全体平面図作成。

14～17日：SD03(背割水路)断面図作成、A区下層面調査終了。

18日：B区バックホウによる表土掘削。

19～21日：B区下層面遺構検出、掘り下げ、断面図作成。

22～24日：B区全体写真撮影、平面図作成、B区下層面調査終了。

25～27日：機材搬出、現地調査完了。

発掘作業・整理事業の従事者(男女別、五十音順)

石田哲雄、鏡 武夫、柿岡和義、細井 茂、近藤智秀、斎藤勝利、

砂原憲彦、道口昭三、西川精一、林 達雄、宝田紀代春、船木薫夫、

丸山大貴、山口 治、山口俊明、横川厚雄

菅頭明日香、関 容子、中山佳子、藤井美紀、藤岡美由紀、堀田伊通子



現地見学会



SD03(下層面背割水路)掘り下げ



SD01・02・03(背割水路)断面測量

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

富山市は、平成17年の市町村合併により、富山県の中央から南東部まで県域の三分の一近くを占める広大な市域となった。北は富山湾、東は立山連峰、西には丘陵・山村地帯が連なり、南は岐阜県境に接して森林が広がる。

富山城下町遺跡主要部は、市域北部の中心市街地に位置する。調査地は富山市一番町である。市域を南北に縦断する国道41号線と旧北陸街道にあたる平和通り交差点の北西角にあたり、都市化・商業化が進んだ地域である。

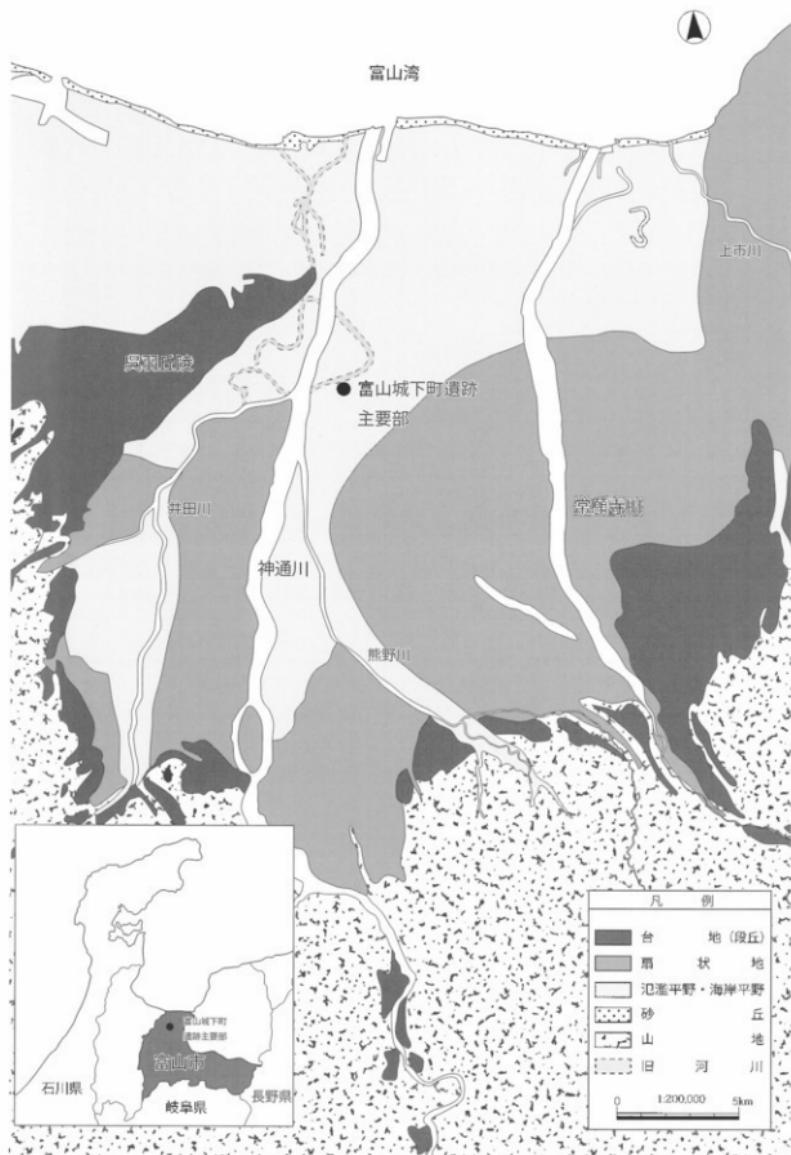
富山県の平野は、県域の中央を南北に延びる呉羽丘陵により東西に分けられ、それぞれ「呉東平野」、「呉西平野」と呼び慣らわされる。呉東平野は、さらに東から黒部平野、新川平野、中部平野に細分され、富山市中心市街地はこのうちの中部平野に位置する。この中部平野を狭義の意味での富山平野と呼ぶこともある（新越中風土記刊行会1978）。以下、富山平野とする場合は、この狭義の場合を指す。富山平野は、東側は新川平野と接し、西側は呉羽丘陵で限られている。常願寺川、神通川、井田川などの扇状地と氾濫平野・海岸平野が発達する。特に常願寺川は県南東部の山岳地帯に水源を持ち、上流には立山カルデラの大崩壊地であることから莫大な量の砂礫が供給され、広大な扇状地を形成している。急流河川でもあることから流域では過去に何度も洪水の被害に見舞われている。富山城はこの常願寺川の扇端付近に位置している。立山連峰や常願寺川水系からの伏流水が扇端に位置する富山城下町付近で湧水し、周辺の発掘調査でも多くの井戸が検出されている。

一方、富山城は神通川下流の右岸に位置し、神通川との関係も深い。富山市街地以北は、幾筋もの旧流路が認められ、自然堤防が発達している。現在、神通川は富山城の西側を真っ直ぐに北流するが、江戸時代以前は瘤状に蛇行し、富山城のすぐ北を湾曲して流れていた。富山城の東は馳川が流れ、西・北・東の三方を川で囲まれる要害となっていた。現在城址公園となっている旧本丸・西ノ丸は標高約10mの神通川の自然堤防上にあり、南に位置する二ノ丸、三ノ丸、城下町はやや低い標高8.8m前後の後輩湿地に立地する。こうした立地環境に対応して、本丸・西ノ丸はしまりの強い砂質土からなり、城下町部分は水分の多い粘質土・シルトを主体とする。さらに、城下町の微地形を標高からみると、南よりも北、東よりも西が低い傾向があり、全体としては南東から北西に向かって低くなる（國香1995）。

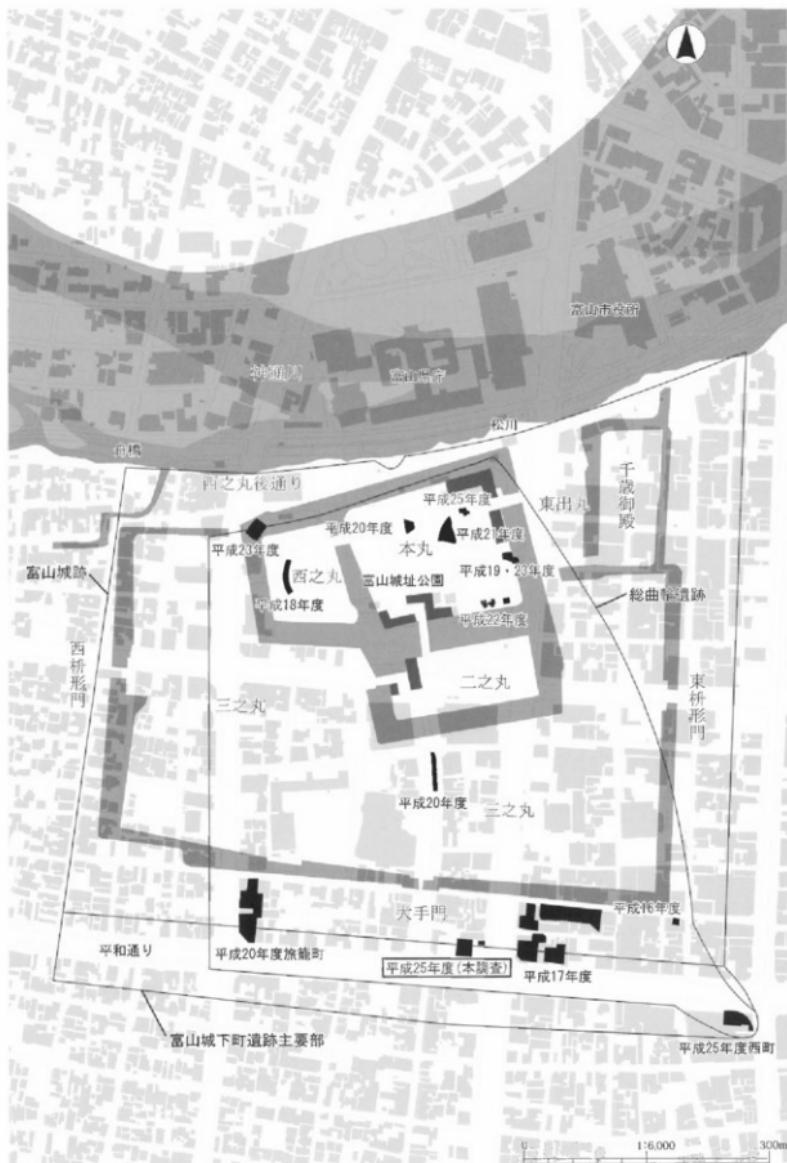
蛇行した神通川は、洪水の被害を度々生じさせたため、明治から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越工事が行われた。工事により富山城北側を流れている旧河道は、廃川地となって大部分が埋め立てられ、県庁や市役所が建つことになった。旧河道は規模を縮小して現在松川としてその名残をとどめている。

本調査区に南面して東西に延びる現在の平和通りは、江戸時代の北陸街道と重なり、本調査区の約250m東で飛騨街道の起点と交わる。越中の産物が神通川や馳川を利用して富山城下町に集まり、これらの街道を通って飛騨方面や各地に運ばれた。富山城下町は、水陸交通の要衝に位置していたことがうかがえる。

(野垣)



第1図 富山平野の地形分類図



第2図 富山城縄張の現況比較と本発掘調査区位置（富山市郷土博物館作成図を改変）

## 第2節 歴史的環境

### (1) 富山城・城下町域における室町時代以前の様相

これまでの富山城と城下町の発掘調査で、築城前にあたる室町期以前の遺構・遺物を一部確認している。

平成19年度に行った本丸東部の発掘調査で、土塁下部から刀装具(笄)や赤漆椀、陶磁器が出土し、室町期の武家居館に関わる遺構の存在が推測された。その下層では平安時代の湿地の存在が明らかになり、築城前の微地形が明らかになった。平成22年度には城址公園西部(旧西ノ丸)の工事立会で、「宅持」と墨書きされた奈良時代後期の須恵器が出土した。付近に官衙関連施設が存在した可能性がある。

室町期以前の遺構・遺物は、現在のところ点的な確認にとどまっているが、早くから当該地が重要な位置を占めていたことが推定できる。

なお、富山城築城前にあたるこれらの遺跡は「縦曲輪遺跡」とし、「富山城跡」や「富山城下町遺跡主要部」とは別の埋蔵文化財包蔵地としている。

### (2) 戦国時代の富山城

**戦国期富山城の概要** 富山城は、越中守護代神保長職により築造されたのをはじまりとする。天文12(1543)年のことと考えられている。ここから前田氏の居城となるまでのおよそ60年は、17世紀以降の近世富山城の繩張りと大きな違いがある。

戦国期富山城は頻繁に城主の入れ替わりが生じた。神保長職は、富山平野南部の太田保への進出の足がかりとして富山城を築いたが、永禄3(1560)年には上杉謙信が神保長職を追い、富山城を攻略した。その後、反上杉勢力である一向一揆による占拠などがあったものの、天正4(1576)年、謙信は一揆勢を富山周辺から排除し、越中全域をほぼ支配下におさめた。謙信の死後は織田信長の勢力が越中への進出を強めた。その中心となったのが信長に仕える神保長住とその支援のため越中に派遣された佐々成政である。佐々成政は、本能寺の変後、農臣秀吉から越中支配を認められたが、後に成政は徳川家康・織田信雄に味方するなどして秀吉と対立した。このため天正13(1585)年、秀吉による征討を受け、富山城は破却された。

戦国期富山城は、城址公園の1kmほど南の星井町付近にあったとする説が有力であったが、平成14年度から行った城址公園整備に伴う一連の試掘調査・本調査によって、当該期の遺構が良好に残っていることが明らかになり、近世富山城と同じ現城址公園に存在していたことが確実となった。

**発掘調査の成果** 城址公園の中央では、城を東西に分けるとみられる堀が確認され、標高差から東側の郭が本丸、西側が二ノ丸と推定している(富山市教委2004)。城址公園の北部ではこれに直交する東西方向の薬研堀を検出した。これら堀の配置から推定される繩張りは、近世富山城と大きく異なっている。

このほか、本丸東部で土採り跡とみられる鍛先による凹凸面や(富山市教委2006a・2008)、北東部で井戸(富山市教委2009)を検出した。二ノ丸では鍛冶遺構とみられる焼土が見つかり、周辺からは羽口、鍛造剥片、鉄滓、土壁片が出土した。砥石や刃物の表面の仕上げに使う雲母も見つかり、研磨までの工程を行っていたと推定できる(富山市教委2004)。

また、近世の城下町範囲にあたる旅籠町地内の平成20年度調査では、15世紀後葉から16世紀後葉の溝・土坑を検出している(富山市教委2010)。溝は直交し、区画溝の可能性がある。戦国期富山

城と直接結び付くか断定はできないが、城下町遺構の可能性がある。

戦国期富山城の遺構はなお点的な把握にとどまっており、全体構造を把握するまでに至っていない。

### (3) 近世の富山城

**近世富山城の概要** 慶長2（1597）年に富山城に入った加賀二代藩主前田利長は、翌年家督相続のため金沢に移ったが、慶長10（1605）年、隠居により再び富山城に入った。このとき城の大規模な改修が行われ、富山城は近世城郭として整備された。ところが、慶長14（1609）年、大火によって富山城は焼失し、その後しばらく再建されず、元和元（1615）年、一国一城令により廢城となった。

寛永16（1639）年、加賀藩から10万石を分与されて富山藩が成立する。初代藩主となった前田利次は、当初百塚の地に新城を建設する予定であったが断念し、廢城となっていた富山城を居城と定めた。寛文元（1661）年から幕府の許可を得て本格的な整備を行った。幕府からは新たな天守のほか、櫓3ヶ所、櫻門3ヶ所などの新築が許可されたものの、最終的に天守や櫓は建てられず、櫻門も1ヶ所にとどまった。三ノ丸外周の外堀は位置をずらし拡張された。また、外堀外周には武家屋敷が一列に並べられた。城下町は、全体のおよそ八割にあたる範囲を囲郭し惣構を新設するとともに、東西に外町を置いて拡張した。

なお、寛文期以降の本丸等内郭の縄張りは、絵図にみえる慶長期のそれと規模・形状が異なることから、承応3（1654）年の神通川氾濫に伴う修復で本丸・西ノ丸・二ノ丸に大幅な変更が加えられたとする説がある（古川2006）。

**本丸・西ノ丸・二ノ丸・三ノ丸の発掘調査** 城址公園整備や路面電車敷設、民間開発に伴って複数の調査を行っている。

平成14年度から継続している城址公園整備に伴う調査は、本丸・西ノ丸を対象に行い、井戸・石組みの溝・廐棄土坑など多くの遺構が見つかっている。平成21年度調査では、寛文元（1661）年に建てられた本丸御殿の縁側に置かれた沓脱石あるいは飛び石とみられる石材を確認した。また、石垣解体修理に伴う発掘調査では石垣の構造や積替えの過程が明らかになった。

平成19年度と平成22年度は、本丸南東部の土壘の調査を行い、約40°の傾斜をもつことや盛土の造成方法が明らかになった。

西ノ丸北西部の内堀の跡地で平成23年度に雨水貯留施設設置に伴う発掘調査を行ったところ、現地表面から約5.8m下で堀底を確認した。

二ノ丸・三ノ丸は、主に平成20年度からの路面電車敷設工事に伴う発掘調査・工事立会で成果が得られている。二ノ丸の二階櫓門や三ノ丸の大手門では石垣の基底部を検出し、位置や規模が判明した。また、三ノ丸南部においては寛文期以降の絵図に表れない堀を検出し、拡張する前の慶長期外堀とみられている（富山市路面電車推進室・富山市教委2009）。

**城下町の発掘調査** 近年、民間開発に伴う発掘調査が相次ぎ、北陸街道沿いを中心とする城下町主要部の様相が明らかになりつつある。

本調査区から国道41号線を挟んだ東側隣接地では、平成17年度に2811m<sup>2</sup>の発掘調査を行った（富山市教委2006b）。遺構の中心は19世紀前半から暮末期である。この調査で初めて武家屋敷地と町屋敷地を分ける背割水路を検出し、その存在が注目されることとなった。背割水路は石組みで幅約1.5～2.8m、深さ0.6mである。本書報告の下層の背割水路（SD03）と一連のものとみられる。石組みの背割水路が構築される前には、素掘りの溝が堀られており、背割水路が素掘りから石組へ変化したことでも明らかになった。また、背割水路北側の武家屋敷地は、絵図から「戸田式部屋敷」と判明した。

幕末期の廃棄土坑から大量の木製品や陶器が出土するとともに、「戸田式部」と書かれた木札も出土し、絵図との対比を裏付けている。背割水路南側の町屋では、幕末期の輪羽口や鍛冶溝が多く出土し、小鐵冶を行っていたことが明らかになった。

本調査区の約250m西で行った平成20年度調査でも背割水路を検出した（富山市教委2010）。ここで上下2層で背割水路を確認した。水路北側の武家屋敷地側は、井戸や土坑が密集し、建物の裏庭に相当すると考えられる。町屋敷側は、遺構密度がきわめて高く、遺構が複雑に切り合う状況が認められた。18世紀後葉以降が主体である。

平成16年度に外堀の南東角沿いで行った発掘調査では、1640～50年代の井戸・溝と1663～90年代の井戸・溝・廃棄土坑を確認した。前者の時期の遺構は、『越中富山古城之図』（正保4（1647）年）によると町屋に伴い、後者は『万治年間富山旧市街図』（1658～1661年）、『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）により岩田宇兵衛屋敷に伴う遺構と考えられる（富山市教委2005）。

また、平成25年度に行った北陸街道南側の町屋の調査（西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）では、井戸・トイレ等の遺構を検出した。建物跡の検出がなかったことから町屋の庭にあたると考えられる。木製品の素材や端材が大量に出土し、付近に木材加工場が存在したことが推測されている。

以上のように、外堀に面する武家屋敷地と北陸街道沿いの町屋において重要な成果が相次いでいる。本調査区もこの範囲に含まれる。

#### （4）近代以降の富山城

**近代以降の富山城の概要** 明治4（1871）年の廃藩置県により、旧藩庁に富山県庁が置かれた。明治6年には明治政府から廢城令が出され、富山城は廃城となる。同19年には淨土真宗の門徒の奉仕により外堀の一部が埋め立てられた。また、戦後にかけてその他の堀の埋め立てや土壘の取り壊しも進み、城址公園となった旧本丸と西ノ丸を除いて市街地化が進んだ。昭和29（1954）年の富山産業大博覧会の際、犬山城や彦根城を参考に本丸石垣上に模擬天守が建設された。

現在は旧本丸と西ノ丸が富山城址公園となり、二ノ丸・三ノ丸・東出丸は市街地となっている。城下町も市街地化が進み、近代富山の商業の中心地となった。

**発掘調査の成果** 重要な近代遺構については一部調査を行っている。

城址公園整備に伴う西ノ丸の工事立会では、県会議事堂の基礎にあたるレンガ積み遺構を検出した。また前記した城下町の近世背割水路は、近代に造り直され、昭和初期頃までは存続していたようである。本書で報告するSD01はこの時期のものである。

#### （5）絵図からみた本調査区の位置

本調査区は外堀南辺に近い城下町主要部に位置する。絵図と対比すると、富山藩の初代藩主前田利次が改修を行った寛文期（1661年）以降とそれより前で土地利用に違いがある。

**寛文期より前** 寛文期より前を描いた絵図として『越中富山古城絵図』（正保4（1647）年）があり、前田利長が整備した慶長期の富山城を反映したものと考えられている。この絵図では、外堀の南辺沿いは町屋として描かれ、本調査区も町屋の範囲に含まれている。

**寛文期以降（第3図）** 寛文期の改修によって外堀南辺沿いが武家屋敷地に変更された。背割水路もこのとき構築されたものとみられる。本調査区を寛文期以降の絵図と照合すると、背割水路を挟んで武家屋敷地と町屋にまたがる。町屋側の町名は「一番町」あるいは「壱番町」とされる。

武家屋敷地側は以下の絵図において次のように表現される。

- ・『万治年間富山旧市街図』(万治年間（1658～1661年頃）) … 「鰐江主水」
- ・『御調理富山絵図』(寛文六（1666）年) … 「鰐江主水」
- ・『御城内外御焼失脚絵図面』(天保年間（1830～1844年）) … 「蟹江」
- ・『越中富山御城下絵図』(安政元（1854）年) … 「鰐江監物」

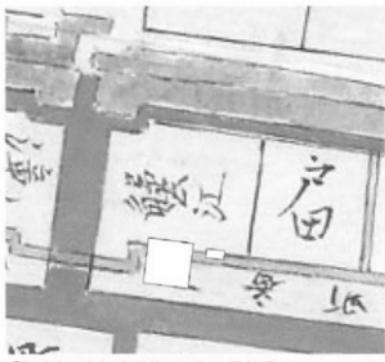
以上とのおり、いずれも鰐江とあり、寛文期から幕末まで鰐江家が屋敷を構えていたとみられる。鰐江主水は『富山藩武鑑』では1500石の馬頭頭、鰐江監物は『安政二年富山御藩中分限帳』で1400石の家老とされる（高瀬編1987）など、上級武家にあたる家柄であった。  
(野垣)



『万治年間富山旧市街図』 万治年間（1658～1661）頃



『御調理富山絵図』 寛文六年（1666）



『御城内外御焼失脚絵図面』 天保年間（1830～1844）



『越中富山御城下絵図』 安政元年（1854）

第3図 江戸時代の絵図にみる本調査区の位置（絵図はいずれも富山県立図書館蔵）

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

**目的** 発掘調査は、建物によって損壊を受ける423m<sup>2</sup>について、試掘調査の結果に基づき上層面と下層面の2面を対象として実施した。試掘調査の成果と絵図や既往の発掘調査によって、武家屋敷地と町屋敷地の境に位置する背割水路の検出が予測できたため、背割水路を中心とした遺構について、記録保存を目的とした発掘調査を行った。

**発掘区とグリッドの設定** 調査区は2地区に分かれ、西側調査区（387m<sup>2</sup>）をA区、東側調査区（36m<sup>2</sup>）をB区とした。調査区全体（上層面と下層面の2面）について、上層面は表土の掘削後、下層面は包含層の掘削後に座標軸に基づいた5m×5mのグリッドを設定した。グリッドの呼称は、X軸に北から1・2・3…の数字、Y軸に西からA・B・C…のアルファベットを付し、グリッド名称として使用した（第5・17図）。グリッド座標は、トータルステーションを使用して周辺に位置する世界測地系の公共座標から測定し、設定した。

**表土の掘削と遺構の検出** 上層面の調査では、調査担当者の立ち会いのもと表土の掘削をバックホウを使用して行った。表土の掘削後、人力でジョレンなどを使用して精査を行い、遺構の検出を行った。上層面に多くみられた近代以降の搅乱は、平面プランのみおさえ、掘削は行っていない。表土の掘削時に出土した遺物は、グリッドごとに上層面包含層出土遺物として取り上げを行った。下層面の調査では、上層面の遺構検出層であったVI層が厚く堆積し、遺物を多く含むことから、調査担当者の立ち会いのもと遺物の出土状況を考慮しながらバックホウと人力を併用して慎重に掘削を行った。包含層の掘削後、人力でジョレンなどを使用して精査を行い、遺構の検出を行ったが、雨雪や粘土質の土質の影響から何度か繰り返す必要があった。包含層の掘削時に出土した遺物は、グリッドごとに下層面包含層出土遺物として取り上げを行った。

B区は下層の遺構検出面まで搅乱が及んでいたため、下層面までバックホウによる掘削を行い、人力でジョレンなどを使用して遺構の検出を行った。

**遺構掘削** 背割水路は1~5の各区に区分して、堆積土を確認するための畦を残して掘り下げを行った。背割水路からは多くの遺物が出土したため、上層から15cmの厚さを基準に順番に掘り下げを行い、主要な遺物の出土状況について写真撮影後、遺物の取り上げを行った。背割水路は上下層で造り直しが行われていたことから、断面図を作成してその構造と変遷過程の確認に努めた。下層面の背割水路（SD03）については、3D測量機材による石組みの平面図と展開図の作成を行った。土坑などの遺構は半裁での掘り下げを行い、手測による断面図を作成した後に完掘を行った。遺物を多く含む遺構については、出土状況図と写真撮影による記録後、遺物の取り上げを行った。

A区の完了後、埋戻しを行い、B区の調査にかかった。B区の遺構数は少なく、短期間で完了した。

**写真撮影** 写真撮影は、発掘作業の当初から終了まで行い、表土の掘削・遺構検出・遺構掘削などの工程ごとに実施した。全体写真の撮影は、上層面の完掘後と下層面の完掘後に行い、下層面の完掘後にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。写真撮影には、6×7フィルムを使用した中判カメラと35ミリカメラ、デジタルカメラを使用し、空中写真撮影には6×7フィルムを使用した中判カメラとデジタルカメラを使用した。

**自然科学分析** 下層面の古環境を検討するため、VI層と下層面の背割水路（SD03）内部に堆積す

る土、井戸（SE03）内部の土などを、調査担当者が試料採取を行った。また、木製品の樹種同定と漆器の塗膜分析を通して、木材利用について検討を行った。動物遺存体も一定量が出土していることから、同定と考察を行った。

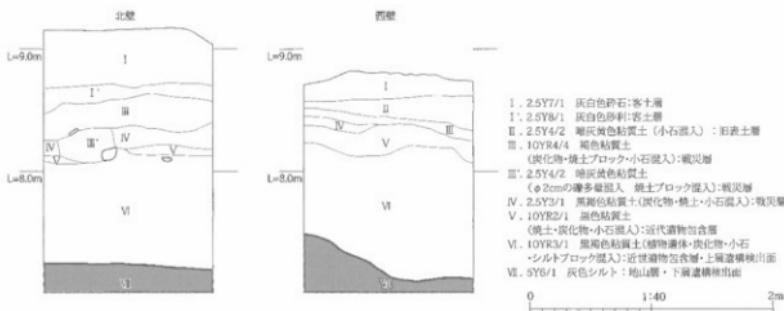
**整理作業** 発掘作業の終了後、出土遺物の洗浄・注記を行い、出土した陶磁器については接合と復元作業を行った。注記はジェットマーカーを使用した。遺構ごとに出土遺物を区分し、遺構の性格と年代を考慮して遺物を選択し、拓本、実測とトレース、遺物写真撮影を行った。木製品と金属製品の一部については、保存処理を行った。遺構図と遺物図のトレースはイラストレーターCS5（作図ソフト）などを使用し、遺構・遺物図版の作成はデジタル図版とした。遺物写真撮影は、デジタルカメラを使用した。あわせて発掘調査成果について原稿執筆・編集を行い、報告書（本書）を行った。（基峰）

## 第2節 基本層序（第4図、図版5）

基本層序は、調査区の北壁（B1グリッド）と西壁（A3グリッド）の2地点で作成した。北壁及び西壁ともに太平洋戦争に伴う戦災層の下に、江戸時代末～近代の遺物包含層が堆積し、その下に江戸時代後期の遺物包含層（北壁：約0.9m、西壁：約1.1m）が厚く堆積する状況が確認できた。

北壁での基本層序は、上層から順に、I層：灰白色碎石（客土層）、I'層：灰白色砂利（客土層）、III層：褐色粘質土（戦災層）、III'層：暗灰黄色粘質土（戦災層）、IV層：黒褐色粘質土（戦災層）、V層：黒色粘質土（江戸時代末～近代遺物包含層）、VI層：黒褐色粘質土（江戸時代後期の遺物包含層・上層面の遺構検出面）、VII層：灰色シルト（地山層・下層面の遺構検出面）である。

西壁での基本層序は、上層から順に、I層：灰白色碎石（客土層）、II層：暗灰黄色粘質土（旧表土層）、III層：褐色粘質土（戦災層）、IV層：黒褐色粘質土（戦災層）、V層：黒色粘質土（江戸時代末～近代遺物包含層）、VI層：黒褐色粘質土（江戸時代後期の遺物包含層・上層面の遺構検出面）、VII層：灰色シルト（地山層・下層面の遺構検出面）である。（基峰）



第4図 基本層序

### 第3節 遺構

#### (1) 下層面(江戸時代)の遺構

下層遺構は、調査区北部で石組の背割水路を検出した。町屋敷地にあたる背割水路南側において井戸や土坑が集中する。北側の武家屋敷地では確実な遺構は認められなかった。

#### SD02(背割水路、第6・8図、図版3・4)

A2～D2グリッドにかけて位置する。

東西方向に延びる石組の背割水路である。後述するSD03の造り替えで構築されたものである。本遺構については最下段の石材の一部のみを確認し、底面レベルから判断すると上層面ないしはその付近のレベルから掘り込んでいる可能性が高い。したがって、本来は上層遺構として扱うべきかもしれないが、掘り込み面が確定できないことや、後述するようにSD03の出土遺物が多く混在しているとみられるため、ここでは下層面遺構に含めて報告する。

石積みは、北側の根石付近及び南側の一部が残存し、その他は後世に造り直されたSD01で失われる。検出長約12.80m、内幅約1.20～1.30m（尺換算で、内幅四尺～四尺三寸）、最も残りの良い部分で底面までの深さは約0.30mを測る。SD03より若干南側に位置をずらして石積みを構築している。石材には、河原石（自然石）を使用し、斜めに用いながら積み上げる。

陶磁器及び土器、土製品、石製品、金属製品、漆器、木製品が数多く出土した。SD02石積み底面まで出土した遺物は、本遺構に伴うと考えたが、本遺構はごく一部しか残存せず、下部のSD03埋土との違いが明確でない部分があり、SD03に伴う遺物が混入している可能性が高い。本遺構から出土した陶磁器は、19世紀後半のものが多い。SD03・SD01といった他遺構との重複関係や遺物から、19世紀後半に構築されたと考えられる。

#### SD03(背割水路、第7・8図、図版2・3)

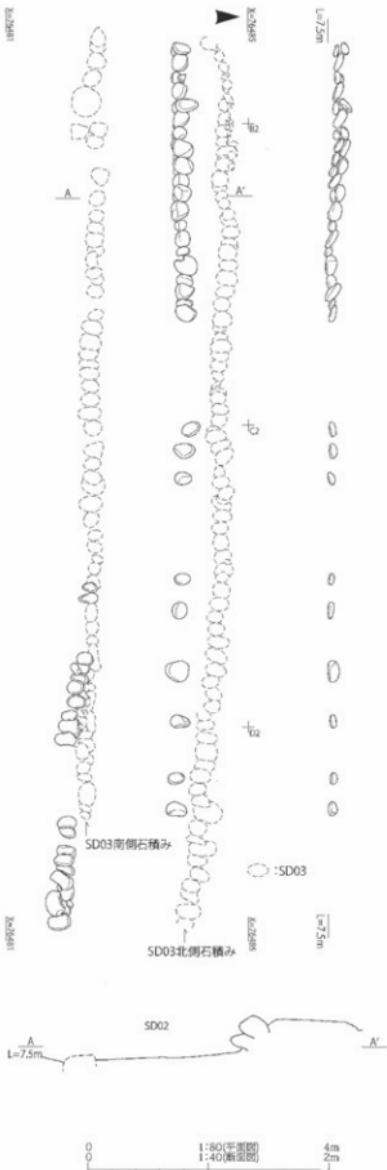
A2～E2グリッドにかけて位置する。

東西方向に延びる石組の背割水路である。検出長約18.20m、内幅約1.50～1.90m（尺換算で、内幅五尺～六尺三寸）を測る。H2グリッド(B区)の南東隅でも南側石積みの根石1石を検出した。底面までの深さは約0.50～0.90mを測る。

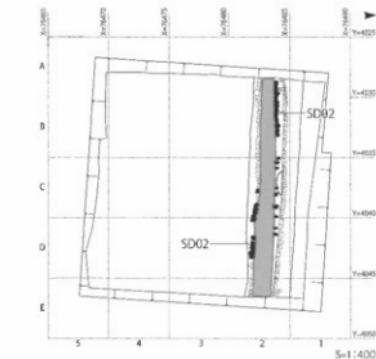
石積みは、北側・南側とともに約15～35cm程度の大きさの河原石（自然石）を使用するが、一部に石臼が転用されていた（第31図237・図版15）。石の積み方は、横の目が通るように積まれた布積状で、隙間には間詰石が見られる。石は3～8段が残る。石の積み上げは、底面から天端石に向かって、比較的直に立ち上がる。場所によっては緩やかに聞いて立ち上がるような積み方の箇所がみられる。このような場所は、崩落などによる改修が行われた箇所と推定でき、後述する上水施設（木樋）の設置を含めて、部分的な改修がある。根石が底面のⅦ層（地山）に深く潜り込んでおり、石積みの重圧によるものとも考えるが、根石設置にあたって溝状に掘り込んでから設置した可能性もある。ただし、底面では、流水や湧水の影響があるため、溝状に掘り下げを行った痕跡は確認できなかった。裏込めには、黒色粘質土（10YR2/1）やオリーブ黒色粘質土（7.5Y2/2）などの堆積が認められる。ただし、調査区西壁断面の観察では、明確に裏込め痕跡を判断することができず、地点によって、Ⅳ層と裏込めの区分ができない箇所がある。底面の標高は西側6.92m・中央6.85m・東側6.83mで、東側の方が9cm程度低くなる。東側に向かって、水が流れていたとみられる。溝内には、大概として小礫や砂を含む黒褐色粘質土（5YR3/1）が堆積し、5～8層ほどの粘質土及び砂質土の堆積に細分できるが、長い年月をかけて徐々に堆積し



第5図 下層造構全体平面図



第6図 SD02(背割水路)平面・立面図



たというよりも、短期間の間に埋もれたような状況である。蓋に相当する板（石）などの出土及びその痕跡は認められず、開渠と考えられる。

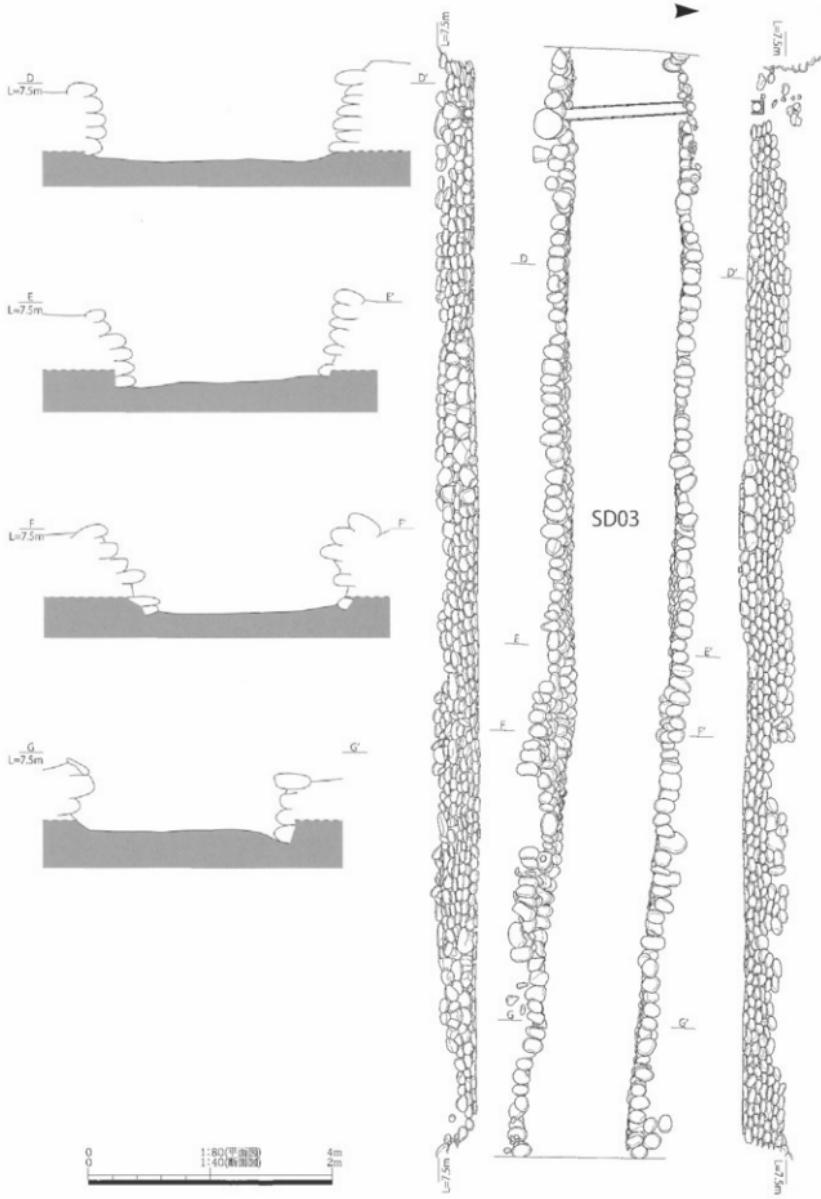
遺物は、検出面～約50cmの層に集中し、底面付近からはほとんど出土しない。陶器及び土器が多く、他に石製品、漆器、木製品が出土した。17世紀前半～後半に該当する遺物があるが、出土した陶磁器は、18世紀後半～19世紀中頃のものが多い。層位及び遺物から、19世紀前半以前に構築され、部分的な改修を経た後、19世紀中頃に埋没したと考えられる。

#### SD03内上水施設（第9図、図版3）

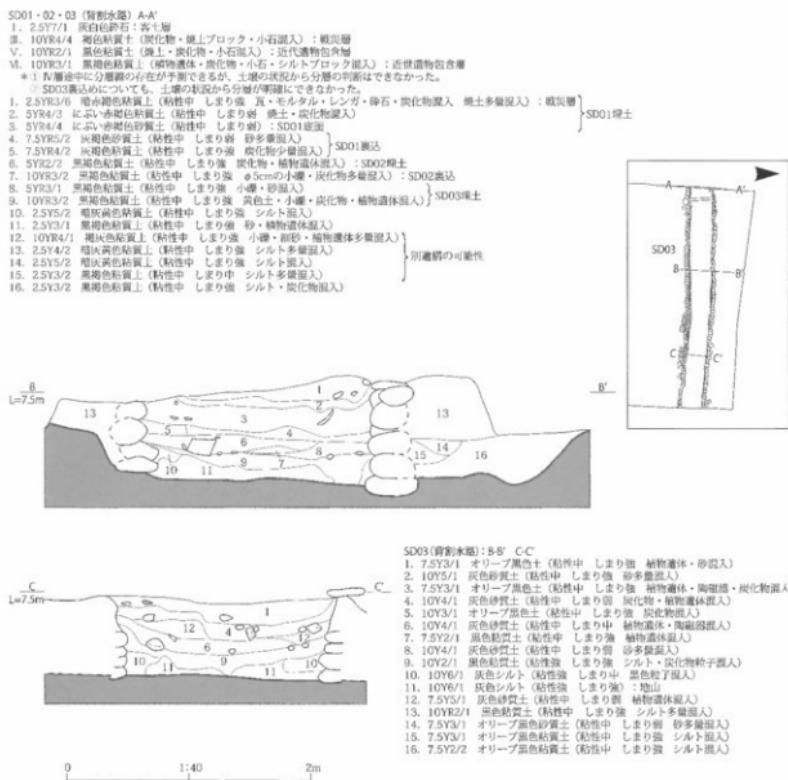
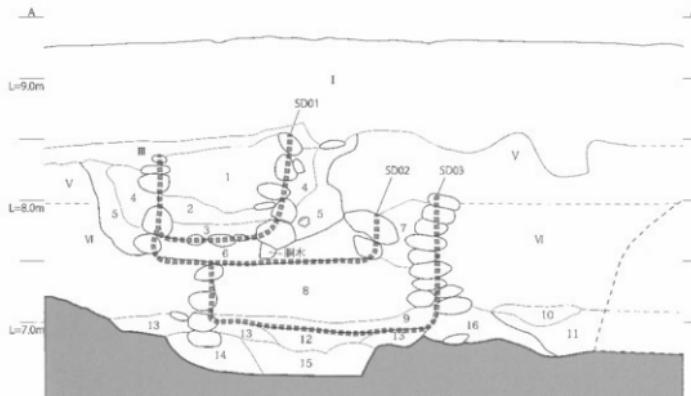
A 2グリッドに位置する。西側の調査区域外へ延びる。

SD03西端の底面付近で、南北方向に伸びる竹樋と木樋を使用した上水施設と考えられる。南北約3.95m、幅約0.19mを測る。本施設の設置又は改修のために、SD03北側石積みでは、内側に向かって石積みが突出し、積み直しが行われた状況を確認できる。また南側石積みも、石材の大きさや並びに乱れがあり、積み直しを行ったとみられる。

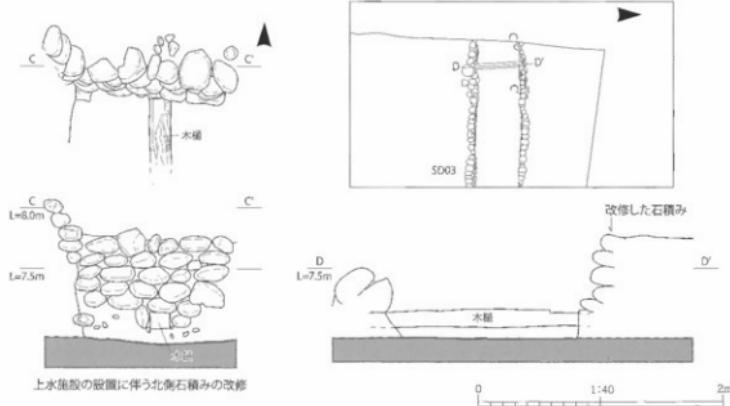
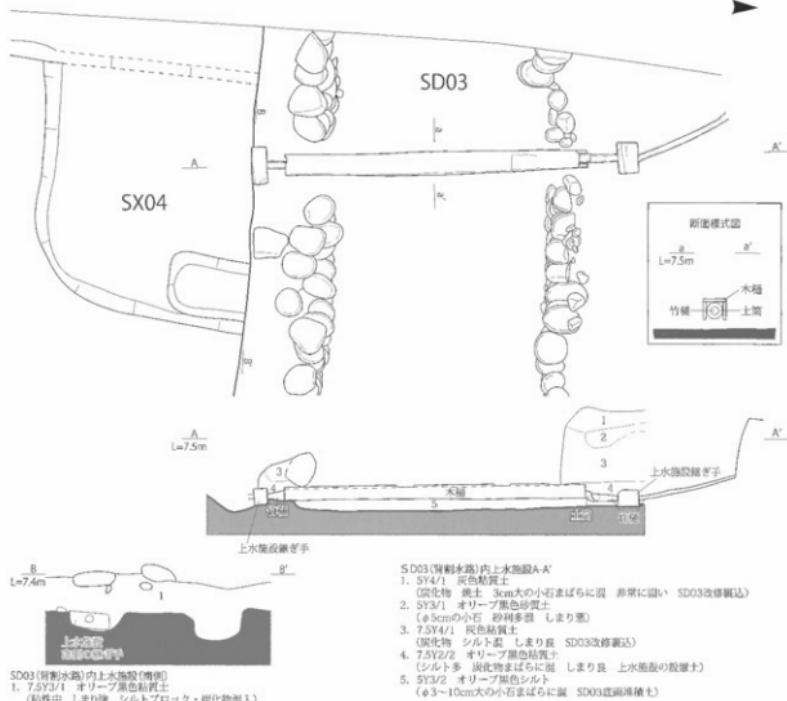
構造は、竹の節を抜いた竹樋に繊維を巻き付けて、土筒で覆った後に、上面と側面を角釘で接合した板材で覆ったものである。内部の竹樋が破損しないように、土筒と板材で補強を施したものである。石積みの裏込め内は竹樋のままである。



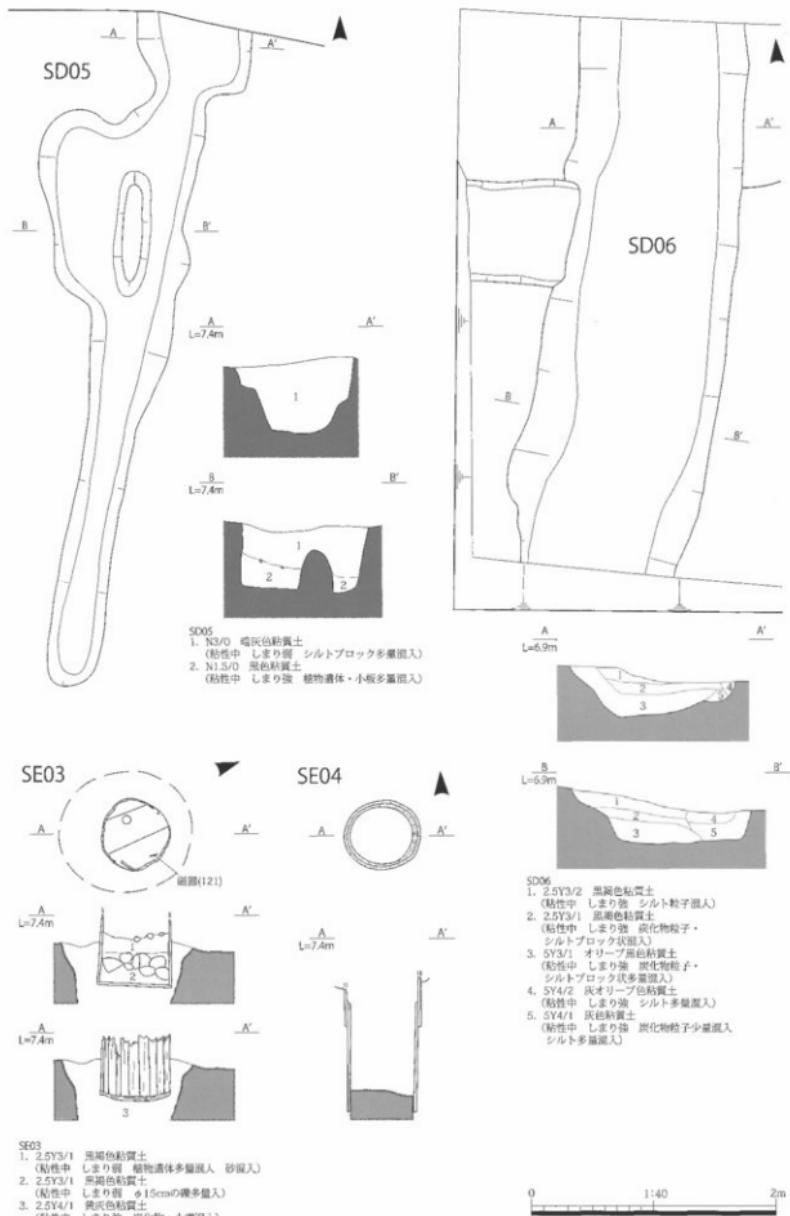
第7図 SD03(背割水路)平面・立面・断面図



第8図 SD03 (背割水路) 断面図



第9図 SD03(背割水路)内上水施設 平面・断面図



第10図 SD05・06 SE03・04 平面・断面図

で、円形の挿入孔を設けた継ぎ手として角形木材（第36図337・338・図版19）が使用される。竹籠の設置された高低差から、取水口は武家屋敷地側（北側）と考えられる。

石積みの撤去時に、陶磁器と土器が出土した。SD03の構築時期から、19世紀前半～中頃にかけて設置されたと考えられる。

#### SD05（第10図）

D2・D3・E2・E3グリッドに位置する。北側でSD03に接する。

南北方向に伸びる溝で、検出長約5.58m、幅約1.28m、検出面からの深さは約0.59mである。底面は平らで、途中で二股に分かれるが、北側と南側では一筋になる。SD03に接する北側では、溝幅が広くなる。溝底が二股に分かれる地点を中心に植物遺体や板片を多量に含む黒色粘質土（N1.5/0）がみられたが、堆積土のほとんどはシルトブロックを多量に含む暗灰色粘質土（N3/0）であった。

土器と木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SD06（第10図、図版6）

F1・F2・G1・G2グリッドに位置する。調査区域外へ広がるため、全体像は不明である。

南北方向に伸びる溝で、検出長は約4.52m、幅約1.30～1.60m、検出面からの深さは約0.39mで、底面はなだらかに窪む。溝底には、シルトブロックを多量に含むオリーブ黒色粘質土（5Y3/1）及びシルトを多量に含む灰色粘質土（5Y4/1）が堆積する。

遺物の出土はないが、SD03の下層に位置することから、背割水路設置前の17世紀前半以前の遺構と考えられる。

#### SE03（第10図、図版4）

A4グリッドに位置し、調査区西壁に接する。

平面円形で、長軸約0.60m×短軸約0.58m、深さ約0.52mを測る。井戸底の標高は6.83mである。側板を桶状に組み、底板を設置する。底板は3枚板の組合せで、取水孔（円形・長軸約7.2cm×短軸約7.1cm）が設けられ、繊維状の付着物の痕跡から竹籠などが下層に差し込まれて、湧水を取水していたと考えられる。

井戸底から、約10～15cmほどの大きさの砾に混じって、瀬戸・美濃系の陶磁器などが出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SE04（第10図、図版4）

B4グリッドに位置する。

平面円形で、直径約0.62m、残存で深さ約1.10mを測る。井戸底の標高は6.11mである。24枚の側板を桶状に組み、上下2段に積み重ねる。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

#### SE06（第11図、図版4）

B3・C3グリッドに位置し、SK31・SK32と重複する。SK31・SK32よりも古い時期と考えられる。

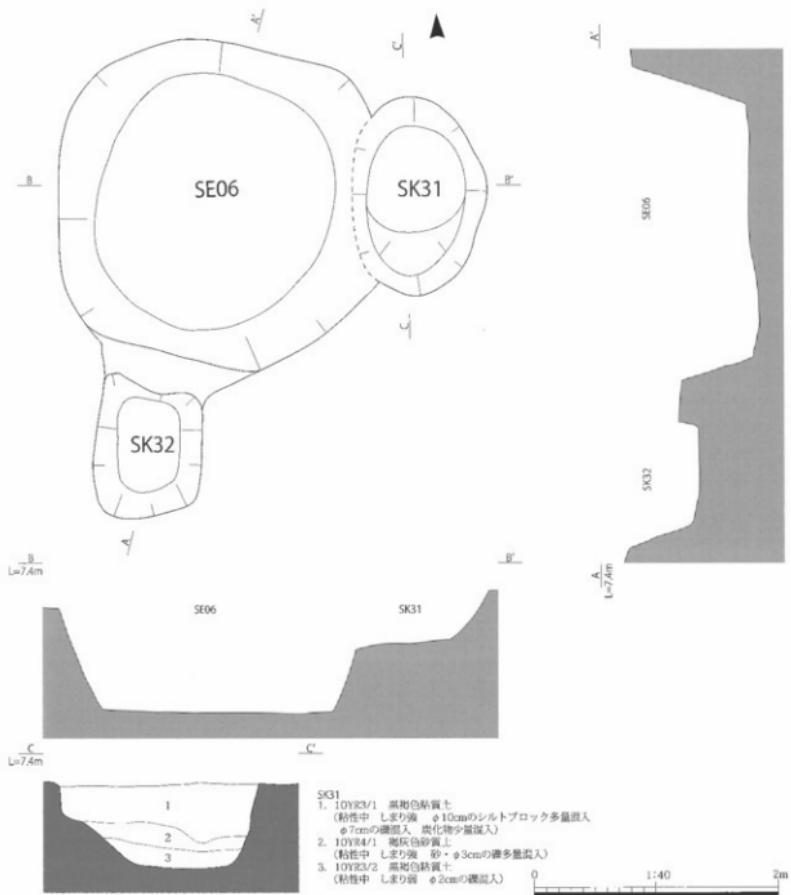
平面は不整形で、長軸約2.92m×短軸約2.85m、検出面からの深さ約0.95mを測る。底面は平坦で、底面の標高は6.11mである。井戸の掘り方あるいは井戸枠の抜き取り痕跡と考えられる。

肥前磁器と木製品が出土した。遺物から、SE03・SE04に先行する17世紀代と考えられる。

#### SK08（第12図）

A3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。

平面不整形で、検出長約1.32m、短軸約0.55m、検出面からの深さ約0.42mを測る。底面は東



第11図 SE06 SK31・32 平面・断面図

西で二股に分かれ、堆積土にも相違が認められることから、本来は重複する二つの遺構であった可能性がある。

#### SK09（第12図）

SK08と同様にA3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。

平面不整長円形で、検出長約1.14m、短軸約1.12m、検出面からの深さ約0.58mを測る。底面は平坦で、底面には黒色粘質土（7.5Y2/1）及び植物遺体・炭化物を含む灰白色砂質土（5Y7/1）が堆積する。

底面付近から漆器が出土した。時期は不明である。

#### SK10（第12図）

SK08とSK09と同様にA3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。平面不整円形で、検出長約1.04m、短軸約0.65m、検出面からの深さ約0.30m、底面は平坦である。金属製品が出土したが、時期は不明である。

#### SK13（第12図）

B2・B3グリッドに位置する。SX05と重複し、SX05より新しい。

平面楕円形で、長軸約1.12m×短軸約0.92m、検出面からの深さ約0.58mを測る。底面は平坦で、黒色粘質土（7.5YR2/1）が堆積する。

石製品と漆器が出土したが、時期は不明である。

#### SK14（第12図）

B4・B5グリッドに位置し、調査区南壁に接する。調査区域外（南側）へ広がる。

平面不整円形で、検出長約1.14m、短軸約0.82m、検出面からの深さ約0.21mを測る。底面は平坦で、黒色粘質土（7.5Y2/1）が堆積する。

肥前磁器と瀬戸系磁器、漆器が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SK16（第12図）

A3・A4・B3・B4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約1.90m×短軸約1.25m、検出面からの深さ約0.40mを測る。底面は平坦で、黒色粘質土（10YR1.7/1）が堆積する。

肥前磁器、瀬戸・美濃磁器、瀬戸・美濃、木製品が出土した。初期伊万里と考えられる碗（第21図42・図版9）を含むが、他の遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SK17（第12図）

A3・B3グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約1.70m×短軸約1.50m、検出面からの深さ約0.42mを測る。底面は平らで、炭化物と植物遺体を含む黒褐色粘質土（10YR2/2）が堆積する。

肥前磁器、越中瀬戸・瓦質土器、木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SK18（第12図）

B3グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約1.45m×短軸約1.25m、検出面からの深さ約0.25mを測る。底面は南に向かって緩やかに下がる。南側に焼けた礫や炭化板などを含む黒褐色粘質土（7.5YR3/1）、北側に褐灰色粘質土（7.5YR4/1）が堆積する。

肥前磁器、瀬戸・美濃、石製品、木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

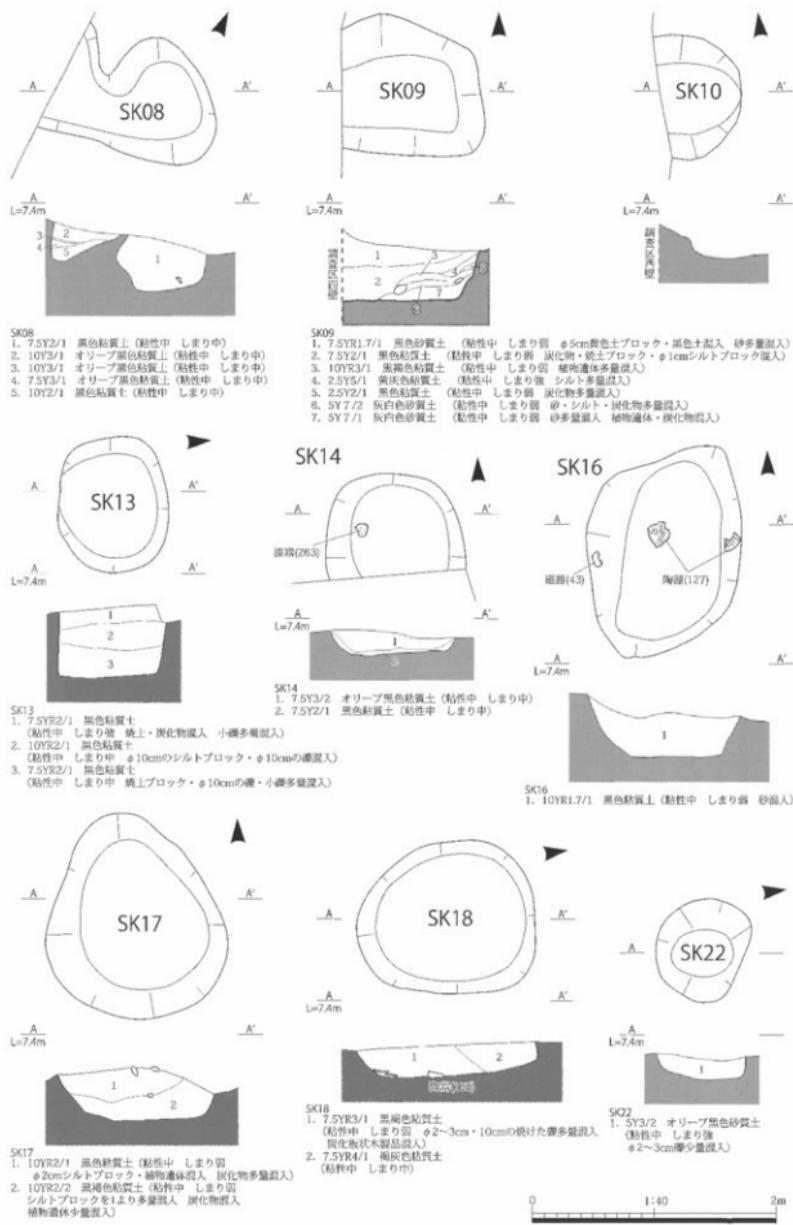
#### SK21（第16図）

C4グリッドに位置する。西側でSX10と重複し、SX10より古い。

平面不整長円形で、長軸約3.25m×短軸約1.82m、検出面からの深さ約0.44mを測る。全体的に灰褐色粘質土（7.5Y4/1）が堆積する。

瀬戸・美濃が出土した。SX10との切り合い関係から、18世紀後半以前と考えられる。

#### SK22（第12図）



第12図 SK08・09・10・13・14・16・17・18・22 平面・断面図

C4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.85m×短軸約0.82m、検出面からの深さ約0.17mを測る。底面はなだらかで、全体的にオリーブ黒色粘質土（5Y3/2）が堆積する。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

#### SK23（第13図、図版4）

C3グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約1.35m×短軸約0.75m、検出面からの深さ約0.21mを測る。底面は中央付近がなだらかに窪む。底面の窪みには、植物遺体を少量含む黒色粘質土（5Y2/1）が堆積する。

底面から瀬戸・美濃と木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SK25（第13図、図版4）

C3グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約1.19m×短軸約0.75m、検出面からの深さ約0.35mを測る。底面はなだらかで、植物遺体を含む黒色粘質土（10YR2/1）が堆積するが、堆積土中には多くの礫と陶磁器・木片が竪状に含まれる。

肥前磁器・瀬戸・美濃、木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SK26（第13図、図版5）

C3グリッドに位置する。SP03と重複し、SP03より新しい。

平面不整長方形で、長軸約1.45m×短軸約0.60m、検出面からの深さ約0.48mを測る。底面は平らで、底面に礫を多量に含むオリーブ黒色粘質土（5Y3/1）が堆積する。

底面から瀬戸系磁器、越中瀬戸、メロン類の種子（第4章第2節参照）が多量に出土した。他に、金属製品と木製品が出土した。遺物から、19世紀後半の時期と考えられる。

#### SK27（第13図）

C3・D3グリッドに位置する。

平面不整梢円形で、長軸約0.72m×短軸約0.50m、検出面からの深さ約0.09mを測る。底面は浅くなだらかで、表面には礫が集中し、集石遺構のような様相を呈する。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

#### SK29（第13図、図版4）

D3グリッドに位置する。南側でSX07と重複し、SX07より新しい。

平面不整長方形で、長軸約1.80m×短軸約0.70m、検出面からの深さ約0.13mを測る。底面は平らで、黒色粘質土（5Y2/1）の上に、礫を含むオリーブ黒色砂質土（5Y3/2）が堆積する。

多くの木製品が出土した。遺物とその出土状況などから、18世紀後半～19世紀中頃のごみ穴と考えられる。

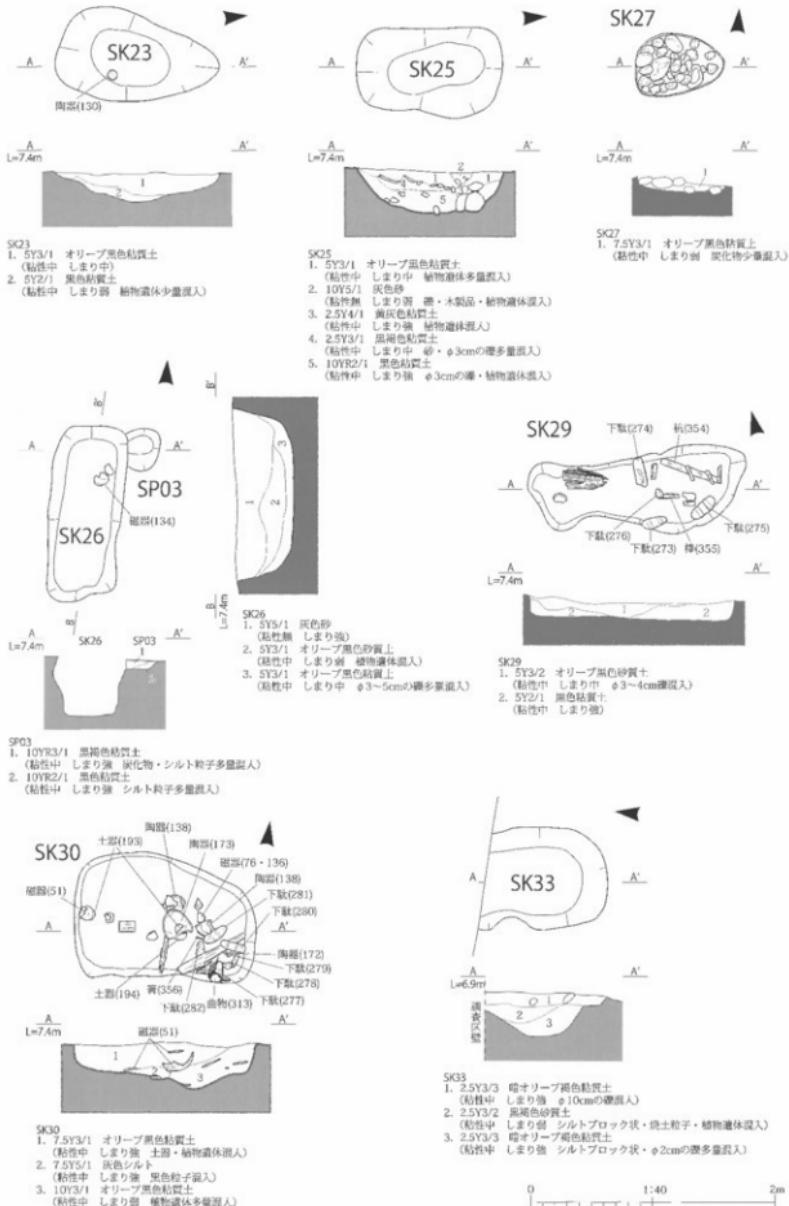
#### SK30（第13図、図版5）

C4グリッドに位置する。

平面不整長方形で、長軸約1.50m×短軸約1.01m、検出面からの深さ約0.38mを測る。底面はなだらかに窪み、植物遺体を多量に含むオリーブ黒色粘質土（10Y3/1）の上に、植物遺体を含むオリーブ黒色粘質土（7.5Y3/1）が堆積する。

土坑の中で、最も多く遺物が出土した。遺物中に初期伊万里と考えられる皿（第21図51・図版9）があるが、他の遺物や出土状況から、18世紀後半～19世紀中頃のごみ穴と考えられる。

#### SK31（第11図）



第13図 SK23-25-26-27-29-30-33 SP03 平面・断面図

C4グリッドに位置する。西側でSE06と重複し、SE06より新しい。

平面不整楕円形で、長軸約1.62m×推定短軸約1.10m、検出面からの深さ約0.45mを測る。底面はなだらかで、平坦に近い。底面には礫を含む黒褐色粘質土(10YR3/2)が堆積し、その上に礫を多量に含む褐灰色砂質土(10YR4/1)、シルトブロックを多量に含む黒褐色粘質土(10YR3/1)が堆積する。

遺物の出土はないが、SE06との切り合い関係から、18世紀代以降と考えられる。

#### SK32（第11図）

B4グリッドに位置する。北側でSE06と重複し、SE06より新しい。

平面不整形で、長軸約1.19m×短軸約0.90m、検出面からの深さ約0.55mを測る。底面は平坦である。

遺物の出土はないが、SK31同様にSE06との切り合い関係から、18世紀代以降と考えられる。

#### SK33（第13図）

H2グリッド（B区）に位置する。調査区北壁に接し、調査区域外（北側）へ広がる。

平面不整長円形で、検出長約1.01m、短軸約0.85m、検出面からの深さ約0.37mを測る。底面は窪み、シルトブロックと礫を多量に含むオリーブ褐色粘質土(2.5Y4/3)の上に、シルトブロック及び焼土粒子・植物遺体を含む黒褐色砂質土(2.5Y3/2)、礫を含む暗オリーブ褐色粘質土(2.5Y3/3)が堆積する。

検出時に、胎土に金雲母を含む土製品（第29図222）が出土した。近代以降の搅乱によって、上層から混入したものと考えられる。他に遺物の出土はない。SD03が搅乱によって壊されているが、本来はSD03の下層に位置することから、18世紀後半以前と考えられる。

#### SX02

C2グリッドに位置する。SD03の底面で確認し、SD03北側石積みの下（北側）へ広がる。

平面不整楕円形で、検出長約2.04m、検出幅約0.48mを測る。SD03石材撤去や湧水・積雪等の影響で、全体像を把握することはできなかった。

遺物の出土はない。層位及び出土状況から、18世紀以前と考えられる。

#### SX03（第14図、図版5）

A4・A5グリッドに位置する。調査区の南壁・西壁に接しており、調査区域外（南西側）へ広がる。

平面不整楕円形で、検出長約2.62m、検出短軸約2.00m、検出面からの深さ約0.52mを測る。底面はなだらかに窪む形状で、全体的にシルトと炭化物及び焼土粒子を含む赤黒色粘質土(2.5YR1.7/1)が堆積する。

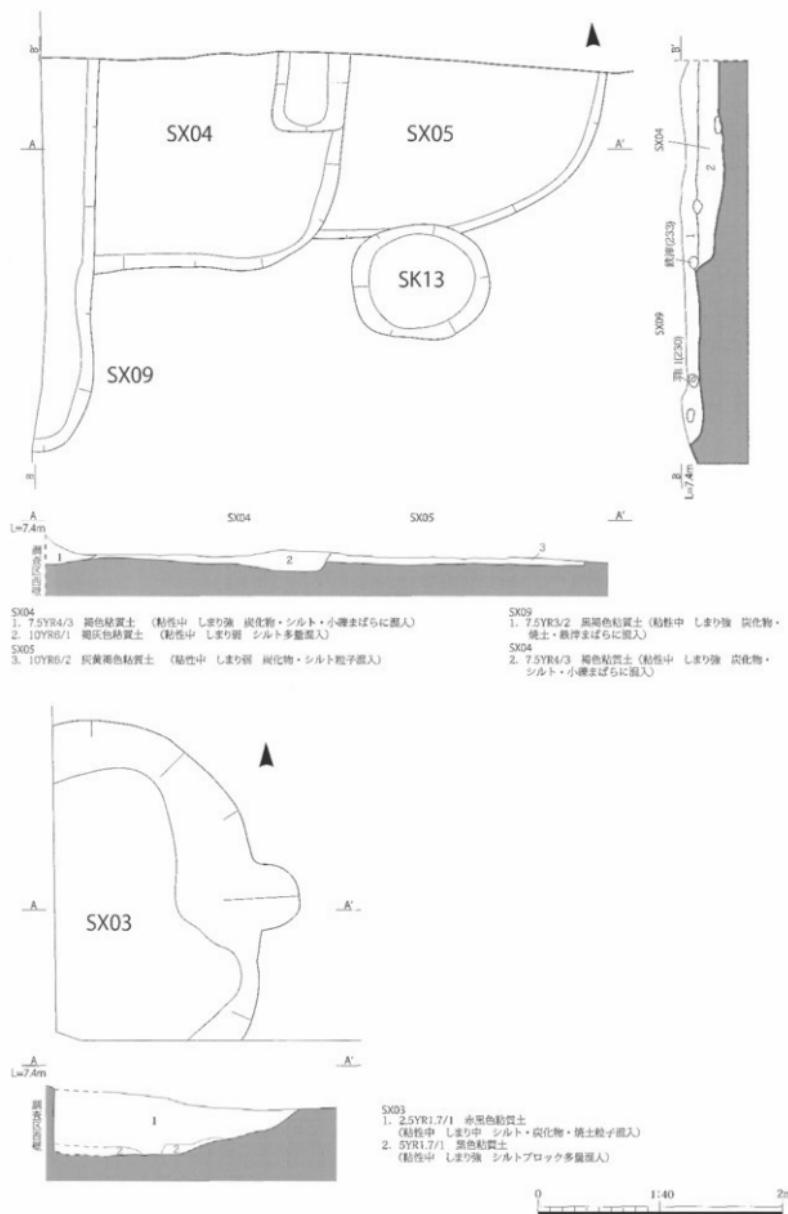
肥前磁器、瀬戸系磁器、土師器、漆器、木製品などが出土した。出土遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

#### SX04（第14図）

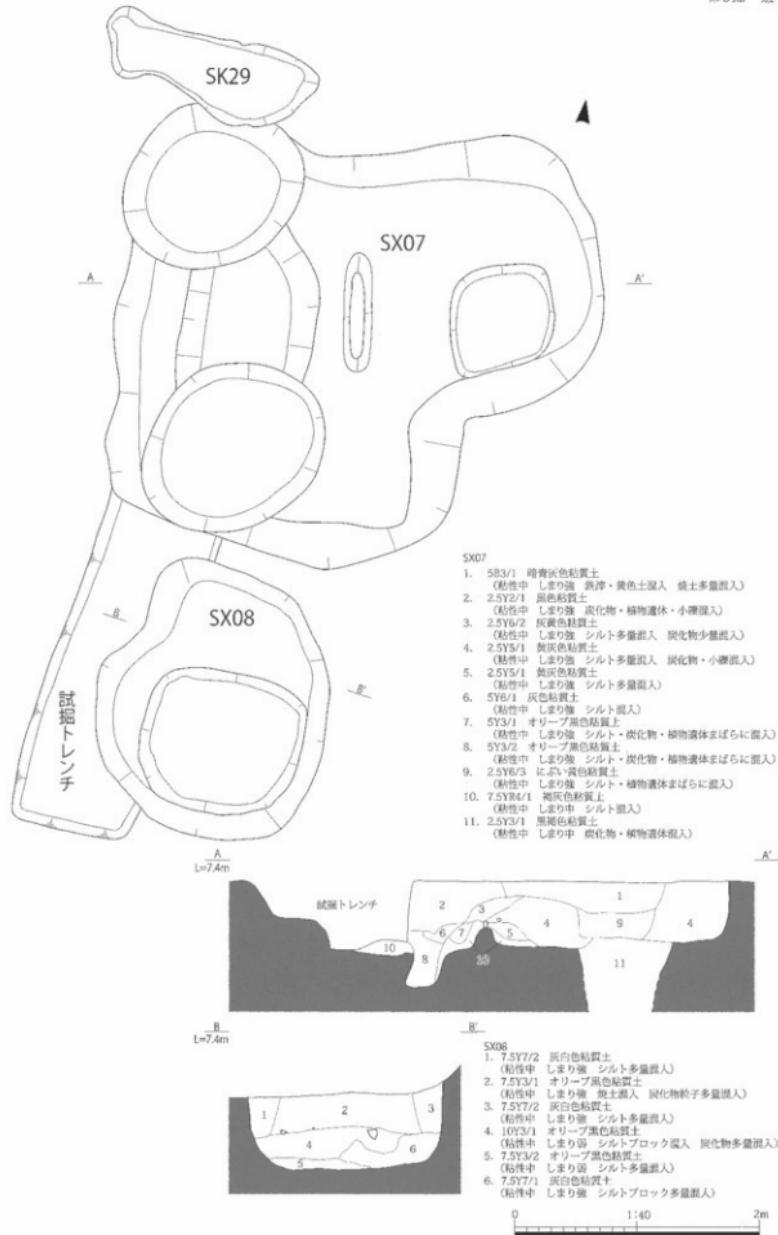
A2・B2グリッドに位置する。東側でSX05、西側でSX09と重複し、北側ではSD03と接する。SD03・SX09より古く、SX05より新しい。

平面不整形で、検出長軸約2.00m×検出短軸約1.71m、検出面からの深さ約0.18mを測る。底面はほぼ平らで、西側に炭化物及びシルト・小礫をまばらに含む褐色粘質土(7.5YR4/3)、東側にシルトを多量に含む褐灰色粘質土(10YR6/1)が堆積する。北東隅にSD03上水施設に関連すると考えられる平面不整長方形で、検出長0.65m、短軸約0.60mの穴が重複する。

瀬戸・美濃、越中瀬戸、丹波系陶器、木製品が出土した。遺物と重複遺構との切り合い関係から、



第14図 SX03・04・05・09 平面・断面図



第15図 SX07・08 平面・断面図

17世紀後半と考えられる。

**SX05（第14図）**

B2グリッドに位置する。西側でSX04、南側でSK13と重複し、北側ではSD03と接する。SD03・SX04・SK13より古い。

平面不整橢円形で、検出長軸約2.22m×検出短軸約1.50m、検出面からの深さ約0.08mを測る。底面は平坦である。全体的にシルト粒子と炭化物を含む灰黄褐色粘質土（10YR6/2）が堆積する。

遺物の出土はないが、重複遺構との切り合い関係から、17世紀後半以前と考えられる。

**SX07（第15図、図版5）**

D3グリッドに位置する。北側でSK29と重複し、SK29より古い。

平面は不整形で、北東側が張り出す形状を呈する。長軸約4.00m×短軸約3.40m、検出面からの深さ約0.55mを測る。底面の北西隅に平面橢円形で長軸約1.53m×短軸約1.32m、南西隅に平面橢円形で長軸約1.60m×短軸約1.34mの窪みが存在し、その間を南北方向の幅約1.10mの溝で連結する。底面中央付近には、長軸約1.00m×短軸約0.25m、底面からの高さ約0.15mの南北方向の高まりが存在する。張り出し部の底面南側に接して、平面不整形で東西約0.88m×南北約0.86mの深い穴が存在する。穴内には炭化物と植物遺体を含む黒褐色粘質土（2.5Y3/1）が堆積する。底面から深さ約0.55mまで確認したが、湧水と降雪の影響で、底は確認できなかった。

肥前磁器、唐津系磁器、唐津、羽口、木製品などが出土した。遺物から、17世紀前半～18世紀中頃の小鋳治に関連する遺構と考えられる。

**SX08（第15図）**

D3・D4グリッドに位置する。

平面不整橢円形で、長軸約2.22m×短軸約1.92m、検出面からの深さ約0.63mを測る。底面は平らであるが、南東隅に平面橢円形で長軸約1.32m×短軸約1.18mの窪みが存在する。

瀬戸系磁器が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

**SX09（第14図）**

A2・A3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。東側でSX04と重複し、北側ではSD03と接する。SD03より古く、SX04より新しい。

平面不整形で、検出長軸約3.21m、検出短軸約0.42m、検出面からの深さ約0.12mを測る。全体的に炭化物及び焼土を含む黒褐色粘質土（7.5YR3/2）が堆積する。

肥前磁器、羽口、鉄滓が出土した。遺物と重複遺構との切り合い関係から、17世紀後半以降の小鋳治に関連した遺構と考えられる。

**SX10（第16図）**

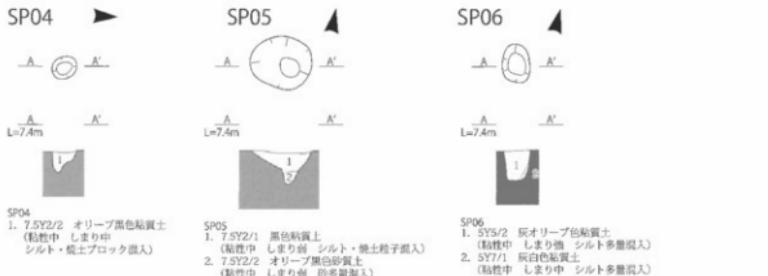
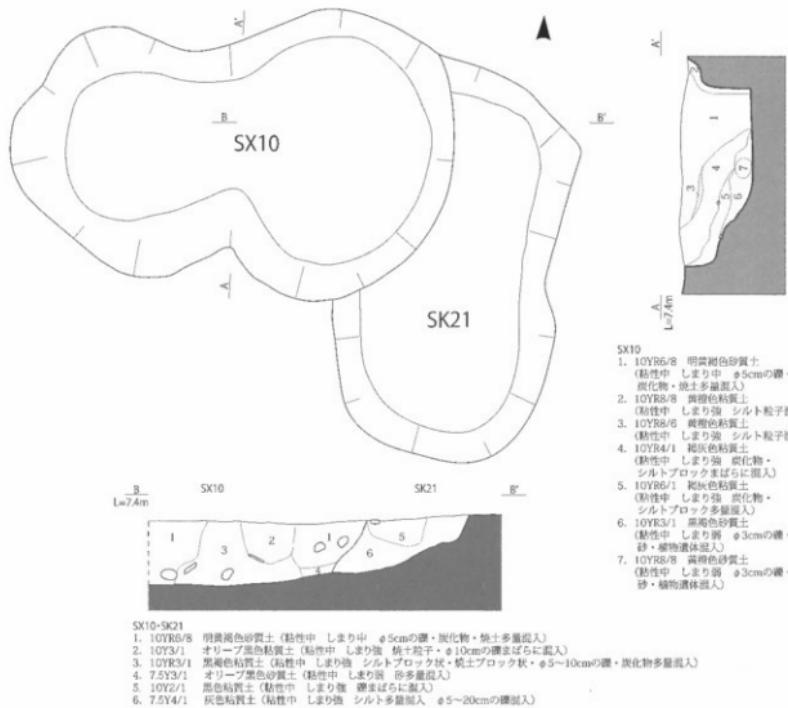
B4・C4グリッドに位置する。東側でSK21と重複し、SK21より新しい。

平面は不整双円形で、長軸約3.62m×短軸約1.64m、検出面からの深さ約0.60mを測る。底面はなだらかで、検出面から底面にかけて、礫及び炭化物・焼土を多量に含む明黄褐色砂質土（10YR6/8）などが堆積する。

肥前磁器、瀬戸、美濃、輸入陶器、石製品、木製品が出土した。礫及び炭化物・焼土を多量に含む堆積土の状況から、火を用いた遺構の可能性が考えられるが、羽口や鉄滓などの鋳冶に関連した遺物の出土はない。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

**SP03（第13図）**

C3グリッドに位置する。SK26と重複し、SK26より古い。



第16図 SX10 SK21 SP04・05・06 平面・断面図

平面不整円形で、長軸約0.35m×短軸推定約0.29m、検出面からの深さ約0.08mを測る。底面は平らである。

遺物の出土はない。SK26との切り合い関係から、19世紀以前と考えられる。

SP04（第16図）

C2グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.20m×短軸約0.18m、検出面からの深さ約0.18mを測る。底面は尖り気味となる。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

SP05（第16図）

C3グリッドに位置する。

平面不整橢円形で、長軸約0.50m×短軸約0.42m、検出面からの深さ約0.25mを測る。底面は尖り気味となる。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

SP06（第16図）

C3グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.32m×短軸約0.21m、検出面からの深さ約0.24mを測る。底面は平らである。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

曲物底板（第5図、図版5）

B4・C4グリッドに位置する。

大型の曲物底板で、水平な状態で出土した。

遺物の出土は他になく、時期は不明である。

（2）上層面（江戸時代末～近代）の遺構

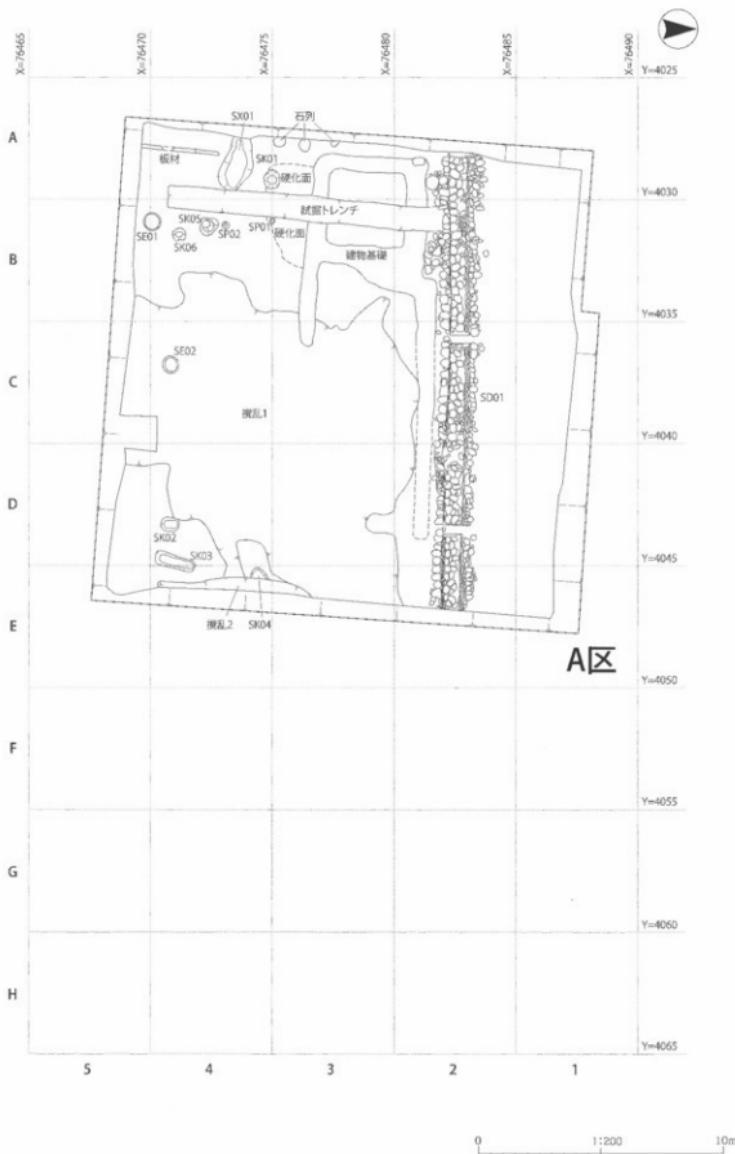
上層遺構では、背割水路、井戸、土坑などを確認した。

SD01（背割水路、第8・18・19図、図版3・7）

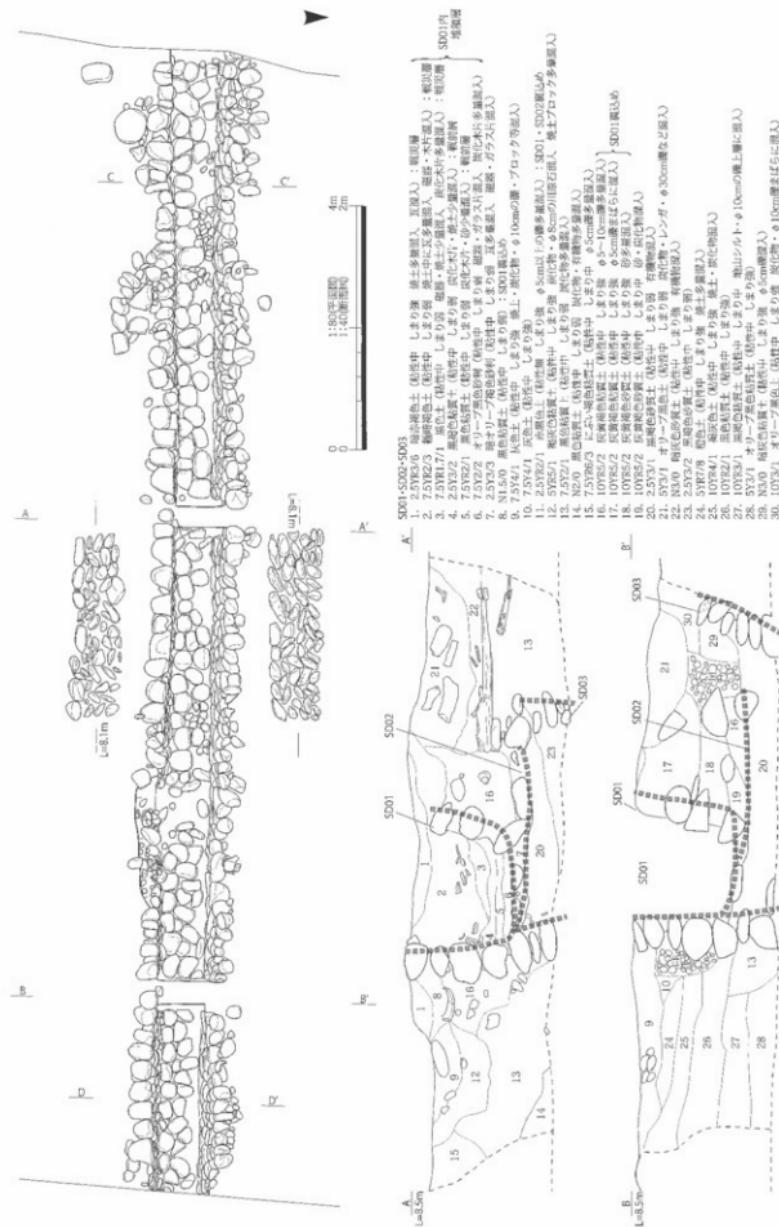
A2～E2グリッドにかけて位置する。

東西方向に伸びる石組の背削水路で、SD03・SD02の造り替えである。検出長約18.70m、内幅約0.80～0.85m（尺換算で、内幅二尺六寸～二尺八寸）、底面までの深さ約0.80m（尺換算で二尺六寸）を測る。

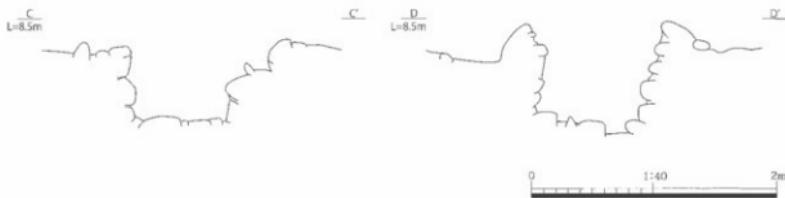
石積みは、北側・南側とともに20～40cmの大きさの河原石（自然石）を、斜めに互い違いに積み上げる積み方である。石材の積み上げは、底面から天端石に向かって、緩やかに広がるような積み方で、裏込めは礫を多量に含む灰黄褐色粘質土（10YR5/2）や礫を多量に含む赤黒色土（2.5YR2/1）である。底面は、扁平な河原石（自然石）を使用した敷石構造である。底面の標高は西側7.70m・中央7.66m・東側7.66mで、東側が僅かに低くなる。東側に向かって、水が流れていたと考えられる。北側石積みの東側下部（D2・E2グリッド）では、約1.8m分の廻木が認められた。中央付近（C2グリッド）の石積みの残存状態はとくに良好で、上端の石と石の隙間に砂目地が詰まった状態で、天端石まで残る。検出面から深さ約0.70m（底面から約10～15cm）付近まで、焼土・炭化木片などを含む災害層が堆積することから、昭和初期（戦中）まで水路として使用され、日常管理としての清掃が行き届いていたと考えられる。蓋に相当する板（石）などの痕跡は認められず、開渠と考



第17図 上層遺構全体平面図



第18図 SD01(背割水路)平面・立面・断面図



第19図 SD01(背割水路)エレベーション図

えられる。

磁器、土製品、銭貨、瓦が出土した。遺物は、20世紀前半のものが多く、背割水路廃絶の時期を示すと考えられる。層位から、近代に構築され、戦後に埋没したものと考えられる。

#### SE01

B4・B5グリッドに位置する。

平面正円形で、長軸約0.74m×短軸約0.70mを測る。石製の井戸枠である。

遺物の出土はない。層位・構造から、19世紀末以降と考えられる。

#### SE02

C4グリッドに位置する。

平面正円形で、長軸約0.70m×短軸約0.65mを測る。石製の井戸枠である。

遺物の出土はない。層位・構造から、SE01同様に19世紀末以降と考えられる。

#### SK01

A3・A4グリッドに位置し、硬化面と重複する。硬化面より新しい。

平面不整梢円形で、長軸約0.78m×短軸約0.65m、検出面からの深さ約0.38mを測る。底面はなだらかに窪む形状で、炭化物を少量含む黒褐色粘質土（10YR3/1）が堆積する。

遺物の出土はないが、硬化面との切り合い関係から、19世紀末以降と考えられる。

#### SK02

D4グリッドに位置する。

平面不整方形で、長軸約0.74m×短軸約0.58m、検出面からの深さ約0.18mを測る。底面はなだらかに窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

#### SK03

D4・E4グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約1.67m×短軸約0.59m、検出面からの深さ約0.18mを測る。底面には凸凹が見られ、南側が低くなつてなだらかに窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

#### SK04

E4グリッドに位置する。調査区の東壁に接し、調査区域外（東側）へ広がる。

平面不整梢円形で、残存長軸約0.80m×残存短軸約0.42m、検出面からの深さ約0.05mを測る。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

#### SK05

B4グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約0.80m×短軸約0.75m、検出面からの深さ約0.55mを測る。底面は、なだらかに窪み、西側が深く窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

#### SK06

SK05と同じくB4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.55m×短軸約0.55m、検出面からの深さ約0.25mを測る。底面は、なだらかに窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

#### SX01

A4グリッドに位置する。調査区の西壁に接し、僅かではあるが調査区域外（西側）へ広がる。

平面不整長円形で、残存長軸約2.20m×短軸約1.30m、検出面からの深さ約0.28mを測る。底面はなだらかに窪む形状で、凹凸がみられる。全体的に、焼土と炭化物を少量含む黒褐色粘質土が堆積する。

鉄製品のコテ（第39図394・図版20）が出土した。層位から、19世紀末頃と考えられる。

#### SP01

B3・B4グリッドに位置する。硬化面と重複し、硬化面より新しい。

平面不整円形で、長軸約0.25m×短軸約0.21m、検出面からの深さ約0.23mを測る。底面まで柱穴状に窪む。

遺物の出土はないが、硬化面との切り合い関係から、19世紀末以降と考えられる。

#### SP02

B4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.32m×短軸約0.29m、検出面からの深さ約0.25mを測る。底面まで柱穴状に窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

#### 硬化面

A3・A4・B3・B4グリッドにかけて位置する。SK01・SP01と重複し、両遺構より古い。

東西約4.15m×南北約1.94mの平面不整半方形の範囲で、土間状に硬く硬化する。北側には建物基礎が存在する。

遺物の出土はない。19世紀末以降と考えられる。北側の建物基礎に付設する土間的機能を有する空間であった可能性がある。

#### 建物基礎

A2～D2・A3～C3グリッドにかけて位置する。

北側に位置するSD01に沿って、東西推定約15.58m、南北約4.88mの範囲で、礫を充填する溝で囲まれた空間が認められた。南東側は搅乱によって、形状を確認することができなかった。

19世紀末以降と考えられる。

#### 板材

A4・A5グリッドに位置する。南側への広がりと北側への延長が考えられる。

南北残存約3.20m、幅約0.15mの2枚以上の板材の組み合せである。配置形状から、上水施設の木樋であった可能性があるが、簡易な施設などの基礎であった可能性もある。

硬化面や建物基礎と同様に、19世紀末以降と考えられる。

#### 石列

A3グリッドに位置する。

調査区西壁際の南北約2.70mの範囲で、約0.5m程度の3石の石が南北方向に列状に並ぶような状態で確認した。2石は扁平な河原石（自然石）であるが、1石は加工が施される。建物の礎石、石塔等の台石、庭石などの可能性がある。

19世紀末以降と考えられる。

（基峰）

### 第4節 遺物

#### （1）下層面（江戸時代）の出土遺物

下層構造からは、肥前磁器や瀬戸・美濃、越中瀬戸などの陶磁器、土師器、土人形などの土製品、羽口と鉄滓、硯や石臼などの石製品、煙管や簪などの金属製品、寛永通宝と文久永宝、漆器椀や和傘部材、下駄や木札、曲物、櫛、箸、羽子板などの木製品、瓦などが出土した。

SD 02（背割水路、第20・22・23・26～32・34・36図、図版8・10・12・14～19）

前節で述べたとおり、下層のSD 03に伴う遺物が混入している可能性が高く、帰属が明確でない遺物についてはSD 02・03と表記し、ここではこれらを含めてSD 02出土遺物として報告する。

1～16は、肥前磁器である。1～3は碗で、1は見込みに「永楽年製」の文字、体部に草花と山水画、2は見込みに雷文、体部に繋ぎ松竹梅、3は見込みに「富貴長春」の文字と渦状文、体部に山水画がある。4は小碗である。5は筒形碗で、見込みに圈線と五弁花、四方擗、体部に山水画、底部に松葉と圈線がある。6～9は蓋で、6はつまみ内に鳥、体部に草、見込みに草と圈線、7はつまみ内と体部に花弁文、見込みに鳥、8はつまみ内に文字、見込みと体部に草花、9はつまみ内と体部に花弁文、見込みに圈線がある。10～13は皿で、10は輪花皿で、見込みに六弁花と花唐草文、11は見込みに半菊花・渦・五弁花と圈線、体部に草と圈線、高台内に文字と圈線、13は見込みと体部に丸形の印判手による花がある。12は輪花皿で、見込みに蓮鷺文、しのぎと染付丸、陽刻の牡丹と蝶、縁に口紅、高台内に目跡が4カ所残る。14・15は鉢で、14は向付で、見込みに四方擗、体部に帆と波文、高台内に文字、15は体部に草花がある。16は仏飯器で、体部に格子文がある。2・3・7・14には焼き継ぎがある。68は肥前系磁器で、体部に菊弁文がある仏飯器である。77～79は唐津である。77・78は鉢で、見込みに白泥による白化粧が施される。77は波状文である。78は渦巻又は波状文で、重ね焼き痕がある。79は壺である。86～89は瀬戸系磁器である。86は碗で、見込みに四方擗、体部に縦線と如意頭がある。87・88は皿で、87は見込みに辰砂か鉄絵での山水画と雷文、体部に家屋と唐草状の文様と雷文、88は見込みに草花、体部に松葉がある。87には焼き継ぎがある。89は仏飯器である。90・91は瀬戸・美濃である。90は拳骨碗で、体部に押任痕、黒褐色の釉に白泥が付着する。91は秉燭で、底部に軸孔がある。145～153は越中瀬戸である。145～147は皿で、145は見込みと底部に重ね焼き痕、146は見込みに重ね焼き痕が残る。147は見込みに十六弁菊の印花、高台内に墨書がある。148は受付皿（灯明皿）、149～151は小鉢、152は建水か匣鉢、153は秉燭である。153の底部には軸孔がある。147を除き、底部は糸切りである。176はロクロ成形の土師器で、油煙が付着する灯明皿である。底部は糸切りである。196は信楽系磁器の皿で、見込みに3条線の×状擗目と目跡が2カ所あり、油煙が付着する灯明皿である。199は瓦質土器で、表面に獅子状の陽刻がある。202は中国系輸入陶器の皿で、見込みに文字文と螺文、圈線、型押し、体部に

型押し、高台内に変形文字がある。206は小碗で、被熱によって全体的に油煙で汚れる。207は鉢で、口縁部に文字刻印が巡る。208は脚付きの底部で、表面に「霞暗□」と陽刻する。209・210は五徳で、文字の印刻がある。211は把手で、「仙山」と印刻する。

214～216は土人形である。214は童子像、215は狛抱き童子像で、いずれも頭部を欠損する。型押し前後併せ成形で、縁釉が施される。216は素焼きの蛙である。220は環状の土製品で、表面がよく磨かれている。

234・235は石製品の硯である。234の裏面には「享保九年 正月四日 十二童 文賞齊肩山」と陰刻される。

242は文久永宝、249は煙管雁首で、肩部に線状の刻みが施される。250は鉄製の鎌で、腐食して刃こぼれする。

256～259は漆器である。256・258は椀で、256・257は見込み・体部ともに黒漆、258は見込みに黒漆、体部に赤漆である。259は杓子で、表裏面ともに赤漆で、柄を欠損する。289～299・322～332は木製品である。289・290・292～294は木札で、290・294の表裏面及び292・293の表面に墨書がある。290の表面は「□覺帳」、292は「七日□□□」、293は「□□□□□/吉澤□」である。294の表面は、左列と右列で同じ文字が書かれていると思われる、「番八枚之内/番八枚之内」、裏面は「演野屋」と判読できる。295は板状木製品で、建物状の図柄のような墨書がある。291・298・299は曲物の蓋か底板である。296・297は曲物の蓋で、296の表面に墨書、297の表面に焼印がある。322～324は横櫛で、322・323は削り出し、324は差し歯タイプである。325は羽子板で、表裏面には、墨や朱の文様がある。326～328は箸で、削り出しだある。326は六角形で両端に朱、327は丸木で隅丸方形、328は四角形である。329は加工板、330は栓である。331・332は不明木製品で、331は鍵手状、332は側面に吊り下げるための孔が施された円柱状を呈する。

#### SD03（背割水路、第20～24・26～32・34～36図、図版8～17・19）

17～37は肥前磁器である。17～28は碗で、17は見込みに寿字文と雷文、体部に繋ぎ蓮弁状の文様、18は小碗か向付で見込みに雷文、体部に人面及び松と草、19は体部に松と團線、20は見込みに卷貝(宝貝)と四方擗、体部に唐花、21は器形が半球形で見込みに十字花、体部に鶴と松、22は広東碗で見込みに團線、体部に松と草花、23は見込みに寿字文、四方擗と團線、体部に唐花、24は見込みに格子文と團線、体部に草と團線がある。25は、見込みに宝と團線、体部に草花と團線、高台内に朱書きで「松村や□□□」、焼き継ぎがある。26は見込みに寿字文と團線、体部に山水と柳、27は見込みに魚、体部に文字文、28は広東碗で体部に船と波がある。29・30は蓋で、29は見込みに格子と團線、体部に格子文、30は広東碗の蓋で見込みに鷺、つまみ内に桜と紫陽花、体部に鳥、桜と紫陽花がある。31は皿で、見込みの口縁付近に貼付菊花がある。十四弁菊である。32～35は鉢で、32・33は向付、32は見込みに四方擗、体部に蛸唐草、33は見込みに四方擗、体部に菊花がある。34は見込みと体部に蛸唐草を施す源氏香文様がある。35は見込みに素地染付と團線、砂目高台の初期伊万里である。36は猪口で、体部に斜格子と薄、團線がある。37は線香立で、体部に筆文がある。69～75は肥前系磁器である。69～71は体部に草花のある碗である。70は高台内に文字がある。72～76は皿である。72は見込みに花と蛸唐草、團線、体部に繋ぎ松葉と團線、蛇の目高台である。73は見込みに花弁と花、唐草、74は見込みに草と蛇の目痕、75は見込みに五弁花と花、唐草、團線、体部に草と團線がある。92～105は瀬戸系磁器である。92～98は碗で、92は体部に菊唐草とその周囲に松、高台に○×文、高台内に名款がある。93は見込みに花と團線、体部に菊花、94は見込みに花、体部に宝文、95は見込みに蝶、体部に草花と團線、96は見込みに蝶と團線、体部に

花弁、97・98は体部に植物文がある。99・100は蓋で、合子蓋と考えられる。99はつまみを欠損し、体部に松葉十字花文と梅、条線、100は上部に山水か梅林、体部に丸と櫛齒がある。101～103は皿である。101は輪花皿で、見込みに山水画がある。102は形打陽刻で、見込みに十字花、波に縞杉、体部にはハリ跡が残る。103は輪花皿で、見込みに花詰文、体部に繋ぎ花文と雷文がある。104は瓶で、器形は筒形で、体部に渦状文と縦線、透かしが施される。105は戸車で、「天下太平」の墨書がある。106～118は瀬戸・美濃である。106～108は碗である。106は体部に鯨釉の網掛文がある。109・110は拳骨碗で、体部に押圧があって、黒褐色釉に白色釉が点々と散る。111・112は受付皿（灯明皿）、113は皿（灯明皿）で、いずれも油煙が付着する。112の底部には渦巻き状の線刻がある。114は鉢、115は擂鉢である。116は壺で、肩部にしのぎがある。117は仏瓶で、光沢のある鉄釉が施され、白色釉が点々と散る。底部は糸切りである。118は秉燭又は蓋である。154～167は越中瀬戸である。154・155は小鉢である。156～163は皿で、156は見込みに十六弁菊の印花、高台内に墨書がある。157・159～163は見込みに重ね焼き痕がある。164は受付皿（灯明皿）、165は片口擂鉢、166・167は建水か匣鉢である。156・164を除き、底部糸切りである。177～188はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。182を除き、油煙が付着する。189は非ロクロ成形の土師器の秉燭である。198は越前の鉢である。貼付脚で、体部に刻印らしき痕跡がある。200は瓦質土器の鉢と考えられる。口縁が平らで、体部に上下の区画内に亀甲文と梅花及び松葉がある。203は輪入陶器の鉢である。中国系で、体部に宝相華がある。

221は角が摩滅し、円形の板状を呈する。表面に「大極上製□大坂南久太演高田屋庄八」の刻印があり、焼塗壺の蓋の可能性がある。

236は硯である。237は石臼で、穀物臼である。角閃石安山岩製（常願寺川産か）で、南側石積みの石材に転用されていた。

243は寛永通宝で、新寛永である。251は鉄製の握り鉄である。

260は和傘部材で、柄の中ほどを移動する手元輻轂である。表面には赤漆が施される。265～267は下駄である。265は平面丸型の一木連歯下駄、266は無眼下駄、267は田下駄である。300は木札で、表裏面に墨書がある。300の表面は「松□□源□/□□人/京□□□□□」、裏面は「□□□/□□ 弥六/□□十六日」と判読できる。301・302は曲物の蓋で、いずれも墨書がある。301の墨書は「清」である。303～305は曲物の蓋か底板である。306は小型桶である。333・334は削り出しの横櫛である。335は削り出し角棒（四角形）の箸で、上端に朱がある。336は加工板である。

#### SD03 内上水施設（第21・25・27・36図、図版19）

38は肥前磁器の碗である。38は体部に菊花があり、初期伊万里と考えられる。119は瀬戸系磁器の碗である。190はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。

337・338は竹櫛の継ぎ手である。337は南側、338は北側に配置されていた。

#### SD05（第27・32・35図、図版18）

191・192は、ロクロ成形の土師器の灯明皿で、191の底部は糸切りである。

268は平面角型の一木連歯下駄で、側面に横緒孔がある。307は小型曲物で、内底面が広い範囲で炭化する。308・309は曲物の蓋か底板で、いずれも金属製の留め金が残る。

#### SE03（第25・28・36・37図、図版11）

120・121は瀬戸系磁器の碗、122は瀬戸・美濃の片口鉢、123は瀬戸・美濃の秉燭か台付碗で、底部は糸切りである。212は種類不明の碗である。

339は底板で、厚さ約2.5cmを測る。340～342は側板で、厚さ約1.5～1.6cmである。工具で下部を削つ

ている。

SE04 (第37図)

343・344は上段の側板である。343は幅8.7cm・厚さ2.0cm、344は幅9.1cm・厚さ1.7cmで、工具で下部を削っている。345・346は下段の側板である。345は長さ90.4cm・幅8.3cm・厚さ2.0cm、346は長さ91.0cm・幅12.6cm・厚さ1.9cmで、工具で下部を削っている。

SE06 (第21・32・35・37図、図版9)

39・40は肥前磁器で、39は碗、40は皿である。39は見込みに斜線、体部に草花、40は見込みに丸に花弁と2条線の組合せ文様と花、体部に草花がある。いずれも初期伊万里である。

269は平面丸型の構造（差歛）下駄で、露卯下駄である。310・311は木札、347は削り出し丸木（六角形）の箸で湾曲する。

SK09 (第32図、図版16)

261は漆器の椀で、見込み・体部ともに黒漆塗りである。体部に赤漆による文様が施されるが、部分的であるため詳しい文様は不明である。

SK10 (第31図)

252は鉄製の包丁の刃である。刃先は磨食し、刃こぼれする。

SK13 (第31・32図、図版16)

238は砥石である。

262は漆器の椀で、見込み・体部ともに赤漆塗りで、高台内は黒漆塗りである。

SK14 (第21・25・32図)

41は肥前磁器の碗で、体部に草花と圓線がある。124は瀬戸系磁器の碗である。

263は漆器の椀で、見込みは赤漆塗り、体部は黒漆塗りである。体部に赤漆で竹か箒を丸で囲んだ文様が3ヵ所施される。高台内は黒漆塗りで、キャタピラ状の凹みが巡る。

SK16 (第21・25・32図、図版9・11・16)

42・43は肥前磁器の碗である。42は体部に扇と宝尽くしがあり、初期伊万里と考えられる。43は体部に花弁がある。125は瀬戸系磁器の碗で、体部に草花がある。126・127は瀬戸・美濃で、126は碗、127は片口擂鉢である。

270は平面丸型の構造（差歛）下駄で、露卯下駄である。

SK17 (第21・26・28・32図)

44・45は肥前磁器の碗である。44は体部に草花、45は見込みに文字と圓線、体部に箒がある。168は越中瀬戸の建水又は匣鉢である。201は瓦質土器で、容器の蓋と考えられる。

271・272は平面丸型の構造（差歛）下駄である。271は陰卯下駄で、表面に墨漆が塗られる。272は露卯下駄である。

SK18 (第21・25・31・37図、図版9・11・19)

46～49は肥前磁器である。46・47は皿で、46は輪花皿で、見込みに染付及び鳥の陽刻がある。47は蛇の目高台で、見込みに草花、体部に樹木状の文様がある。48・49は瓶で、48は口縁部～体部に蜻唐草、49は口縁部に雷文、体部に花がある。128は瀬戸・美濃の秉燭で、底部糸切りである。

239は硯で、裏面に文字などが線書きされる。

348・349は円形の有孔板である。

SK21 (第25図)

129は瀬戸・美濃の皿である。

## SK23 (第25・37図)

130は瀬戸・美濃の碗である。

350は削り出し丸木の箸である。

## SK25 (第21・25・35図、図版9・18)

50は肥前磁器の瓶で、体部に蘭がある。131～133は瀬戸・美濃の皿である。131は見込みに重ね焼き痕が残る。

312は木札で、表裏面に墨書きがある。表面は「山一」とみられる屋号の記号、他は不明で、裏面は「□□壱斤入」と判読できる。

## SK26 (第25・26・31・37図、図版12・19)

134は瀬戸系磁器の碗、169は越中瀬戸の碗である。

253は金属製で、両端に留め金具が残る把手である。

351・352は削り出し丸木の箸である。

## SK29 (第31～33・37・38図、図版15)

273～275は平面丸型の一本連歯下駄で、前歯と後歯が磨り減って草履下駄状を呈する。276は下駄歯である。353は削り出し丸木の箸、354は杭、355は棒状木片である。

244は寛永通宝で、古寛永である。

## SK30 (第21～23・25・27・33・35・38図、図版9・10・12・13・16・18)

51・52は肥前磁器の皿である。51は見込みに菊花流水があり、初期伊万里と考えられる。52は見込みに菊花、体部に松葉がある。76は肥前系磁器の皿で、見込みに花と囲線がある。135・136は瀬戸系磁器の碗で、135は体部に太湖石と花、高台内に文字がある。137は瀬戸・美濃の小鉢、138・139は瀬戸・美濃の片口鉢である。170・171は越中瀬戸の小鉢、172は越中瀬戸の擂鉢、173は越中瀬戸の三脚付火鉢である。193・194はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。

277～282は平面丸型の構造（差歎）下駄で、いずれも露卯下駄である。277～280は、表面・側面に赤漆、裏面・歯に黒漆が施される。313は小型曲物、356は削り出し丸木の箸である。

## SK33 (第29図)

222は土製品で、表面に「□□名産□□組合□□□一」の刻印がある。搅乱によって、上層から混入したものと考えられる。

## SX03 (第22・25・27・31～33・35・38図、図版9・15・19)

53・54は肥前磁器である。53は碗で、体部に花弁と囲線がある。54は皿で、見込みに花弁と囲線があり、初期伊万里と考えられる。140は瀬戸系磁器の皿である。195はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。

245は寛永通宝で、新寛永である。

264は漆器の椀で、見込み・体部ともに黒漆塗りで、体部に紅葉と草の文様がある。283～286は下駄である。283・284は平面角型の構造（差歎）下駄で、283は陰卯下駄、284は露卯下駄である。285は平面丸型の構造（差歎）下駄で、露卯下駄である。286は下駄歯である。314は曲物の蓋か底板である。357は正方形の板で、表面は斜めに区画して赤漆と黒漆が塗られ、裏面は赤漆が塗られる。裏面の上下に、木を留めた接合痕跡が残る。358は加工木である。

## SX04 (第25・27・38図、図版13・14・19)

141は瀬戸・美濃の皿で、見込みに印花の痕跡がわずかに残る。174は越中瀬戸の皿で、見込みに十六弁菊の印花、高台内に墨書きがある。197は丹波系陶器の片口擂鉢である。

359は包丁の柄で、茎が残る。

**SX07 (第22・23・29・30・35・38図、図版10・15・19)**

55～61は肥前磁器である。55～59は碗で、55は体部に蝶と草花、囲線、56は見込みに文字と囲線、体部に縱線と草、57は見込みに文字と波・兎、高台内に文字、58は見込みに文字と囲線、体部に唐草、高台内に文字、59は体部に菊と囲線がある。60・61は皿である。60は輪花皿で、見込みに草花流水、底部は糸切細工で、初期伊万里と考えられる。61は見込みに草花、体部に草がある。80・81は唐津系磁器の碗である。80は体部に丸に花弁と囲線、81は体部に樹木と山状の文様がある。82は唐津の灯明皿で、焼成不良である。83は唐津の片口鉢で、体部に輪状の白化粧、見込みに白泥によって渦巻き状に刷毛目文様が施される。80～82は、17世紀代と考えられる。

224はイタヤガイ製の貝杓子で、柄を取り付けるための直径約2.5mmの孔が2つある(第4章第4節)。

225～229は羽口、231・232は鉄滓である。

315・360・361は木製品で、315は曲物の蓋か底板、360・361は加工木である。

**SX08 (第25図)**

142は瀬戸系磁器の碗である。

**SX09 (第22・30図、図版15)**

62は肥前磁器の碗で、体部に菊花と囲線がある。

230は羽口、233は鉄滓である。

**SX10 (第22・23・25・27・28・31・33・35図、図版10・12)**

63～66は肥前磁器である。63・64は碗で、63の体部には丸に格子状染付がある。64は体部に草か文字がある。65は焼き継ぎのある蓋で、体部に草花と囲線がある。66は瓶で、体部に靖唐草と縱縞、囲線がある。84は唐津の鉢で、見込みに白泥による波状文がある。143は瀬戸・美濃の植木鉢で、鶴縁桶型である。175は越中瀬戸の建水か匣鉢である。204・205は中国系の輸入陶器である。204は台付の台の部分で、外面に波状文がある。205は鉢で、見込みにしのぎがある。

240は粘板岩製の砥石である。

287は平面角型の構造(差歛)下駄で、陰卯下駄である。316は曲物の蓋である。

**曲物底板 (第38図、図版19)**

367は平面円形の大型の曲物底板で、長軸約0.67m×短軸約0.66mを測る。5枚の板を繋ぎ合わせたもので、板の厚さは約3.4cmである。片面のみが、全面的にギトギトした膜状の付着物で被われる。包含層出土遺物 (第22・23・25・28・29・31・33・35・38図、図版10・14～16・18・19)

67・85・144・213・217～219・223・241・246・254・255・318～321・362～366・368・369は、VI層(下層面遺物包含層)からの出土遺物である。247・288・317はA区の東側の試掘トレンチからの出土遺物、248はB区撹乱層からの出土遺物であるが、併せて報告する。

67・223は肥前磁器である。67は瓶で、体部に2羽の鳥と草花、囲線、高台に囲線が巡り、砂目高台である。223は化粧道具の紅皿で、体部にしのぎがある。85は唐津で、朝鮮唐津の瓶(大利德)である。SE04の南側(B4グリッド)からの出土で、口縁部を欠損するが、体部下半にかけて、鉄釉に白釉を上から掛ける装飾技法がみられる。時期は、17世紀前半と考えられる。144は瀬戸・美濃の碗である。213は把手及び注口付の行平鍋で、体部に飛鉢が施される。

217は土人形で、頭部を欠損する女性像、218は大黒天(人形)が陽刻された陶器の一部と考えられる。219は泥面子で、家紋の笠竜胆が押型される。

241は石製丸玉で、表面に赤彩の痕跡が残る。

246～248は寛永通宝で、246は古寛永、247・248は新寛永である。254・255は金属製品で、254は鉄地の表面に鍍金の施された小判形の飾り、255は簪である。

288は平面丸型の一木連歯下駄で、前歯と後歯が磨り減って草履下駄状を呈する。317は加工板である。318・319は木札で、318には焼印で「木町濱屋」、319の表裏面には墨書がある。320・321は曲物の蓋か底板である。321の表裏面は炭化する。362は削り出し丸木の箸である。363は筒か鞘、364～366は上水施設の継ぎ手である。

368・369は瓦で、368は越前系の丸瓦、369は軒棟瓦である。

87を除き、18世紀後半～19世紀中頃が主体と考えられる。

## (2) 上層面(江戸時代末～近代)の出土遺物

上層遺構からは、背割水路SD01を中心に、統制磁器などの磁器、犬や鳥などの土製品、鉄製のコテ、寛永通宝と文久永宝、木製品、瓦などが出土した。

### SD01(背割水路、第39図、図版20)

370～373は統制磁器である。370・371は碗で、370は高台内に「岐405」、371は体部に「岐1003」とある。371は見込みに花十字、区画内の肩と花が連続する。372は小皿で、高台内に「有46」、見込みに草がある。373は瓶で、高台内に「会19」、体部に花がある。374～377・380・381は磁器である。374は碗で、見込みに五弁花、体部に唐草がある。375・376は蛇の目高台の輪花皿で、375は見込みに筆と錦文、牡丹、草花、体部に唐草、376は見込みに桔梗と竹、花、体部に牡丹、唐草がある。377は徳利で、体部に格子目の上に桜花と短冊「支那事変凱旋記念」がある。380・381は猪口で、380は見込みに桜花と「除隊記念」、381は見込みに「銘酒満泉」、体部に松葉などがある。378・379は九谷磁器の猪口で、高台内に「九谷」とある。378は見込みに菊花、体部に松葉と圓線、379は見込みに人面、体部に桜花と「不して帰る□□ぞ□□しき」とある。384は信楽系磁器の皿で、見込みに3条線の櫛目と2カ所目跡があり、油煙が付着することから灯明皿と考えられる。

385は統制磁器の人形で、背面に「京人56」とある。386～388は土製品で、386は鳥、387は犬、388は林檎である。

389～391は寛永通宝で、新寛永である。392は一錢貨で、明治21(1888)年の発行である。

397・398は瓦で、397は軒瓦、398は軒丸瓦である。

他に圓化はしなかったが、石製とガラス製のビー玉状の玉が、大小合わせて数多く出土した。ビー玉もあると考えられるが、玉のほとんどは、小石とガラス片が、流水と敷石及び石積みとの摩擦によって、角が削れて丸くなつたと考えられる。本水路で水流があったことを示す遺物と考えられる。

### SX01(第39図、図版20)

394は鉄製のコテで、柄が直角に曲がる。

### 包含層出土遺物(第39図、図版20)

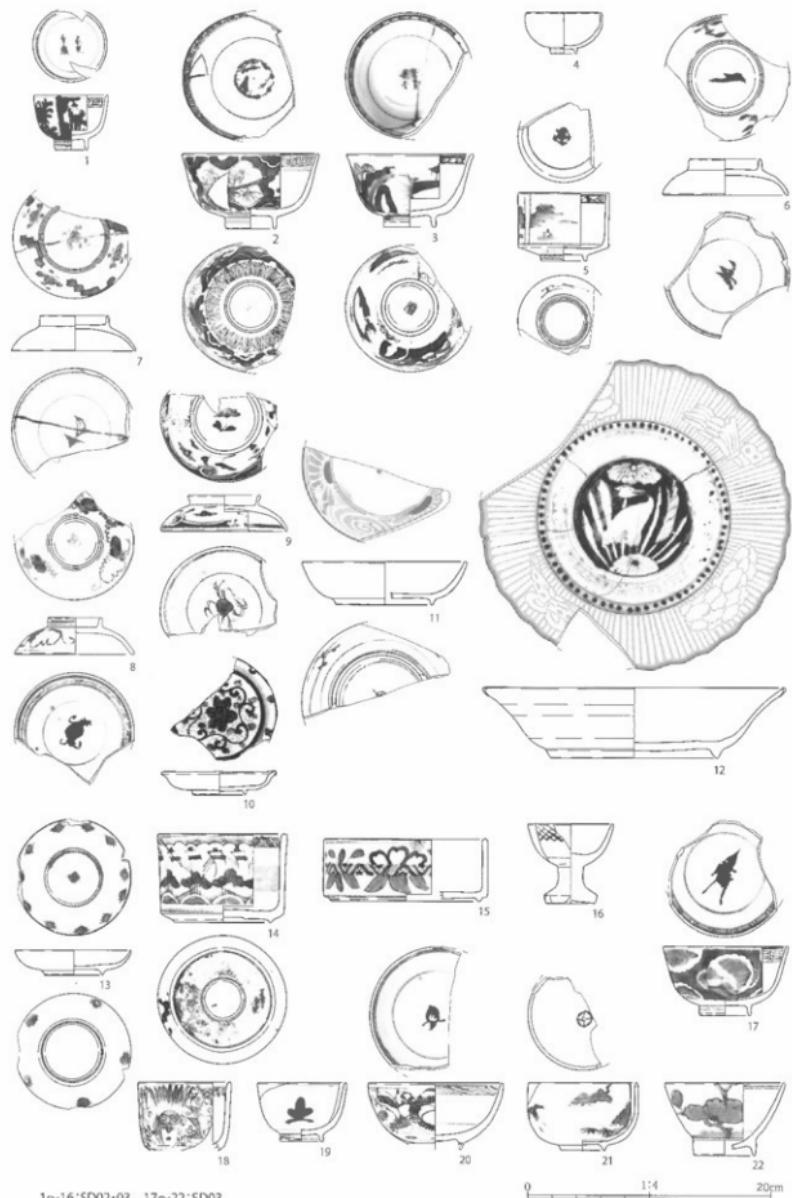
382・383・393・395・396はV層(上層面遺物包含層)からの出土遺物である。

382・383は磁器の猪口である。382は高台に穿孔、体部に「八尾坂道 別れて 来れば 露か時雨かオハラ はらはらと」といった、越中おわら節の歌詞がある。特注品と考えられる。383は見込みに桜花と「除隊記念」とある。

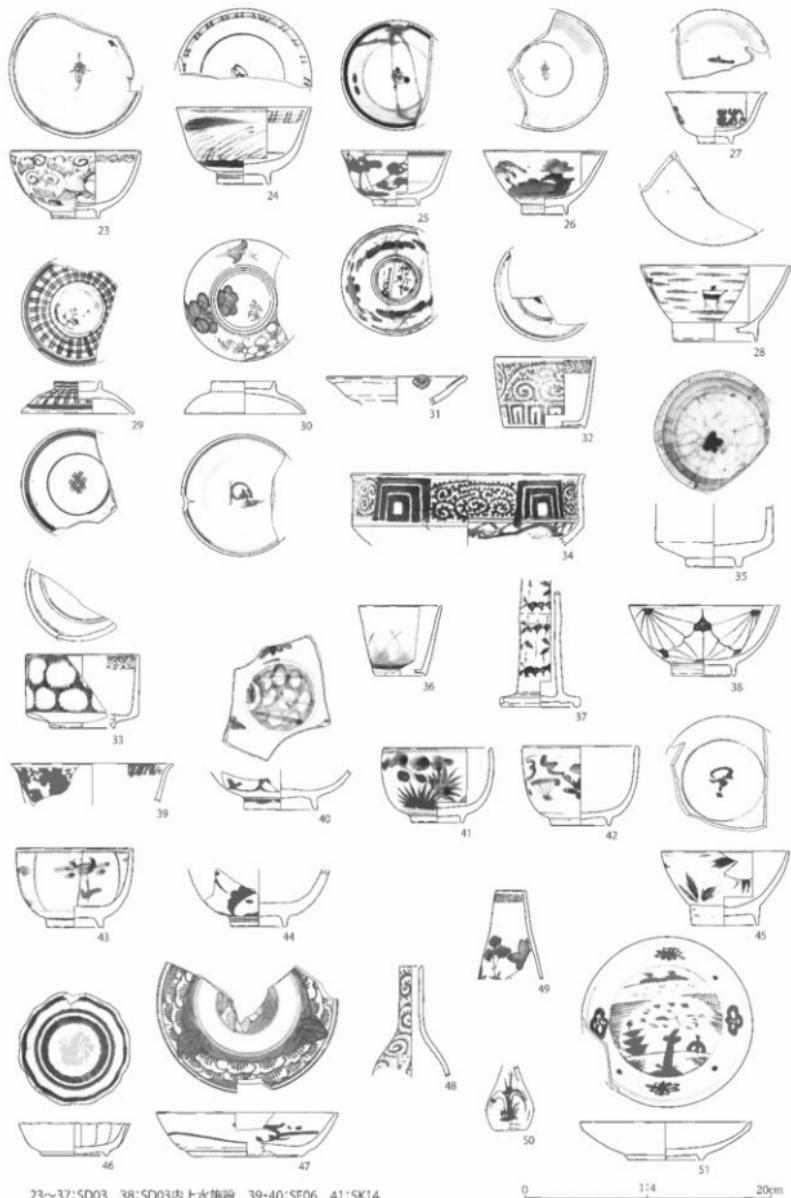
393は文久永宝である。

395・396は木製品で、395は小判状板、396は栓である。

(基峰)



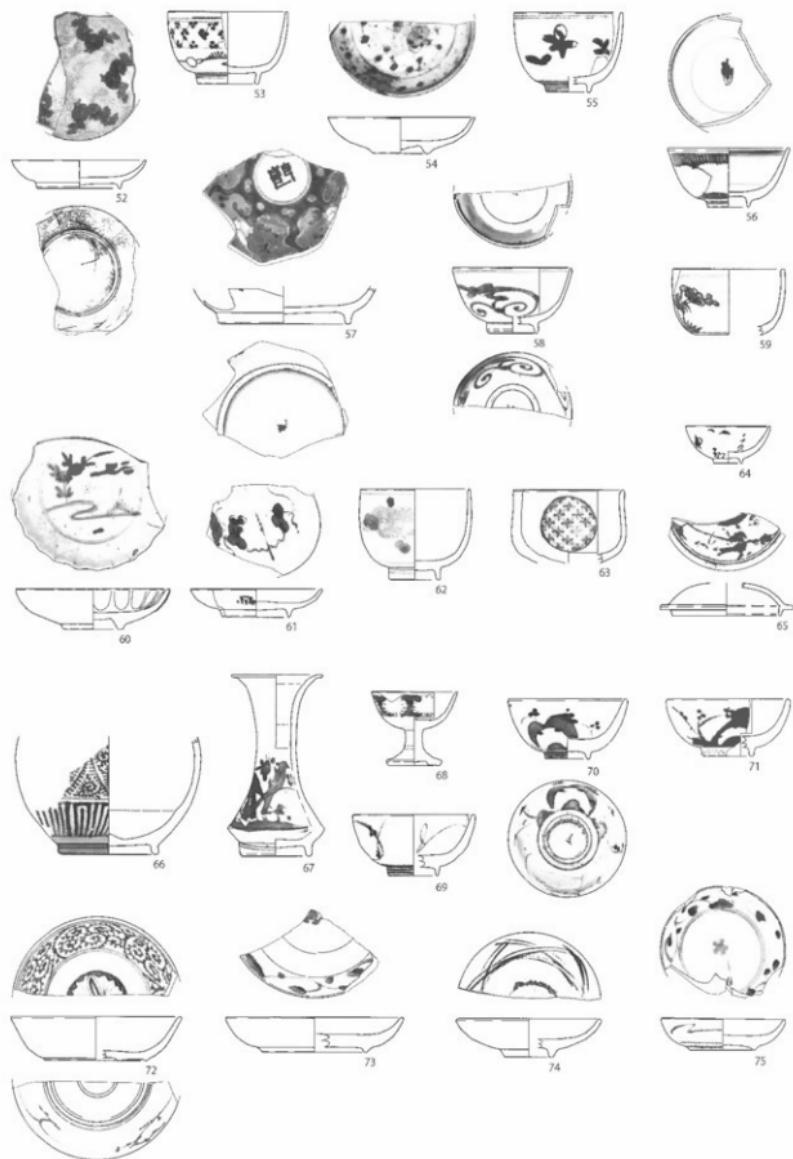
第20図 遺物実測図1【下層面：肥前磁器1~22】



23~37:SD03 38:SD03内上水施設 39~40:SE06 41:SK14  
42~43:SK16 44~45:SK17 46~49:SK18 50:SK25 51:SK30

0 1/4 20mm

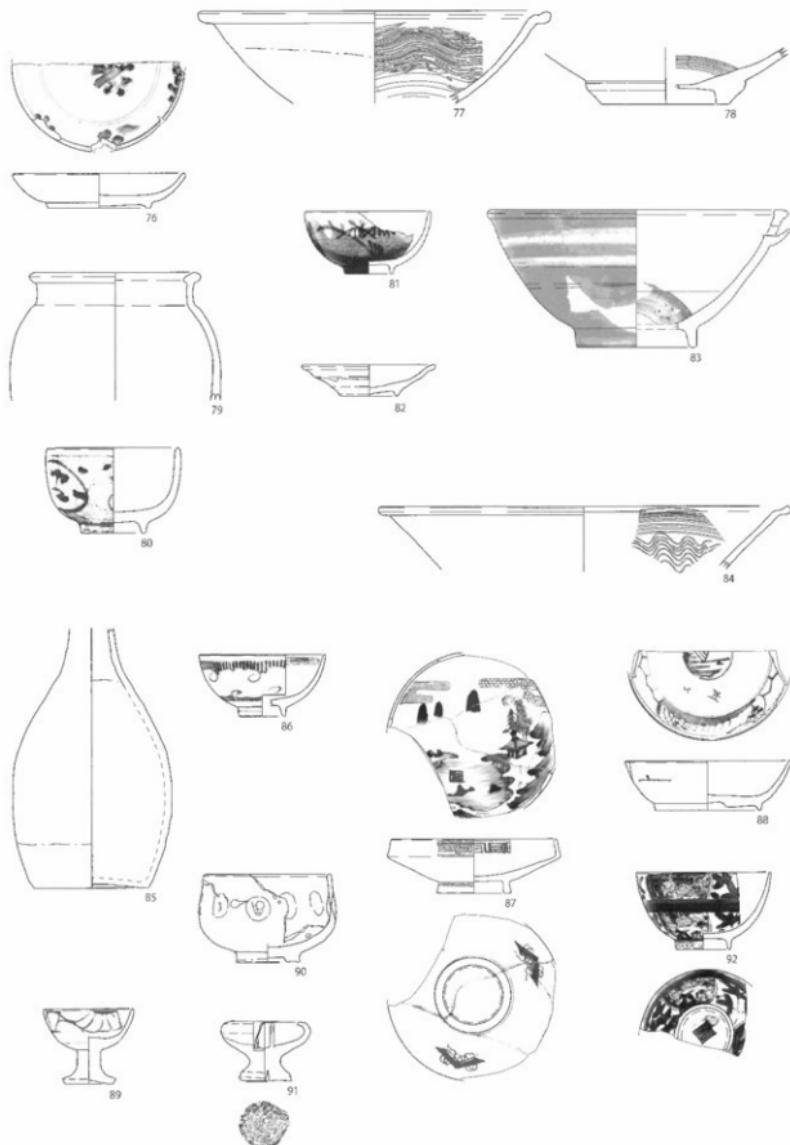
第21図 遺物実測図2 [下層面・肥前磁器 23~51]



52:SK30 53・54:SK03 55~61:SK07 62:SK09 63~66:SK10 67:包含層  
68:SD02+03 69~75:SD03

0 1/4 20cm

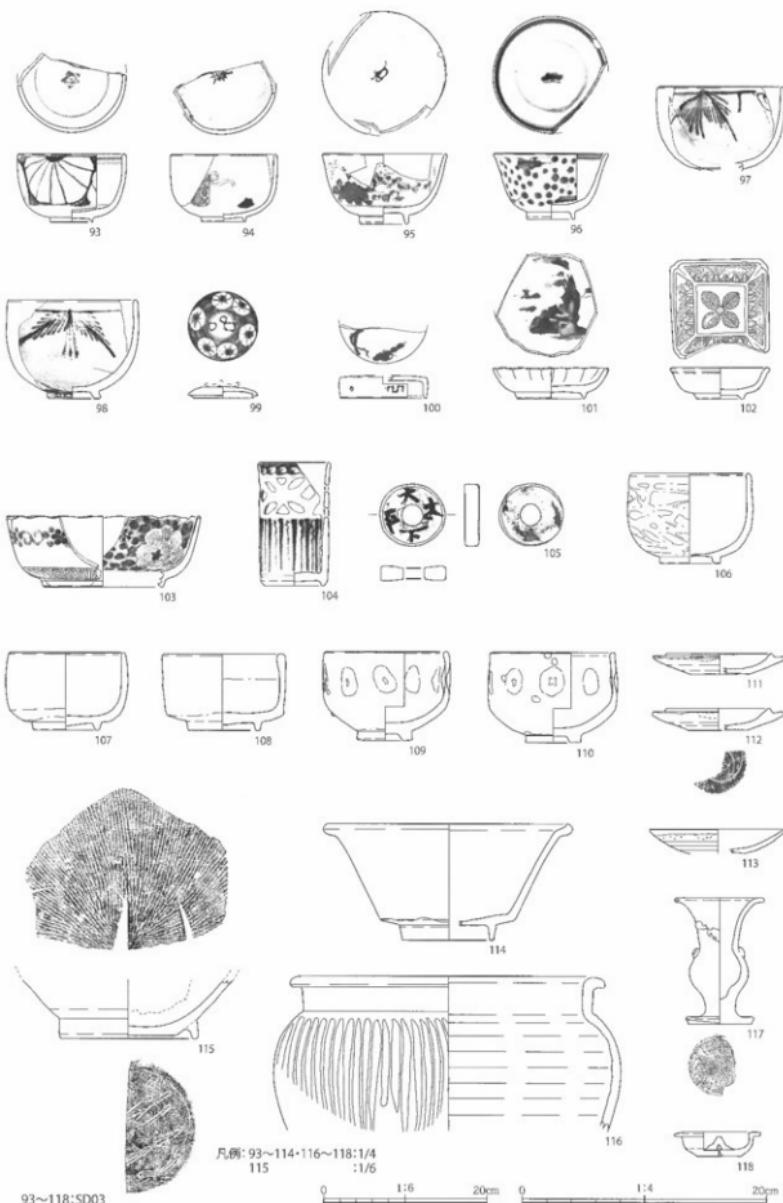
第22図 遺物実測図3 [下層面：肥前磁器 52～67、肥前系磁器 68～75]



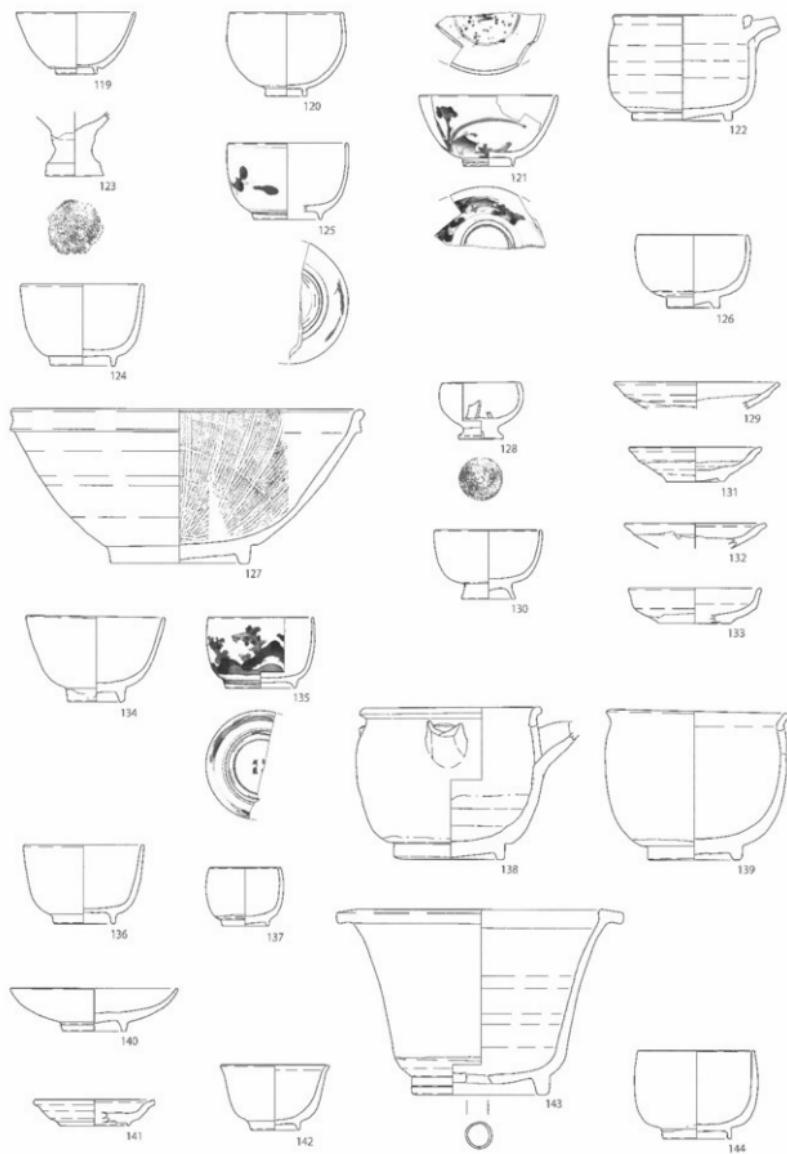
76:SK30 77~79・86~91:SD02・03  
80~83:SK07 84:SX10 85:包含層 92:SD03

0 1/4 20cm

第23図 遺物実測図4 [下層面: 肥前系磁器 76、唐津 77~79・82~85、唐津系磁器 80・81、  
瀬戸系磁器 86~89・92、瀬戸・美濃 90・91]



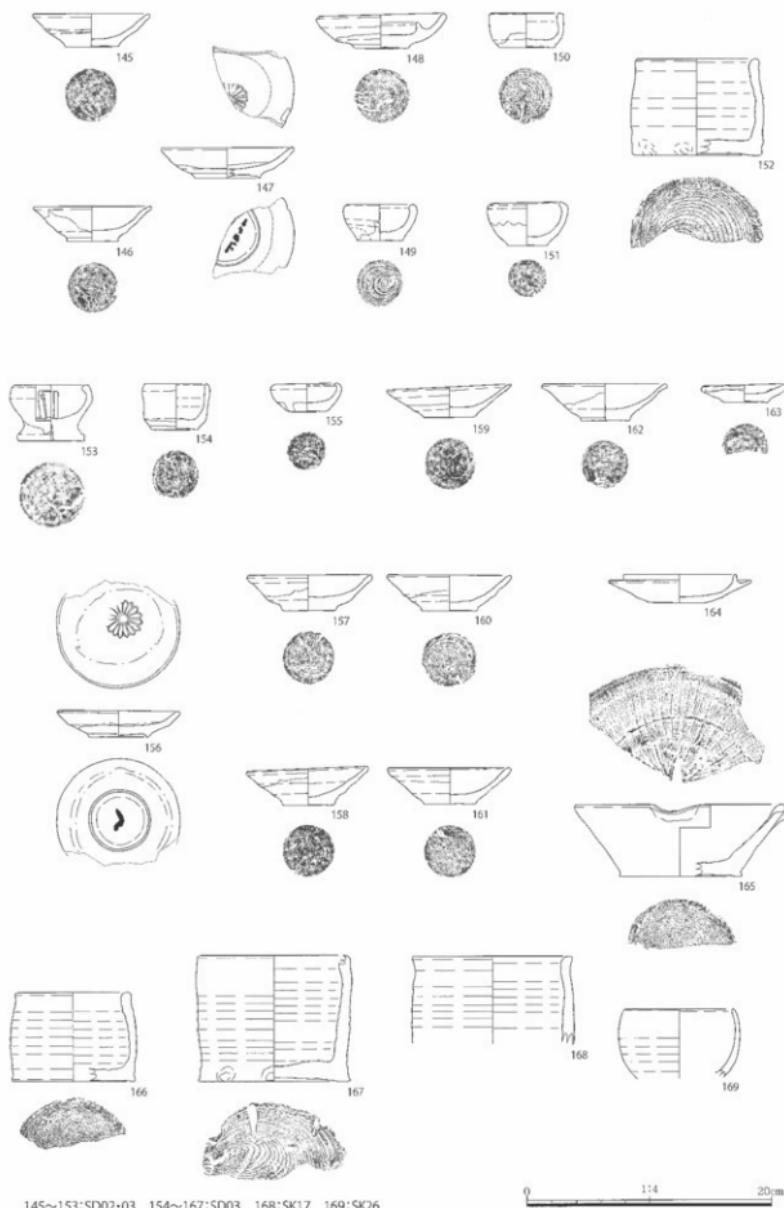
第24図 遺物実測図5 [下層面: 濱戸系磁器 93~105、濱戸・美濃 106~118]



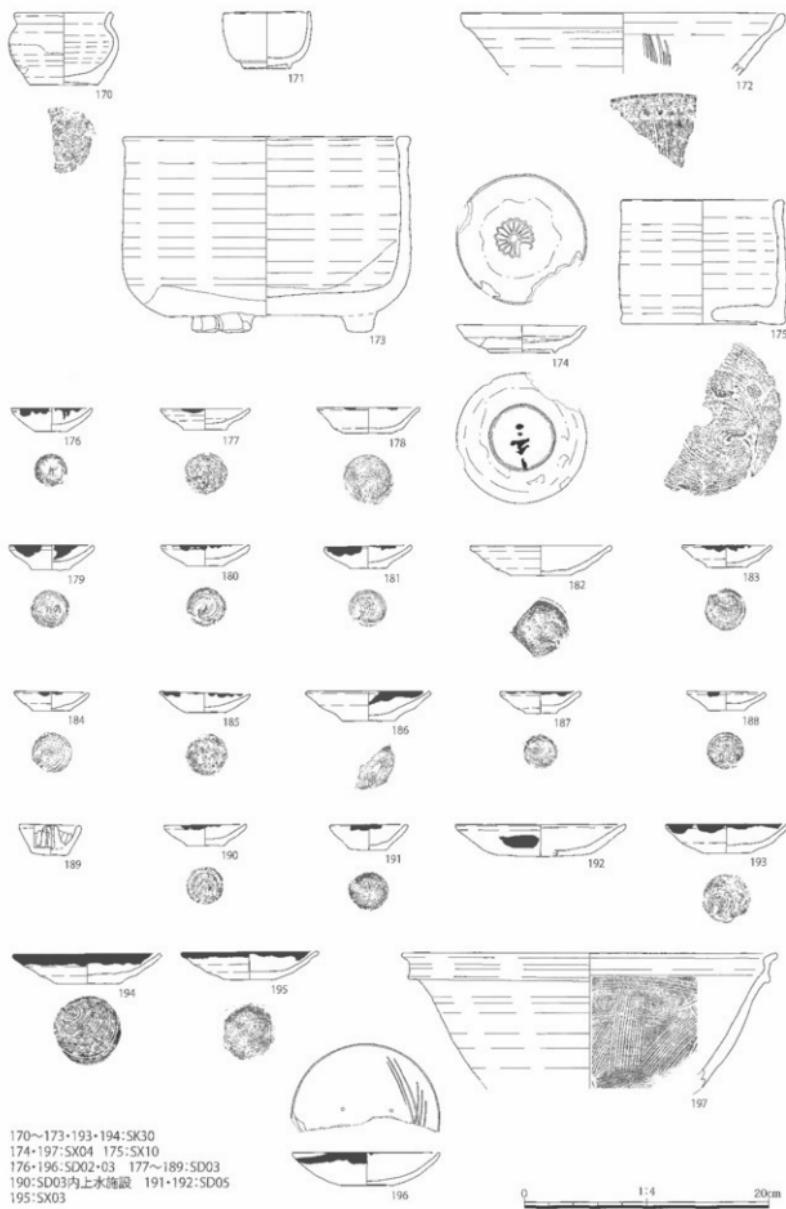
119:SD03内上水施設 120~123:SE03 124:SK14 125~127:SK16  
128:SK18 129:SK21 130:SK23 131~133:SK25 134:SK26  
135~139:SK30 140:SX03 141:SX04 142:SX08 143:SX10 144:包含層

0 10 20cm

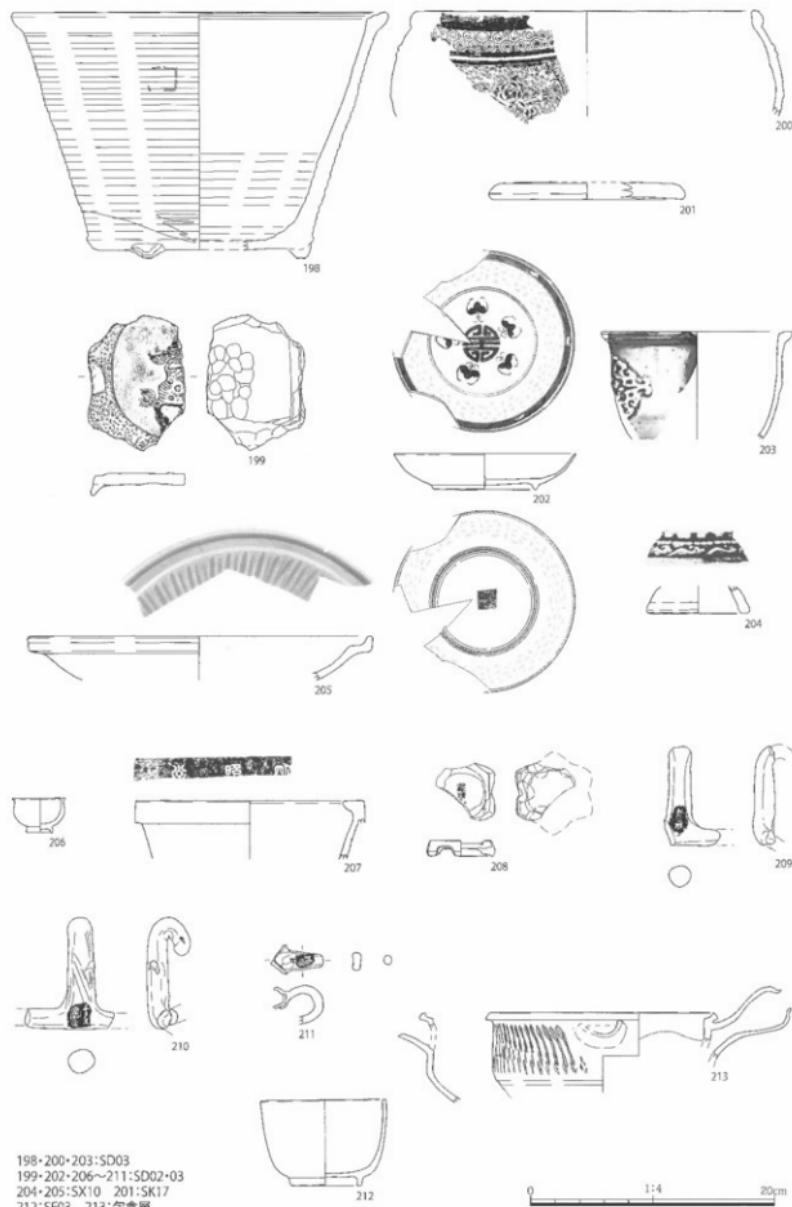
第25図 遺物実測図6 [下層面:瀬戸系磁器119~121・124・125・134~136・140・142、  
瀬戸・美濃122・123・126~133・137~139・141・143・144]



第26図 遺物実測図7 [下層面：越中瀬戸145～169]

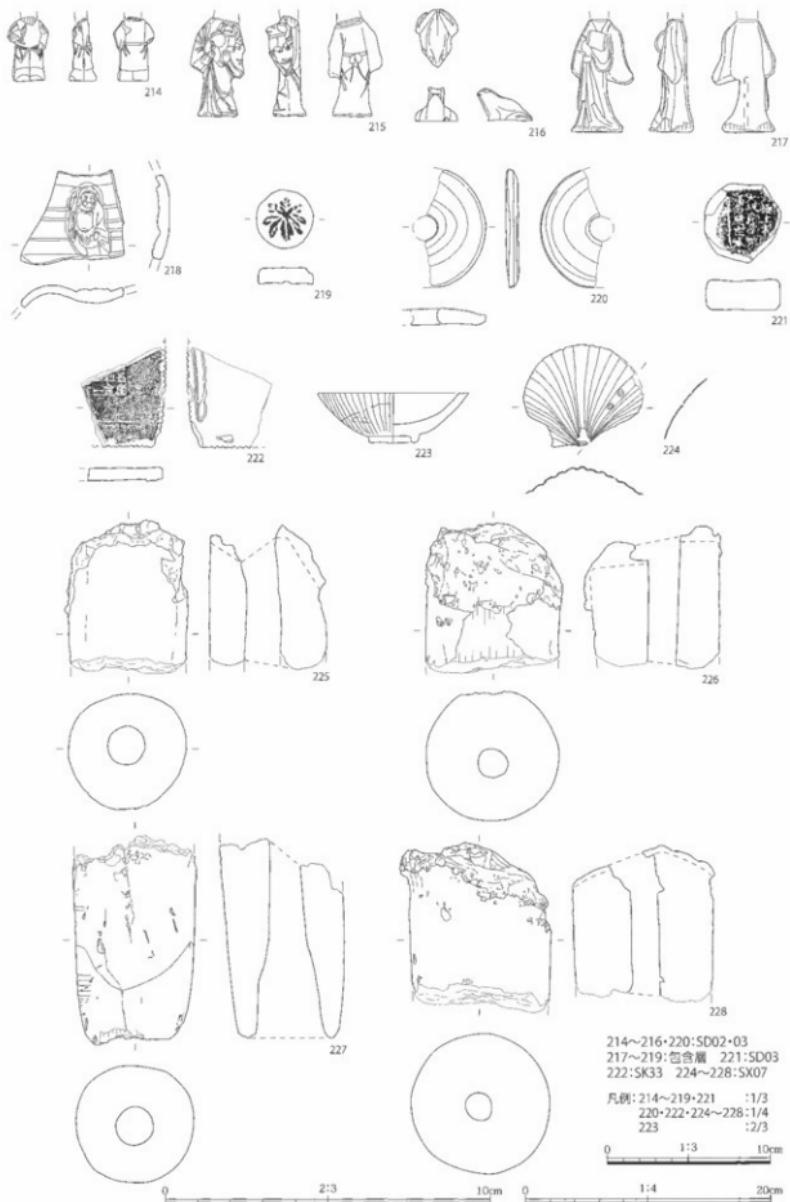


第27図 遺物実測図8【下層面：越中瀬戸170～175、土師器176～195、信楽系磁器196、丹波系陶器197】

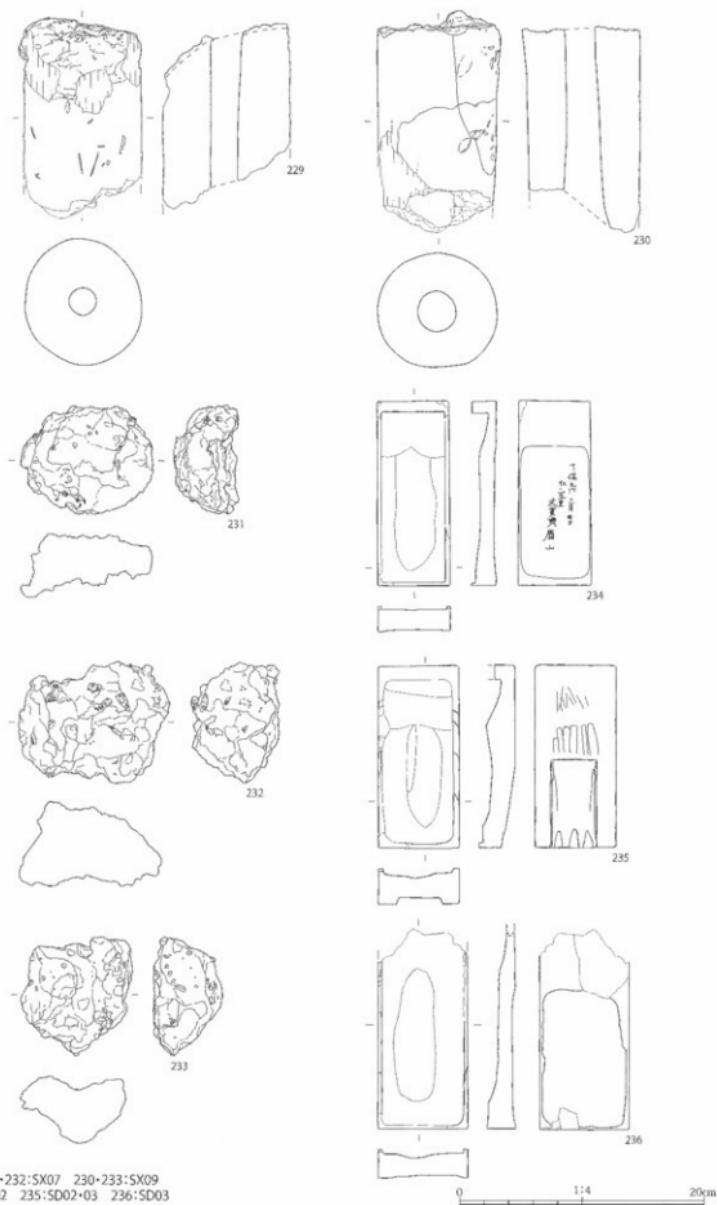


198・200・203:SD03  
199・202・206～211:SD02-03  
204・205:SX10 201:SK17  
212:SE03 213:包含層

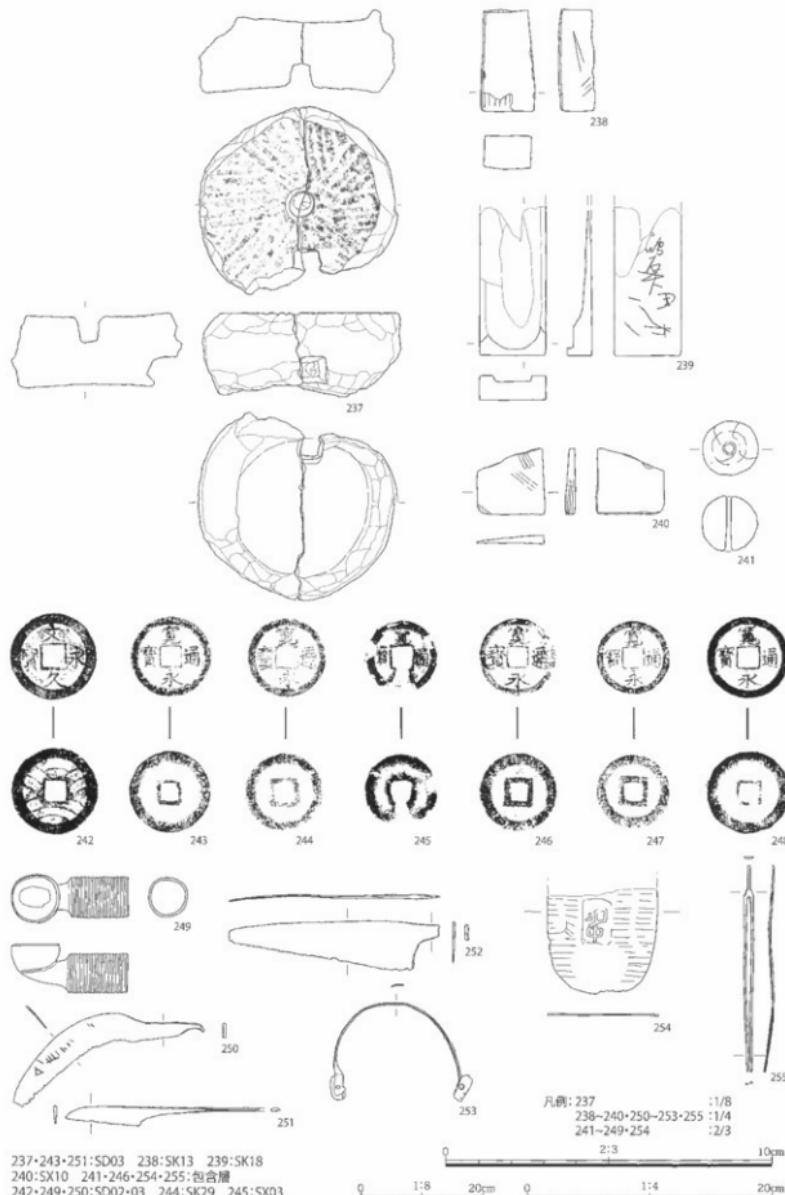
第28図 遺物実測図9 [下層面：越前198、瓦質土器199～201、輸入陶磁器202～205、不明陶磁器206～213]



第29図 遺物実測図10 [下層面: 土人形214~218、泥面子219、土製品他220~224、羽口225~228]



第30図 遺物実測図11 [下層面：羽口229・230、鉄滓231～233、石製品234～236]



237-243・251:SD03 238:SK13 239:SK18  
240:SK10 241-246-254-255:包含層  
242-249-250:SD02-03 244:SK29 245:SK03  
247:試掘トレンチ 248:B区攢乱 252:SK10 253:SK26

第31図 遺物実測図 12 [下層面: 石製品 237~241、銭貨 242~248、煙管 249、金属製品他 250~255]



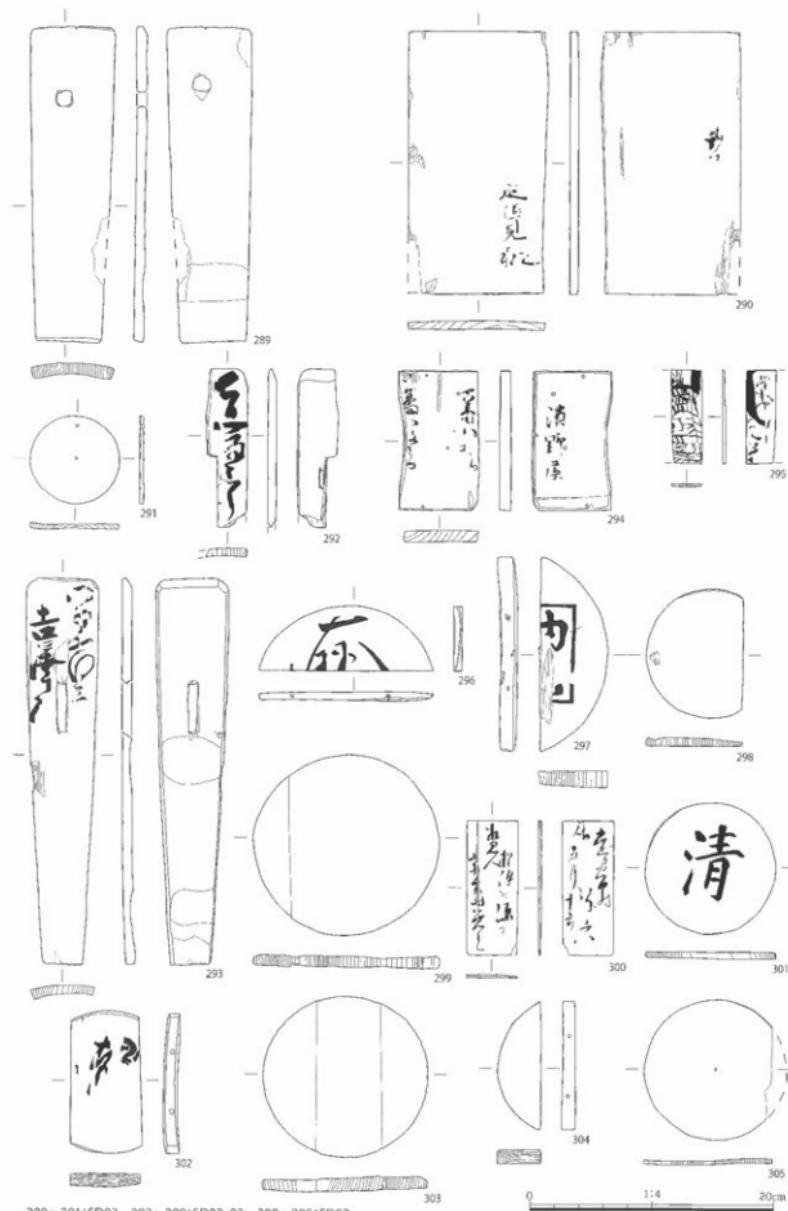
第32図 遺物実測図13 [下層面:漆器256~264、下駄265~275]



276:SK29 277～282:SK30  
283～286:SK03 287:SK10 288:試掘トレンチ

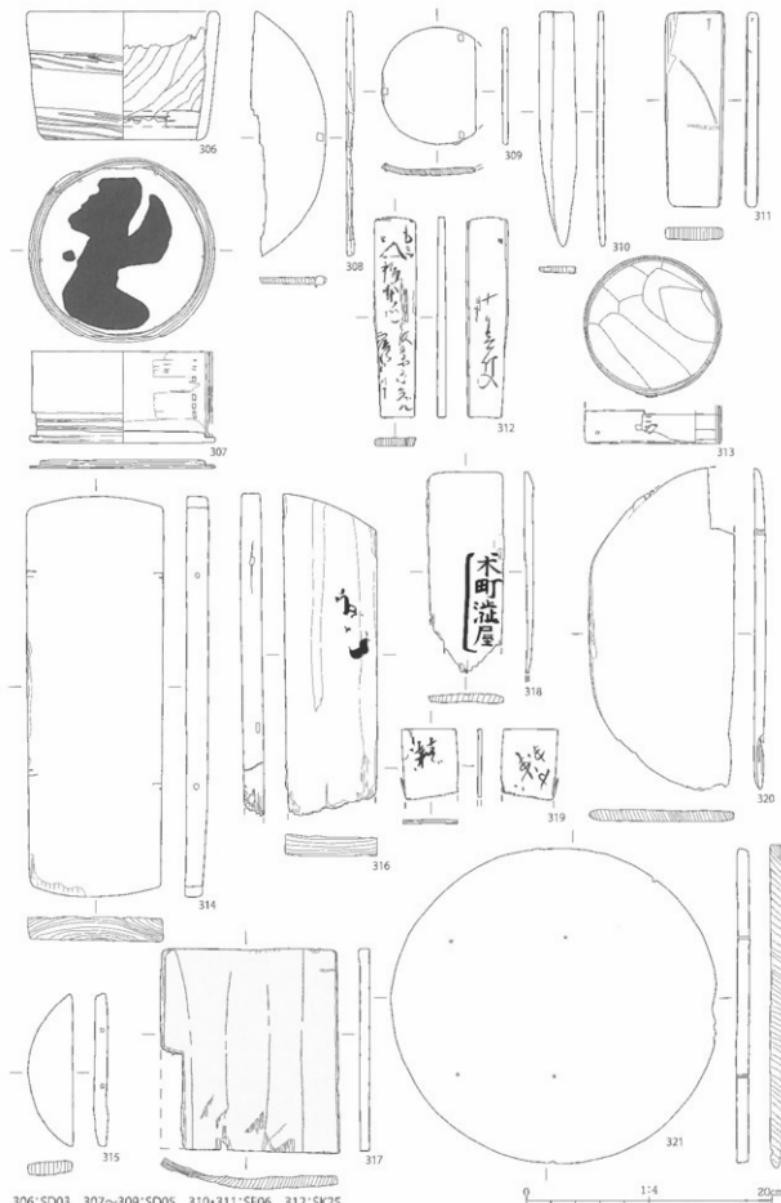
0 1:6 20cm

第33図 遺物実測図14 [下層面:下駄276～288]



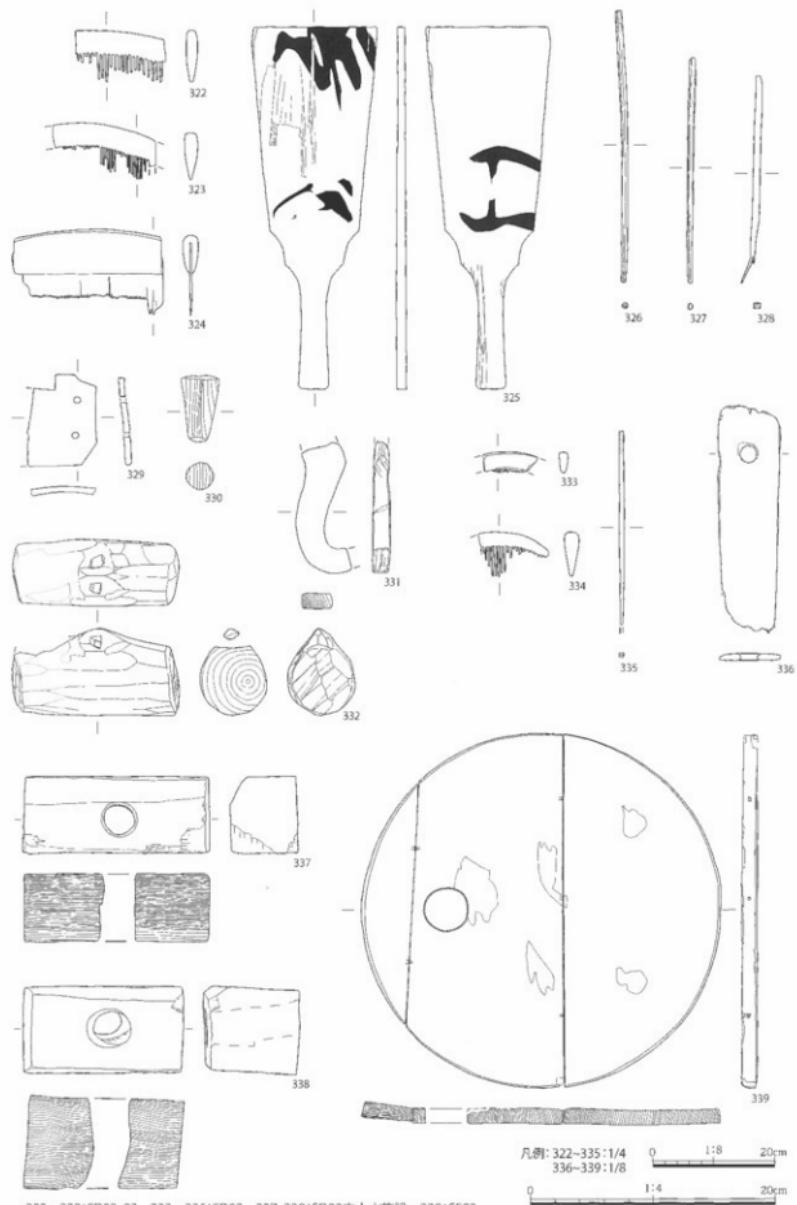
289~291:SD02 292~299:SD02~03 300~305:SD03

第34図 遺物実測図15 [下層面：その他木製品289~305]

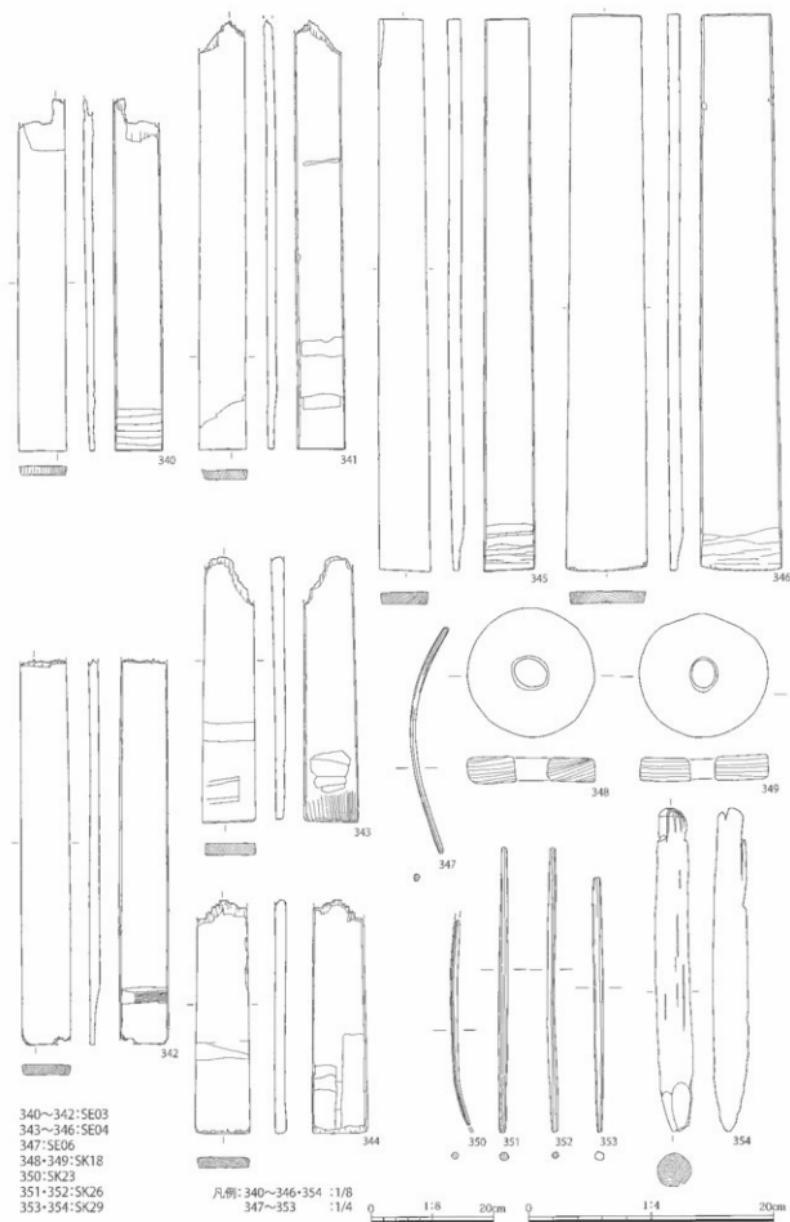


306:SD03 307~309:SD05 310~311:SE06 312:SK25  
313:SK30 314:SK03 315:SX07 316:SX10 317:試掘トレンチ 318~321:包含層

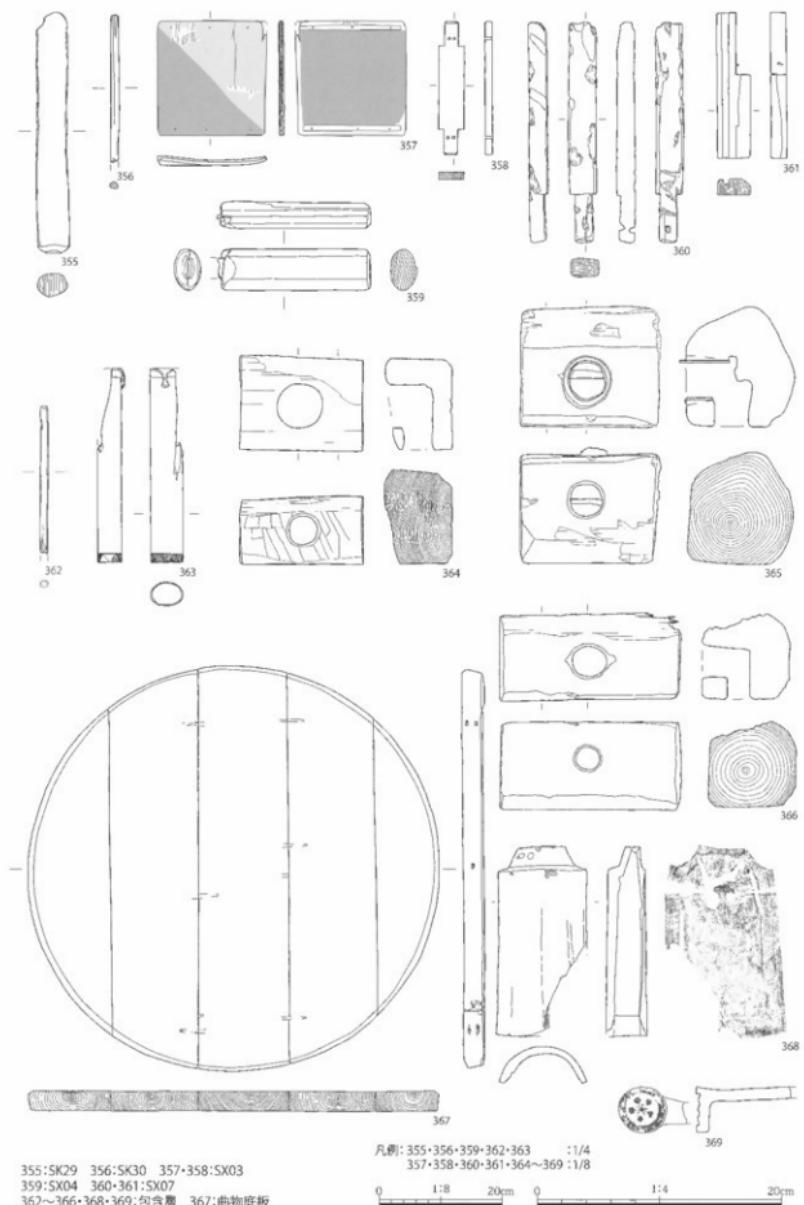
第35図 遺物実測図16 [下層面：その他木製品306～321]



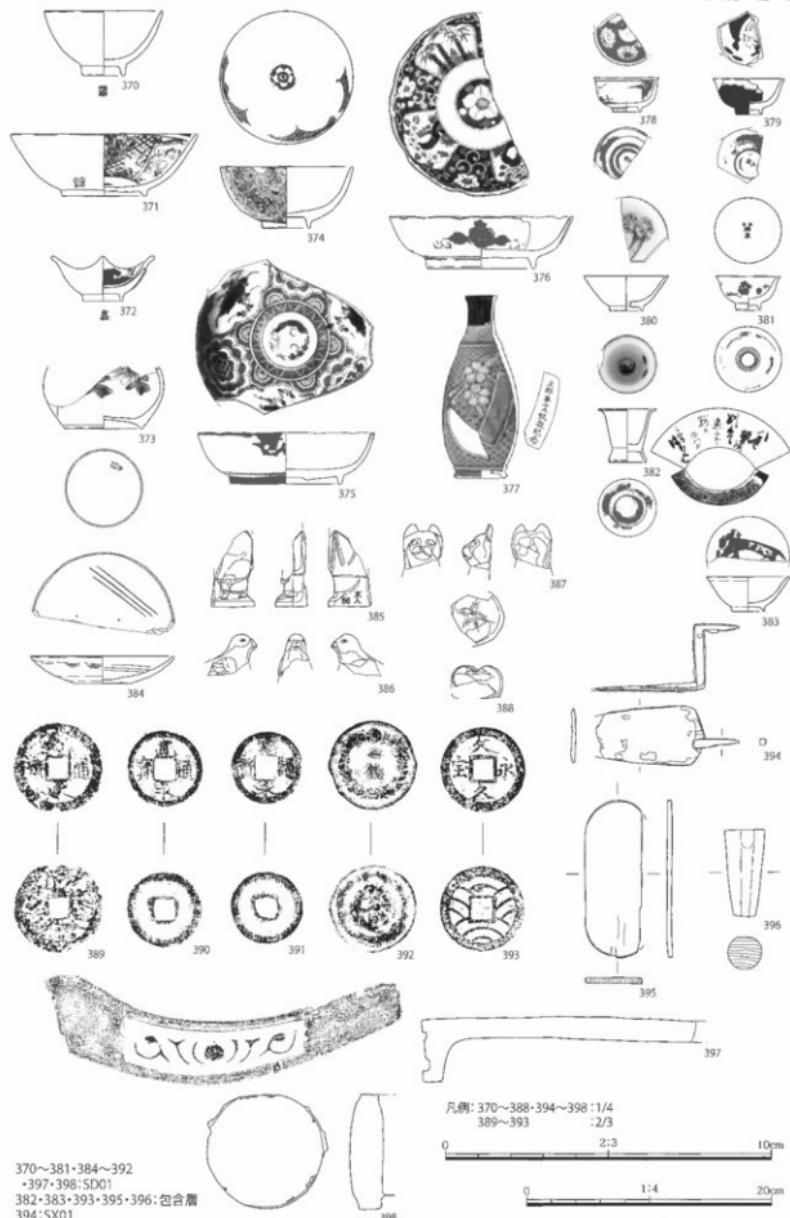
第36図 遺物実測図17 [下層面: その他木製品 322~339]



第37図 遺物実測図18 [下層面:その他木製品340~354]



第38図 遺物実測図19【下層面:その他木製品355~367、瓦368・369】



凡例: 370~388・394~398: 1/4  
389~393: 2/3

0 2:3 10cm

0 1:4 20cm

370~381・384~392  
397~398: SD01  
382~383・393・395・396: 包含層  
394: 5X01

第39図 遺物実測図20 [上層面: 統制磁器 370~373、九谷磁器 378・379、信楽系磁器 384、不明磁器 374~377・380~383、土製品他 385~388、銭貨 389~393、金属製品 394、木製品 395・396、瓦 397・398]

第1表 遺構一覧表

遺構番号	層位	地区	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
SD02 背割水路	-	A区	A2~D2	東西方向	12.80	1.2~1.3	0.30	江戸／19c後半	肥前・瀬戸美濃・越中濃口・羽子板・土人形等 ／背割水路	第62回
SD03 背割水路	下層	A区	A2~E2	東西方向	18.20	1.5~1.9	0.5~0.9	江戸／ 19c前半以前～19c中頃	肥前・瀬戸美濃・越中濃口等 ／背割水路	第7-8回
SDX05 土人形跡	下層	A区	A2	南北方向	3.95	0.19	-	江戸／ 19c前半～19c中頃	竹桶・木桶體・縦ぎ手角材等／上水施設	第9回
SD05	下層	A区	D2D3E2E3	南北方向	5.58	1.28	0.59	江戸／18c後半～19c中頃	土器・下敷・齒物等／	第10回
SD06	下層	B区	F1F2G1G2	南北方向	4.52	1.3~1.6	0.39	江戸／17c前半以前		第10回
SE03	下層	A区	A4	円形	0.60	0.58	0.52	江戸／18c後半～19c中頃	瀬戸・柴蒸・升戸	第10回
SE04	下層	A区	B4	円形	0.62	0.62	1.10	江戸／	升戸	第10回
SE05	下層	A区	B3C3	不整円形	2.92	2.85	0.95	江戸／17c	肥前・下敷・木札等・升戸	第11回
SK09	下層	A区	A3	{不整円形}	(1.32)	0.55	0.42	江戸／		第12回
SK09	下層	A区	A3	{不整長円形}	(1.14)	1.12	0.58	江戸／	漆椀／	第12回
SK10	下層	A区	A3	{不整円形}	1.04	(0.65)	0.30	江戸／	包丁／	第12回
SK13	下層	A区	B2B3	箱円形	1.12	0.92	0.58	江戸／	漆椀・砥石／	第12回
SK14	下層	A区	B4B5	不整円形	1.14	(0.82)	0.21	江戸／18c後半～19c中頃	肥前／	第12回
SK14	下層	A区	A3A4B3B4	不整円形	1.90	1.25	0.40	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・下敷／	第12回
SK17	下層	A区	A3B3	不整円形	1.70	1.50	0.42	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・粘土・瓦器・下敷等／ごみ穴か	第12回
SK18	下層	A区	R3	不整円形	1.45	1.25	0.25	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・瀬戸美濃・ごみ穴か	第12回
SK21	下層	A区	C4	不整長円形	3.25	1.82	0.44	江戸／18c後半以前	漆椀・美濃等／	第16回
SK22	下層	A区	C4	不整円形	0.85	0.82	0.17	江戸／		第16回
SK23	下層	A区	C3	不整長円形	1.35	0.75	0.21	江戸／18c後半～19c中頃	瀬戸・美濃・箸等／	第16回
SK24	下層	A区	C3	不整長円形	1.19	0.75	0.35	江戸／18c後半～19c中頃	瀬戸・美濃・木札／	第16回
SK26	下層	A区	C3	不整長方形	1.45	0.60	0.48	江戸／19c後半	漆碗・粘土等／	第16回
SK27	下層	A区	C3D3	不整箱円形	0.72	0.50	0.09	江戸／	朱雀壇様	第16回
SK28	下層	A区	D3	不整長方形	1.80	0.70	0.13	江戸／18c後半～19c中頃	下敷・箸等／ごみ穴	第16回
SK30	下層	A区	C4	不整長方形	1.50	1.01	0.38	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・下敷・漆物・箸等／ごみ穴	第16回
SK31	下層	A区	C3	不整箱円形	1.62	(1.10)	0.45	江戸／18c～		第16回
SK32	下層	B区	B4	不整方形	1.19	0.90	0.55	江戸／18c～		第16回
SK33	下層	B区	H2	不整長円形	(1.01)	0.85	0.37	江戸／18c後半以前		第16回
SX02	下層	A区	C2	不整箱円形	2.04	(0.48)	-	江戸／18c以前	／青割水跡下面	-
SX02	下層	A区	A4A5	{不整箱円形}	(2.62)	(2.00)	0.58	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・瀬戸・十郎・下敷等／ごみ穴か	第14回
SX02	下層	A区	A2B2	{不整箱円形}	(2.00)	(1.71)	0.18	江戸／17c後半	瀬戸・濃口等／	第14回
SX05	下層	A区	B2	{不整箱円形}	(2.22)	(1.50)	0.08	江戸／17c後半以前		第14回
SX07	下層	A区	D3	不整方形	4.00	3.40	0.58	江戸／17c後半～18c中頃	肥前・唐津・津洋・漆器等／小鏡治	第15回
SX08	下層	A区	D3D4	不整箱円形	2.22	1.92	0.63	江戸／18c後半～19c中頃		第15回
SX09	下層	A区	A2A3	{不整方形}	(3.21)	(0.42)	0.12	江戸／17c後半以降	羽口／小鏡治	第14回
SX10	下層	A区	B4C4	不整箱円形	(3.62)	1.64	0.60	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・唐津等／火闇達か	第16回
SP04	下層	A区	C3	不整円形	0.35	(0.29)	0.08	江戸／19c以前		第16回
SP04	下層	A区	C2	不整円形	0.30	0.18	0.18	江戸／		第16回
SP05	下層	A区	C3	不整箱円形	0.50	0.42	0.25	江戸／		第16回
SP06	下層	A区	C3	不整箱円形	0.32	0.21	0.24	江戸／		第16回
商物底版	下層	A区	B4C4	円形	0.69	0.69	0.03	江戸／	-	
SD01 背割水路	上層	A区	A2~E2	東西方向	18.70	0.8~0.85	0.80	近代／	就製船器等／背割水路	第18-19回
SE04	上層	A区	B4B5	円形	0.74	0.70	-	近代以降／		-
SE04	上層	A区	C4	円形	0.70	0.65	-	近代以降／		-
SK01	上層	A区	A3A4	不整箱円形	0.78	0.65	0.38	近代以降／		-
SK02	上層	A区	D4	不整方形	0.74	0.58	0.18	幕末～近代／		-
SK03	上層	A区	D4E4	不整長円形	1.67	0.59	0.18	幕末～近代／		-
SK04	上層	A区	B4	{不整箱円形}	(0.80)	(0.42)	0.05	幕末～近代／		-
SK05	上層	A区	B4	不整長円形	0.80	0.75	0.55	幕末～近代／		-
SK06	上層	A区	B4	不整円形	0.55	0.55	0.25	幕末～近代／		-
SX01	上層	A区	A4	不整長円形	(2.20)	1.30	0.28	幕末～近代／		-
SP01	上層	A区	B3B4	不整円形	0.25	0.21	0.23	近代以降／		-
SP02	上層	A区	B4	不整円形	0.32	0.29	0.25	幕末～近代／		-
礎化廻	上層	A区	A3A4B3B4	不整方形	4.15	1.94	-	近代以降／		-
建物基礎	上層	A区	A2~D2, A3~C3	東西方向	(15.58)	4.88	-	近代以降／		-
板材	上層	A区	A4A5	南北方向	(3.20)	0.15	-	近代以降／		-
石列	上層	A区	A3	南北方向	2.70	0.50	-	近代以降／		-

非遺構番号が欠番のものについては、調査時に番号を付したが遺構ではなかったため除外した。

第2表 下層面：陶磁器・土器遺物観察表

剖面 番号	遺物 名	種類 分類	口径 (cm)	縦径 (cm)	高さ (cm)	形成 状態	胎土	色調	施文・特徴等	年代
1 SD02-03	肥前織部 碗	口沿 削り出し高台	6.0	2.4	4.5	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・水葉文・脇形・草花・山水画 透明釉	13c~
2 SD02-03	肥前織部 碗	(10.0) 3.9	6.2	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・宝文・体部・蟻・松竹梅 透明釉、燒き継ぎ	13c~		
3 SD02-03	肥前織部 碗	10.3	4.3	6.0	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・富貴萬事・酒呑文・体部・山水画 透明釉、燒き継ぎ	13c~	
4 SD02-03	肥前織部 小碗	(6.1) 2.1	3.4	ロコナデ	緻密	灰白色	灰白色 透明釉、手揉形	13c~		
5 SD02-03	肥前織部 博多織	(7.0) 3.6	5.6	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・五角文・四方博・梅桜・体部・山水画・底部・板張・團紋 古伊万里	13c~		
6 SD02-03	肥前織部 盃	(10.1) 5.6	2.9	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・草・瀬戸文・体部・草・つまみ内・鳥 透明釉、古伊万里	13c~		
7 SD02-03	肥前織部 盃	10.4	5.6	2.9	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・鳥・藤原・花卉・つまみ内・花介 透明釉、燒き継ぎ・古伊万里	13c~	
8 SD02-03	肥前織部 盃	9.6	4.3	3.0	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・草花・休体・草花・つまみ内・文字 透明釉	13c~	
9 SD02-03	肥前織部 盃	(10.2) 5.8	3.0	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・團紋・体部・花卉・つまみ内・花卉 透明釉	13c~		
10 SD02-03	肥前織部 盃	(9.1) 4.1	2.0	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・六角文・花卉草 透明釉、梅花型	13c~		
11 SD02-03	肥前織部 盃	(13.4) (7.8)	3.6	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・五角文・半斎文・高・圓紋・体部・草・團紋・高台内・文字・團紋 透明釉	13c~		
12 SD02-03	肥前織部 盃	24.3	13.6	5.8	手付成形	緻密	灰白色	見込み・蓮瓣・象付・蝶形・松竹牡丹・楓・しのぎ・溝・口高・高台内・日絵 透明釉、梅花型・古伊万里	13c~	
13 SD02-03	肥前織部 盃	9.5	4.7	2.0	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・花・團紋・体部・花 透明釉	13c~	
14 SD02-03	肥前織部 盃	10.9	7.7	7.3	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・四方博・体部・帆・度・高台内・文字 内付 透明釉、燒き継ぎ・古伊万里	13c~	
15 SD02-03	肥前織部 盃	(13.2) (11.9)	5.15	ロコナデ	緻密	灰白色	体部・草花 透明釉	13c~		
16 SD02-03	肥前織部 紅鉢	(6.9) 4.0	6.5	ロコナデ	緻密	灰白色	体部・格子・瓶蓋・眞輪 透明釉	13c~		
17 SD03	肥前織部 盃	(10.0) 4.0	5.7	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・山字・草文・体部・蟹・萬字 透明釉、古伊万里	13c~		
18 SD03	肥前織部 盃	(7.20) -	(5.6)	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・雷文・休形・人面・枕・草 小字を内付 透明釉、古伊万里	13c~		
19 SD03	肥前織部 盃	(7.20) (3.4)	4.3	ロコナデ	緻密	灰白色	体部・枕・團紋 透明釉	13c~		
20 SD03	肥前織部 盃	(10.8) -	(5.1)	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・委員(文賀)・四方博 透明釉	13c~		
21 SD03	肥前織部 盃	(8.6) (3.4)	5.6	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・十字花文・体部・鶴・松 千字形・透明釉、古伊万里	13c~		
22 SD03	肥前織部 盃	(9.8) 5.0	6.0	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・團紋・体部・船・草花 古伊万里、透明釉、古伊万里	13c~		
23 SD03	肥前織部 盃	10.6	4.0	5.5	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・唐字・四方博・團紋・体部・團紋 高台・團紋、古伊万里	13c~	
24 SD03	肥前織部 盃	(11.0) (4.4)	6.4	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・桔子・團紋・体部・草・團紋・高台・團紋 透明釉	13c~		
25 SD03	肥前織部 盃	9.6	3.7	4.55	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・宝文・團紋・休形・草花・團紋 高台内・朱書きまで「松村今口○○」 口付外反、透明釉、燒き継ぎ	13c~	
26 SD03	肥前織部 盃	10.1	3.6	5.25	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・舟形・休形・体部・山水・柳 高台・團紋、古伊万里	13c~	
27 SD03	肥前織部 盃	(8.0) 2.8	4.2	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・魚・休形・文字 口付外反、透明釉	13c~		
28 SD03	肥前織部 盃	12.0	6.4	6.25	ロコナデ	緻密	灰白色	休形・和・度 止付縫、透明釉、古伊万里	13c~	
29 SD03	肥前織部 盃	(9.2) 3.8	2.65	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・兩端・格子・体部・桔子 透明釉、古伊万里	13c~		
30 SD03	肥前織部 盃	9.8	5.1	2.7	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・葉・休形・舟・楓・愛麗花 つまみ内・板・團紋 止付縫の有・透明釉、古伊万里	13c~	
31 SD03	肥前織部 盃	(11.2) -	(2.3)	ロコナデケズリ	緻密	灰白色	見込み・口縫に附付菊文(十卉) 透明釉	13c~		
32 SD03	肥前織部 盃	(8.2) (6.6)	5.2	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・四方博・休形・頬付茶 内付 透明釉、古伊万里	13c~		
33 SD03	肥前織部 盃	(9.0) (5.1)	6.05	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・四方博・休形・菊花 内付 透明釉、古伊万里	13c~		
34 SD03	肥前織部 盃	(18.6) -	(5.0)	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・如意文・休形・頬付茶 内付文透彌、透明釉、古伊万里	13c~		
35 SD03	肥前織部 盃	-	3.4	4.2	ロコナデ	緻密	灰白色	見込み・束ね糸文付・團紋 透明釉、燒研伊万里	13c~	
36 SD03	肥前織部 盃	(6.7) (4.1)	5.75	ロコナデ	緻密	灰白色	体部・格子・海・團紋 透明釉	13c~		
37 SD03	肥前織部 盃	-	6.2	(9.5)	ロコナデ	緻密	灰白色	休形・海 透明釉、古伊万里	13c~	
38 SD03内 上水道	肥前織部 盃	(12.0) (5.0)	5.8	ロコナデ	緻密	灰白色	体部・草花・高台・團紋 透明釉、燒研伊万里	13c~		

番号	種類 変異	形態 特徴	LW径 (cm)	周径 (cm)	高さ (cm)	成形	脚上	色調	施文・非登録等	年代
39	SBD6	肥前頭器 鏡	(13.0)	—	(3.3)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:斜面 体部:草花 透明感 知朝伊万里	17c
40	SBD6	肥前頭器 鏡	—	5.5	(3.3)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:灰白色に花紋状の文様 体部:草花 高台:團扇	17c前
41	SK04	肥前頭器 鏡	(8.7)	3.8	6.1	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:草花 团扇 透明感 和歌伊万里	18c~
42	SK06	肥前頭器 鏡	(9.0)	4.6	6.5	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	内付 透明感 古伊万里	17c
43	SK06	肥前頭器 鏡	9.4	4.6	6.45	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:花舟 透明感 古伊万里	18c~
44	SK07	肥前頭器 鏡	—	4.0	(4.0)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:草花 高台:團扇 透明感 古伊万里	18c~
45	SK07	肥前頭器 鏡	10.2	5.4	6.1	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:文字 团扇 体部:笠 高台:團扇 内付 透明感	17c
46	SK08	肥前頭器 鏡	8.8	5.2	2.65	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:灰白色 透明感 輪花皿 透明感	18c~
47	SK08	肥前頭器 鏡	14.7	8.8	3.6	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:草花 体部:樹木小 くわんか手 透明感	17c
48	SK08	肥前頭器 鏡	1.7	—	(9.1)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	口縁部:一體型 樹木 透明感 六角伊万里	18c~
49	SK08	肥前頭器 鏡	2.4	—	(7.3)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	口縫部:文字 文様 体部:花 透明感	17c
50	SK25	肥前頭器 鏡	—	2.6	(5.3)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:葉 透明感	18c~
51	SK30	肥前頭器 鏡	13.9	6.0	3.1	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:草花 水波 透明感 知朝伊万里	17c
52	SK30	肥前頭器 鏡	(11.0)	6.8	2.3	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:草花 体部:紫葉 透明感 古伊万里	18c~
53	SK03	肥前頭器 鏡	(9.7)	(5.0)	6.0	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:花舟 团扇 透明感	17c
54	SK03	肥前頭器 鏡	(11.8)	(4.4)	3.0	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:草花 团扇 透明感 加賀伊万里	17c後
55	SK07	肥前頭器 鏡	(8.7)	(3.5)	6.6	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	透明感 芳賀伊万里	18c~
56	SK07	肥前頭器 鏡	(9.0)	3.2	4.9	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:花舟 团扇 体部:楓 透明感 古伊万里	18c~
57	SK07	肥前頭器 鏡	—	(10.5)	(2.6)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:文字 文字 黄高台:文字 透明感 おひ万里	18c~
58	SK07	肥前頭器 鏡	(9.7)	(3.6)	5.4	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:文字 文字 团扇 体部:書 透明感 古伊万里	18c~
59	SK07	肥前頭器 鏡	(9.0)	—	(5.5)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:南:團扇 透明感 朝鮮伊万里	18c~
60	SK07	肥前頭器 鏡	(12.7)	4.8	3.35	ロクロナダ 鋸刃出し高台 未切脚 T	微密	灰白色	見込み:草花 水波 透明感 朝鮮伊万里	17c前
61	SK07	肥前頭器 鏡	(10.6)	5.3	2.3	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:草花 水波 透明感 朝鮮伊万里	18c~
62	SK09	肥前頭器 鏡	(8.7)	(3.6)	7.45	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:草花 团扇 透明感	18c~
63	SK10	肥前頭器 鏡	(9.0)	—	(6.0)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:丸に勝子状 透明感	18c~
64	SK10	肥前頭器 鏡	(6.6)	(2.2)	3.1	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:草・文字か 透明感	18c~
65	SK10	肥前頭器 鏡	(10.6)	—	(2.7)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:草花 团扇 透明感 勝手鏡	18c~
66	SK10	肥前頭器 鏡	—	8.2	(9.7)	ロクロナダ 鋸刃出し高台	密	灰白色	体部:始羅房・經藏・團扇 高台:團扇 透明感	NB/0
67	SK10	肥前頭器 鏡	(7.2)	5.4	14.9	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:鳥・草花・團扇 高台:團扇 透明感 吉伊万里	18c~
68	SD02-03	肥前頭器 鏡	(6.8)	4.1	6.1	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	透明感 透明感	18c~
69	SD03	肥前頭器 鏡	(9.6)	(3.6)	5.0	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:砂利地 透明感	18c~
70	SD03	肥前頭器 鏡	9.6	3.6	4.95	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:白ねじ地 体部:草花 高台:團扇 透明感	19c
71	SD03	肥前頭器 鏡	(9.6)	(3.6)	4.7	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	体部:爪・高台:團扇 透明感	18c~
72	SD03	肥前頭器 鏡	(14.0)	(8.4)	3.65	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:網目草・團扇・花 体部:蟹松・團扇 透明感	19c
73	SD03	肥前頭器 鏡	(14.4)	(8.4)	2.9	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:花・草・蘿蔔 透明感	19c
74	SD03	肥前頭器 鏡	11.6	4.0	3.2	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:草・鉢の甘味 透明感	19c
75	SD03	肥前頭器 鏡	16.0	5.3	2.6	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:五瓣花・花道・團扇 体部:草・團扇 透明感	19c
76	SK30	肥前頭器 鏡	(14.0)	(8.4)	2.8	ロクロナダ 鋸刃出し高台	微密	灰白色	見込み:花:團扇 透明感	18c~
77	SD02-03	唐津 鏡	(26.0)	—	(7.6)	ロクロナダ	密	灰白色 2.5Y25/4	見込み:白地銀版 透明感 占武地	18c~19c

佛國	造像 番号	種類 登録名	口徑 (cm)	後頭 (cm)	器高 (cm)	成形	胎土	色調	特写-待等參	年代
78	SD02-03	唐津 鉢	-	(16.4)	(4.66)	ロクロテヅリ 割り出し白面	素	赤褐色 1084/3	足込み: 白面渦巻筋; 狹・直ねじき底 占古窓	18c-19c
79	SD02-03	唐津 鉢	(13.1)	-	(10.5)	ロクロナダ	素	にふ・青褐色 25.5R5/4		
80	SK07	伊賀高麗器 鉢	10.7	5.2	7.0	ロクロナダ	無窓	灰白色	体部-丸に花型・團扇 前縁・透明釉	17c後
81	SK07	唐津系高麗器 鉢	(10.2)	3.9	5.2	ロクロナダ	無窓	灰オリーブ 5Y6/2	体部-木目と山川 透明釉	17c
82	SK07	唐津 鉢	(10.8)	(4.3)	3.6	ロクロテヅリ・ケヅリ 割り出し白面	素	灰褐色 2.5Y6/1	足込: 雜斗平底	17c
83	SK07	唐津 口付鉢	24.0	9.6	11.3	ロクロテヅリ 付・白面	素	胡赤褐色 2.5Y6/2	足込: 白元巻希次体 体部-輪状の白化粧 秋輪・古窓	17c後
84	SK10	唐津 鉢	(33.2)	-	(5.15)	ロクロナダ	素	にふ・青褐色 2.5YR5/4	足込み: 白面渦巻 古窓	18c-19c
85	京作	唐津 大風呂鉢	-	9.5	(21.3)	タキヨ・コナ 風呂鉢	素	赤灰褐色 2.5YR5/1	脚附-深さ35mm 脚附-腰筋・脚部の上に白目 透明釉	17c前
86	SD02-03	瀬戸・高麗器 鉢	10.3	3.6	5.1	ロクロナダ	無窓	灰白色	足込み: 江戸青 足込: 山川白	
87	SD02-03	瀬戸高麗器 皿	13.4	5.8	4.5	ロクロナダ	無窓	灰白色	足込み: 山川-雪文・体部: 家屋と雪文 高台: 棚板 屋根小窓: 銀葉・銀葉	19c~
88	SD02-03	瀬戸・高麗器 皿	(13.3)	(8.5)	4.05	ロクロナダ	無窓	灰白色	足込み: 花・团花・体部: 松葉 ぐれわらか手・透明釉	
89	SD02-03	瀬戸高麗器 口付鉢	(7.2)	3.9	6.2	ロクロナダ	無窓	灰白色	体部-半花型・底部: 露胎 透明釉	
90	SD02-03	瀬戸・美濃 參政	(10.1)	5.0	7.2	ロクロナダ	街	黒	体部-押模・白泥行春 合・墨色粒子含合 灰白色5Y2/2	
91	SD02-03	瀬戸・美濃 受持	5.8	4.3	4.9	ロクロナダ・ケヅリ 大切	素	灰 20Y6/1	足附	
92	SD03	瀬戸高麗器 鉢	(10.9)	(4.4)	6.3	ロクロナダ	無窓	灰白色	体部-凹面内に葉書章・因縫に松 萬葉〇×○・萬葉内: 名款 透明釉	
93	SD03	瀬戸高麗器 鉢	8.6	3.5	5.6	ロクロナダ	無窓	灰白色	足込み: 花・團扇・像鼻・菊花 透明釉	19c~
94	SD03	瀬戸高麗器 皿	(8.4)	(3.6)	5.65	ロクロナダ	無窓	灰白色	足込み: 花・体部: 宝 透明形	19c~
95	SD03	瀬戸高麗器 皿	10.9	3.7	5.8	ロクロナダ	無窓	灰白色	足込み: 華・透杯・草花・鹿 透明釉	19c~
96	SD03	鬼戸高麗器 皿	9.2	3.7	5.4	ロクロナダ	無窓	灰白色	足込み: 華・團扇・像鼻・花房 透明釉・古伊万里	18c~
97	SD03	瀬戸系高麗器 皿	(10.0)	-	(6.96)	ロクロナダ	無窓	灰	体部: 植物 透明釉	19c~
98	SD03	瀬戸系高麗器 皿	(10.3)	4.2	8.1	ロクロナダ	無窓	灰白色	体部: 植物 透明釉	19c~
99	SD03	瀬戸高麗器 皿	4.8	-	(9.9)	ロクロナダ	無窓	灰白色	体部-枝葉子午花と斜・条絆・つまみ筋: 手撰 合・直・透明釉	
100	SD03	瀬戸高麗器 皿	(7.0)	-	(1.9)	ロクロナダ	無窓	灰白色	体部-大・象鼻・上部: 山水小桿林 合・直・透明釉	
101	SD03	瀬戸系高麗器 皿	(10.0)	5.9	2.8	ロロロ又は彌打・切 割り出し白面	無窓	灰白色	足込み: 山川頭 輪・直・透明釉	
102	SD03	瀬戸高麗器 皿	8.2	3.8	2.6	彌打或は蒸 彌打	無窓	灰白色	足込み: 十字花-腹に櫻桃形(打模範) 體部-ハ丁跡 透明釉	
103	SD03	瀬戸高麗器 皿	(15.8)	(9.6)	5.8	打目或は 蒸	無窓	灰白色 輪・直・透明釉	足込み: 花・團扇・体部-繁・芭・葉文 透明形	19c~
104	SD03	瀬戸高麗器 皿	5.5	4.8	10.1	ロクロナダ	無窓	灰白色	体部-透かし・透狀況・瓶様 透形・古伊万里	19c~
105	SD03	瀬戸高麗器 皿	9.45	内径 厚	2.7	ロクロナダ 削り出し白面	無窓	灰白色	體部-墨・天下太平 透明釉	
106	SD03	瀬戸・美濃 鉢	5.2	1.8	1.2	削り出し白面	無	灰白色	体部-始輪繩 斜・直・乳	
107	SD03	瀬戸・美濃 鉢	9.4	5.4	6.4	ロクロナダ・ケヅリ 削り出し白面	無	灰 黑色	足込み: 花・團扇・体部-繁・芭・葉文 透明形	
108	SD03	瀬戸・美濃 鉢	9.6	5.8	6.25	ロクロナダ・ケヅリ 削り出し白面	無	にふ・青褐色 7.5YR6/4	足部立・縁がかった底脚 透明釉	
109	SD03	瀬戸・美濃 参政	(9.6)	4.4	7.3	ロクロナダ 削り出し白面	無	黑 体部-押模・白地・毬付骨 白面地粒子を含む 白面地5Y2/2	体部-抑模・白地・毬付骨 黑色	
110	SD03	瀬戸・美濃 鉢	(9.6)	4.3	7.4	ロクロナダ 削り出し白面	無	灰 灰白色5Y5/2	体部-押模 黑色	
111	SD03	瀬戸・美濃 鉢	-	(10.9)	(4.9)	ロクロナダ・ケヅリ 削り出し白面	無	灰 7.5YR7/2	口縁に油滲行者 透明釉	
112	SD03	瀬戸・美濃 受付(打模範)	-	(10.4)	(4.8)	ロクロナダ・ケヅリ 削り出し白面	無	黄灰褐色 2.5Y6/1	底脚立・油滲行者 透明形	
113	SD03	瀬戸・美濃 鉢(打模範)	(11.0)	(4.4)	2.6	ロクロナダ・ケヅリ 削り出し白面	無	灰白色 10YR1/1	油滲行者 透明釉	
114	SD03	瀬戸・美濃 鉢	(19.7)	(7.5)	9.55	ロクロナダ・ケヅリ 削り出し白面	密	にふ・青褐色 10YR7/3	1.5倍折縁 光沢のある鉄釉	
115	SD03	瀬戸・美濃 座盆	-	(16.2)	(6.9)	ロクロナダ・ケヅリ 削り出し白面	密	明赤褐色 2.5YR5/8	足込み: 伏狀置腰盤(1.5倍厚)・油滲付 鉄	
116	SD09	瀬戸・美濃 鉢	(25.6)	-	(12.7)	ロクロナダ	密	灰白色 SY2/1	肩部-しのぎ 口縁・直・透明釉	

番号	種類 名	詳細 種類	口径 (cm)	高さ (cm)	部調 (cm)	形態	胎土	色調	施文・特徴等	年代	
117 SD03	窓戸・美濃 弘化風		7.3 (5.1)	10.35	ロクロナデ 直腹み切り	密	灰黄色	裏部:ボク状貼付 光沢のある鉄軸の上に白色釉		18c後	
X18 SD03	窓戸・美濃 更級小皿		7.0 (5.5)	2.5	2.0	ロクロナデ・ケズリ	密	淡青色 2.5YR/3	底部:魚板あり 鉄軸		
119 SD03内 J-本施設	窓戸系器 窓		9.4 (3.4)	5.1	ロクロナデ	難密	灰白色		透明釉		
120 SB03	窓戸系器 窓		9.1 (3.4)	3.4	6.9	ロクロナデ	新密	灰白色 5YR/1	透明釉	19c~	
121 SE03	窓戸系器 窓		11.1 (4.0)	4.0	5.85	ロクロナデ	難密	灰白色	裏部:草花 透明釉		
122 SE03	窓戸・美濃 片口		11.1 (8.0)	8.65	ロクロナデ・ケズリ	密	黄灰色 2.5YR/1	裏部:窓跡 絞りかかった灰釉		18c~19c	
123 SE08	窓戸・美濃 東南台付窓		-	4.5 (5.0)	4.5	ロクロナデ	密	にごく黄褐色 10YR/0/2	灰釉		
124 SK14	窓戸系器 窓		9.9 (5.2)	6.7	ロクロナデ	付け窓台	微密	灰黄色	透明釉		
125 SK16	窓戸系器 窓		9.7 (5.4)	6.3	ロクロナデ	難密	灰白色	朱跡:草花 透明釉			
126 SK16	窓戸・美濃 片口		-	4.3	6.0	ロクロナデ	難密	茶褐色			
127 SK16	窓戸・美濃 片口連持		28.5 (13.0)	11.2	13.0	ロクロナズリ	密	陶質色 白色粘合土 2.5Y7/4	見込み:貧弱状様(7条1単位) 鉄軸		
128 SK16	窓戸・美濃 片口		6.1 (2.2)	3.6	4.65	ロクロナデ	密	灰色			
129 SK21	窓戸・美濃 片口		12.0 (2.2)	-	4.2	ロクロナデ	密	灰黄褐色 白色粘合土 10YR/6/2	鉄軸:黒物		
130 SK23	窓戸・美濃 窓		9.0 (4.5)	4.3	5.7	ロクロナデ	密	灰色 白色粘合土 10Y/1	鉄軸		
131 SK25	窓戸・美濃 片口		10.0 (4.8)	2.85	2.85	ロクロナデ・ケズリ	粗	淡青色 2.5Y/3	見込み:世ね焼き灰 鉄軸		
132 SK25	窓戸・美濃 片口		11.0 (2.05)	-	4.0	ロクロナデ・ケズリ	密	灰黄色 白色粘合土 2.5Y/2	鉄軸		
133 SK25	窓戸・美濃 片口		10.6 (6.0)	2.9	2.9	ロクロナデ・ケズリ	密	灰白色 2.5Y/1	口縁直立状、灰釉		
134 SK26	窓戸系器 窓		11.3 (5.6)	4.3	7.1	ロクロナデ	難密	灰白色 N8/9	窓台内:妙付竈 透明釉	19c後	
135 SK30	窓戸系器 窓		8.6 (5.6)	5.8	5.8	ロクロナデ	難密	灰白色	伴部:灰窯石・花 窓台内:文字 透明釉		
136 SK30	窓戸系器 窓		9.8 (5.9)	5.0	6.5	ロクロナデ	難密	灰白色 5Y8/1	透明釉		
137 SK30	窓戸・美濃 小鉢		-	5.7	3.8	4.8	ロクロナデ・ケズリ	密	灰白色 5Y7/1	鉄軸	
138 SK30	窓戸・美濃 片口		14.1 (7.0)	8.9	12.05	ロクロナデ・ケズリ	密	暗灰黄色 2.5Y5/2	見込み:底跡はトシ度か 鉄軸		
139 SK30	窓戸・美濃 片口		14.3 (7.5)	7.5	12.15	ロクロナデ・ケズリ	密	にごく黄褐色 10YR5/3	鉄軸		
140 SD03	窓戸系器 窓		13.7 (4.8)	4.0	3.5	ロクロナデ	難密	灰白色	見込み:一部底脚 透明釉		
141 SK04	窓戸・美濃 片口		9.7 (5.6)	2.1	2.1	ロクロナデ	密	灰白色 2.5Y7/1	見込み:印表脚 鉄軸がかった灰釉		
142 SK08	窓戸・美濃 片口		8.7 (3.7)	3.7	5.25	ロクロナデ	難密	灰白色 5Y8/2	口縁外反 透明釉		
143 SK10	窓戸・美濃 片口		10.6 (9.5)	10.6	15.2	ロクロナデ・ケズリ	密	にごく黄褐色 2.5YR5/3	底面施墨 平口縁外反 緑物		
144 磁器 窓	窓戸・美濃 小鉢		9.3 (5.5)	5.5	7.25	ロクロナデ	難密	灰白色 N8/0	透明釉		
145 SD02-03	越中織田 窓		9.5 (4.4)	4.4	2.7	ロクロナデ	密	淡青色 5Y8/3	見込み:重ね焼き灰 底部:苔ね旋き底 鉄軸	18c~19c	
146 SD02-03	越中織田 窓		9.6 (4.2)	4.2	2.85	ロクロナデ	密	淡青色 10YR8/3	見込み:苔ね焼底 口縁外反 鉄軸		
147 SD02-03	越中織田 窓		10.6 (5.1)	5.1	2.5	ロクロナデ・ケズリ	密	暗褐色 2.5Y10E/0	見込み:十六葉菊の花紋 業台内:墨書き 内裏里:鉄軸 黒引出上	17c後	
148 SD02-03	越中織田 片口		10.6 (4.5)	4.5	2.9	ロクロナデ・ケズリ	密	にごく褐色 7.5YR7/0	鉄軸	18c~19c	
149 SD02-03	越中織田 小鉢		3.25 (3.6)	3.6	2.95	ロクロナデ	密	灰黄色 2.5Y7/2		18c~19c	
150 SD02-03	越中織田 小鉢		6.0 (3.5)	4.5	2.8	ロクロナデ	密	灰黄色 2.5Y7/2		18c~19c	
151 SD02-03	越中織田 小鉢		5.3 (3.1)	3.1	3.55	ロクロナデ	密	灰白色 10YR8/2		18c~19c	
152 SD02-03	越中織田 木箱小鉢		9.6 (10.6)	7.9	10.0	ロクロナデ・ケズリ	粗	にごく褐色 10YR7/4	内側:墨跡 黑塗(黒塗)	18c~19c	
153 SD02-03	越中織田 茶碗		6.0 (4.9)	4.9	4.6	ロクロナデ	密	灰白色 10YR7/2	底部:鉢輪	18c~19c	
154 SD03	越中織田 小鉢		5.1 (3.5)	3.8	3.8	ロクロナデ	密	深青色 2.5Y8/2	鉄軸	18c~19c	
155 SD03	越中織田 小鉢		5.0 (3.5)	3.5	2.5	ロクロナデ	密	深青色 2.5Y7/4	底部:赤切り不明確 口縁内側 鉄軸	18c~19c	

番号 登録 番号	遺物 名	種類 形態	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	成形	施土	色調	説文・特徴等	年代
156 SD03	縫中繩口 皿	9.8	4.9	2.15	ロクロナデ・ケズリ 付け高台	密	褐色	見込み:十六弁菊の印花 菓台内:墨書き 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR6/6	17世後
157 SD03	縫中繩口 皿	10.0	4.4	2.95	ロクロナデ 底部み切り	密	褐色	見込み:重ね焼き模 底部:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR6/4	18c~19c
158 SD03	縫中繩口 皿	9.7	4.2	3.2	ロクロナデ 底部み切り	密	褐色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/B	18c~19c
159 SD03	縫中繩口 皿	10.1	4.3	2.75	ロクロナデ 底部み切り	密	褐色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/6	18c~19c
160 SD03	縫中繩口 皿	9.9	4.7	3.0	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	密	浅黄色	見込み:重ね焼き模 底部:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/3	18c~19c
161 SD03	縫中繩口 皿	9.9	4.25	3.0	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	密	褐色	見込み:重ね焼き模 底部:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/6	18c~19c
162 SD03	縫中繩口 皿	(9.9)	4.0	3.05	ロクロナデ 底部み切り	密	褐色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/6	18c~19c
163 SD03	縫中繩口 皿	(6.7)	(3.8)	1.5	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5Y7/1	18c~19c
164 SD03	縫中繩口 受け皿(右側面)	(11.7)	(4.4)	2.3	ロクロナデ	密	褐色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR6/4	18c~19c
165 SD03	縫中繩口 片口皿	(17.0)	(9.8)	5.9	ロクロナデ 底部み切り	灰白色	見込み:模目(10条1段目)・重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR6/2	18c~19c	
166 SD03	縫中繩口 笠水玉深	(8.9)	(10.2)	7.3	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	灰	浅黄色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/3	18c~19c
167 SD03	縫中繩口 笠水玉深	(11.8)	(12.0)	10.35	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	灰	灰白色	見込み:重ね焼き模 底部:工芸直庄 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR6/3	18c~19c
168 SK17	縫中繩口 追手木・煙管	(12.8)	-	(7.2)	ロクロナデ・ケズリ	灰	灰白色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/2	18c~19c
169 SK26	縫中繩口 瓶	(8.8)	-	(5.7)	ロクロナデ	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目)・重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	10YR7/3	19c
170 SK30	縫中繩口 小鉢	(7.8)	(5.6)	5.9	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	灰	浅黄色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR6/2	18c~19c
171 SK30	縫中繩口 小鉢	6.9	3.8	4.7	ロクロナデ・ケズリ ケズリ古:高台	灰	浅黄色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/4	18c~19c
172 SK30	縫中繩口 錠	(26.0)	-	(5.1)	ロクロナデ	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	SYR7/4	18c~19c
173 SK30	縫中繩口 大鉢	(23.2)	16.5	16.0	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	灰	灰白色	見込み:重ね焼き模 内光面 黄緑 黄込土	10YR7/4	18c~19c
174 SK30	縫中繩口 大鉢	10.4	5.4	2.2	ロクロナデ・ケズリ 付け高台	灰	浅黄色	見込み:十六弁菊の印花 西台内:墨書き 内光面 黄緑 黄込土	2.5YR7/4	17世後
175 SX10	縫中繩口 追手木・煙管	(13.0)	(13.2)	10.2	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	灰	灰白色	見込み:中心に墨書き 内光面 黄緑 黄込土	5YR7/4	18c~19c
176 SD02-03	土器蓋 灯明皿	6.6	(2.6)	1.9	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	5Y7/1	油懸行者
177 SD03	土器蓋 灯明皿	7.2	3.5	1.7	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	10YR7/3	油懸行者
178 SD03	土器蓋 灯明皿	(8.2)	(3.9)	2.1	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR7/4	油懸行者
179 SD03	土器蓋 灯明皿	6.8	3.1	2.1	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	5YR7/4	油懸行者
180 SD03	土器蓋 灯明皿	7.1	3.1	1.7	ロクロナデ 底部み切り	密	浅灰色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR8/4	油懸行者
181 SD03	土器蓋 灯明皿	7.0	3.1	1.8	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	5YR8/4	油懸行者
182 SD03	土器蓋 灯明皿	(11.3)	(5.2)	2.45	ロクロナデ 底部み切り	密	浅灰色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR8/4	油懸行者
183 SD03	土器蓋 灯明皿	(7.2)	3.2	1.8	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR6/2	油懸行者
184 SD03	土器蓋 灯明皿	6.0	3.2	1.5	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	10YR6/4	油懸行者
185 SD03	土器蓋 灯明皿	7.3	3.2	1.6	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	5YR7/4	油懸行者
186 SD03	土器蓋 灯明皿	(10.0)	(4.3)	2.4	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR7/1	油懸行者
187 SD03	土器蓋 灯明皿	6.5	2.7	1.8	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	10YR7/4	油懸行者
188 SD03	土器蓋 灯明皿	6.25	2.85	1.5	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	5YR7/6	油懸行者
189 SD03	土器蓋 灯明皿	4.9	2.9	2.5	手びねり	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5Y7/2	油懸行者
190 SD03内 上水道	十輪蓋 灯明皿	6.6	3.2	1.7	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR7/4	油懸行者
191 SD05	土器蓋 灯明皿	(6.2)	3.2	2.1	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR6/4	油懸行者
192 SD05	土器蓋 灯明皿	(13.7)	(6.9)	2.6	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	10YR7/4	油懸行者
193 SK30	土器蓋 灯明皿	(10.0)	(3.9)	2.4	ロクロナデ 底部み切り	密	灰白色	見込み:模目(10条1段目) 内光面	2.5YR7/4	油懸行者
194 SK30	土器蓋 灯明皿	(12.0)	5.6	2.5	ロクロナデ・ケズリ 底部み切り	密	灰白色	見込み:重ね焼き模 底部:重ね焼き模 内光面	5YR6/3	油懸行者

件名	遺構 番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
196	S303	土師器 丸明器	(11.1)	4.4	2.35	クロナデ 底部丸切り	密	にじみ・黄褐色 10YR7/4	油顔付唇	
196	SD02-05	春葉山磁器 片口瓶	(12.0)	(4.15)	2.7	クロナデ・ケヌリ	織窯	灰褐色 10YR6/2	見込み:3条線の×状模様・口部2分所 透明白地　油顔付唇	
197	SX04	丹波山海器 片口瓶	(30.5)	—	(11.6)	ロクロナデ	密	にじみ・褐色 5YR4/4	見込み:横縞(12条巻)・口縁2寸4枝脚 口縁2寸4枝脚	18c~
198	SD03	被焼 鉢	(30.5)	(17.6)	20.2	ロクロナデ	密	褐灰色 10YR6/1	体部:刻印の△・英字:駒有脚 脚	19c中
199	SD02-03	瓦質土器 不明	長 縮 (11.1)	(7.8)	1.0	ロクロナデ	密	灰白色 2.5Y7/1	表面:円形内に斜子状模刻・裏面:接頭圧痕・斜線	
200	SD03	瓦質土器 鉢	(28.2)	—	(8.65)	ロクロナデ	密	灰白色 NT/0	尾部:胸器・匠印の中に毫毛・梅花と松葉 織字印	
201	SK17	瓦質土器 鉢	—	(15.4)	(14.4)	ロクロナデ	密	灰白色 10YR6/1		
202	SD02-03	輸入陶器 鉢	14.8	8.3	2.95	ロクロナデ	織窯	灰白色 10YR6/1	見込み:文字:楕・圓・圓錐・整脚し・体部:型押し・裏台内:変形文字 中岡系　透明白	19c~
203	SD03	輸入陶器 鉢	(15.4)	—	(8.9)	ロクロナデ	織窯	灰白色 2.5Y8/1	体部:宝相華 小柄足　透明白	
204	SX10	輸入陶器 台付(不明)	—	8.0	(2.3)	ロクロナデ	織窯	灰白色 中岡系　透明白	外腹:波紋 中岡系　透明白	
205	SX10	輸入陶器	(22.8)	—	(3.6)	ロクロナデ	織窯	灰白色 5YR4/1	見込み:しのぎ 中岡系　透明白	
206	SD02-03	不明 小鏡	(4.2)	2.1	2.8	ロクロナデ	密	灰白色 5YR6/1	輪外足・弦餘(黒褐色)　油顔付唇	
207	SD02-03	不明 鏡	(18.4)	—	(4.46)	ロクロナデ	密	灰白色 2.5Y8/1	口縁部:刻印文字 序認	
208	SD02-03	不明 底部	—	(5.0)	(1.25)	手びねり成型	密	灰褐色 10YR6/1	表面:邊脚(黒褐色)　底山・脚部に接頭圧痕 2.5Y7/2	
209	SD02-03	不明 三脚	英 鉢 (8.6)	(3.9)	(1.8)	手びねり成型	密	灰白色 2.5Y8/1	表面:刻印文字	
210	SD02-03	不明 五脚	英 鉢 9.15	(6.8)	(1.9)	ミガキ	織窯	灰白色 2.5Y8/2	表面:刻印文字	
211	SD02-03	不明 把手	—	—	(3.2)	手びねり成型 ミガキ	密	灰オリーブ色 5Y5/2	裏面:刻印文字「仙山」 容器の把手	
212	SE03	不明 鏡	16.0	5.7	7.1	ロクロナデ	織窯	にじみ・青褐色 10YR7/2	透明白	19c~
213	金雀署	不明 行平鍋	18.3	—	6.5	ロクロナデ・ケヌリ	密	灰白色 10YR2/1	体部:飛鷹 丸蓋形状　把手・注口付　脚	

第3表 下層面:土製品他遺物観察表

件名	種類 器種	西 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	底型	胎土	色調	施文・特徴等	年代	
214	SD02-03	土製品 人形	(3.9)	2.5	1.7	盤合わせ	織窯	褐色 10YR6/1	右手に神物を持つ童子像　頭部欠損 絆脚	19c~
215	SD02-03	土製品 人形	(6.1)	3.2	1.9	盤合わせ 中空	織窯	にじみ・黄褐色 10YR7/4	背負童子像　頭部欠損 絆脚	19c~
216	SD02-03	土製品 鉢	2.1	2.6	2.65	手びねり	織窯	にじみ・青褐色 10YR2/4	手が甲脚	
217	猿合署	土製品 人形	(7.0)	3.7	2.7	盤合わせ	織窯	褐色 7.5YR7/6	女性像　腹部欠損	
218	酒呑町	胡服か 人形(大葉天)付	(5.6)	(6.0)	0.75	織窯	灰褐色 5YR4/2	「大葉天像」隕前	19c~	
219	酒呑町	土製品 内思狀	3.8	3.6	0.9	盤打ち成形	織窯	青褐色 2.5Y8/3	家紋:唐鳳型	19c~
220	SD02-03	土製品 環狀	(9.6)	(5.0)	1.1	織窯	黑色 2.5Y8/3	裏面:織筋		
221	SD03	土製品 内思狀	(4.8)	(4.7)	1.9	織窯	黄褐色 10YR7/6	裏面:窓口大腹上部□大腹南久太漢高田屋左八』 角が彫り、裏面は平型		
222	SK35	土製品 不明	(8.2)	(7.0)	1.1	密 企差用合	密 2.5Y8/1	裏面:窓口□□名前 □□組合 □□□一 裏面:刻印の點付	19c末~	
223	金雀署	肥前昭芳 底盤	4.7	1.5	1.5	盤打ち成形	織窯 2.5Y8/1	体部:しのぎ・朱絵付唇 化粧脚　透明白		
224	SX07	貝飾品 貝約7...	8.4	9.7	0.05	—	—	イタヤガイの軸 網の接合孔二つ(径2.5mm)		

第4表 下層面：鍛冶関連遺物観察表

番号	遺物 番号	種類 器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	計重	色調	施文・特徴等	年代
225	SX07	製鉄製品 鋤口	(12.6)	9.75	9.4	-	黒褐色 7.5TR5/2	焼成良好 穴の直径2.2cm 重さ1.0kg	
226	SX07	製鉄製品 鋤口	(11.9)	10.9	10.5	-	黒褐色 7.5YR5/4	焼成良好 穴の直径2.4cm 重さ1.36kg	
227	SX07	製鉄製品 鋤口	(16.7)	9.7	9.6	-	黒褐色 5Y7/1	焼成良好 穴の直径3.1cm 重さ1.42kg	
228	SX07	製鉄製品 鋤口	(13.2)	11.5	11.4	-	黒褐色 7.5YR7/6	焼成良好 穴の直径2.2cm 重さ1.56kg	
229	SX07	製鉄製品 鋤口	(16.3)	9.7	10.3	-	黒褐色 7.5YR5/4	焼成良好 穴の直径2.2cm 重さ1.51kg	
230	SX09	製鉄製品 鋤口	(17.5)	9.7	9.6	-	黒褐色 2.5Y7/3	焼成良好 穴の直径3.3cm 重さ1.68kg	
231	SX07	製鉄製品 鋤口	8.8	10.9	5.2	-	黒褐色 5Y7/1	重さ0.43kg	
232	SX07	製鉄製品 鋤口	9.9	12.4	6.9	-	黒褐色 5Y7/1	重さ0.57kg	
233	SX09	製鉄製品 鋤口	9.8	9.2	4.6	-	黒褐色 5Y7/1	重さ0.37kg	

第5表 下層面：石製品遺物観察表

番号	遺物 番号	種類 器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	石材	色調	施文・特徴等	年代
224	SD02	石製品 鏡	15.2	5.9	2.1	-	-	赤褐色：墨の擦り傷で中央が僅む 裏面：手縫い縫、正月四日 十二重 文寶齊西山」	享保年間 (1716～1735年)
225	SD02-03	石製品 鏡	15.0	6.6	2.9	-	-	裏面：墨の擦り傷で中央が僅む 裏面：墨の擦り傷で中央が僅む 裏面：墨の擦り傷で中央が僅む	
226	SD03	石製品 鏡	(16.4)	7.3	2.3	-	-	裏面：墨の擦り傷で中央が僅む 裏面：墨の擦り傷で中央が僅む	
227	SD03	石製品 鏡	15.0	6.6	2.9	-	-	裏面：墨の擦り傷で中央が僅む 裏面：墨の擦り傷で中央が僅む	
228	SK13	石製品 鏡石	(8.5)	4.4	(2.8)	研磨板表面	黒褐色 5YR2/1	裏面：刻記：北熱、銘板：北熱、裏面：次指	
229	SK18	石製品 鏡	(12.3)	5.5	2.0	-	-	裏面：墨の擦り傷で中央が僅む 裏面：文字等の擦り音	
230	SX10	石製品 鏡	(5.5)	5.6	0.8	地板岩製 鏡打	灰色 7.5Y6/1	裏面：材質 裏面：鏡面 表面：研磨	
241	金合掌 丸玉	骨董真 丸玉	1.6	1.6	1.6	-	-	表面用ガラス色20R3/2 赤色10R5/5	

第6表 下層面：金属製品遺物観察表

番号	遺物 番号	種類 器種	長(米) (cm)	幅(米) (cm)	厚(米) (cm)	重量 (g)	施文・特徴等	年代
242	SD01-03	鍔 鍔質	2.7	0.7	0.09	2.7	-	
	文久永宝							新文永
243	SD03	鍔質 寛永通寶	2.5	0.6	0.13	4.0	-	
244	SK29	鍔質 寛永通寶	2.4	0.7	0.1	2.9	-	
245	SX03	鍔質 寛永通寶	(2.2)	(0.6)	0.1	1.1	-	
246	宝吉屋	鍔質 寛永通寶	2.4	0.6	0.13	3.3	-	
247	宝吉屋(レジ)	鍔質 寛永通寶	2.3	0.6	0.12	2.5	-	
248	BK1(魔丸)	鍔質 寛永通寶	2.5	0.6	0.13	2.7	-	
249	SD02-03	金誠製品 鎌管器質	3.6	1.2	0.08	7.6	裏面：縫合の跡み	新文永
250	SD02-03	鍔製品 鍔刃	(15.7)	2.4	0.2	32.8	左先：萬葉・刀こぼれ	
251	SD03	鍔製品 圓り鍔	(15.9)	1.55	0.3	20.5	萬葉	
252	SK10	鍔製品 匁丁刀	(17.2)	3.9	0.25	46.4	左先：萬葉・刀こぼれ	
253	SK26	金誠製品 把手	-	1.0	0.07	10.0	両面に留め金具	
254	金合掌 小判銀	金萬銀品 小判形割り	(3.2)	3.3	0.04	2.8	純金・条根	
255	金合掌 等	金誠製品 等	16.9	0.7	0.1	5.0	表面：凹凸	

第7表 下層面：木製品遺物観察表

[表25]

番号	遺物 番号	名種	口径 (cm)	奥内径 (cm)	高さ (cm)	唐 外面	内面	箋文・特徴等	年代
256	SD02	瓶	(11.4)	7.4	(5.3)	黒	黒		
257	SD02	瓶	-	7.6	(1.5)	黒	黒		
258	SD02	瓶	-	-	(3.1)	赤	黒	体部・底鉢(1.3cm)文様 柄付・火口	
259	SD02-03	杓子	表(55)	幅(7.6)	厚(1.1)	黒面：赤	裏面：赤	裏面(口部)	
260	SD03	杓子	裏(53)	幅(6.9)	厚(0.9)	赤面：赤	-	手元部・縫合	
261	SK09	杓子	(14.0)	7.1	(7.0)	黒	黒	体部・赤面で文様	
262	SK13	杓子	(11.4)	7.0	(4.0)	赤	赤	高部内面：墨跡	
263	SK14	杓子	-	6.1	(3.5)	黒	赤	体部・赤面で丸で囲んだ竹子の文様　高台内：墨跡・キャラクタの印みが高る	
264	SK03	杓子	(8.6)	(4.4)	(3.2)	黒	黒	体部・赤面で紅葉文様・赤	

[下點]

番号	遺物 番号	種類	全長 (cm)	全幅 (cm)	全高 (cm)	木版	左右 の割	特徴等	年代
265	SD03	下鉢	21.2	8.3	7.9	祇口	右足	一本道面：弧(丸型) 横筋孔後側面 方 直側欠損	
266	SD03	下鉢	(11.0)	(7.6)	2.4	祇口	なし	無頭・弧(つま先に小穴)四角形の切り込み・横筋2カ所 下刃に小字孔	
267	SD03	下鉢	24.3	12.0	0.8	祇口	なし	不明	
268	SD05	下鉢	30.3	9.0	4.1	祇口	左足	一本道面(角付) 右左側面に横筋孔後側面 方 直側欠損	
269	SD06	下鉢	(12.2)	6.4	(2.6)	祇口	なし	左足 横筋孔(差込溝)直切下鉢(人型) 指江痕	
270	SK16	下鉢	22.3	8.9	7.6	祇口	なし	横筋孔(差込溝)直切下鉢(人型) 横筋孔後側面 方 指江痕	
271	SK17	下鉢	22.5	7.1	(4.8)	祇口	なし	横筋孔(差込溝)直切下鉢(人型) 横筋孔後側面 方 指江痕 滅國風跡	
272	SK17	下鉢	28.1	7.5	(3.8)	祇口	右足	横筋孔(差込溝)直切下鉢(人型) 横筋孔後側面 方 指江痕	
273	SK29	下鉢	(22.5)	8.2	(1.5)	祇口	左足	一本道面(直切下鉢) 横筋孔後側面 方 異面(面が唐り或り草薙下鉢狀)	
274	SK29	下鉢	22.5	8.0	(1.5)	祇口	なし	一本道面(直切下鉢) 横筋孔後側面 方 異面(面が唐り或り草薙下鉢狀)	
275	SK29	下鉢	22.1	8.8	(2.5)	祇口	左足	一本道面(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
276	SK29	下鉢	(7.6)	(5.8)	厚(2)	祇口	なし	一本道面(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
277	SK30	下鉢	21.9	7.9	9.0	祇口	右足	一本道面(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 表面・側面赤錆	
278	SK30	下鉢	(15.4)	(6.9)	9.0	祇口	左足	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 表面・側面赤錆	
279	SK30	下鉢	22.2	8.1	9.5	祇口	右足	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 表面・側面赤錆	
280	SK30	下鉢	22.2	8.0	-	祇口	左足	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 表面・側面赤錆	
281	SK30	下鉒	23.0	8.2	(3.4)	祇口	-	右足 横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
282	SK30	下鉒	22.9	7.7	(3.4)	祇口	なし	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
283	SK30	下鉒	(15.8)	7.8	(3.8)	祇口	左足	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
284	SK03	下鉒	22.3	8.0	(3.5)	祇口	なし	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
285	SK03	下鉒	20.2	6.8	(4.3)	祇口	なし	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
286	SK03	下鉒	22.0	12.8	厚(2)	祇口	なし	横筋孔(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 指江痕	
287	SK10	下鉒	(5.2)	7.4	(4.4)	祇口	左足	一本道面(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 表面・側面(面が唐り或り草薙下鉒狀)	
288	武藏シート	下鉒	19.5	8.4	(2.1)	祇口	-	一本道面(直切下鉒) 横筋孔後側面 方 表面・側面(面が唐り或り草薙下鉒狀)	

[その他]

番号	遺物 番号	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	木版	箋文・特徴等	年代
289	SD02	木札	25.8	7.0	0.9	祇口	穿孔(直径約1.7cm)	
290	SD02	木札	21.6	11.5	0.7	祇口	表裏共に墨書・深縫口(縫合)	
291	SD02	曲物墨小紙板	7.1	7.3	0.4	祇口	穿孔(直径約2mm) 中央に凹み	
292	SD02-03	木札	(15.0)	(3.3)	0.7	祇口	墨書(墨書き七寸(二尺九寸)(「二尺九寸」)) 上縁の墨面が研磨に剥がれる	
293	SD02-03	木札	31.7	6.0	0.8	祇口	表面に墨書き(二尺九寸)・背薄(2mm) 長方の加工穴	
294	SD02-03	木札	11.5	6.5	1.0	祇口	表面に墨書き(一尺八寸之内)・(二尺九寸之内)・(三尺六寸之内)・裏面に墨書き(深縫)	
295	SD02-03	板状	7.8	(2.5)	0.2	祇口	左側面に墨書き・背の中央に凹み(野町が刻む)	
296	SD02-03	墨書き	(5.4)	(14.2)	0.7	祇口	表面に墨書き 木筋(2mm)	
297	SD02-03	墨書き	15.9	(5.6)	1.3	祇口	裏面に墨書き(縫合)などの作り部分と異なるが不規則 木筋(2mm)	
298	SD02-03	曲物墨小紙板	10.6	(7.9)	0.7	祇口	二輪の一つ	
299	SD02-03	曲物墨小紙板	14.8	15.2	1.0	祇口	二輪・墨書き2ヶ所	
300	SD03	木札	11.0	4.2	0.2	祇口	表裏に墨書き(松・木口・縫合・口相り)二寸八分(2.8cm)	
301	SD03	墨書き	10.8	10.7	0.6	祇口	表裏に墨書き(二寸八分(2.8cm)口付)二寸八分(2.8cm)	
302	SD03	墨書き	11.6	(5.9)	1.1	祇口	裏面に墨書き 三分の二の中央 木筋(2mm)	
303	SD03	曲物墨小紙板	13.3	13.4	1.1	祇口	二輪	
304	SD03	曲物墨小紙板	(10.6)	(3.6)	1.3	祇口	三分割の一つ	
305	SD03	曲物墨小紙板	11.5	(10.5)	0.3	祇口	中央に穿孔(直径約2mm)	
306	SD03	小型筒	11.1(15.5)	直径(12.0)	高(10.5)	-	裏面に墨書きの痕跡 中央に釘穴2ヶ所 裏面に加工痕	
307	SD05	小型曲物	移(15.2)	高(7.5)	1.0	祇口	内縫が被り墨書き 内縫に段差があり側板が二重になる 側板は内外側とともに、底板の内縫に2ヶ所木筋(穴)がある	
308	SD05	曲物墨小紙板	(20.0)	(6.6)	1.0	祇口	木筋(墨書き)の縫合(2ヶ所)で縫じられる 内縫のみ縫合か程度が底板	
309	SD05	曲物墨小紙板	9.6	(7.7)	0.5	祇口	木筋(墨書き)の縫合(2ヶ所)	
310	SD06	木札	19.1	2.9	0.5	祇口	裏面に墨書き 先頭を細く削る	
311	SD06	木札	15.9	4.7	0.8	祇口	裏面に墨書き(木口)裏面の下部に墨の痕跡か	
312	SK25	木札	16.5	3.4	0.7	祇口	裏面に墨書き(木口)裏面の(墨書き(木口))代入し 裏面の(木口)代入する	

辨認 番号	遺物 番号	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	木取	施文・特徴等	年代
303	SK30	小判舟形	径11.3	高(2.7)	0.8	柾目	木釘3孔で直板を留める。側板は19時~3時で組む。板底に織紋が残る。	
314	SK303	前帶蓋合板板	32.7	(11.6)	1.9	柾目	側面に縦合蓋穿孔4ヶ所(底板の4cm)。	
315	SK07	船物蓋合板板	(12.5)	(3.7)	1.1	柾目	三分割の面物の一つ。木釘穴2ヶ所。	
316	SX10	漆器盒	(26.4)	(7.7)	1.7	柾目	表面に墨書き。	
317	試作レシナ	加工木	15.8	14.6	1.0	柾目	上面に墨書き(墨書き墨跡)。	
318	包含層	木札	(16.4)	6.3	0.8	柾目	表面に焼跡(木札焼痕)か、裏面の上面に加工。	
319	包含層	木札	(5.8)	4.6	0.35	柾目	裏面に墨書き。	
320	包含層	舟物蓋合板板	(26.4)	(11.8)	0.8	柾目		
321	包含層	舟物蓋合板板	25.8	26.4	1.0	柾目	三分割。表裏墨書き化。4ヶ所の穿孔。	
322	SD02-03	椎形	(4.2)	(2.3)	0.9	—	側面に墨書き。	
323	SD02-03	椎形	(5.1)	(8.5)	1.1	—	側面に墨書き。	
324	SD02-03	椎形	(7.6)	12.4	1.8	—	墨書きタグ(筆が非常に細かい)。	
325	SD02-03	羽子板	29.7	10.1	0.8	柾目	表面に墨書き。	
326	SD02-03	著	22.3	0.5	0.5	—	削り出し角板(六角形)。両端部に朱。	
327	SD02-03	著	18.5	0.6	0.5	—	削り出し丸棒(丸方角)。	
328	SD02-03	著	(17.0)	0.6	0.4	—	削り出し角板(四角形)。先が削れる。	
329	SD02-03	加工板	7.6	(5.7)	0.6	—	穿孔(直径約5mm)。表面は滑らかで、裏面はザザザする。	
330	SD02-03	板	5.5	3.4	0.4	柾目		
331	SD02-03	扇手狀	(10.7)	(3.4)	1.3	柾目	鍵手狀に焼痕。	
332	SD02-03	内柱狀	13.7	7.2	5.5	心棒	中央に墨書き。円錐状の焼痕に平底面。	
333	SD03	楕圓	(1.7)	(4.5)	0.75	—	削り出し。楕圓11木。着火はほとんど残っていない。	
334	SD03	椭圓	(3.7)	(5.8)	1.2	—	削り出し。	
335	SD03	筆	(15.9)	0.4	0.3	—	削り出し角板(四角形)。上端に朱。	
336	SD03	加工木	(37.3)	30.3	1.2	柾目	上部に穿孔(直径約2.7mm)。	
337	SD09上木	上木船形手舟	30.8	12.6	1.1	柾目	竹棒の墨書き(表面配列)。中央に穿孔(約5.8cm×約5.0cm)。	
338	SD09上木	上木船形手舟	26.4	14.3	15.3	柾目	竹棒の墨書き(表面配列)。中央に穿孔(約5.8cm×約6.1cm)。	
339	SB03	板	56.0	38.7	2.5	柾目	三枚板。木釘穴4ヶ所。底木式(底板約7.2cm×約7.1cm)。	
340	SB03	糊板	(57.6)	8.5	1.5	柾目	下部(背面)糊板取り加工。	
341	SB03	糊板	(70.2)	7.7	1.5	柾目	下部(背面)糊板取り加工。	
342	SD03	糊板	(65.1)	8.0	1.6	柾目	下部(背面)糊板取り加工。	
343	SD04	糊板(上部)	(41.3)	8.7	2.0	柾目	下部(正面)糊板取り加工。竹糸付書き。	
344	SE04	糊板(上部)	(38.1)	9.1	1.7	柾目	下部(背面)糊板取り加工。竹糸付書き。	
345	SD04	糊板(下部)	90.4	8.3	2.0	不規	下部(背面)糊板取り加工。	
346	SD04	糊板(下部)	91.0	12.6	1.9	柾目	下部(背面)糊板取り加工。	
347	SR06	筆	(18.5)	0.7	0.6	—	削り出し丸棒(六角形)。	
348	SK18	舟形板(円筒)	10.5	10.4	2.2	柾目	中央に穿孔(直径約2.0cm)。表面一部焼化。	
349	SK18	舟形板(円筒)	10.1	10.5	2.0	柾目	中央に穿孔(直径約2.0cm)。表面一部焼化。	
350	SK23	筆	(16.8)	0.6	0.5	—	削り出し丸棒。	
351	SK23	著	23.4	0.75	0.7	—	削り出し丸棒。	
352	SK25	著	23.5	0.7	0.5	—	削り出し丸棒。	
353	SK29	著	20.8	0.75	0.65	—	削り出し丸棒。	
354	SK29	杖	52.9	5.7	5.5	四方	上部・下部に削り加工。	
355	SK29	施杖木片	(19.8)	26	1.9	柾目	頂部から約6cm下の左右に棒状仕様・横方向の木材の埋着痕跡。	
356	SK30	筆	(12.1)	0.7	0.6	—	削り出し丸棒。	
357	SX03	板	18.9	18.0	0.8	柾目	板棒が墨書き。裏側・裏面が墨書き。裏面上下に木を留めた孔跡。	
358	SX03	加工木	21.8	4.0	1.2	柾目	穿孔(直径約4mm)4ヶ所。両面加工。先鋒削り。	
359	SX04	柄	(12.4)	3.4	2.2	柾目	気刀の柄か。なかご(茎)が残る。	
360	SK07	加工木材	36.2	4.5	3.0	柾目	舟側と上部側に十字状加工痕。下部表面に楕圓形(約1.0cm×約0.8cm)の穿孔。	
361	SK07	加工木材	23.9	5.4	2.8	柾目	正面から側面にかけて穿孔(刀型)。	
362	包含層	筆	(12.1)	0.7	0.6	—	削り出し丸棒。	
363	包含層	箆小形手舟	15.9	2.6	0.4	柾目	箆次。底に舟形の板がめ込まれている。下端部は山形か。三角形の文様が描かれている。上端部に削り把手のようなものを削り出す。	
364	包含層	上木船形手舟	20.0	15.2	10.3	柾目	上部・正面に穿孔。正面に削り把手(手型)。	
365	包含層	上木船形手舟	(22.6)	19.8	17.0	四方	正面から側面にかけて穿孔(刀型)。	
366	包含層	上木船形手舟	29.6	14.1	14.4	四方	舟底に墨書きの箆間に疵状の繊維が詰め込まれる。	
367	畫物板	大形舟形流板	67.0	66.0	3.4	柾目	上部・正面に穿孔。	
						心棒	五枚板。木釘穴4ヶ所(四角形の割)	

第8表 下層面：瓦遺物観察表

辨認 番号	遺物 番号	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	地土	色調	施文・特徴等	年代
369	包含層	瓦	30.0	34.4	6.0	赤	内面・褐色 SYR6-8	織物灰瓦。褐色物。	12c~19c
369	包含層	瓦	(15.3)	(11.1)	1.9	青	内面 N4-6	瓦当:文様	13c~19c

第9表 上層面：磁器遺物観察表

序号	遺物 番号	種類 器種	長径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	形態	胎土	色調	施文・特徴等	年代
370	SD01	純削磨器 鏡	9.6	3.2	5.3	ロクロナード 削りだし・高台	繊維 赤色粒含む	灰白色	高台内:「瓶405」 透明釉	1940~1946年
371	SD01	純削磨器 鏡	15.2	6.8	5.1	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:丸子・丁字・区画内に墨と化 体部:「瓶1003」 透明釉	1940~1946年
372	SD01	純削磨器 小皿	8.3	3.1	3.7	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:草 瓶内:「有46」 透明釉	1940~1946年
373	SD01	純削磨器 鏡	-	6.2	(5.2)	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	体部:花 高台内:「会19」 透明釉	1940~1946年
374	SD01	磁器 鏡	10.8	3.8	6.0	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:玉手花 体部:唐京 透明釉	1940~1946年
375	SD01	磁器 皿	(14.4)	8.8	1.2	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:英・蘭苗文・牡丹・草花 体部:舟系 高白・薄青 織花器 透明釉	1940~1946年
376	SD01	磁器 皿	14.9	8.6	4.3	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:桔梗・竹・花 体部:牡丹・唐京 織花器 透明釉	1940~1946年
377	SD01	磁器 盤	(2.4)	(4.4)	1.6	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	体部:桔子・日・月花・經掛(文部省事務記念) 透明釉	1940~1946年
378	SD01	九谷酒器 鏡口	(5.3)	2.2	2.8	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:菊文 体部:松葉・團扇 高台内:「九谷」 透明釉	1940~1946年
379	SD01	九谷酒器 鏡口	(5.6)	1.9	2.0	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:入闇 体部:桜花・「不して得る□□ぞ□□しき」 高台内:「九谷」	1940~1946年
380	SD01	磁器 鏡口	(6.7)	(2.6)	2.9	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:桜花・「知解記念」 透明釉	1940~1946年
381	SD01	磁器 鏡口	5.1	1.8	2.8	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:「君臣恩義」 体部:松葉など 透明釉	1940~1946年
382	SD01	磁器 鏡口	4.2	2.9	4.4	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	体部:「八尾鳳凰 運れて 来れば 蘭か梅雨か オハナ はらはと」 高台 幸孔 体中おわら節歌詞 透明釉	1940~1946年
383	SD01	磁器 鏡口	(6.6)	(2.6)	2.9	ロクロナード 削り出し・高台	繊維	灰白色	見込み:桜花・「振舞式記」 透明釉	1940~1946年
384	SD01	柄付系磁器 鏡(片貝)	(11.6)	(4.5)	2.25	ロクロナード・テグリ 繊維	灰白色 SYR/1	見込み:赤緋の櫻日・日輪2分咲 透明釉 淡青付番	1940~1946年	1940~1946年

第10表 上層面：土製品他遺物観察表

序号	遺物 番号	種類 器種	高 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	形態	胎土	色調	施文・特徴等	年代
385	SD01	純削磨器 鏡人形	(6.3)	3.6	2.6	型合わせ 中空		灰白色 75YR/1	骨供像 人面:頭冠「火入室56」	1940~1946年
386	SD01	土製品 鳥形	(3.4)	(4.0)	(2.5)	型合わせ 中空		素地: 黄白色	表面:緑・茶・青の彩色 豆玉: 黄	
387	SD01	土製品 大形	(3.7)	(3.2)	(2.4)	型合わせ 中空	繊維含む	灰黄色 25YT/2		
388	SD01	土製品 林檎形	2.6	4.2	0.3	型合わせ 中空		素地: 黄色	表面:赤の彩色 2.5YR/6	

第11表 上層面：金属製品遺物観察表

序号	遺物 番号	種類 器種	外径 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形態	胎土	施文・特徴等	年代
389	SD01	純質 鏡 鏡背 鏡裏通宝	2.8	0.75	0.1	3.3	背文			銅鏡水
390	SD01	純質 鏡 鏡裏 鏡裏通宝	2.8	0.7	0.09	1.8				銅鏡水
391	SD01	純質 鏡 鏡裏 鏡裏通宝	2.2	0.7	0.11	2.4				銅鏡水
392	SD01	純質 鏡 鏡裏 一錢質	2.8	-	0.16	6.9	背文:十七才重 鏡裏:大日本 1sen:明治二十一年・中央に斜			
393	SD01	金合掌 鏡 文久永宝	2.6	0.6	0.12	3.9				
394	SD01	純質品 コテ	5.6	4.9	1.0	91.5	コテ面:先端が鋒 側:垂直取付け・直角に曲がある			

第12表 上層面：木製品遺物観察表

序号	遺物 番号	種類 器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	木質	形態	胎土	特徴等	年代
395	包装箱	小判状板	12.7	(4.6)	0.3					
396	包装袋	包	-	7.1	3.2					

第13表 上層面：瓦遺物観察表

序号	遺物 番号	種類 器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	胎土	色調	形態	施文・特徴等	年代
397	SD01	瓦 新瓦	(22.4)	(30.0)	2.2	青	黑色	瓦当:文様 越前系か 磁釉	19c末~	
398	SD01	瓦 新瓦	-	9.1	(2.7)	青	黑色	瓦当:文様なし 磁釉	19c末~	

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 概 要

基峰 修（株式会社アーキジオ）、田中義文（パリノ・サーヴェイ株式会社）

富山城下町遺跡主要部は、常願寺川扇状地の扇端、旧神通川が大きく蛇行する地点の右岸域の沖積地（氾濫平野・海岸平野）に立地し、富山城跡の南側に位置する（第1図）。今回の発掘調査は、富山城下町における武家屋敷と町屋敷の境となる地点であった。調査の結果、古絵図や既往の発掘調査で確認されている背割水路を検出し、江戸時代から戦後までの変遷を確認した。また、町屋敷側から井戸や土坑などの遺構を検出した。

調査地及び周辺の古植生や遺構内と包含層の堆積（水域）環境、さらに出土した木製品の樹種、漆器の塗膜や顔料（赤色）の性状などの検討を目的として、古環境及び植物利用と木製品について自然科学分析調査を実施した。また、出土した動物遺存体の同定と考察を行った。

### 第2節 古環境及び植物利用について

田中義文・堀内誠示・齊藤崇人・馬場健司・松元美由紀（パリノ・サーヴェイ株式会社）

#### （1）試 料

試料は、背割水路（SD03）、井戸（SE03・SE04）及びVI層（包含層）より採取された土壤5点と、背割水路（SD02・03）、溝跡（SD05）、土坑（SK26・SK30）及び性格不明遺構（SX04）より出土した水洗・抽出済の種実遺体7試料である。後者の種実遺体試料は、1試料あたり1点からなるものと複数点～極めて多量のものとが含まれる。これらの各試料の詳細を第14表に示す。

本項目では、土壤試料については珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析の各種微化石分析及び微細物分析を行った。また、水洗・抽出済の種実遺体試料については、種実同定を行った。

第14表 分析試料一覧（土壤・種実遺体）

地区	層位	遺物番号	遺構番号	試料採取 位置など	試料(種別)	備考
A	下層	No.571	SE03	2層	土壤	井戸内堆積土
A	下層	No.572	SD03	B-B断面 9層	土壤	背割水路内堆積土 底面層
A	下層	No.614	SE04	-	土壤	井戸内堆積土
A	下層	No.720	包含層	VI層上層	土壤	西壁基本堆積層位
A	下層	No.721	包含層	VI層下層	土壤	西壁基本堆積層位
A	下層	No.350-6	SD02-03-2区	-	種実遺体	背割水路内、15～30cm下
A	下層	No.389-2	SD02	-	種実遺体	背割水路内、北側石積撤去時
A	下層	No.443-2	SD03-1区	-	種実遺体	背割水路内、東側30～40cm下（底面）、北側石積付近
A	下層	No.530	SK26	-	種実遺体	
A	下層	No.695-3	SK30	-	種実遺体	No.12遺物の下から
A	下層	No.784	SD06	-	種実遺体	底面
A	下層	No.796	SX04	-	種実遺体	北側、木枯新削り時

## (2) 分析方法

### 珪藻分析

土壤（湿重約5g）をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4~5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行う。その後検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い同定・計数した。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985-1991)、Desikachari (1987)などを参考にした。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類する。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表す。

### 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9:濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、同定・計数する。

同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952, 1957)、Faegri and Iversen (1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007) 等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集変遷図として表示する。図表中で複数の種類を一（ハイフン）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

### 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥後、ブリュラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表と層位の変化を図示する。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」で表示する。

### 微細物（微細植物片）分析・種実同定

#### 1) 微細物（微細植物片）分析（水洗）

土壤試料は、種実や葉などの大型植物遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、

ピンセットを用いて、同定が可能な大型植物遺体を抽出する。

## 2) 大型植物遺体・種実同定

土壤から抽出された葉や種実などの大型植物遺体や水洗・抽出済の種実は、現生標本および藤下(1984)、石川(1994)、中山ほか(2000)、鈴木ほか(2012)などを参考に同定し、部位・状態別に個数を数えて、結果を一覧表と図、図版で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、- (ハイフン)で結んで表示する。ヒノキの枝条は、十字対生する4枚の葉を1個と数える。なお、マツ属複維管束亜属の葉は、一部を対象に葉横断面の切片を剃刀で採取し、ガム・クロラール(滴水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入したプレパラートを実体顕微鏡とマイクロスコープ(KEYENCE,VHX-1000)で観察し、樹種を同定する。また、保存状態が良好な一部の種実遺体を対象として、大きさ(長さ、幅、厚さ)をデジタルノギスで計測する。分析後は、大型植物遺体を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存する。

## (3) 結 果

### 珪藻分析

結果を第15表、第40図に示す。以下に、試料別に産状を述べる。

#### 1) SE03・2層 (No.571)

SE03・2層 (No.571) は、量としては少ないものの、100個体以上の珪藻化石が検出される。化石の保存状態は、半壊した殻が多いだけでなく、殻表面には溶解の痕跡が認められることから、状態としては、極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主体に極低率に淡水～汽水生種を伴っている。群集の構成としては、湿地性および陸生珪藻で構成される。本試料から特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の *Gomphonema parvulum*、*Pinnularia microstauron*、流水不明種の *Fragilaria spp.*、*Pinnularia spp.*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*などである。

#### 2) SD03・9層 (No.572)

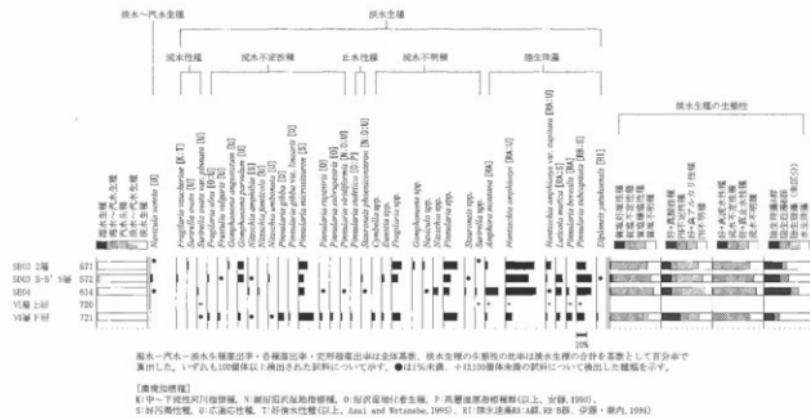
SD03・9層 (No.572) は、100個体以上の珪藻化石が検出されるが、保存状態は、極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主体に極低率に淡水～汽水生種を伴う。群集は、湿地性および陸生珪藻で構成される。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の *Gomphonema parvulum*、*Pinnularia microstauron*、流水不明種の *Fragilaria spp.*、*Pinnularia spp.*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica*、*Pinnularia subcapitata*などである。

#### 3) SE04 (No.614)

SE04 (No.614) は、100個体以上の珪藻化石が検出されるが、保存状態は、極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主体に極低率に淡水～汽水生種を伴っている。群集は、湿地性および陸生珪藻で構成される。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の *Pinnularia microstauron*、流水不明種の *Pinnularia spp.*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica*、*Pinnularia subcapitata*などである。

#### 4) VI層上層 (No.720)

VI層上層 (No.720) は、本試料は、珪藻化石の量が少なく、1プレパラートから62個体が検出されたのみで、保存状態は極々不良である。検出された分類群は、淡水生種のみであり、汽水生種等は認められない。群集は、湿地性および陸生珪藻で構成される。特徴的に認められた種は、淡水生種で陸生珪藻の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*などである。



第40図 主要珪藻化石群集

## 5) VI層下層 (No.721)

VI層下層 (No.721) は、今回の分析に供された5試料中で最も多くの珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。化石の保存状態は、ほとんどが完形殻であることから、状態としては普通（良好）である。検出された分類群は、淡水生種のみである。群集の構成は、湿地性種群を中心として陸生種群を伴っている。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の *Pinnularia gibba*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia rupestris*、流水不明種の *Cymbella* spp.、*Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp.、陸生珪藻の *Luticora mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*などである。

## 花粉分析

結果を第16表、第41図に示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出する。群集組成は、VI層下層 (No.721) を除く4試料は類似し、木本花粉の割合がやや高い。VI層下層は、シダ類胞子が多産し、花粉化石では草本花粉が多く産出する。花粉化石の保存状態は、全体的に普通～やや悪い程度であるが、5試料の中ではVI層下層の保存状態がやや良好である。

花粉化石群集についてみると、検出される種類は5試料とも概ね類似する。木本花粉ではマツ属が多産し、亞属まで同定できたもの多くはマツ属複複管束亞属である。この他、モミ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。また、VI層上層 (No.720) では、アカメガシワ属やノブドウ属なども多く産出する。

草本花粉は、いずれの試料もイネ科が多産し、アカザ科、アブラナ科などを伴う。その他、サナエタデ、ヨモギ属などの他に、ガマ属などの水湿地生植物も産出する。なお、多産したイネ科には、栽培種のイネ属も含まれる。イネ科全体に占めるイネ属花粉の割合は、SE03・2層 (No.571) が約52.7%、SD03・9層 (No.572) が約48.5%、SE04 (No.614) が約38.6%、VI層上層 (No.720) が約26.1%、VI層下層 (No.721) が約41.2%である。この他の栽培種や栽培の可能性がある種類では、ソバ属やベニバナ属がみられる。なお、花粉・胞子以外では、回虫卵や鞭虫卵が微量認められる。

## 植物珪酸体分析

結果を第17表、第42図に示す。各試料からは、植物珪酸体が認められ、保存状態は比較的良好である。

第15表 珪藻分析結果

種類	生息性		環境 指標種	SD03 2番		SD03 B-B' 9番		SD04 614		VI層	
	塩分	pH		S71	S72	S73				上層 729	下層 721
	淡水	海水									
Thalassiosira mitschadi (Grun.) Grunow	Eut.	A,B		-	1	-	-	-	-	-	-
Anomoctenia spinigerogloba (Kuetz.) Pfitzer	Ogb-Meh	al-kd	ind	D,B	-	1	-	-	-	-	-
Navicula holopepla (Gru.) Cleve	Ogb-Meh	al-kd	ind	O,U	-	1	1	-	-	-	-
Navicula veneta Kuetzing	Ogb-Meh	al-kd	ind	U	1	3	1	-	-	-	-
Nitzschia levidens var. victoriae (Grun.) Chodat	Ogb-Meh	al-kd	ind	U	-	1	-	-	-	-	-
Nitzschia palca (Kuetz.) W.Smith	Ogb-Meh	al-kd	ind	S	-	1	-	-	-	1	-
Rhopidiola gibberula (Ehr.) Mueller	Ogb-Meh	al-kd	ind	U	1	1	1	-	-	2	-
Asperula montana Kruske	Ogb-ind	ind	ind	RA	3	-	16	6	4	-	-
Asperula ovalis var. affinis (Kuetz.) Van Heurck	Ogb-ind	al-kd	ind	T	-	1	-	1	-	-	-
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogb-ind	al-kd	ind	O,T	-	-	-	-	-	1	-
Cymbella citula (Ehr.) Kirchner	Ogb-ind	al-kd	r-ph	O,T	-	-	-	-	-	1	-
Cymbella naviculariformis Auerwald	Ogb-ind	ind	ind	O	-	1	-	-	-	-	-
Cymbella turgida Grunow	Ogb-ind	al-kd	r-ph	K,T	-	1	-	-	-	-	-
Cymbella spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	7	-
Diplosira parva Cleve	Ogb-ind	ind	ind	O	-	1	-	-	-	-	-
Diplosira yatakamai Horikoshi et Okuno	Ogb-ind	ind	r-ph	RI	-	1	-	-	-	3	-
Diplosira spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	-	-	-
Encyonema siliculosum (Bleek in Rabenb.) D.G.Mann	Ogb-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	1	-
Euota incisa W.Smith ex Gregory	Ogb-hab	al-kd	ind	O	1	1	-	-	-	-	-
Euota pectinata var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogb-hab	al-kd	ind	O	1	-	-	-	-	1	-
Euota spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	3	-	-	-	4	-
Fragilaria alua (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogb-ind	al-kd	ind	O,U	-	2	-	-	-	4	-
Fragilaria alua var. arcu. (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogb-ind	al-kd	r-ph	T	-	1	-	-	-	-	-
Fragilaria vaucheri (Kuetz.) Petersen	Ogb-ind	al-kd	r-ph	K,T	-	2	-	-	-	-	-
Fragilaria spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	12	8	-	-	-	17	-
Frustulia vulgaris (Thwaites) De Toni	Ogb-ind	al-kd	ind	U	-	1	-	-	-	5	-
Gomphonema angustum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogb-ind	al-kd	ind	U	2	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum C.Agarib	Ogb-ind	al-kd	ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema pavulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogb-ind	ind	ind	U	8	8	-	-	-	6	-
Gomphonema spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	3	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogb-ind	al-kd	ind	R,A,U	36	29	37	29	14	-	-
Hantzschia amphioxys var. capitata Muller	Ogb-ind	al-kd	ind	R,A,U	7	2	1	8	3	-	-
Lenticula matica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogb-ind	al-kd	ind	R,A,S	-	8	7	-	-	8	-
Meridion circulare var. constructum (Ralfs) Van Heurck	Ogb-ind	al-kd	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-
Navicula convergens (Kuetz.) Grunow	Ogb-ind	al-kd	ind	R,B,S	-	1	-	-	-	-	-
Navicula cryptocapsula Kuetzing	Ogb-ind	al-kd	ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Navicula cryptotomella Lange-Bertalot	Ogb-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-	-	-
Navicula kotschy Grunow	Ogb-ind	al-kd	ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Navicula rhynchocapsula Kuetzing	Ogb-ind	al-kd	ind	U	-	1	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	2	-	-	1	-	-	-
Neidium amplifolium (Ehr.) Krammer	Ogb-ind	ind	r-ph	O	1	-	-	-	-	1	-
Neidium spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogb-ind	al-kd	ind	S	-	1	2	-	-	2	-
Nitzschia brevisinuata Grunow	Ogb-ind	al-kd	ind	R,B,U	-	-	1	-	-	-	-
Nitzschia frigida Grunow	Ogb-ind	al-kd	ind	U	-	-	2	-	-	-	-
Nitzschia sinuata (W.Smith) Grunow	Ogb-ind	al-kd	ind	U	-	1	-	-	-	-	-
Nitzschia umbonata (Ehr.) Lange-Bertalot	Ogb-ind	al-kd	ind	U	-	2	-	-	-	2	-
Nitzschia spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	6	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogb-ind	ind	ind	RA	-	-	3	3	12	-	-
Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogb-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	2	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogb-ind	ac-kd	ind	O	-	-	-	-	-	12	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustadt	Ogb-hab	ac-kd	ind	O	-	-	-	-	-	3	-
Pinnularia mesolepta (Birn.) W.Smith	Ogb-ind	ind	ind	S	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia microstaurina (Ehr.) Cleve	Ogb-ind	ac-kd	ind	S	11	6	7	-	-	30	-
Pinnularia obscura Kruske	Ogb-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogb-hab	ac-kd	ind	O	-	-	1	-	-	6	-
Pinnularia stomatophora (Gru.) Cleve	Ogb-ind	ac-kd	r-ph	Q,P	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogb-ind	ac-kd	ind	R,B,S	12	19	18	11	16	-	-
Pinnularia subestrigosa Krammer	Ogb-hab	al-kd	ind	O	-	-	-	-	-	6	-
Pinnularia sudetica (Hans.) M.Peragallo	Ogb-hab	al-kd	r-ph	Q,P	-	-	-	-	-	3	-
Pinnularia viridiflora Krammer	Ogb-ind	ind	ind	N,O,U	-	-	1	-	-	3	-
Pinnularia spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	17	9	7	-	-	27	-
Psammodictyon elegans (Greg.) Cox	Ogb-ind	al-kd	ind	Q,U	-	1	-	-	-	-	-
Ranaria sinuata (Greg.) Koulik et Stoermer	Ogb-ind	al-kd	r-ph	K,T	-	-	1	-	-	-	-
Rhopidiola gibba (Ehr.) Mueller	Ogb-ind	al-kd	ind	O,U	-	1	1	-	-	-	-
Rhopidiola guianensis Skvortsov	Ogb-ind	al-kd	ind	O,U	1	-	-	-	-	-	-
Scaphoidea levissima (Kuetz.) D.G.Mann	Ogb-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Staurosira phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogb-ind	al-kd	r-ph	N,O,U	-	2	1	-	-	-	-
Staurosira thermoclasta (Petersen) Lund	Ogb-unk	unk	unk	RI	-	1	-	-	-	-	-
Staurosira spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	1	2	-	-	-	-
Suriellia ovata Kuetzing	Ogb-ind	al-kd	r-ph	U	2	-	-	-	-	-	-
Suriellia ovata var. pinnata (W.Smith) Hustadt	Ogb-ind	al-kd	r-ph	U	-	-	2	1	1	-	-
Suriellia spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	1	-	2	1	1	-	-
海藻水生種					0	1	0	0	0	0	0
海水・淡水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水・海水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水・海水生種					2	8	3	0	3	0	3
淡水・海水生種					126	118	120	62	62	206	-
陸生石炭種					128	127	123	62	62	209	-

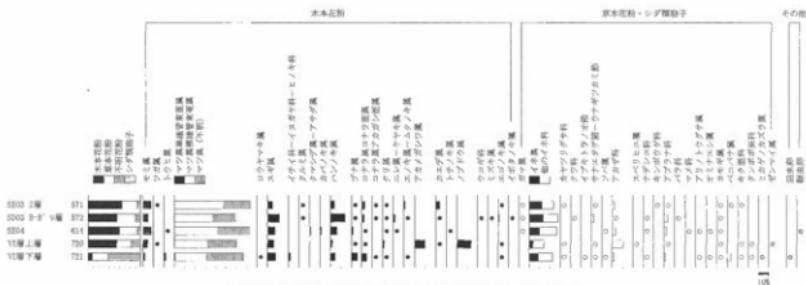
## 凡例

[適応性]

塩分・塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Euh-Meh : 海水生種-汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-Meh : 淡水生種-汽水生種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	unk : pH不明種	unk : 流水不明種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性		
Ogh-unk : 貧塩不明種		

## [環境指標種]

A: 外洋指標種、B: 内湾指標種、C1: 海水藻場指標種、C2: 汽水藻場指標種、D1: 海水砂質干潟指標種、D2: 海水砂質干潟指標種、E1: 海水泥質干潟指標種、E2: 汽水泥質干潟指標種、F: 流水底生種群(以上、小杉, 1988)、G: 流水浮遊生種群、H: 河川浮遊性種群、J: 上流性河川指標種、K: 中～下流性河川指標種、L: 最下流性河川指標種群、M: 湖沼浮遊性種、N: 湖沼沼沢湿地指標種、O: 泽沼湿地付着生種、P: 高層湿原指標種群、Q: 陸域指標種群(以上、安藤, 1990)、S: 好汚染性種、U: 広適応性種、T: 好清水性種(以上、Asai and Watanabe, 1996)、R: 陸生珪藻(RA群、RB: B群、RI: 未区分、伊藤・堀内, 1991)



第41図 花粉化石群集

また、SD03・9層（No.572）を除く4試料からは珪化組織片も検出される。

植物珪酸体含量は、5試料を通じて200～2,900個/gであり、SE04（No.614）とVI層上層・下層（No.720・No.721）とで比較的高いという特徴を示す。検出された分類群は、5試料より栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体が検出されるほか、SE03・2層（No.571）を除く試料からはイネの初穂に由来する穎珪酸体、短細胞列などの珪化組織片も検出される。この他、SE04、VI層上層・下層からは、ヨシ属やススキ属などが僅かに検出される。

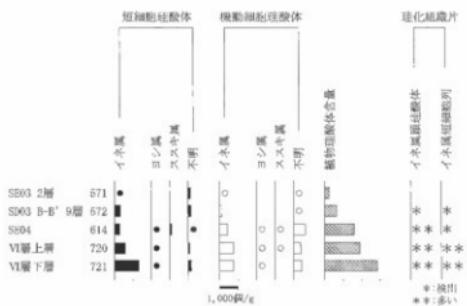
## 微細物（微細植物片）分析・種実同定

## 1) 微細植物片分析

土壤試料の水洗選別によって得られた大型植物遺体の同定結果を第18表、堆積物200ccに換算した大型植物遺体群集組成を第43図に示す。分析に供された5試料からは、裸子植物5分類群（クロマツ、マツ属複殖管束亞属、モミ属、スギ、ヒノキ）の葉（短枝・枝条含む）22個、種実3個と、被子植物42分類群（ハンノキ属、クワ属、ウメ、スマモ、モモ、アカメガシワ、サンショウ、タラノキ、クサギ、ニワトコ、タニウツギ属、イネ、アワ、オヒシバ、イネ科、イヌホタルイ近似種、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、ソバ、ザクロソウ、スペリヒュ、ハコベ類、ナデシコ科（A-B）、

第16表 花粉分析結果

種類	SE03 2層 571	SD03 B-B' 9層 572	SE04 614	VI層	
				上層 720	下層 721
<b>木本花粉</b>					
モミ属	23	12	16	12	2
ツガ属	1	-	-	1	-
トウヒ属	-	-	1	-	2
マツ属単維管束亞属	-	1	-	1	1
マツ属複維管束亞属	148	97	84	86	32
マツ属(不明)	78	59	62	74	37
コウヤマキ属	-	-	-	-	1
スギ属	15	29	14	16	8
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	2
クルミ属	1	2	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	2	-	-
カバノキ属	-	-	2	-	-
ハンノキ属	12	36	12	5	5
ブナ属	1	2	3	1	6
コナラ属コナラ亜属	10	7	1	2	5
コナラ属アカガシ亜属	1	1	-	-	1
クリ属	1	2	1	4	1
ニレ属-ケヤキ属	-	5	1	-	-
エノキ属-ムクノキ属	4	2	-	-	1
アカメガシワ属	-	-	-	26	-
カエデ属	11	1	-	1	-
トチノキ属	-	-	1	-	-
ノブドウ属	-	-	-	36	-
ウコギ科	-	-	-	-	-
ミズキ属	-	1	-	-	-
エゴノキ属	2	3	-	2	1
イボタノキ属	-	2	-	-	-
<b>草本花粉</b>					
ガマ属	3	1	1	-	-
イネ属	58	63	34	18	128
他のイネ科	52	67	54	51	183
カヤツリグサ科	2	-	-	1	7
クワ科	-	1	-	-	-
イブキトランオオ節	-	-	-	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	9	-	1	4
ソバ属	-	-	1	-	1
アカザ科	10	4	10	51	26
スペリヒユ属	-	-	-	1	-
ナデシコ科	-	1	1	-	7
キンポウゲ科	2	-	-	-	-
アブラナ科	4	15	7	2	18
バラ科	-	2	-	-	-
マメ科	-	-	1	-	-
アリノトウグサ属	-	-	1	-	3
オミナエシ属	-	-	1	-	2
ヨモギ属	1	1	1	1	5
ベニバナ属	1	-	-	-	42
キク科	1	-	-	2	1
タンボボア科	-	-	-	1	2
<b>不明花粉</b>					
不明花粉	9	9	4	7	9
<b>シダ類胞子</b>					
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	1
ゼンマイ属	-	-	-	1	-
他のシダ類胞子	22	41	18	82	851
<b>合計</b>					
木本花粉	308	264	200	287	105
草本花粉	135	164	112	129	430
不明花粉	9	9	4	7	9
シダ類胞子	22	41	18	83	852
合計(不明を除く)	465	469	330	479	1387
<b>その他</b>					
回虫卵	-	-	-	-	2
鞭虫卵	-	-	1	-	-



第42図 植物珪酸体群集

第17表 植物珪酸体含量

分類群	SE03	SD03	SE04	VI層		(μg/g)
	2層 571	B-B' 9層 572	614	上層 720	下層 721	
<b>イネ科葉身短細胞珪酸体</b>						
イネ属	<100	300	300	600	1,300	
ヨシ属	-	-	<100	<100	<100	
ススキ属	-	-	100	-	-	
不明	100	200	<100	100	200	
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>						
イネ属	<100	100	400	800	800	
ヨシ属	-	-	<100	<100	<100	
ススキ属	-	-	<100	<100	-	
不明	<100	<100	600	400	400	
<b>合計</b>						
イネ科葉身機動細胞珪酸体	200	500	500	700	1,600	
イネ科葉身短細胞珪酸体	<100	200	1,100	1,200	1,300	
植物珪酸体合量	200	700	1,600	1,900	2,900	
<b>珪化組織片</b>						
イネ属頸卵胎子	-	*	*	**	**	
イネ属短細胞列	-	-	*	**	**	

&lt;100: 100個/g未満

-:未検出, \*:検出, \*\*:多い

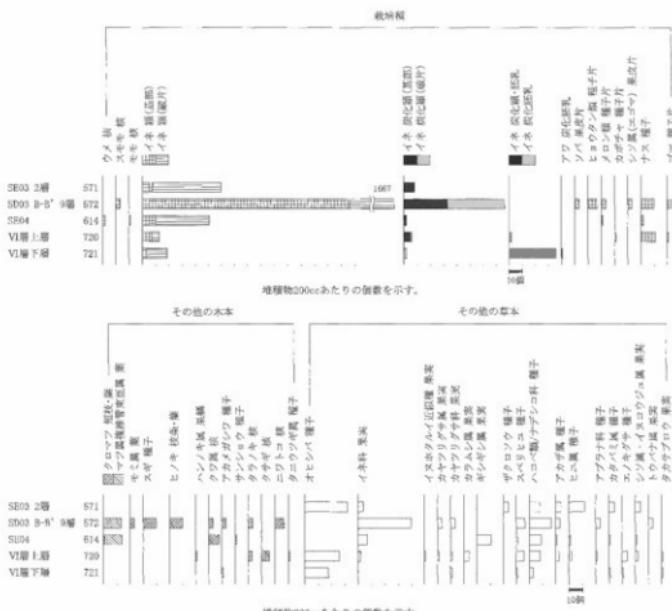
アカザ属、ヒュ属、アブラナ科（A、B）、カタバミ属、エノキグサ、ヒヨウタン類、メロン類、カボチャ、シソ属（エゴマ）、シソ属—イヌコウジ属、イヌコウジ属、トウバナ属、ナス、ゴマ、タカサブロウ）の種実936個の、計961個が検出された。

大型植物遺体の出土状況は、SE03・2層（No.571:50cc）が35個、SD03・9層（No.572:60cc）が620個、SE04（No.614:200cc）が114個、VI層上層（No.720:200cc）が107個、VI層下層（No.721:200cc）が85個であった。大型植物遺体は、SD03・9層（No.572）より最も多く出土し、栽培種のイネの穎（破片：570個）がその多数（92%）占める。

栽培種は、ウメの核が2個（No.614）、スマモの核が1個（No.572）、モモの核が1個（No.614）、イネの穎が645個（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、炭化穎が35個（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、炭化穎・胚乳が2個（No.721）、炭化胚乳が36個（No.720・No.721）、アワの炭化胚乳が1個（No.721）、ソバの果実が1個（No.572）、ヒヨウタン類の種子が2個（No.572）、メロン類の種子が2個（No.572・No.614）、カボチャの種子が1個（No.720）、シソ属（エゴマ）の果実が1個（No.572）、ナスの種

第18表 微細植物片分析結果

分類群	部位	状態	SD03		SD03		SD04		VI層		備考
			2層 671	E-B' 2層 673	上層 614	下層 720	上層 721	下層 721			
木本											
クロマツ	枝条・葉	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ黒復屈管束亞属	葉	破片	-	4	13	-	-	-	-	-	-
モミ属	葉	破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-
スギ	種子	完形	-	3	-	-	-	-	-	-	-
ヒノキ	枝条・葉	完形	-	3	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	葉	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	-
クワ属	核	完形	-	1	6	-	-	-	-	-	-
ウメ	核	完形	-	-	2	-	-	-	-	-	-
		完形未満	-	-	1	-	-	-	-	-	-
スモモ	核	破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-
モモ	核	破片	-	1	1	-	-	-	-	-	半分
アカメガシワ	種子	破片	-	1	-	-	-	-	1	-	-
サンショウ	種子	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-
タラノキ	核	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	-
クサギ	核	破片(背面)	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片(腹面)	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ	核	破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-
タニウツギ属	胞子	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	-
草本											
イネ	穀	破片(基部)	2	47	10	7	3	-	-	-	-
		破片	15	500	41	6	16	-	-	-	-
		破片(基部)	2	10	2	5	-	-	-	-	-
		破片	-	13	-	1	2	-	-	-	-
		胚・胚乳	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		胚乳	-	-	-	-	-	-	8	-	-
		完形	-	-	-	-	-	-	5	-	-
		完形未満	-	-	-	-	1	-	21	721:2後接着	-
		破片	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アワ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	25	-	-
オヒシバ	種子	完形	8	-	-	-	-	-	18	-	-
イネ科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イヌホタルイ近似種	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カヤツリグサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カラムシ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	4	-	-
ギシギシ属	花被	破片	-	-	3	-	-	-	-	-	-
ソバ	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ザクロソウ	種子	完形	1	-	9	-	-	-	-	-	-
スペリヒュ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハコベ属	種子	完形	1	2	3	2	-	-	2	-	-
ナデシコ科A	種子	完形	1	-	-	-	-	-	3	-	-
ナデシコ科B	種子	完形	-	-	1	-	-	-	3	-	-
アカゲ属	種子	完形	1	1	1	1	2	-	-	-	-
ヒユ属	種子	完形	3	-	1	1	1	-	-	-	-
アブラン科A	種子	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アブラン科B	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カタバミ属	種子	完形	1	-	1	-	-	-	1	-	-
エノキグサ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	4	-	-
ヒヨウタン属	種子	破片(基部)	-	-	2	-	-	-	1	-	-
メロン属	種子	破片(基部)	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カボチャ	種子	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-
シソ属(エゴマ)	果実	破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シソ属(ヌコウジュー)	果実	完形	-	-	1	-	-	-	1	-	-
イヌコウジュー属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-
トウバナ属	果実	完形	-	1	-	-	-	-	1	-	-
ナス	種子	完形	-	-	3	1	10	-	-	-	-
ゴマ	種子	破片	-	1	-	-	1	-	1	-	-
タカサゴロク	果実	完形	-	-	-	-	1	1	-	-	-
合計			-	17	26	11	-	-	1針55個		
木本種実・葉			35	603	88	96	-	-	84針906個		
草本種実			35	620	114	107	-	-	85針961個		
その他(主なものを抽出・同定対象外)											
木材			-	-	+	+	-	-	-	-	-
炭化材			+	+	+	+	+	+	+	-	-
シダ類の葉			+	-	-	-	-	-	-	-	-
蘇鐵類の茎・葉			-	+	+	-	-	-	-	-	-
昆蟲類			-	+	+	+	+	+	-	-	-
骨片			-	+	+	-	-	-	-	-	-
魚類の鱗			-	+	+	-	-	-	-	-	-
砂礫類			+	+	+	+	+	+	+	-	-
分析量			50	60	200	200	200	200	容積(cc)		
			75	80	309	364	359	359	重量(g)		



第43図 大型植物遺体群集

子が16個（No.572・No.614・No.720）、ゴマの種子が2個（No.572・No.720）の、計748個が確認され、大型植物遺体群全体の78%を占める。

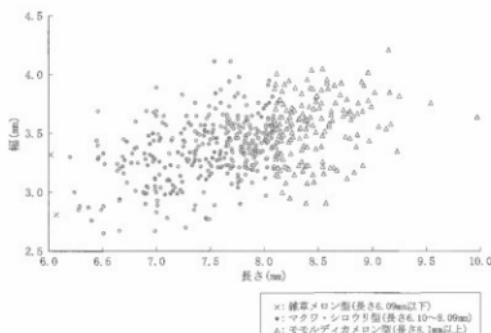
栽培種を除いた分類群では、木本はSD03・9層（No.572）を除く4試料から検出される、常緑針葉樹で高木になるクロマツ（No.614）、マツ属複維管束亞属（No.572・No.614）、モミ属（No.572）、スギ（No.572）、ヒノキ（No.572）と、落葉広葉樹で高木になるハンノキ属（No.720）、クワ属（No.572・No.614）、アカメガシワ（No.721）、低木のサンショウ（No.614）、タラノキ（No.572・No.720）、クサギ（No.720）、ニワトコ（No.572）、タニウツギ属（No.720）が確認された。

草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から成り、やや乾いた場所や湿った場所にも生育可能なオヒシバ（No.571・No.720・No.721）、イネ科（No.571・No.572・No.614・No.720）、カヤツリグサ属（No.572・No.720）、カヤツリグサ科（No.572・No.720・No.721）、カラムシ属（No.720）、ギシギシ属（No.614）、ザクロソウ（No.571）、スペリヒュ（No.614・No.720・No.721）、ハコベ類（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、ナデシコ科（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、アカザ属（No.571・No.572・No.614・No.720）、ヒユ属（No.571・No.614・No.720）、アブラナ科（No.572・No.720）、カラバミ属（No.571・No.614・No.721）、エノキグサ（No.720・No.721）、シソ属-イヌコウジ属（No.571・No.614・No.720）、イヌコウジ属（No.720）などの、中生植物を主体とし、抽水植物のイヌホタルイ近似種（No.720）や、湿生植物のトウバナ属（No.572）、タカサプロウ（No.720・No.721）などもわずかに確認された。

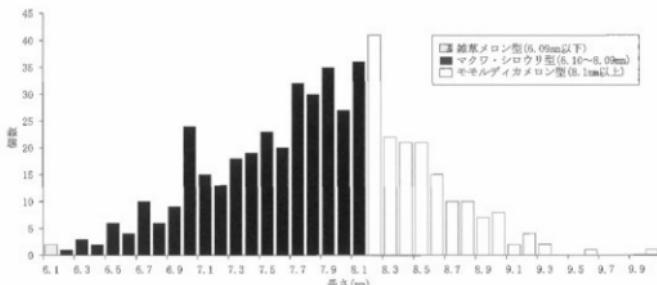
第19表 種実同定結果

遺物番号	遺構番号	分類群	部位	状態	個数	大きさ(mm)*			備考
						長さ	幅	厚さ	
No.350-8	SD02-03-2区	イチヨウ	種子	破片	1	11.9 +	18.0 +	12.2 +	
No.389-2	SD02	ウメ	核	完形	1	13.9	12.8	10.9	
No.443-2	SD03-1区	モモ	核	完形	1	25.6	18.5	13.2	
No.530	SK26	アブラチャン	果実・種子	完形	1	11.3	12.1	9.8	
		雜草メロン型	種子	完形	2				
		マクワ・シロクリ型	種子	完形	333	7.8 ± 0.6	3.4 ± 0.3	1.3 ± 0.3	500個の平均土標準偏差
		モモルディカメロン型	種子	完形	165				
		メロン類	種子	完形	2,765	-	-	-	計測対象外
No.696-2	SK30	カキノキ属	種子	破片	4	16.1 +	8.9 +	-	
		ヒヨウタン種	種子	完形	12	16.1 ± 0.6	7.2 ± 0.2	2.6 ± 0.2	12個の平均土標準偏差
				完形未満	22	-	-	-	計測対象外
No.784	SD05			破片	27	-	-	-	計測対象外
No.796	SK11	オニグルミ	核	半分	2	32.9	23.0	23.0	接合し完形1個
						合計 3,636			

\*計測はデジタルノギスを使用。破損部は既存値に「+」で示す。



第44図 SK26 (No.530) 出土メロン類種子の大きさ (n=500)



第45図 SK26 (No.530) 出土メロン類種子の長さ (n=500)

## 2) 種実同定

水洗・抽出済の種実試料の同定結果を第19表に示す。分析に供された7試料からは、裸子植物1分類群（イチョウ）1個、被子植物10分類群（オニグルミ、アブラチャン、ウメ、モモ、カキノキ属、ヒヨウタン類、メロン類（雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、モモルディカメロン型））3,635個の、計3,636個の種実が同定された。栽培種は、イチョウの種子が1個（No.350-6）、ウメの核が1個（No.389-2）、モモの核が1個（No.443-2）、カキノキ属の種子が4個（No.695-3）、ヒヨウタン類の種子が61個（No.784）、メロン類の種子が3,565個（No.530）の、計3,633個が確認された。

最も多く確認されたメロン類（No.530）は、保存状態が良好な完形種子500個の大きさを計測した結果、長さが最小6.02 - 最大9.97（平均7.79 ± 標準偏差0.63）、幅が2.65 - 4.21（平均3.42 ± 0.28）、厚さが0.4 - 1.98（平均1.26 ± 0.3）であった。また、種子の長さは、藤下（1984）の基準による雑草メロン型が2個（0.4%）、マクワ・シロウリ型が333個（66.6%）、モモルディカメロン型が165個（33.0%）に分類された（第44・45図）。

以下に、今回の分析で確認された大型植物遺体のうち、主な種類の形態的特徴を記す。

・イチョウ (*Ginkgo biloba L.*) イチョウ科イチョウ属

種子が検出された。淡灰褐色、長さ約2cm、径1.5cm程度の広楕円体。頂部から基部にかけて2本の稜があり、両端は短く尖る。種皮は堅く、表面は粗面。半分が欠損する。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

短枝、針葉が検出された。灰褐色、短枝から2針葉が伸びる。針葉は、長さは最大で4cm程度、径1mm程度の針形で、横断面は半円形。中心部に2個の維管束がある。一部の葉横断面を観察した結果、4~10個程度の樹脂道が葉肉内に点在するため、クロマツ (*P. thunbergii* Parlatoare) であることがわかる。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核が検出された。灰褐色、完形ならば広卵体で先端部分がやや尖る。径3cm。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れているが、これらは接合することから、実際の個体数は1つである。核皮は硬く、表面は縦方向に溝状の浅い彫紋が走りごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・クワ属 (*Morus*) クワ科

種子が検出された。灰褐色、完形ならば長さ2mm、径1.8mm程度の三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は穂になりやや薄く、一辺が鋭利。基部は爪状突起がある。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・ウメ (*Prunus Mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.) バラ科サクラ属

核（内果皮）の破片が検出された。茶褐色で、レンズ状の広楕円形。長さ1.5cm、幅1cm程度。基部は丸く臍点があり、一方の側面には縫合線が発達する。内果皮は厚く硬く、表面には小凹点が分布する。

・スマモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核（内果皮）破片が検出された。側面には縫合線が発達する。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核（内果皮）の完形が半分の状態で検出された。褐色～黒褐色。広楕円形でやや偏平。基部は丸く

大きな臍点があり、先端部はやや尖る。長さ3cm、幅2cm、厚さ1.5cm程度。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られ、縫合線に沿って半分に割れやすく、半分に割れた個体もある。表面は縦に流れる不規則な線状のくぼみがあり、全体として粗いしわ状に見える。

・カキノキ属 (*Diospyros*) カキノキ科

種子が検出された。破片のため全体の大きさが不明であるが、半月形で、最低でも2cm以上はあると思われる。全体の形状が不明であり小型のカキとの区別が付かないことから、カキノキ属としている。

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

炭化した穎、非炭化の穎、炭化した胚乳が検出された。穎は炭化して黒色のものと、淡褐色で炭化していないものがある。基部に特徴的な果実序柄がある。穎は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に継列する。胚乳は黒色、長楕円形でやや偏平。長さ6mm程度。一端に胚が脱落した凹部があり、両面はやや平滑で2~3本の縫溝がある。

・アワ (*Setaria italica (L.) P.Beauv.*) イネ科エノコログサ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、径1.5mm、厚さ1mm程度の半偏球体で背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。窪みは切れ込みが浅く、孔の深さも浅い。

・ソバ (*Fagopyrum esculentum Moench*) タデ科ソバ属

果実の破片が検出された。灰褐色、完形なら約5mmの三稜状広卵体。一部の稜と頂部を欠き、基部のみ残る。果皮表面はやや平滑。

・ヒヨウタン類 (*Lagenaria siceraria Standl.*) ウリ科ヒヨウタン属

種子が検出された。扁平な倒広皮針体。大きさは、約1.5cm程度。頂部は切形で角張り、基部は切形で臍と発芽口がある。種皮表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い稜に2本の縫線がある。

・メロン類 (*Cucumis melo L.*) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。完形種子の多くは、藤下（1984）の基準によるマクワ・シロウリ型の中粒種子（長さ6.1-8.0mm）に該当するものが最も多いが、小型の雑草メロン型（長さ6.0mm以下）は微量認められるほか、大粒のモモルディカメロン型（長さ8.1mm以上）も比較的多いことから、複数の品種が混じっている可能性が高い（第44・45図）。

・カボチャ (*Cucurbita*) ウリ科カボチャ属

種子の破片が検出された。灰褐色、完形ならば大きさ1.5cm程度の偏平な倒卵体。基部にあたる切形の大きな臍がわずかに残る。完形なら全周に走る明瞭な縁があるが、検出された個体にも一部が残存し、段差がある。種皮表面は粗面である。

カボチャは栽培種の総称で、日本では16世紀に渡來したニホンカボチャ、19世紀に渡來したセイヨウカボチャ、セイヨウカボチャよりさらに後れて渡來したペポカボチャの3種が現在栽培されている（藤枝1995）。

・エゴマ (*Perilla frutescens (L.) Britt. var. japonica Hara*) シソ科シソ属

果実が検出された。暗灰褐色、倒広卵体、果実基部に大きな着点部があり、舌状に突出する。果皮は厚く柔らかく、厚さは0.1mm程度。表面には浅く大きく不規則な網目模様がある。破片の個体は大きく、推定される大きさが2mm程度であったため、中山はか（2000）の計測値を参考にエゴマとした。

・シソ属-イヌコウジユ属 (*Perilla - Mosla*) シソ科

上述したエゴマに似るが、大きさが1.5mm前後のものをシソ属-イヌコウジユ属とした。ただし、

栽培種のエゴマと、シソを含むシソ属、野生種のイヌコウジュ属の果実は、大きさの変異が連続的であるため、これらの中にエゴマを含んでいる可能性もある。

・ナス (*Solanum melongena* L.) ナス科ナス属

種子が検出された。灰褐色、大きさ3.5mm厚さ1mmの偏平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮はやや厚く、表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・ゴマ (*Sesamum indicum* L.) ゴマ科ゴマ属

種子が検出された。淡褐色、広皮針形で大きさは4mm程度。扁平で、表面はざらつく。片面の表面に縦方向の浅い筋が走る。基部側の約1/3が残存し、あとは欠損する。

#### (4) 考 察

##### 堆積環境

珪藻化石の群集組成が類似するSD03（背割水路）(No.572) 及び井戸（No.571・No.614）より検出された特徴種の生育環境を概説すると、まず、流水不定性種の*Gomphonema parvulum*は、流水、塩分濃度、pHに対しても極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe (1995) は、広域適応種としている。同じく、流水不定性種の*Pinnularia microstauron*は、富栄養化した湿地に認められる場合が多く、Asai and Watanabe (1995)によれば、好汚濁性種とされている。流水不明確種の*Fragilaria* spp., *Pinnularia* spp.は、種は不明であるものの、これらの属は、湿地から沼澤湿地に認められることが多い傾向にある。陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*などは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群である（小杉1986）。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内1989・1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70~80%以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。

以上のことから、井戸埋積時の環境は、地下水位は低く、やや湿った状況であったとみられ、陸生珪藻は当時の地表面などの好気的な場所からの混入が推定される。また、SD03（背割水路）の試料は底面層より採取された土壌であることから、当時の表層土の混入が想定されるほか、普段はやや湿っている程度で水の流れはほとんどなかったと思われる。

次に、上記した3試料と異なる群集組成を示したVI層下層(No.721)で検出された特徴的な種類のうち、前述していない種について述べると、流水不定性種の*Pinnularia gibba*は、好酸性（最適pH6付近）、富栄養から貧栄養種、湧泉・小川等にみられる着生種とされる（中島他1978）。同じく、流水不定性種の*Pinnularia rupestris*は、貧塩-嫌塩性種、好酸性、流水不定性であり、比較的広範に生育するが、湿原、湿地あるいは沼澤地などに生育していることが多い種である。このことから、基本的には湿地であったが、好気的な場所も存在したと考えられる。一方、VI層上層 (No.720) では、陸生珪藻が多く、保存状態も悪いことから、好気的環境にあったと考えられる。

##### 周辺植生

栽培種を除く分類群のうち、確認された木本種実についてみると、常緑針葉樹で高木になるクロマツ、マツ属複雜管束亜属、モミ属、スギ、ヒノキと、落葉広葉樹で高木になるオニグルミ、ハンノキ属、クワ属、アカメガシワ、低木のアブラチャン、サンショウ、タラノキ、クサギ、ニワトコ、タニウツギ属などが検出された。また、木本花粉ではマツ属が多産し、モミ属、スギ属、ハンノキ属、コ

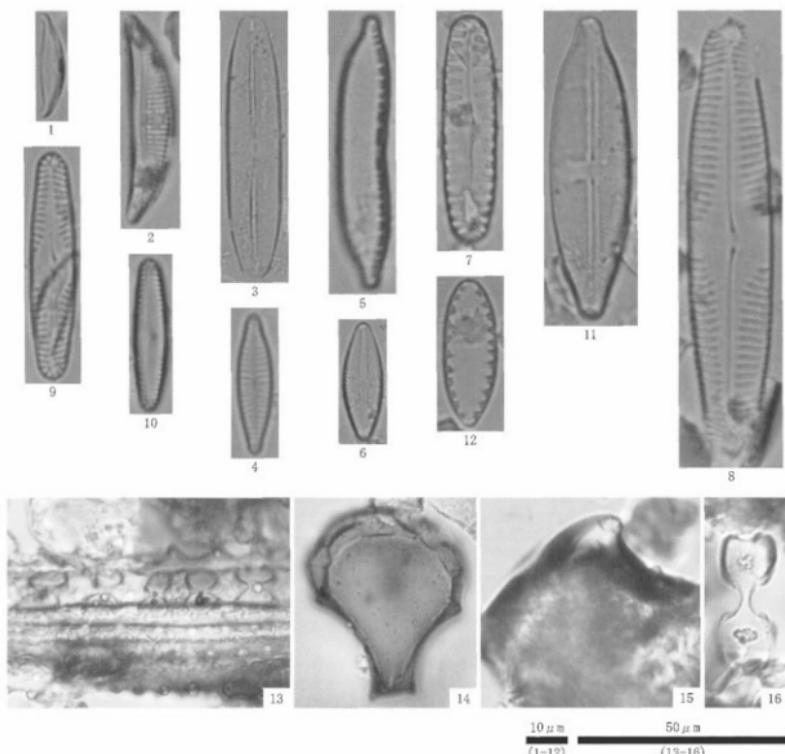
ナラ属コナラ亜属、アカメガシワ属、ノブドウ属などが産出した。これらの生態性をみると、マツ属やタラノキ、アカメガシワなどの成長が早く二次林を構成する種類や、スギやオニグルミ、クマシデ属ーアサダ属、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、エノキ属ームクノキ属、ニレ属ーケヤキ属、トチノキ属、アブラチャンなど傷害に強く河畔林を構成する種類からなる。調査地は富山城下町の武家屋敷および町屋敷の範囲にあたることから、屋敷地周辺に生育した種類や、富山城下町周辺を流下した旧神通川などの河畔や湿地などに生育していた森林植生を反映していると考えられる。なお、スギやマツは花粉や葉などが確認されており、これらは成長が早く、景観が美しいことから、護岸、防風目的で今日でも植栽されることが多い。おそらく、富山城内や城下町などに植栽されていた樹木に由来する可能性がある。

また、草本類では、栽培種を除いた草本種実は、やや乾いた場所や湿った場所にも生育可能なオヒシバ、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、ザクロソウ、スペリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科、カタバミ属、エノキグサ、シソ属ーイスヌコウジ属、イスヌコウジ属や、抽水植物のイヌホタルイ近似種、湿生植物のトウバナ属、タカサブロウなどの種実が検出された。草本花粉では、イネ科の割合が高く、サンエタデ節ーウナギツカミ節、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属など開けた場所を好む種類が認められ、植物珪酸体では湿润な場所を好むヨシ属や開けた場所を好むススキ属も検出された。上述したように、調査地周辺は、城下町として開発が進んでいることから、確認された種類は、調査地周辺にいわゆる雑草として生育していたとみられる。また、背割水路内は、珪藻分析の結果から、流れが小さい蓄水域で埋積が進んでいったことが指摘されたことから、水路内には上記した湿性植物が生育していた可能性がある。

#### 植物利用

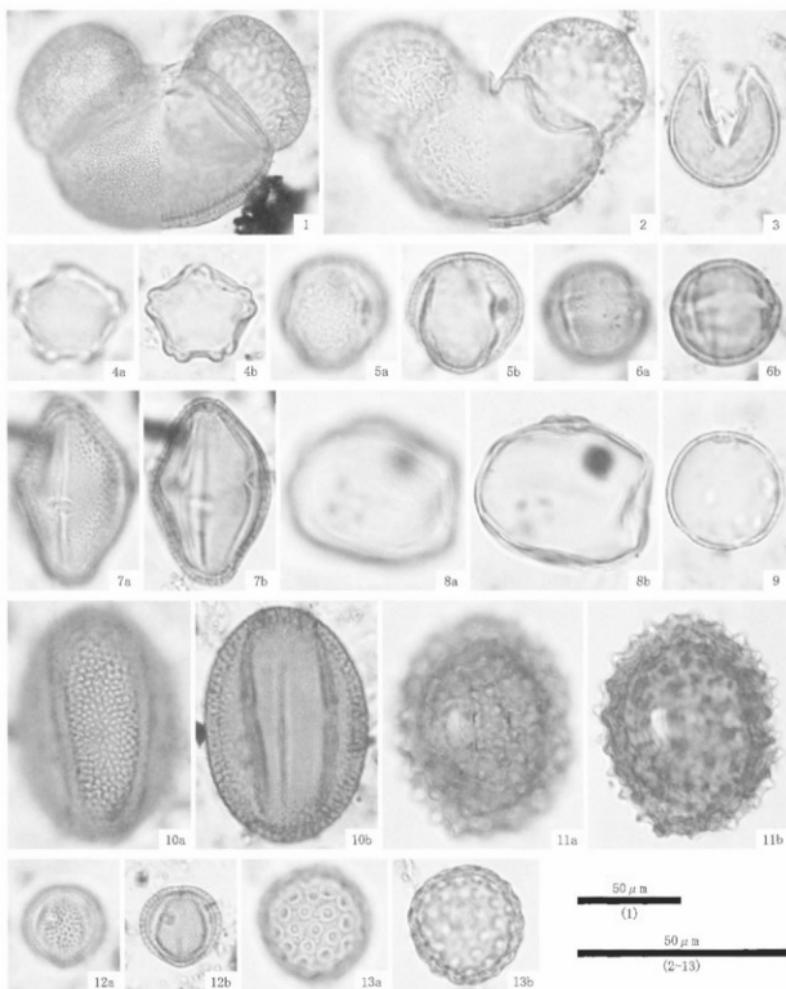
SD03（背割水路）や井戸跡、土坑及び包含層（VI層）からは、イチョウ、ウメ、スモモ、モモ、カキノキ属、イネ、アワ、ソバ、ヒヨウタン類、メロン類、カボチャ、シソ属（エゴマ）、ナス、ゴマの種実が出土した。これらの出土した栽培種は、当時利用された植物質食料と考えられる。なお、SK 26（No.530）より多量出土したメロン類は、出土種実の計測結果によれば、中粒種子のマクワ・シリウリ型が66.6%と最も多く、大粒種子のモモルディカメロン型が33.0%と次ぎ、小粒種子の雑草メロン型は0.4%と少量であった。この結果を参考すると、マクワ・シリウリ型を主体とする複数の系統のメロン類の利用が窺える。

また、花粉分析では、イネ属型、ソバ属、ベニバナ属の花粉が、植物珪酸体分析においてもイネが検出された。この結果から、当該期の城下町周辺でのこれらの栽培の可能性が考えられる。なお、イネについては、上述したように種実（穎、胚乳）としても検出されており、イネは開花後も稲穂（穎）の中に花粉が残留することが知られている。以上の点を踏まえると、検出されたイネ属花粉は稲穂に由来するものも含まれている可能性を考慮する必要がある。



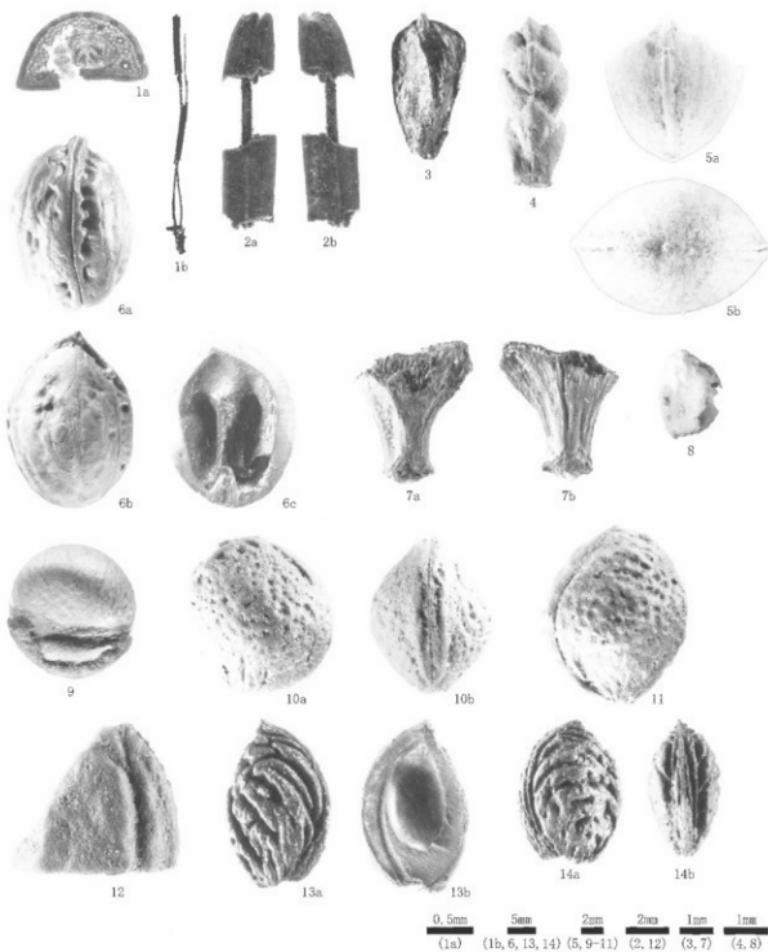
1. *Amphora montana* Krasske (SE03 2層; No.571)
2. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (SD03 B-B' 9層; No.572)
3. *Frustulia vulgaris* (Thwaites) De Toni (SD03 B-B' 9層; No.572)
4. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (SE03 2層; No.571)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SE03 2層; No.571)
6. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann (SE04; No.614)
7. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (SE04; No.614)
8. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (VI層下層; No.721)
9. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve (SE04; No.614)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory (SE03 2層; No.571)
11. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (SD03 B-B' 9層; No.572)
12. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W.Smith) Hustvedt (SE04; No.614)
13. イネ属短細胞列 (VI層下層; No.721)
14. イネ属機動細胞珪酸体 (VI層上層; No.720)
15. イネ属頸短細胞珪酸体 (SE04; No.614)
16. ススキ属短細胞珪酸体 (SE04; No.614)

第46図 珪藻化石・植物珪酸体



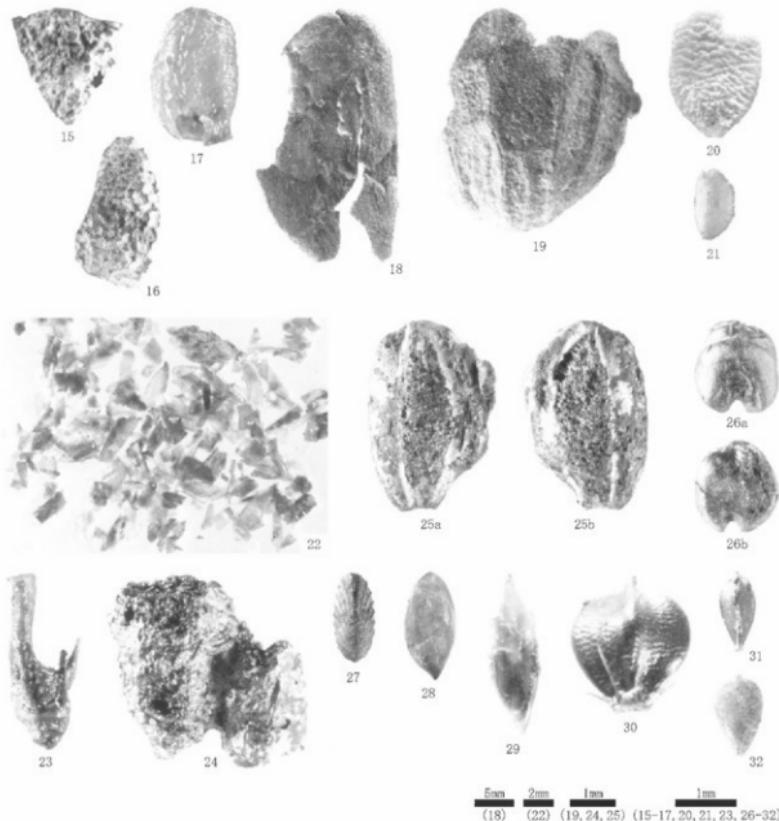
1. モミ属 (SD03 B-B' 9層; No.572)
3. スギ属 (SD03 B-B' 9層; No.572)
5. コナラ属コナラ亜属 (SD03 B-B' 9層; No.572)
7. ノブドウ属 (VI層上層; No.720)
9. イネ科 (SD03 B-B' 9層; No.572)
11. ベニバナ属 (VI層下層; No.721)
13. アカザ科 (VI層上層; No.720)
2. マツ属 (SD03 B-B' 9層; No.572)
4. ハンノキ属 (SD03 B-B' 9層; No.572)
6. アカメガシワ属 (VI層上層; No.720)
8. イネ属 (SD03 B-B' 9層; No.572)
10. ソバ属 (SE04; No.614)
12. アブラナ科 (SD03 B-B' 9層; No.572)

第47図 花粉化石



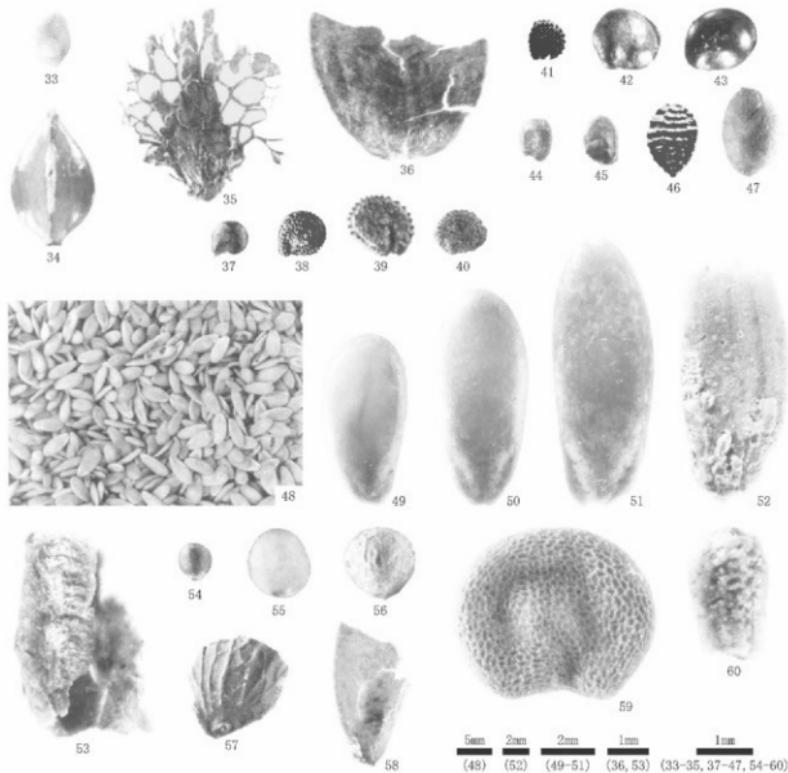
1. クロマツ 短枝・葉 (SE04; No.614)
3. スギ 種子 (SD03 B-B' 9層; No.572)
5. イチヨウ 種子 (SD02-03; No.350-6)
7. ハンノキ属 果鱗 (VI層上層; No.720)
9. アブラチヤン 果実・種子 (SK26; No.530)
11. ウメ 核 (SE04; No.614)
13. モモ 核 (SE04; No.614)
2. モミ属 葉 (SD03 B-B' 9層; No.572)
4. ヒノキ 枝条・葉 (SD03 B-B' 9層; No.572)
6. オニグルミ 核 (SX04; No.796)
8. クワ属 核 (SE04; No.614)
10. ウメ 核 (SD02; No.389-2)
12. スモモ 核 (SD03 B-B' 9層; No.572)
14. モモ 核 (SD03; No.443-2)

第48図 大型植物遺体 (1)



15. アカメガシワ 種子(VI層下層; No.721)  
 17. タラノキ 核(VI層上層; No.720)  
 19. クサギ 桜(背面) (VI層上層; No.720)  
 21. タニウツギ属 種子(VI層上層; No.720)  
 23. イネ 穂(基部) (SD03 B-B' 9層; No.572)  
 25. イネ 穂・胚乳(VI層下層; No.721)  
 27. オヒシバ 種子(VI層上層; No.720)  
 29. イネ科 果実(SD03 B-B' 9層; No.572)  
 31. カヤツリグサ科 果実(VI層上層; No.720)
16. サンショウ 種子(SE04; No.614)  
 18. カキノキ属 種子(SK30; No.695-3)  
 20. ニワトコ 核(SD03 B-B' 9層; No.572)  
 22. イネ 穂(2個接着) (VI層下層; No.721)  
 24. イネ 胚乳(VI層下層; No.721)  
 26. アワ 胚乳(VI層下層; No.721)  
 28. イネ科 果実(SE04; No.614)  
 30. イヌホタルイ近似種 果実(VI層上層; No.720)  
 32. カヤツリグサ科 果実(VI層上層; No.720)

第49図 大型植物遺体 (2)



33. カラムシ属 果実(VI層上層; No.720)  
 35. ギシギシ属 花被(SE04; No.614)  
 37. ザクロソウ 种子(SE03 2層; No.571)  
 39. ハコベ属 种子(SE04; No.614)  
 41. ナデシコ科B 种子(VI層上層; No.720)  
 43. ヒユ属 种子(SE03 2層; No.571)  
 45. アブラナ科A 种子(VI層上層; No.720)  
 47. エノキグサ 种子(VI層上層; No.720)  
 49. 雑草メロン型 种子(SK26; No.530)  
 51. モモルディカメリコン型 种子(SK26; No.530)  
 53. カボチャ属 种子(VI層上層; No.720)  
 55. イヌコウジュ属 果実(VI層上層; No.720)  
 57. シソ属(エゴマ) 果実(SD03 B-B' 9層; No.572)  
 59. ナス 种子(SE04; No.614)
34. ギシギシ属 果実(SE04; No.614)  
 36. ソバ 果実(SD03 B-B' 9層; No.572)  
 38. スペリヒュ 种子(VI層上層; No.720)  
 40. ナデシコ科A 种子(VI層上層; No.720)  
 42. アカザ属 种子(VI層上層; No.720)  
 44. アブラナ科A 种子(SD03 B-B' 9層; No.572)  
 46. カタバミ属 种子(VI層下層; No.721)  
 48. メロン型 种子(SK26; No.530)  
 50. マクワ・シロウリ型 种子(SK26; No.530)  
 52. ヒョウタン型 种子(SD05; No.784)  
 54. トウバナ属 果实(SD03 B-B' 9層; No.572)  
 56. シソ属・イヌコウジュ属 果实(SE04; No.614)  
 58. ゴマ 种子(SD03 B-B' 9層; No.572)  
 60. タカサゴプロウ 果实(VI層下層; No.721)

第50図 大型植物遺体 (3)

## 第3節 木製品について

齊藤紀行・高橋 敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

### (1) 試 料

#### 樹種同定

試料は、背割水路や土坑などから出土した木製品15点である。なお、後述する漆塗膜分析に供された試料には樹種同定対象外とされた木製品が2点含まれていたが、漆塗りと木地との関係を検討する上で重要と判断し、分析対象としている。また、漆器輪（SK09: 第32 図261 [No.698-2]・図版16）は、漆塗膜分析の際に木片の確認を行った際、樹種同定用の木片と樹種が異なることが明らかとなつたため、その結果を併記している。以上の各試料の詳細は、結果とともに第20表に記す。

#### 漆塗膜薄片作製観察・X線回折分析

試料は、漆塗膜の残る漆器及び下駄5点である。なお、下駄（SK30: 第33 図277 [No.679]）と漆器（SK09: 第32 図261 [No.698-2]・図版16）は、樹種同定用の木片にも漆塗膜が確認された。そのため、これらも含めて試料の観察を行い、薄片作製観察およびX線回折分析試料を選択している。各試料の詳細および各種分析対象とした漆塗膜の別を第21表に示す。

### (2) 分析方法

#### 樹種同定

試料はいずれも木片であったため、木取りが判断できるもののみを第20表に記した。木片の観察後、彫刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。採取した切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheelerほか（1998）、Richterほか（2006）

第20表 樹種同定結果

地区	層位	報告書 番号	遺物 番号	遺物 種類	漆塗	漆種	木取り	備考	樹種 (分類群)	備考
A	下駄	315	No.254	包含層	木札	南東側	焼印		スキ	
A	下駄	361	No.314-2	SD03	曲物蓋	背割水路内出土	墨書き		ヒノキ	
A	下駄	322	No.335-5	SD02-02-3区	柾目	削出	背割水路内 15~20cm下		イスノキ	
A	下駄	323	No.347	SD02-03-3区	柾目	削出	背割水路内 15~30cm下		バラ科ナシ属科	
A	下駄	293	No.360-1	SD02-02-3区	木札	背割水路内	30~40cm下 墨書き 加工穴		スキ	
A	下駄	256	No.405-2	SD02	漆器(側)	横木地	背割水路内 北側石積下		ナツツバキ属	
A	下駄	334	No.446	SD03-1区	柾目	削出	背割水路内 40cm~底面 北側石積み		モッコク	
A	下駄	263	No.515	SK14	漆器(側)	横木地	底面		ブナ属	
A	下駄	260	No.633	SD03	漆器(身)	背割水路内	C-C' 接出面~15cm下		エゴノキ属	
A	下駄	360	No.647	SD03	木札	背割水路内	C-C' 15~30cm下 墨書き		クリ	
A	下駄	277	No.679	SK30	下駄		No.16		ブナ属	
A	下駄	278	No.680	SK30	下駄		No.16		ブナ属	
A	下駄	261	No.698-2	SK09	漆器	横木地	北側一括 (高台付側)		ブナ属	
A	下駄	257	No.727	SX03	板				トチノキ	漆塗膜分析用
A	下駄	359	No.794-1	SX04	研				ヒノキ	
A	下駄	279	No.691-1	SK30	下駄		No.17		スキ	
A	下駄	262	No.741-2	SK13	漆器(側)	横木地			サクラ属	漆塗膜分析用
									カエデ属	漆塗膜分析用

を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995～1999）を参考にする。

#### 塗装膜薄片作製観察

塗装膜を木地が残るように切り離し、軽く水分を拭き取る。合成樹脂で塗膜を包埋し、樹脂を固化させる。塗装膜の断面が出るように、ダイヤモンドカッターで樹脂と塗膜を切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡、偏光顕微鏡、落射蛍光顕微鏡などを用いて、塗膜の状態や混和物などを観察する。X線回折分析

試料を無反射試料板に固定し、以下に示す条件で測定を実施した。なお、検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. の X 線回折パターン処理プログラム JADE を用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装置：Ultima IV Protectus（リガク） Divergency Slit : 1°

Target : Cu (K $\alpha$ ) Scattering Slit : 1°

Monochromator : Graphite 湾曲	Receiving Slit : 0.3 mm
-----------------------------	-------------------------

Voltage : 40 kV	Scanning Speed : 2°/min
-----------------	-------------------------

Current : 40 mA	Scanning Mode : 連続法
-----------------	---------------------

Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
---------------	------------------------

Calculation Mode : cps	Scanning Range : 3～45°
------------------------	------------------------

### (3) 結 果

#### 樹種同定

同定結果を第20表に示す。分析対象とした木製品18点は、針葉樹2分類群（スギ、ヒノキ）と広葉樹10分類群（ブナ属、クリ、ナツツバキ属、モッコク、イスノキ、サクラ属、バラ科ナシ亞科、カエデ属、トチノキ、エゴノキ属）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

##### ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

##### ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

##### ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

##### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

##### ・ナツツバキ属 (*Stewartia*) ツバキ科

散孔材で、道管は横断面では楕円形、ほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管

第21表 分析試料一覧（漆塗膜・顔料分析）

地区	層位	報告書番号	造物番号	遺構番号	器種	試料種別	備考	仮名称 (漆の色等)		分析項目*	
										薄片	X回
A	下層	263	No.515	SK14	漆器(椀)	塗膜・顔料	底面、馬・赤漆あり	黒漆	a	●	-
								赤漆	b	●	●
A	下層	277	No.679	SK30	下駄	塗膜・顔料	Na15、赤漆あり	黒漆	a	●	-
								黒漆	b	-	-
A	下層	279	No.681-1	SK30	下駄	塗膜・顔料	Na17、黒・赤漆あり	赤漆	c	●	●
								黒漆	a	-	-
A	下層	261	No.698-2	SK09	漆器(高台付椀)	塗膜・顔料	北側、黒漆あり	黒漆	b	●	-
								黒漆	b	-	-
A	下層	262	No.741-2	SK13	漆器(椀)	塗膜・顔料	西側、黒・赤漆あり	赤漆	c	●	●
								黒漆	d	-	-
A	下層	262	No.741-2	SK13	漆器(椀)	塗膜・顔料	西側、黒・赤漆あり	黒漆+赤漆	a	●	-
								黒漆+赤漆	b	●	-

\*「薄片」：塗膜薄片観察、「X回」：X線回折分析、●：分析対象。

は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高で、時に上下に連結する。

・モッコク (*Ternstroemia gymnanthera* (Wright et Arn.) Bedd.) ツバキ科モッコク属

散孔材で、道管は横断面では多角形、単独または2-3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-100細胞高。

・イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は、独立帶状または短接線状で、放射方向にはほぼ等間隔に配列する。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・バラ科ナシ亜科 (Rosaceae subfam. Maloideae)

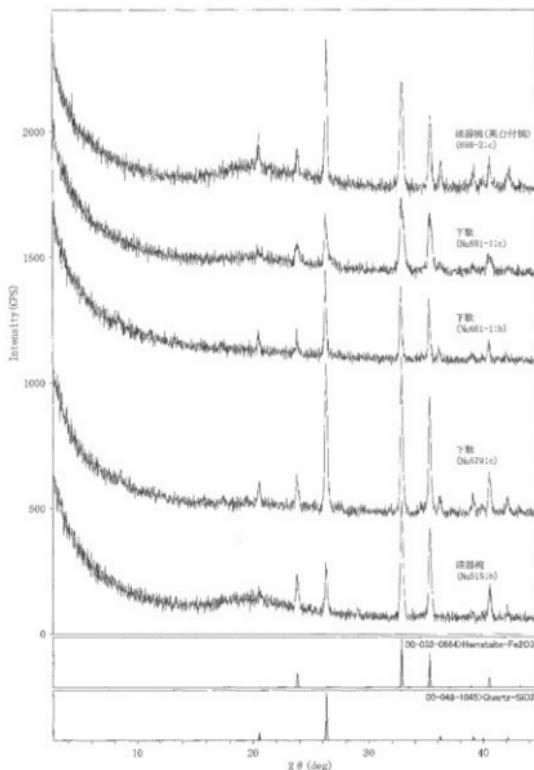
散孔材で、道管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2-5個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。



第51図 赤漆片のX線回折図

められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高で層階状に配列する。

・エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。漆塗膜薄片作製観察

1) SK 14 漆器椀 (第32図 263 [Na515])

漆器椀は、黒漆の面 (a) と赤漆の面 (b) の2面が認められる。黒漆の面 (a) は、下地に炭粉が認められる。下地は、木地の凹凸を埋めるように認められ、厚さは80~170 μmを測る。下地の上には、混和物の無い漆層が1層 (60~70 μm) 塗布される。赤漆の面 (b) は、同じく炭粉を用いた下地が認められるが、黒漆の面より薄く厚さは10~90 μm程度である。下地層の上には、赤色顔料を混和した漆層が1層 (厚さ約50 μm) 塗布される。

## 2) SK30 下駄 (第33図277 [No.679])

下駄は、塗膜分析用と樹種同定用とがあり、塗膜分析用の木片には黒漆 (a・b) が認められ、樹種同定用の木片には赤漆とみられる赤色部 (c) が認められる。黒漆の面 (a) は、下地が認められず、木地の上に黒色の塗布層が10 µm以下の厚さで直接塗布される。肉眼では表面に光沢が確認できることから、何らかの黒色物質を混ぜた黒漆と考えられるが、混和物の特定には至らない。一方、赤漆の面 (c) は、木地の凹凸を埋めるように下地層 (130~200 µm) が認められるが、下地の種類は不明である。その上に、10 µm以下で黒色の薄い塗布層が認められ、最上部に赤色顔料を混和した漆層 (20~30 µm) が認められる。

## 3) SK30 下駄 (第33図279 [No.681-1]・図版16)

下駄は、木片の形状から側面の端部と推定される。漆塗りは、3面認められ、黒漆が1面 (a)、赤漆が2面 (b・c) からなる。なお、黒漆の面 (a) は、保存状態が悪く、光沢も認められないことから塗層が剥落している可能性があるため、比較的状態の良い赤漆を観察対象としている。赤漆の面 (b) は、木地の上に下地と考えられる黒色の層 (30~40 µm) が認められる。微細な黒色粒子が認められるが、粒子の由来は不明である。その上に、赤色顔料を含む漆層 (10 µm以下) が1層認められる。もう一方の赤漆の面 (c) では、赤漆 (b) と同様に木地の上に黒色の層 (30~40 µm) が認められ、その上に赤色顔料を混和した漆層 (約100 µm) が認められる。

## 4) SK09 漆器椀 (高台付椀) (第32図261 [No.698-2]・図版16)

試料は、塗膜分析用と樹種同定用とがあり、塗膜分析用の木片で黒漆が2面 (a・b) 認められる。一方の樹種同定用の木片 (混入物と考えられる) は黒漆の面 (d) と赤漆の面 (c) が認められる。黒漆の面 (a) は、下地とみられる微細な粒子を含む黒色の塗布層 (180~240 µm) が認められ、その上に混和物の無い漆層 (10 µm以下) が1層認められる。赤漆の面 (c) は、下地と考えられる黒色の塗布層 (90~120 µm) が認められ、漆の一部は木地の奥まで浸透する。この下地の上には、赤色顔料を混和した漆層 (約40 µm) が認められる。

## 5) SK13 漆器椀 (第32図262 [741-2]・図版16)

漆器椀は、黒漆と赤漆からなる面が2面 (a,b) 認められる。なお、黒漆部分の保存状態が悪く、赤漆が模様であるかあるいは黒漆の上に塗布された赤漆であるかの判別には至らない。黒漆+赤漆 (a) では、下地と考えられる黒色の層 (60~70 µm) が認められ、その上に赤色顔料を含む漆層 (約10 µm) が認められる。黒漆+赤漆 (b) も状況は類似しており、木地の上に黒色の層 (100~120 µm) が認められ、その上に赤色顔料を含む漆層 (10~20 µm) が認められる。黒色の層には、微細な黒色の粒子が認められるが、粒子の由来は不明である。

## X線回折分析

X線回折図を第51図に示す。なお、図中上段に試料のX線回折図、下段に検出された鉱物の参照パターンを掲げている。

いずれの試料についても顔料鉱物である赤鉄鉱 (hematite) が検出されたほか、石英 (quartz) に基づく反射が認められた。

## (4) 考 察

今回の分析に供された木製品は、伊東・山田 (2012) の木器分類を参考とすると、容器 (曲物蓋、漆器椀)、服飾具 (下駄、櫛、傘)、遊戯具・日用品 (木札)、施設材・器具材 (板) などに分類される。これらの木製品には、針葉樹のスギ、ヒノキと、広葉樹のブナ属、クリ、ナツツバキ属、モッコク、

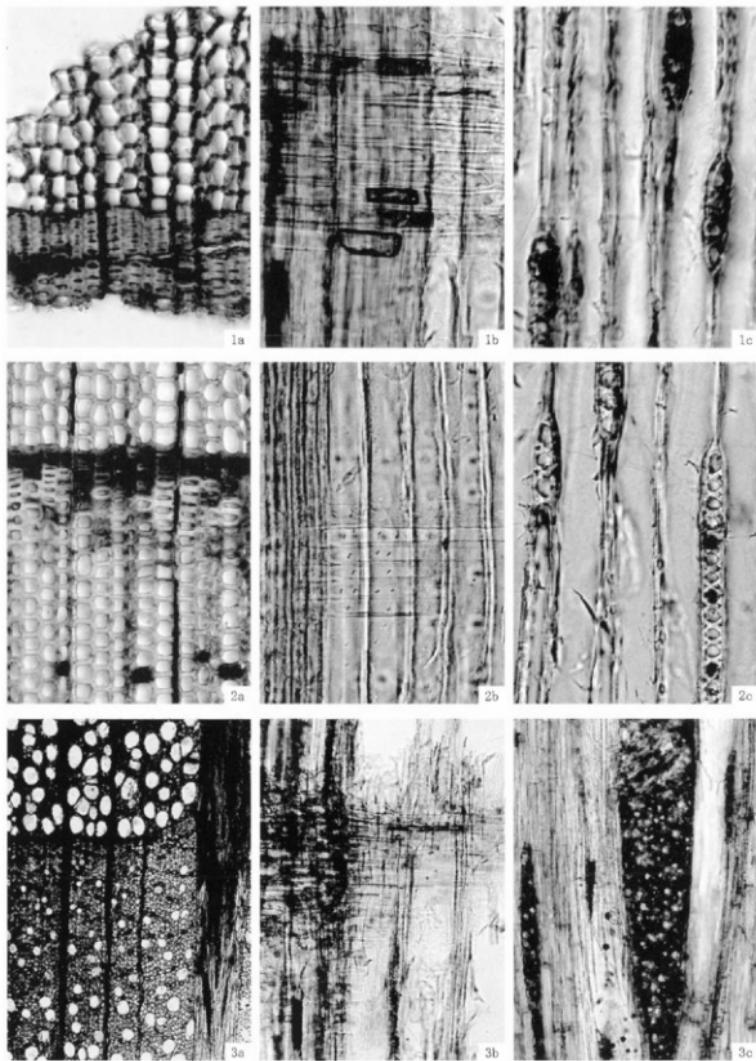
イスノキ、サクラ属、バラ科ナシ亞科、カエデ属、トチノキ、エゴノキ属が確認された。

包丁の柄（第38図359 [No.794-1]・図版19）には、スギが確認された。この結果から、強度よりも加工性を考慮した木材利用が推定される。容器は、板物となる曲物蓋と挽物の漆器碗がある。曲物蓋（第34図301 [No.314-2]・図版17）にはヒノキが認められたことから、加工性や耐水性を考慮した木材利用が考えられる。一方、漆器碗はいずれも横木地であり、ナツツバキ属（第32図256 [No.405-2]・図版16）、ブナ属（第32図261 [No.698-2]・図版16、第32図263 [No.515]:樹種同定用）、カエデ属（第32図262 [No.741-2]・図版16）、トチノキ [No.698-2 (混入物)]：漆塗膜分析用）などが認められた。この結果から、樹種が多様であり、材質も重硬な種類から軽軟な種類からなるという特徴が指摘できる。なお、漆塗膜の観察を行った試料についてみると、いずれも下地の上に漆を1層塗っただけの簡単な作りであり、赤漆については赤鉄鉱が検出されたことからベンガラを顔料として利用したことが明らかとなった。

服飾具の下駄は、いずれも漆塗りの資料である。樹種は、ブナ属（第33図277 [No.679]・第33図278 [No.680]）とサクラ属（第33図279 [No.681-1]・図版16）が認められたことから、比較的強度の高い広葉樹の利用が指摘できる。また、漆塗膜の観察では、黒色部分が木地の上に直接1層塗られるのみであるのに対し、赤色部分では下地と考えられる層が認められる（SK30：第33図277 [No.679]）、黒漆の上に赤漆を塗る（SK30：第33図279 [No.681-1]・図版16）などの黒色部分とは異なる特徴が確認された。これらの状況から、下駄の側面や足を乗せる台（表）などの部位の耐久性、摩耗度等に応じて漆塗りが異なっていた可能性がある。

櫛は、イスノキ（第36図322 [No.335-5]・図版18）、ナシ亞科（第36図323 [No.347]・図版18）、モッコク（第36図334 [No.446]・図版19）が認められ、比較的硬く緻密な木材の利用が窺える。イスノキやモッコクは本地域には分布せず、主に西日本に分布することから、西日本で作られた製品の搬入などが推定される。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、イスノキやナシ亞科は、これまでにも富山県内の中世～近世の資料に確認された事例がある一方、モッコクは富山県内での出土事例は確認されていない。傘（第32図260 [No.633]・図版16）はエゴノキ属であり、緻密な木材が利用される。橋本（1979）によれば、轆轤で作る傘の柄にエゴノキ属が利用されるという民俗事例が紹介されており、この事例と調和する結果と言える。なお、富山県内における傘の出土事例では、梅原胡摩堂遺跡（南砺市）で近世の資料にモクレン属が確認された例があるが、エゴノキ属の確認例は知られていない。エゴノキ属の確認例についてみると、千駄ヶ谷五丁目遺跡（東京都渋谷区）、紀尾井町遺跡（東京都千代田区）などの江戸遺跡、宮沢中村遺跡（山梨県南アルプス市）、宮下遺跡（静岡県静岡市）などから出土した近世の資料を中心に17例が確認できる（伊東・山田2012）。

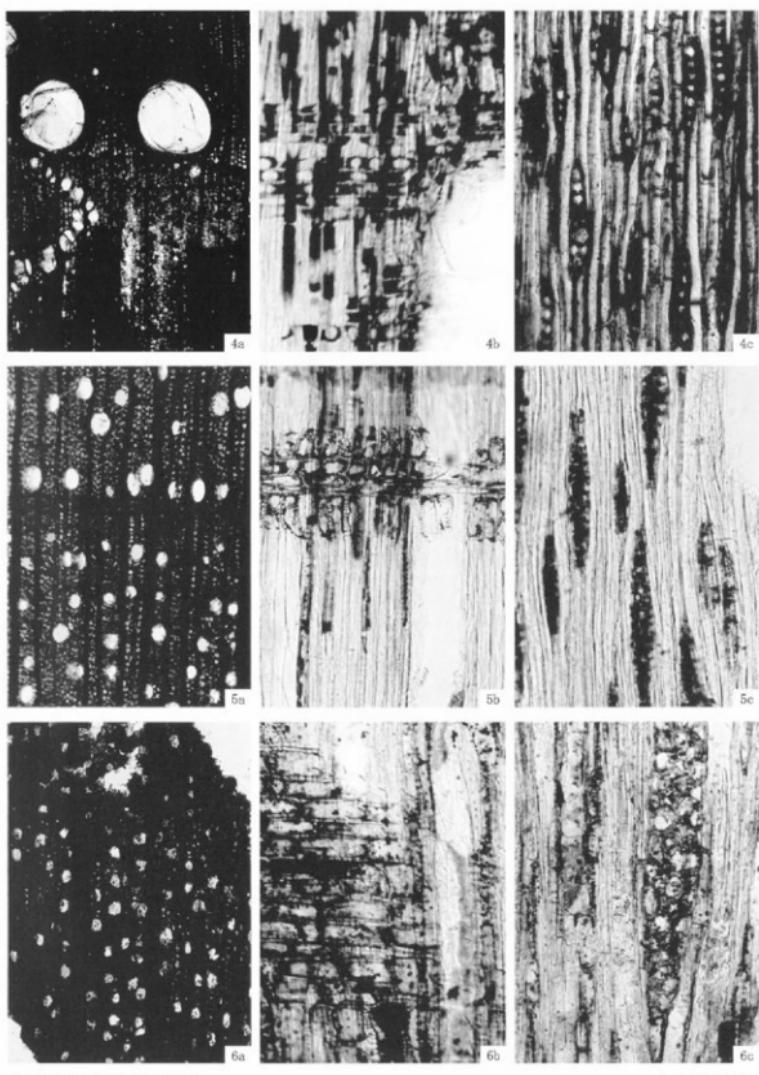
木札は、3点のうち2点がスギ（第34図293 [No.360-1]・図版17、第35図318 [No.254]・図版18）、残る1点（第34図300 [No.647]・図版17）がクリであった。木材の材質などから、加工性が高い木材や強度が高く腐りにくい木材の利用が考えられる。板（第38図357 [No.727]・図版19）にはヒノキが認められた。用途などの詳細は不明であるが、確認された樹種より曲物蓋と同様に加工性の高い木材の利用が推定される。



1. シギ(SX04:359 [No.794-1] )
  2. ヒノキ科(SD03:301 [No.314-2] )
  3. ブナ属(SK30:277 [No.679] )
- a:木口, b:柾目, c:板目

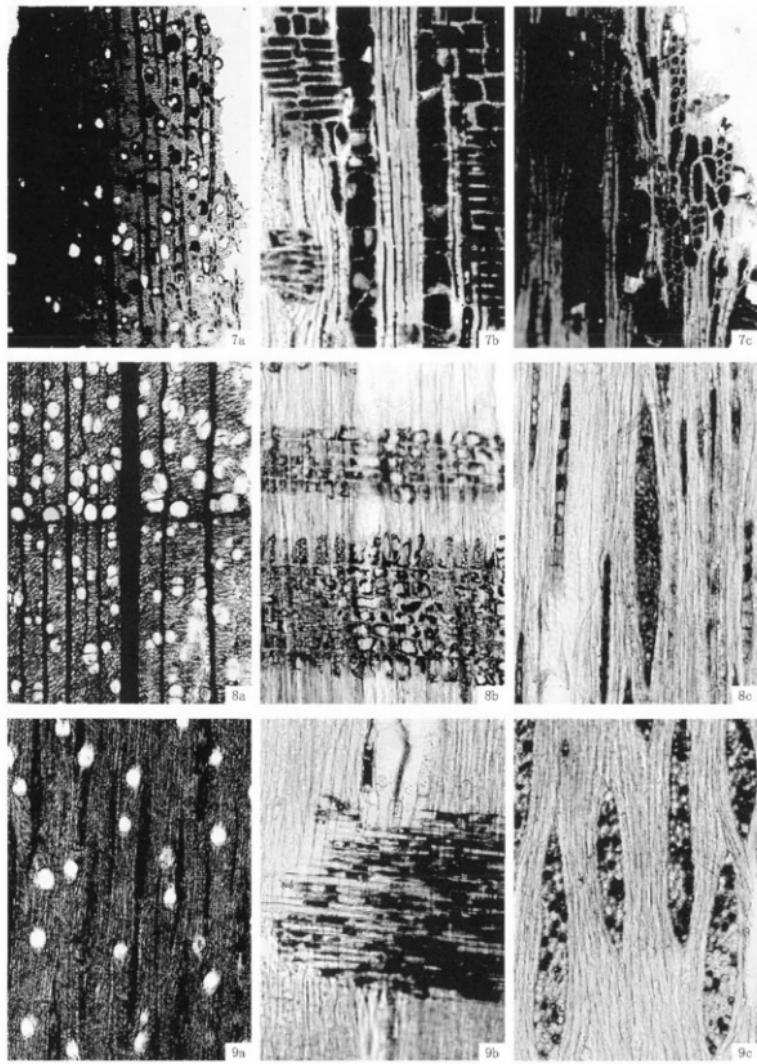
— 100  $\mu$ m:3a  
— 100  $\mu$ m:1-2a, 3b, c  
— 100  $\mu$ m:1-2b, c

第52図 木材 (1)



4. クリ(SD03;300 [No.647])  
5. ナツツバキ属(SD02;256 [No.405-2])  
6. モッコク(SD03;334 [No.446])  
a:木口, b:径目, c:板目

第53図 木材 (2)



7. イスノキ (SD02-03;322 [No.335-5] )

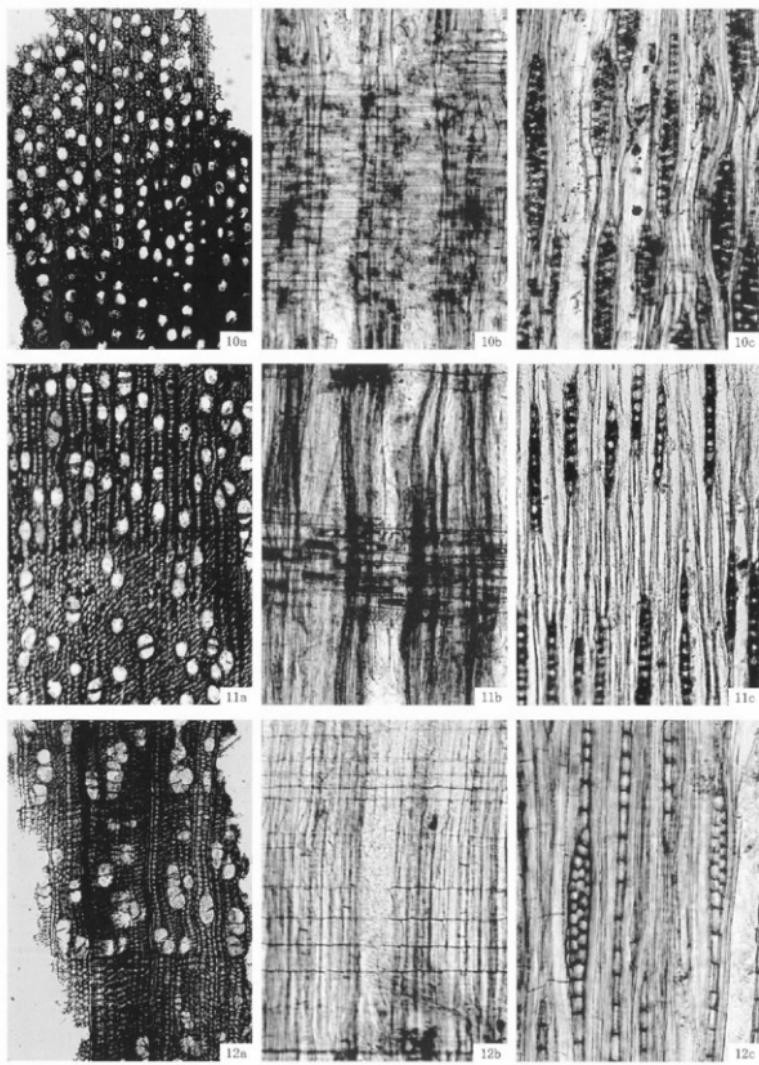
8. サクラ属 (SK30;279 [No.681-1] )

9. カエデ属 (SK13;262 [No.741-2] )

a:木口, b:柾目, c:板目

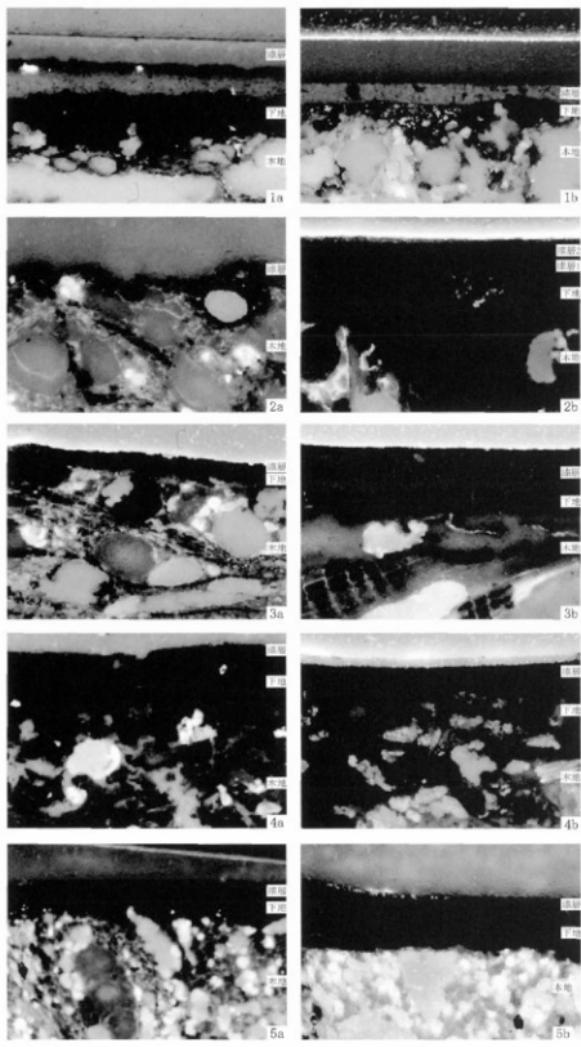
— 100 μm:a  
— 100 μm:b, c

第54図 木材 (3)



10. パラ科ナシ亜科 (SD02-03;323 [Na347])  
11. トチノキ (SK09;261 [Na698-2])  
12. エゴノキ属 (SD03;260 [Na633])  
a:木口, b:極目, c:板目

第55図 木材 (4)



1. 漆器椀 (SK14;263 [No.515] ) a:a黒漆, b:b赤漆  
 2. 下駄 (SK30;277 [No.679] ) a:a黒漆, b:c赤漆  
 3. 下駄 (SK30;279 [No.681-1] ) a:b赤漆, b:c赤漆  
 4. 漆器椀 (高台付椀) (SK09;261 [No.698-2] ) a:a黒漆, b:c赤漆  
 5. 漆器椀 (SK13;262 [No.741-2] ) a:a黒漆+赤漆, b:b黒漆+赤漆

第56図 漆塗膜

## 第4節 動物遺存体分析について

納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター）

### (1) 試 料

資料は主に上層・下層の背割水路（SD01～03）や井戸を中心とする遺構から水づかり状態で出土した。ほとんどが下層面からの出土である。資料の帰属時期は、共伴した陶磁器等から上層遺構出土のものは19世紀後半以降、下層遺構出土のものは18世紀後半から19世紀中頃が中心である。

すべて調査時に目視により取り上げたもので、フルイを用いた遺物の取上げは行っていない。資料の保存状態は、概ね良好である。分析は、筆者所有の標本との比較を基本とし、奥谷編（2000）、上野・山崎（2008）、松井（2008）、安部編（2009）なども参考にした。

資料数は、総点数で101点を数え（第22～24表）、このうち綱よりも下位の分類群を同定できたものは84点である。同定できた資料は、イワガキを含むカキ類が37点と最も多く、イヌが11点、キジ科が8点、コタマガイまたはオキアサリ、及びシジミ類が各7点と続く。

以下、出土した資料の詳細を述べる。

### (2) 分類群ごとの記載

#### ①貝類

##### 腹足綱

アワビ類（Nordotis sp.）：SK33から殻が2点出土した。どちらも比較的大型の個体に由来すると考えられるが、殻の残存状態が悪く、形状からの詳細な種の同定や個体数の算出はできない。

エゾバイ科（Buccinidae gen. et sp. indet.）：いわゆるバイ類である。殻が、SD01から2点、SD03から1点、包含層から1点の計4点出土した。

##### 斧足綱

イタヤガイ（Pecten albicans）：SX07から右殻が1点出土した。殻の後部を2カ所穿孔しており、貝杓子（第29図224）として用いたと考えられる。

イタボガキ科（Ostreidae）：いわゆるカキ類である。イワガキ（Crassostrea nippona）が、SD02・03及びSX07を中心に左殻8点、右殻5点の計13点が出土したほか、右殻と思われるものが搅乱内から1点出土しており、総計14点ある。

また、遺存状態が悪く、種を同定できなかったものが、SD02・03を中心に、左殻2点、右殻10点、左右不明の殻11点の計23点出土している。

シジミ属（Corbiculidae sp.）：SD02・03から右殻が1点、SX07から左殻が1点出土したほか、包含層から右殻3点、左右不明の殻2点の計5点が出土している。周辺環境から、マシジミまたはヤマトシジミと考えられるが、出土資料からいざれかを判断することは難しい。

オキアサリまたはコタマガイ（Gomphina aequalatera or Gomphina melanaegis）：SD02から左殻1点、右殻2点、左右不明の殻2点の計5点、SD03から左殻1点が出土したほか、包含層から左殻1点が出土しており、総計7点ある。すべてオキアサリまたはコタマガイと考えられるが、殻の全形が分かるものがいたため、詳細な同定は避けた。

ハマグリ属（Meretrix）：搅乱内からチョウセンハマグリ（Meretrix lamarchii）が1点出土したほか、属以下の分類群を同定できない左右不明の殻が1点出土している。チョウセンハマグリは殻高70mmを

超える大型のものである。

### ②軟骨魚類

板鰓亜綱 (Elasmobranchii ord.fam.gen. et sp. indet.) : SD02から椎骨が1点出土した。椎体径34.3mmを計る大型のもので、サメ類と考えられる。

### ③硬骨魚類

タラ科 (Gadidae gen. sp. indet.) : SD03から椎骨が1点出土した。

ブリ属? (Seriola sp.?) : SD03から椎骨が1点出土した。ブリ属の可能性があるが、椎体表面の状態がやや異なり、全体の形状が不明確であることから、断定することは避けた。椎体径26.6mmを計り、ブリ属であるとするならば、体長1.6mを超える大型の個体に由来すると考えられる。

タイ科 (Sparidae) : タイ科魚類のうち、種まで同定できたものにはマダイ (Pagrus major) がある。マダイは、SK25から頭蓋骨が1点出土した。中央部を右側面から冠状方向に切断されており、背割りをされたものと考えられる。

この他に、マダイ亜科 (Pagriinae gen. et sp. indet.) まで同定できるが、属よりも下位の分類群を同定することができない前鰓蓋骨、主鰓蓋骨が計3点、タイ科以下を同定することができない椎骨が1点出土した。これらのうちマダイ亜科主鰓蓋骨、タイ科椎骨には刃物により切断された痕跡が見られる。

マグロ属 (Thunnus sp.) : SD02・03から椎骨が1点出土した。椎体径38.25mmを計り、相川他の体長推定式 (相川他1938) を基に、クロマグロ、キハダ、ビンナガの場合を想定して体長を検討したところ、体長2.5m~3m前後と推定された。

ヒラメ科 (Paralichthyidae gen. et sp. indet.) : SD03から、外翼状骨が1点出土した。

### ④鳥類

キジ科 (Phasianidae) : SD01から尺骨、大腿骨が各1点、SD02・03から上腕骨、足根中足骨が各1点出土した。このうち、SD02・03から出土した上腕骨、足根中足骨については、江田・井上 (2011) に基づき種レベルでの同定を試みたところ、ニワトリの可能性が高いと判断された。また、足根中足骨は蹴爪が見られないことからメスの可能性が高い。

### ⑤哺乳類

イヌ (Canis familiaris) : SD02から、下顎骨、椎骨、肋骨、脛骨、大腿骨が計11点出土している。同一地点からまとめて出土し、関節部が良くフィットすることから同一個体に由来すると考えられる。出土した大腿骨、脛骨の最大長から、西中川他の体長推定式 (西中川2008) を基に体高を検討したところ、いずれも体高50cm前後の個体に由来すると推定できる。現在の犬種と比較すると四国犬や紀州犬程度の大きさに相当する。

また、種類を同定することができなかったものの、イヌの可能性が考えられるものが、包含層から1点、SD02・03から下顎骨、四肢骨など計5点出土した。特にSD02・03から出土した下顎骨、脛骨、尺骨は、小型で骨端部も癒合していないことから幼獣のものと考えられる。

## (3) 考 察

今回、同定した資料は89点にのぼる。同定した資料の多くは、カキ類を中心とする貝類であり、それ以外のものも、イヌを除き主に食用として利用されるものが大半を占める。また、それらの多くは背割水路や井戸から出土している。そのため出土した資料の多くは、食料資源として利用された後、背割水路や廃絶した井戸の中に廃棄されたものと考えられる。

魚貝類は、貝類ではイワガキを含むカキ類が37点と最も多く、コタマガイまたはオキアサリと考えられるものやシジミ類、バイ類なども少量出土した。魚類では、マダイを含むマダイ亜科が4点あるほか、サメ類やタラ科、マグロ属なども出土している。これら出土した魚貝類は、遺跡周辺の河川や近傍の海域である富山湾で獲得可能なものばかりである。

また、マダイの頭蓋骨にはいわゆる兜割りに伴うと考えられる切断痕が見られた。このことは、近世期の本地点周辺において、兜煮や鍋などマダイの頭を用いた料理に用いられたことを示す。

鳥類・哺乳類は、キジ科とイヌが出土した。特にキジ科は、そのうち2点がニワトリの可能性が高いと判断した。そのため、ニワトリやイヌといった家畜の利用が行われていたと考えられる。また、ニワトリはメスの可能性が高く、肉用としてだけでなく、採卵用として利用されていた可能性も考慮する必要があるだろう。

これらのことから、近世期の本地点周辺の動物利用は、魚貝類については遺跡近傍で獲得可能なものを利用していたことがわかる。また、ニワトリやイヌなどの家畜の利用も行われていた。これら出土した種のうち、特にマダイは兜煮や鍋などの形で賞味されたものがあったほか、ニワトリについては肉用以外に採卵用として利用された可能性も考える必要がある。

今回の分析結果を、これまでの近世富山城下町遺跡の分析結果（納屋内2010・2012、西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）と比較すると、貝類では遺跡近傍から獲得可能な種を主とし、カキ類が目立って出土するという点でこれまでの分析結果と共通する。また、魚類は、出土量は少ないので、タラ科、タイ科、マグロ属などこれまでの城下町遺跡の調査で出土しているものばかりである。このことから、特に本地点周辺における魚貝類利用は、大局的にはこれまでの城下町調査と同様の傾向があるといえるだろう。

#### (4) 小 結

今回の分析により、カキ類を中心とする貝類やタラ科やタイ科などの魚類、ニワトリ、イヌといった鳥獣類を同定することができたほか、資料に見られた痕跡などから、その利用法の一端を垣間見ることができた。

今回分析した資料数は少ないが、これまでの富山城下町から出土した動物遺存体の報告例は少なく、富山城下町遺跡における動物利用を考えていく上で重要な資料となる。今後、資料数の増加を待って比較検討を進めると共に、文献資料等との対比を行うことによって、本資料の位置づけをより明確にできると考えられる。

第22表 上層面出土動物遺存体集計表

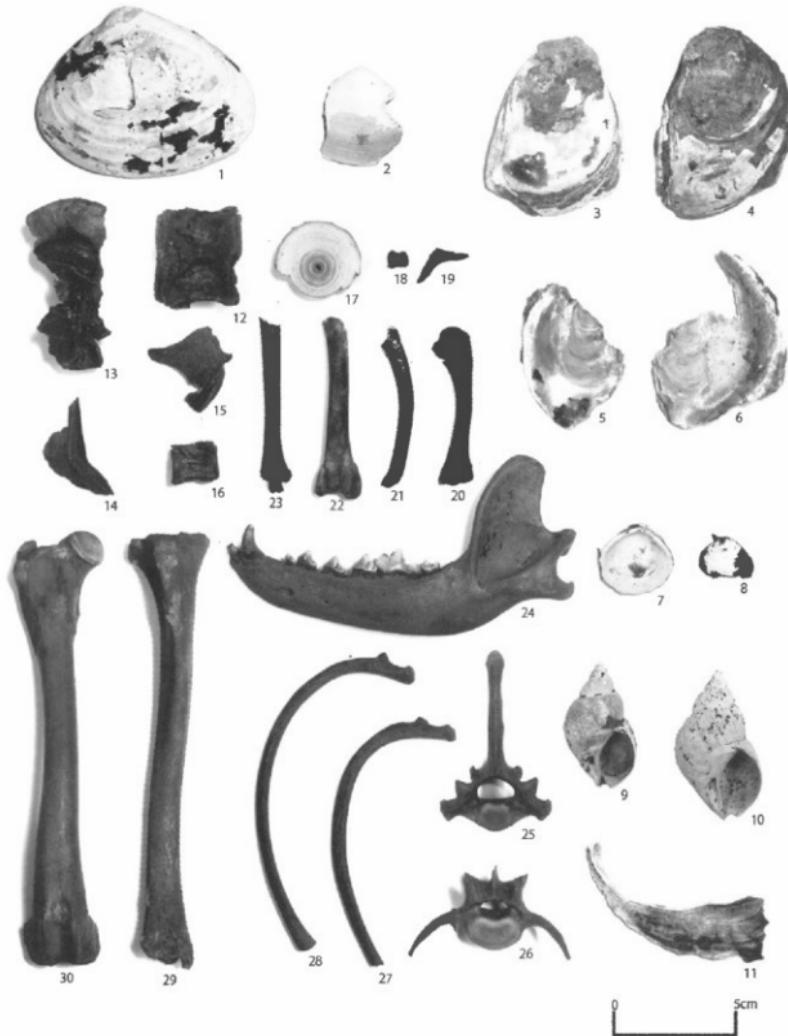
種別	種名	部位	左右	SD01	包含層	総計
貝類	エゾバイ科 エゾバイ科	殻	-	2	1	3
	イワガキ	殻	R	1		1
	コタマガイ オキアサリ	殻	L		1	1
鳥類	キジ科 大鷦鷯	尺骨 大鷦鷯	L	1		1
	計			5	2	7

第24表 掘乱出土動物遺存体集計表

種別	種名	部位	左右	巣計
貝類	イワガキ	殻	R?	1
	チョウセンハマグリ	殻	L	1
	ハマグリ貝	殻	不明	1
	計			3

第23表 下層面出土動物遺存体集計表

種別	種名	部位	左右	SD01	SD02-03	SD03	SK25	SK29	SK29	SK33	SK36	SK07	包含層	総計
貝類	アワビ類	殻	-							2				2
	エゾバイ科	殻	-			1								1
	不明深足類	殻	-		1									1
	不明深足類	殻	-			1							2	3
	イタヤガイ	殻	R									1		1
	カキ類	殻	L	2									2	
		殻	R	8					1		1		10	
		不明		9	1							1		11
	イワガキ	殻	L	5						3			8	
		殻	R		1					2	1		4	
	シジミ属	殻	L			1				1			1	
		殻	R								3	4		7
		不明									2	2		
	コタマガイ/ オキアサリ	殻	L	1		1							2	
		殻	R	2									2	
	不明深足類	殻	不明	2									2	
軟骨魚類	板鰓類	椎骨	-	1									1	
	タラ科	椎骨	胸椎	-				1					1	
	ブリ属?	椎骨	尾椎	-		1							1	
	マダイ	頭蓋骨	-				1						1	
	マダイ亜科	前鰓蓋骨	R								1	1		1
	マダイ亜科	主鰓蓋骨	L					1				1		1
		主鰓蓋骨	R	1									1	
	タイ科	椎骨	尾椎	-			1						1	
	マグロ属	椎骨	尾椎	-		1							1	
	ヒラメ科	外翼状骨	R			1							1	
	不明	椎骨	-	1									1	
鳥類	ニワトリ	上腕骨	R		1								1	
	アヒル中足骨	R		1									1	
	不明	複合肱骨	-	1		1							1	
	イヌ	下顎骨	L	1									1	
		椎骨	胸椎	-	1								1	
		椎骨	腰椎	-	3								3	
		肋骨	L	1									1	
		肋骨	R	2									2	
		大腸骨	R	1									1	
		脛骨	L	1									1	
		脛骨	R	1									1	
	イヌ?	下顎骨	R		1								1	
		上顎C	R?								1	1		
		C	不明		1								1	
		尺骨	R		1								1	
		脛骨	L		1								1	
		中足骨	不明		1								1	
	固定不可		不明		3								3	
	計			18	40	8	1	1	1	2	1	7	12	91



1: チョウセンハマグリ左殻, 2: コタマガイ or オキアサリ左殻, 3~4: イワガキ右殻, 5~6: イワガキ左殻, 7: シジミ左殻, 8: シジミ類右殻, 9~10: バイ類殻, 11: アワビ類殻, 12: マグロ類椎骨(尾椎), 13: マダイ頭蓋骨, 14: マダイ亜科前鰓蓋骨R, 15: マダイ亜科主鰓蓋骨R, 16: タイ科椎骨(尾椎), 17: 板鰓類椎骨, 18: タラ科椎骨(腹椎), 19: ヒラメ科外翼状骨R, 20: ニワトリ上脳骨R, 21: キジ科尺骨L, 22: キジ科大脳骨L, 23: ニワトリ足根中足骨R, 24: イヌ下頸骨L, 25: イヌ椎骨(胸椎), 26: イヌ椎骨(腰椎), 27~28: イヌ肋骨R, 29: イヌ脛骨R, 30: イヌ大脳骨R

第57図 出土動物遺存体

## 第5章 総 括

### 第1節 町屋構成遺構の構造と性格

#### (1) 町屋を構成する遺構

本調査区は、富山市一番町に位置する。富山城下「一番町」又は「壱番町」(以下、「一番町」とする)は、万治年間(1658~1661年頃)「富山旧市街図」、寛文六(1666)年「御調理富山絵図」、天保年間(1830~1844年)「御城内外御焼失御絵図」、安政元(1854)年「越中富山御城下絵図」(巻頭図版4・富山県立図書館蔵)によれば、富山城三の丸南側の外堀に沿い、東西方向に延びる北陸街道の北側に面した、東西方向に細長い区画である。

本調査区で確認した富山城下町の町屋を構成する遺構は、背割水路、井戸、上水施設、ごみ穴、小鍛冶遺構などがある。武家地と町人地を分ける背割水路の遺存状態が良く、江戸時代後期の下水施設の構造を知るうえで、貴重な資料となった。武家屋敷地側は調査面積が少なく、主だった遺構は見られなかった。

#### (2) 背割水路

背割水路は、背合わせに建てられた屋敷と屋敷の境界に造られ、「境堀」としての機能を有する。検出した背割水路は、基本的には生活排水を流すための下水溝と考えられる。本調査区では、背割水路が同一場所において、改修及び再構築された状況が明瞭に確認でき、大別して次のとおり、三段階の時期変遷があったことが判断できた。ほぼ同じ位置で、層を越えて構築している。

①~19世紀中頃

【SD03】内幅五尺~六尺三寸(約1.50~1.90m)ほどの石積水路の構築、底面は素掘りで、上水施設(木樋)設置に伴う石積改修と部分的な補修が行われる。

②19世紀後半頃

【SD02】SD03の上に、内幅四尺~四尺三寸(約1.20~1.30m)ほどに狭めた石積水路を改修構築、根石付近のみが残存する。

③19世紀末頃~20世紀前半

【SD01】内幅二尺六寸~二尺八寸(約0.80~0.85m)ほどの石積水路の再構築、底面敷石で、天端石まで残る。昭和初期(戦中頃)まで使用される。

いずれの段階も蓋板(石)などの出土がなく、天端石が残るSD01においても蓋板(石)などの痕跡が確認できなかったことから、開渠と考えられる。護岸に積まれた石材は、SD03では一部に穀物臼(第31図237・図版15)の転用が見られたが、他は自然石(原石)を使用する。SD03の石積みは横方向に目が通るように積まれた布積状で、所々の隙間には、間詰石が見られた。

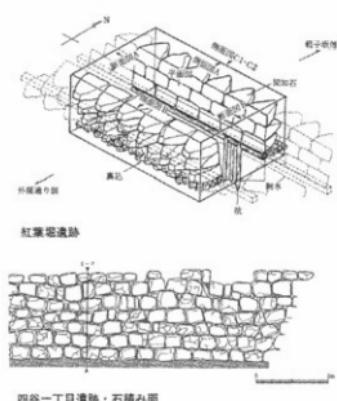
胴木の使用は、SD01の北側でのみ確認した。水堀などの水中から構築される石積みは、水に強い松の木の胴木(土台木・土居木)を敷き、胴木の上に根石を並べるか、根石を据える範囲を溝状に深く掘り込んで根石を据える場合が多い。SD03では素掘り溝底面の地山土に根石が沈み込んでいる状況を所々で確認した。SD03の根石下には、胴木や杭の痕跡は認められず、石積みの重さによる沈み込みも考えられるが、構築当初から素掘り溝底面の根石部分を掘り込み、根石を設置した可能性もある。

江戸時代の城下町における下水溝については、江戸では、雨落下手水や溝(ドブ)、小下水、大下水、

背下水などの名称で呼ばれ、自分下水や手前下水、公儀下水といった管理者の名前が付けられたものもあった（谷口1993）。東京都新宿区紅葉堀遺跡や四谷一丁目遺跡といった大下水の調査では、その規模は幅五尺～六尺で、安山岩による石積護岸を有する構造であった（第58図、新宿区教委1990・四谷一丁目遺跡調査団1998）。これらの大下水は、17世紀後半頃に石積護岸への整備が進められ、昭和初期まで使用されたことがわかっている。一方、大阪の下水溝は、太閤下水とも呼ばれ、当初は素掘りであった下水溝が、江戸時代後期に石積護岸に整備され、明治27（1894）年の改修を経て、現在でも使用されている。その規模は、幅一尺～四尺であるが、幅広の箇所では一間（約1.80m）～二間（約3.60m）の大きさで、開渠であったと理解できる（大阪市建設局2007・久田2012）。

江戸での下水溝の管理は、公儀下水のように幕府直轄のものもあったようであるが、その維持管理は、奉行所が町人に命じて行うのが普通であった。御触書によって、下水溝の疎通をよくすること、下水溝にごみを投げ捨てるなどと罰せられることなどが通達されている（東京下水道史探訪会1995）。大阪の太閤下水の維持管理も、各町々で行われ、春～初夏にかけて清掃の水道浚えが実施され、補修も各町々の負担で行われた。藩が造った下水溝を、町人が管理するのが普通であったようである（大阪市建設局2007）。

江戸時代の下水溝は、水路及び排水路の機能・役割を担うもので、現在の下水道のように、汚水と併せて糞尿を流すものではなかった。糞尿は、便槽に溜めて汲み取られ、近郊農村での有効な肥料として、一定の価格で引き取られていた。背割水路は、現在の用水路的な機能・役割を持った排水路であって、町屋や武家屋敷などの小下水や雨落水を集めて、河川へと流す機能・役割を担うと同時に、城下町での町境の役割を持ったものと考えられる。今回調査で確認した背割水路は、その規模と機能から考えると、江戸の大下水や大阪の太閤下水に相当するような下水溝であったことが理解できる。富山城下町を描いた各種城下町絵図（巻頭図版4・富山県立図書館蔵）では、富山城を中心に整備された水路網が描かれており、江戸や大阪と同様に、大小の下水溝を含む水路が整備されていた状況を窺い知ることができる。一番町周辺では、背割水路の北側が武家屋敷、南側が町屋敷である。SD03・SD01とともに、底面の西端と東端の計測値を比べるとSD03で9.0cm、SD01で4.0cmほど東端が低くなる。約100m東側で行った平成17年度調査（富山市教委2006b）と同様に、西から東に向かって水が流れていることがわかる。



第58図 江戸大下水の構造  
(文獻34・35から)

また、平成17年度調査では、背割水路に木橋がかけられていた痕跡が見つかっており、武家屋敷と町屋敷間を行き来できるような便宜が図られていた（富山市教委2006b・古川2014）。本調査区では、SD03を埋設横断して、武家屋敷側から町屋敷側への通水が考えられる上水施設（第9図・図版3）を確認した。万治年間以降の絵図によれば、背割水路北側の武家地は、「姫江家」の屋敷地である。背割水路が町境となって、武家屋敷地と町屋敷地とでは明確な分離がなされていたことが考えられるが、ある時期には武家屋敷と町屋の間で関係があったことが想定できる。

なお、背割水路の変遷と構造については、本章第5節で詳述する。

### (3) 井戸

江戸時代の町屋敷地から、SE03、SE04、SE06の3基の井戸を確認した。SE03とSE04は側板構造で、SE06は井戸の掘り方と考えられ、井戸枠は抜き取られたものとみられる。SE03は、井戸底の底板に取水孔が設けられたものであるが、SE04では井戸底に底板の設置が認められず、桶状に組んだ板を積み重ねていく方法で、設置されたものと考えられる。井戸内に投棄された陶磁器、掘り方内から出土した陶磁器から、SE06は17世紀代、SE03は18世紀後半～19世紀中頃の使用が考えられる。SE04もSE03とほぼ同時期の使用が考えられるが、背割水路同様に19世紀中頃での町屋敷の再整備の時期に作られた可能性がある。

### (4) 上水施設

SD03を横断する上水施設を確認した。SD03と一緒に構築されたのではなく、SD03使用途中の段階で設置されたものである。設置にあたってSD03の石材を積み直した状況が明瞭にみられる(第9図・図版3)。溝底付近に設置された木樋の構造は、竹の節を抜いた竹樋に繊維を巻き付けてから土筒で覆った後、上面と側面を釘で接合した板材を組んで覆っている。背割水路内を横断する竹樋が破損しないように、土筒と板で補強が施されたものであった。石積みの裏込め内は竹樋のままで、円形の挿入孔を設けた継ぎ手として角形木材を使用していた(第36図337・338・図版19)。

竹樋と継ぎ手に角形木材を使用した上水施設は、北陸では福井県福井市福井城跡(福井市文化財センター2004)、富山県立山町芦跡寺室堂遺跡(立山町教委1994)などで見つかっている。江戸では、東京都港区汐留遺跡(汐留地区遺跡調査会1996)などの上水施設がよく知られる。汐留遺跡は、仙台藩屋敷跡である。汐留遺跡では、井戸が取水口で、継ぎ手部分に木樋の大きさに合わせた孔を割り抜いた角形木材が使用されており、木樋間には水溜めが設置され、竹樋も使用している。木樋や竹樋には、各種の刻印や焼印がある。上水施設は、17世紀～19世紀にかけて、各地の城下町整備に伴い、飲用水の安定した確保を目的に設置されたものである。

本調査区で注目できるのは、武家屋敷地と町屋敷地の町境として、城下町の区画を分離する役割を持った背割水路を横断していることと、高低差から考えて、取水口は武家の鰐江家の屋敷地側と推定でき、武家屋敷地側から町屋敷地側への通水であった点である。調査によって、町屋敷から井戸が見つかっており、町屋敷地に井戸がなかったわけではない。しかしながら、労力と費用のかかる上水施設の整備が、武家屋敷地側から町屋敷地側にかけて行われていることから、何らかの必要性に応じて普請されたことが考えられる。さらに、設置された竹樋の延長線上の調査区南壁(町屋敷地内)に接して、円形の挿入孔を設けた継ぎ手の角形木材が埋設設置された状態のままで見つかっており、調査区内を南北に横断するように設置されていた可能性がある。

### (5) ごみ穴

町屋では、敷地内にごみ捨て穴を掘って、地中に埋めることが広く行われていた。ごみ捨て穴は、比較的小さな穴である場合が多く、堆積土と遺物の出土状況から判断して、SK29及びSK30は、ごみ穴と考えられる。また、SK17及びSK18・SX03もごみ穴であった可能性が高い。平成17年度調査においても、町屋敷の裏手にあたる箇所からごみ穴が見つかっている(富山市教委2006b)。

ごみ穴及びその可能性が高い遺構からは、下歎が多く出土した。SK29出土の平面丸型の一木連續歯下歎(第32図273～275)は、前歎及び後歎が磨り減っていずれも草履下歎のようになっている。SK30出土の平面丸型の構造(差歎)下歎のうち、表面に赤漆及び裏面に黒漆が施された露卯下歎4

平面構造		角型	丸型							
一木下歎	連齒下歎 A		265	273	274	275	275	275	275	288
	連齒下歎 B									※277～275+288:基底下歎状
	連齒下歎 C					268				
露卯下歎 A		284	277	278	279	280				265:SD03 273:SK27 274-275:SK29 288:試掘トレンチ 268:SD05
					285					※277～280:津波
構造(差歎)下歎	露卯下歎 B		270	272	281	282				284-285:SK03 277～280:SK30
	陰卯下歎 A				271					270:SK16 272:SK17 281-282:SK30
陰卯下歎 B		283								271:SK17 283:SK03
無眼下歎		266		田下歎		267				266-267:SD03 ※S=1/16

第59図 出土下歎の分類

点（第33図277～280・図版16）は、セット関係で2組の下駄であった可能性が高い。SK30では、もう1組の平面丸型の構造（差歛）露卯下駄が出土していることから、合計3組の下駄が捨てられていたことになる。SK17・SX03からも構造（差歛）下駄の露卯下駄（第32図272、第33図284・285）と陰卯下駄（第32図271、第33図283）が出土している。出土した下駄を分類整理した結果（第59図）、平面形及び歛・横縫孔を含めたその構造は一様ではなく、平成17年度調査（富山市教委2006b）と同様に各種が存在したことがわかる。

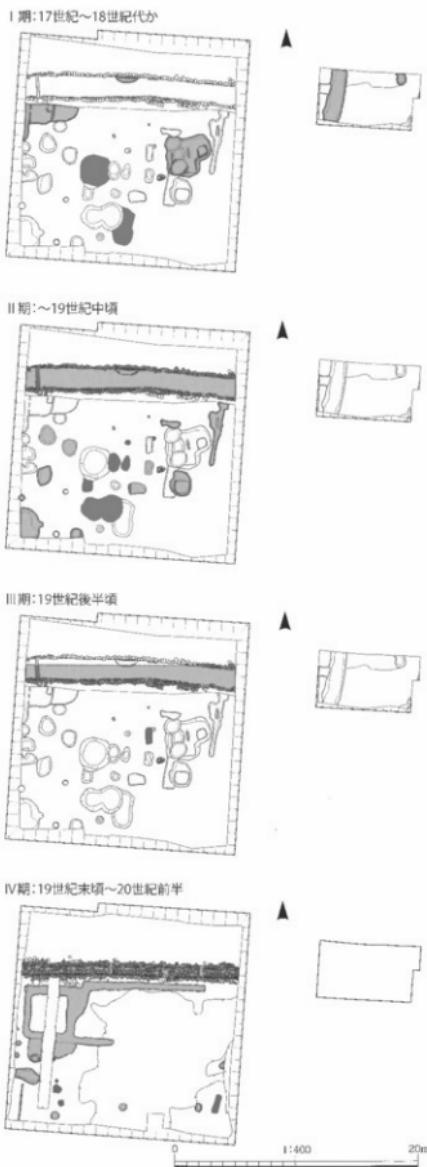
#### (6) 小鋳冶

平成17年度調査では、町屋敷地から小鋳冶に使用された羽口や鉄滓が出土し、背割水路内に大量の鉄滓が廃棄されていた状況が明らかになった（富山市教委2006b・古川2014）。本調査区からも、SX07・SX09から羽口と鉄滓が見つかり、小鋳冶に関連する遺構と考えられる。また、SX10も堆積土の状況から火に関連した遺構である可能性が高い。出土した陶磁器から、SX07は17世紀後半～18世紀中頃の年代が考えられる。

富山城大手門のすぐ南側に位置する富山城下一番町の町屋敷では、敷地内において、小規模な鋳冶作業を一般的に行っていたことが考えられる。

#### (7) 町屋構成遺構の年代と変遷

背割水路の変遷は既に述べたとおりであるが、他の遺構も含めると次の変遷が考えられる（第60図）。



第60図 遺構の変遷

I期：17世紀～18世紀代か  
SD06・SE06・SK21・SK33・SX02・SX04・SX05・SX07・SX09

II期：～19世紀中頃 [SD03]

SD03内上水施設・SD05・SE03・SK14・SK16～SK18・SK23・SK25・SK29～SK32・SX03・  
SX08・SX10・SP03

III期：19世紀後半頃 [SD02]

SK26

IV期：19世紀末頃～20世紀前半 [SD01]

上層面の遺構

#### (8) 小 結

富山城下一番町での町屋敷の構造は、北陸街道に沿った区画形状から判断して、北陸街道に面して主屋である町屋が建てられ、その裏側の背割水路との間の空間に、土蔵や離れなどの付属屋などがあつたことが推測でき、城下町特有の「商家の町並み」が形成されていたと考えられる。

町屋敷は、城下町での商人や職人の営業及び生活の拠点であって、町人地の空間を構成する基礎単位でもある。加賀藩・富山藩の城下町における町屋内部は、街道に面して商人や職人が商売や仕事をする空間「ミセ」と「ミセノマ」、「オトリニワ」と呼ばれる通路、吹き抜けのある居住空間である「チャノマ」、そして「ツツマ」や「ザシキ」といった部屋が一列に並び、「オトリニワ」を通って「台所」や「廁」に続き、最も奥に「土蔵」を有する構造が基本であった（金沢市教委1992・1994）。富山城下町は戦災によって焼失しているが、加賀藩の高岡城下町の外縁にある「金屋町」では、幕末～明治年間（19世紀後半～末頃）にかけての町並みがよく残っており、町屋敷の構造を窺い知ることができ、間取りに京都の町屋敷との共通性が窺える（第61図、高岡市教委2011・深田2006）。

本調査区は、各種絵図の位置から判断して、商家の一角であった可能性が高い。調査によって見つかった町屋構成遺構は、背割水路と各種絵図に描かれた北陸街道の位置から、町屋敷の正面「ミセ」の奥に位置する居住空間の一部ないしはさらに奥（裏手）に該当する箇所と考えられる。井戸、ごみ穴、小鍛冶などの遺構は、富山城下町での町屋敷地における敷地空間の使用とその生活構造を知るうえで重要である。（基峰）



第61図 江戸時代後期（19c前半）の町屋構成  
(文献36から作成)

## 第2節 肥前陶器（朝鮮唐津）瓶について

### (1) 肥前陶器（朝鮮唐津）について

肥前陶器は、唐津焼と呼ばれている。肥前地方（現在の佐賀県及び長崎県）で生産された陶器の総称で、肥前磁器の伊万里焼と同様に、出荷した港の名前が呼び名となっている。唐津焼は、当初は薺灰釉を用いた陶器で、成形技法は、叩き作りとロクロ作りがある。慶長年間（1596～1615）に生産窯が拡散・急増し、最盛期を迎えた（伊万里市史編さん委員会2006）。その中で、朝鮮の陶工から伝わった伝統的な叩き作り技法で成形され、表（外）面に、鉄釉を上から流した黒色、さらに薺灰釉を掛けた白色の二つの色を交わせたものが、朝鮮唐津と呼ばれている。

### (2) 出土した肥前陶器（朝鮮唐津）瓶

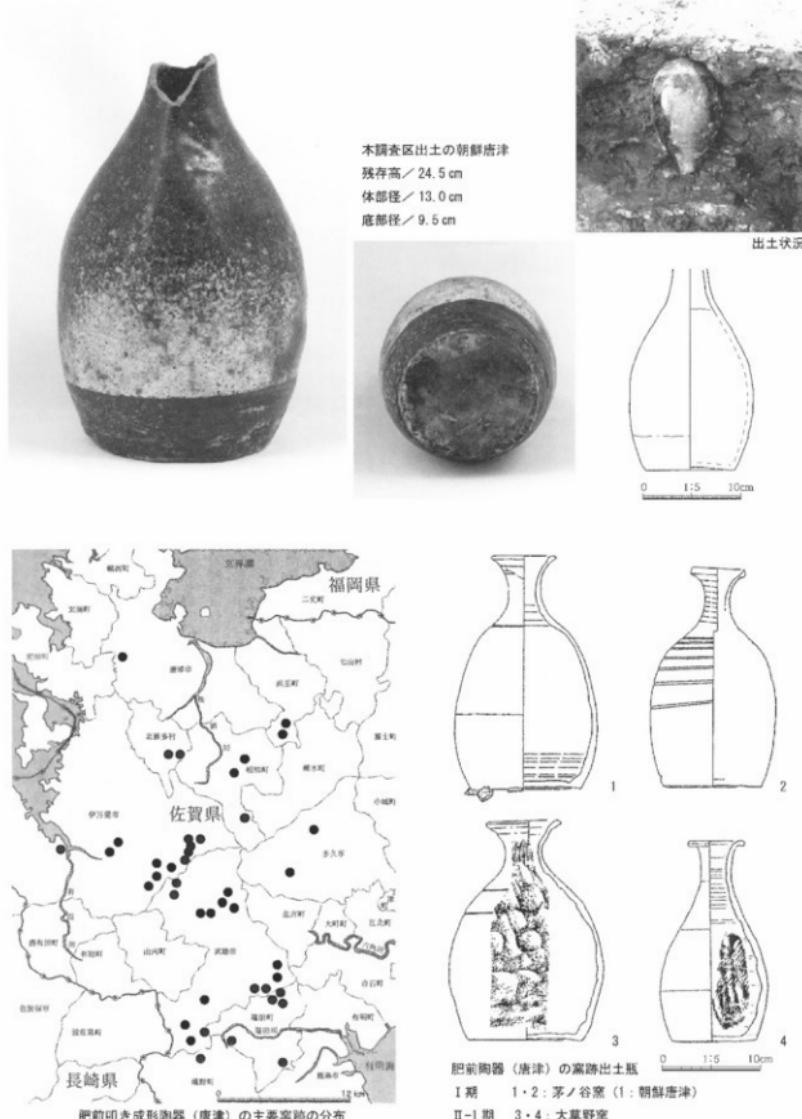
本調査区の下層面SE04南側（B4グリッド）包含層から、朝鮮唐津の瓶、所謂大徳利1点（第23図85）が出土した。口縁部～頸部までを欠損し、残存高21.3cm、体部径13.0cm、底部径9.5cmを測る。表（外）面は、頸部～体部にかけて黒褐色の鉄釉が施され、鉄釉施釉の体部を中心に、白濁色の薺灰釉が掛けられる。特に体部下半が、白みを増している。体部を中心に、黒と白の二つの色が混じり合うように、釉が施される。底部から約4cmまでは褐色の灰釉のみで、厳密には三色構成といえる。表（外）面に、飾りなどの特別な装飾は見られない。釉の下には、叩き成形による平行目の痕跡が見られる。頸部内面にまで、鉄釉が施されている。頸部から光りを当てて内面を見ると、底面の上に粘土紐を巻き上げながら作った輪積み痕跡が一部に残っている。内面の叩き痕は、叩き後になで消しており、一部に平行目が見られる程度で、不明瞭である。体部を叩き成形して肩部を絞り込んだ後、ロクロを使用して頸部が作られている。頸部～肩部にかけて絞り込んだ時の押圧が残り、頸部には段が見られる。体部の器壁は薄く、頸部の方が器壁が若干厚くなる。素地は、鉄分が強い褐色の陶土が使用されている。底面は平底で、未調整・無施釉である。底面に荒目の砂というよりも、粗粒の付着を思わせる痕跡がある（第62図上段）。

### (3) 肥前陶器（朝鮮唐津）瓶の特徴と年代

『伊万里市史』（伊万里市史編さん委員会2006）では、叩き成形を中心とする肥前陶器の生産窯が38基以上報告されている。なかでも、朝鮮唐津の瓶を中心に生産した窯では、伊万里市茅ノ谷窯が知られている。その操業期間は、天正18（1590）年～慶長15（1610）年と推定されている。

一方、肥前陶器の瓶は、大形瓶（底径が9cm以上）及び中形瓶（底径が9cm未満7cm以上）、それ以下の小形瓶に分類されており（九州近世陶磁学会2000）、本調査区から出土した肥前陶器（朝鮮唐津）の瓶は、大形瓶に該当するが、中形瓶ともいえる大きさもある。肥前陶器の瓶で、叩き成形で作られた平底の瓶は、比較的古い時期の生産品に該当し、九州陶磁器編年（九州近世陶磁学会2000）では、I期（1580～1610年）及びII期（II-1期：1600～1630年、II-2期：1630～1650年）の特徴を有する。叩き成形による瓶の内面の叩き目は、寛永年間（1624～1643）に同心円状から格子目状へと漸次、変化することが指摘されているが、本調査区出土の瓶は、内面の叩き目が不明瞭でわからない。しかしながら、I期～II期の特徴を有すると判断できる（第62図下段）。

本資料は、江戸時代前期（17世紀前半）の生産品と考えられる。発掘調査成果が少ない17世紀前半の資料であり、北陸地方での九州陶器の流通及び本遺跡の性格を考える上で重要である。（基峰）



第62図 肥前陶器（唐津）瓶  
(文献6・11から作成)

## 第3節 越中瀬戸印花丸皿について

### (1) 越中瀬戸について

越中瀬戸は、中世末頃（16世紀末頃）から操業が開始され、現在まで受け継がれている。近世以降の越中を代表する焼物で、現在も富山県窯業の中心的役割を担って、展覧会でもよく取り上げられてきた（富山市郷土博1960・愛知県陶磁祭1990・富山市郷土博1995・富山市陶芸館2013）。

北陸地方の施釉陶器では最も古い焼物で、昭和初期から注目され（山本1934）、文書類の記録がよく残っていることでも知られる（定塚1983）。当初は、現在の滑川市及び中新川郡上市町・立山町で操業が開始され、近世（17～19世紀）を通じて立山町を中心に生産が行われた。その系譜は、名前のとおり、中部地方を代表する焼物である瀬戸・美濃である。生産の最盛期には、越中を中心に加賀・能登・飛騨・越後などの北陸地方を中心に流通している（宮田1997・1998）。

### (2) 出土した越中瀬戸印花丸皿の検討

本調査区からは、越中瀬戸印花丸皿が少ないながらも3点出土した。ここでは、越中瀬戸印花丸皿について若干の検討を行う。

越中瀬戸丸皿の見込み内底面に、梅や菊といった印花が施されたものが、越中瀬戸皿全体の中では少ないながらも存在する。越中瀬戸は、近世における越中を生産・消費の中心とした日常雑器で、装飾の乏しさもその特徴であるが、操業当初の製品では印花丸皿が多く、雅趣がある。越中瀬戸の中では、印花は文様としての装飾性が高く、その特徴を容易に把握できる資料もある。印花は、素地が柔らかいうちに、はんこ（判子）や土型などを押し当てて文様を施すもので、17世紀代に多く用いられた陶器の装飾方法のひとつである。はんこで押捺された文様は、印刻部に釉薬が溜まって文様が濃くみえ、焼物の装飾性をより一層増す効果を發揮する。

本調査区から出土した越中瀬戸印花丸皿は、第26図147・156（図版12）及び第27図174（図版13）の3点である。147は体部中央で丸みをもって立ち上がる釉薬内禿皿で、156と174は若干丸みをもって立ち上がり、口縁部が鐘反り風になる釉薬内禿皿である。いずれも見込み内底面の中心から外れた箇所に十六弁菊が印花され、付高台で、高台内に記号状の墨書きが見られるのが特徴である。

147は、SD02・03（背割水路）A-A'間の断割時に、裏込めから出土した。SD02・03（背割水路）構築以前の土に混入していたと判断できる。口縁部から底部にかけての破片で、復元口径10.6cm、復元底径5.1cm、高さ2.5cm、光沢のない鉄釉がかかる。印刻内部にも若干はあるが釉が見られ、作りは丁寧で焼成は良好、素地色調は橙（2.5YR6/6）で、胎土に白い砂粒を少量含む。156は、SD03（背割水路）内に設営された上水施設の断ち割り時に、北側の裏込めから出土した。SD03（背割水路）構築以前の土に混入していたと判断できる。ほぼ完形で、口径9.8cm、底径4.9cm、高さ2.15cm、銀色の光沢ある鉄釉がかかる。印花内部にも若干はあるが釉が見られる。作りは丁寧で焼成は良好、素地色調は橙（2.5YR6/6）で、胎土に白い砂粒と少し大きめの白砂粒を含んでいる。174は、SX04からの出土である。層位からSD03（背割水路）構築以前の遺構であることが理解できる。ほぼ完形で、口径10.4cm、底径5.4cm、高さ2.2cm、緑がかかった透明感のない厚みのある灰釉がかかる。高台の一部に釉溜まり、印花内部にも若干はあるが釉が見られる。作りは丁寧で焼成は良好である。素地色調は浅黄（2.5Y7/4）で、胎土に白い砂粒と少し大きめの白砂粒を含んでいる。器形や特徴などの要素から考えて、いずれもほぼ同時期の生産品であることが想定できる。

また、156と174では器形及び印花・胎土の共通要素から、同生産地（窯）であった可能性がある。

### (3) 富山県内出土資料との比較(第63図)

越中瀬戸印花丸皿の一般的な特徴は、灰釉か鉄釉の内禿で、灰釉は少しくすんだ緑色で透明感がなく、部が内湾気味に立ち上がり、高台は付高台か削り出し高台であることが從来より指摘されている(安田1988)。

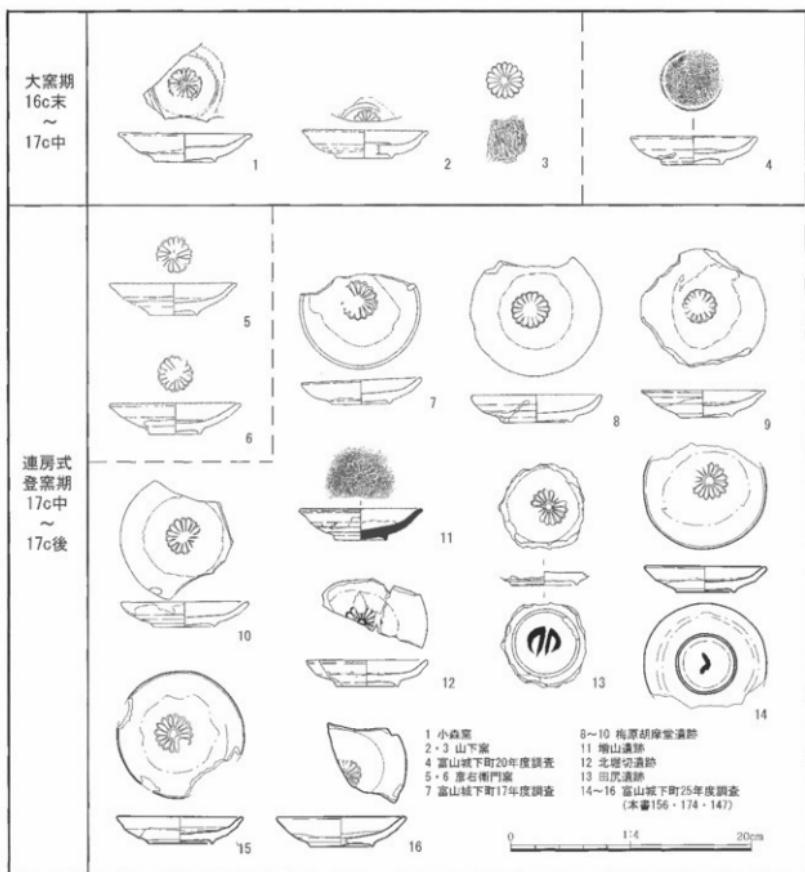
富山県内の発掘調査資料に目をむけると、本調査区で出土した越中瀬戸印花丸皿のうち、147は南砺市梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類(部中央で丸みをもって立ち上がる丸皿)、156・174は梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿B類(若干丸みをもって立ち上がり、口縁部が端反り風になる内禿皿、鉄釉・灰釉、付高台)に該当する。梅原胡摩堂遺跡では、越中瀬戸皿を器形などによってA~F類の6類に分類している。147に相当する越中瀬戸印花丸皿(見込み内底面に十六弁菊)はA類23点中6点、156・174に相当する越中瀬戸印花丸皿(見込み内底面に十六弁菊)はB類13点中1点が出土する。梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類では、口径が10cm前後が多く、口径と器高の比がほぼ5:1であることが指摘されている(富山県文振財団埋文事務所1996a)。なお、梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類及びB類は、宮田進一氏による越中瀬戸皿A1a類に該当する(宮田1988)。梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿B類に相当し、見込み内底面に十六弁菊が印花される丸皿の事例としては、富山市富山城下町平成20年度調査(富山市教委2010)や砺波市増山遺跡(砺波市教委1978・2008)・黒部市北堀切遺跡(黒部市教委2013)・朝日町柳田遺跡(富山県文振財団埋文事務所2009)などが知られる。また、梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類に相当し、見込み内底面に十六弁菊が印花される丸皿の事例としては、富山市富山城下町平成17年度調査(富山市教委2006b)や砺波市宮森採集資料(砺波市教委2010)などがある。

本調査区から出土した丸皿同様に、見込み内底面に十六弁菊が押捺され、高台内部に記号状の墨書きもつ事例としては、南砺市田尻遺跡出土の皿(富山県文振財団埋文事務所1996b)がある。

### (4) 小結

越中瀬戸は、操業当初の大窯期においては、上市町黒川窯では見込み内底面に印花が施されたものは確認されていないようであるが、滑川市小森窯では多くの皿類の見込み内底面に桜・菊の印花が認められる。立山町山下窯では生産の主体が皿類で、数多くの皿類の見込み内底面に桜・梅・菊・大吉などの各種の印花が認められ、多様な印花が施されている。大窯の操業は出現期から17世紀中頃までと考えられており、17世紀中頃以降は立山町上瀬戸彦右衛門窯・下瀬戸孫市窯・新瀬戸九左衛門窯といった連房式登窯の操業に変換していくことが指摘されている(宮田1988・1997・1998)。前述の富山城下町平成20年度調査の越中瀬戸印花丸皿は、大窯期の生産品であることが推定されている(富山市教委2010)。立山町を生産の主体とした操業は、加賀藩の「瀬戸役」として、江戸時代末頃まで続いた(安田1988・宮田1997・1998)、連房式登窯以降は、胴窯という単房式の窯が普及し、飛躍的に生産量が多くなったことが理解できる。

本調査区から出土した越中瀬戸印花丸皿は、いずれも十六弁菊の印花である。比較資料が少ないながらも、前述した梅原胡摩堂遺跡などの消費地での出土資料及び生産地である大窯の山下窯及び小森窯、登窯の彦右衛門窯の十六弁菊を印花する皿類との比較検討と、17世紀後半に釉止めの段がほとんどない内禿皿になるといった技法上の指摘(宮田1997・1998)から考えると、山下窯の系譜下で展開した立山町彦右衛門窯などの連房式登窯で生産されたものと考えられる。その生産年代は17世紀後半と推定できる。本調査区から出土した陶磁器類の中では、古い様相を示す資料である。(関)



## 第4節 背割水路出土の土人形「狛抱き」について

### (1) 土人形について

人形は「紙・木・土などで人間の形に作ったもの」で、古くは神の依代や呪詛の対象物として呪術的因素の強いものであったが、江戸時代に入ると、愛玩あるいは観賞用として盛行した。日本の郷土人形は、世界的に見ても種類が多く、全国各地で作られてきた（依編1978・京都府立総合資料館友の会1981）。

土人形は、こねた粘土を型枠に入れて抜き、合わせて成形し、乾燥後に窯で焼き、色鮮やかな塗彩が施されたものが多い。江戸時代後期に京都の伏見人形を媒介にして、広く全国に普及したといわれている。愛玩・観賞用といった機能の他に、江戸時代の人々の実生活と関連した民間信仰が加味され、人形の種類ごとに付与するご利益が決まっていたことでも知られている（塙見1967・奥村1976）。考古学による土人形の研究は、伏見人形窯の構造や変遷の過程などを中心に進められ（木立1997・2001）、平成以降、各種開発工事に伴う近世遺跡の発掘調査の進展に伴って、遺跡出土の土人形が研究の対象として注目されるようになった（北原2000・安芸2000・関西近世考古研2008）。

### (2) SD02・03(背割水路)出土の「狛抱き」

本調査区では、下層面（江戸時代）から蛙（第29図216・図版14）を除き、土人形が3点出土した（第29図214・215・217・図版14）。

ここでは、出土した土人形の中で、特徴の把握が容易である「立ち人形の狛抱き」（以下、「狛抱き」と呼ぶ）について、若干の検討を行いたい。「狛抱き」は、SD02・03（背割水路）の中央（2区）の中央付近、検出面からの深さ15～30cmから出土した。立ち人形で、胸元正面に狛（犬）を抱き、頭部を欠損する。残存高6.1cm、幅3.2cm、厚さ1.9cmを測る。型抜き前後合わせ成形で、正面を中心にして透明釉と緑釉が施釉され、狛の目と体には黒色の彩色が見られる。

### (3) 遺跡出土の「狛抱き」

遺跡から出土した「狛抱き」は、管見に触れたもので第25表及び第64図（東京都建設局・内藤町遺跡調査会1992・四谷一丁目遺跡調査団1998・東京都埋文センター2005・東池袋四丁目再開発組合・玉川文研2007・汐留遺跡調査会1996・京都市埋文研2007・石川県埋文センター2002・金沢市2006・福岡市教委1994・福岡市教委2007・北原2000）に示したとおりである。幕府の中心である江戸城が置かれた江戸城下（東京23区）及び京都の伏見城下（京都市）、地方では九州の福岡城下（福岡市）と北陸の金沢城下（金沢市）・富山城下（富山市）からの出土で、特に江戸城下に集中する。いずれも江戸・京都といった都や地方の有力大名によって築かれた城下町で、近世遺跡の発掘調査が実施されている箇所からの出土である。

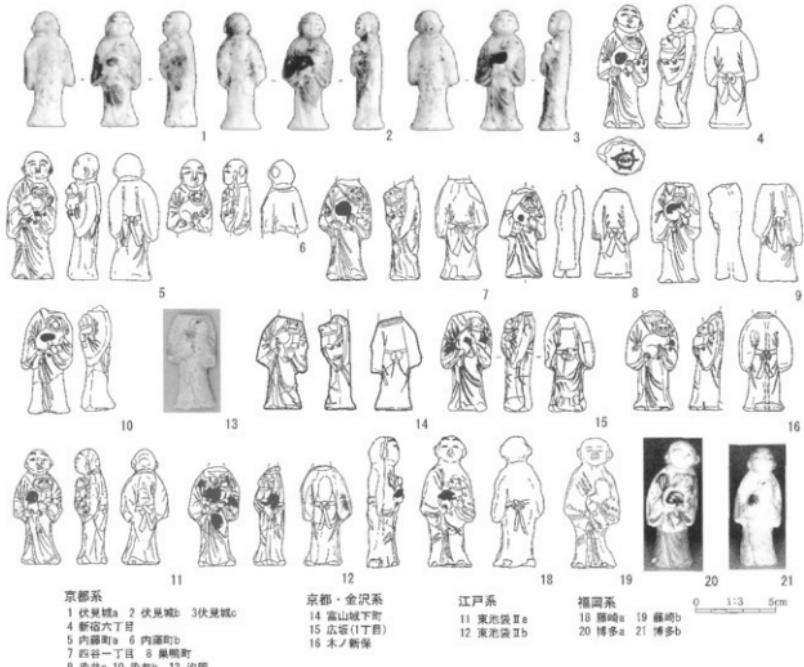
「狛抱き」は、いざれも型抜き前後合わせ技法での成形と考えられる。その規模は、平均で高さ7.79cm、幅3.17cm、厚さ2.18cmである。土人形の種類の中では小型で、ほってりと愛嬌のある造形が特色である。その形状から、子どもを対象として流通した、安価な愛玩用であったと考えられる。

江戸城下からの出土品については、胎土が白色で透明釉に緑釉を流し掛けるものが京都産（背面に「亀」や「治」などの刻印などがあるものあり）、胎土が橙色・褐色で透明釉のみのものが江戸近郊産のものに多いとの指摘がある（安芸2001）。ここで集成を試みた「狛抱き」は、容姿・成形などの細やかな特徴に差異が認められる。伏見人形のように、土产品などとして全国的に流通したものと、福

第25表 遺跡出土の主な土人形「紳抱き」

番号	都道府県	市町村	城下町	遺跡・人形名	出土箇所	規格 cm 高さ 索幅	成 形	頭飾	色彩	時代	備考	文 号	古 文 号
1	京都府	京都市	伏見	伏見城a	櫻井237	7.0 3.0 2.1	型抜き・首後合わせ	鶴・鈴・透明	白	19c前	底面彫孔	京都府2007	形版5-522
2	京都府	京都市	伏見	伏見城b	櫻井214	7.0 3.0 1.9	型抜き・首後合わせ	鶴・透明	白	19c前	底面彫孔	京都府2007	形版5-942
3	京都府	京都市	伏見	伏見城	鹿苑214	7.6 3.0 1.9	型抜き・首後合わせ	鶴・透明	白	19c前	底面彫孔	京都府2007	形版5-943
4	京都府	新宿区	江戸	新宿六丁目	2416薄削	7.9 3.3 2.5	型抜き・首後合わせ	鶴形	白	19c前	京都府「東山御用奉書「龜」」	京都府2005	205図3
5	京都府	新宿区	江戸	内藤町a	C-4薄削	8.9 3.2 2.5	型抜き・首後合わせ	鶴・茶・黒	白	19c前	笠置系	御用内藤町1992	229図-23
6	京都府	新宿区	江戸	内藤町b	C-2薄削	14.0 3.0 2.1	型抜き・首後合わせ	鶴・茶	白	19c前	笠置系	御用内藤町1992	229図-17
7	東京都	麹町区	江戸	四谷一丁目	D-1薄削	6.0 3.4 2.5	型抜き・首後合わせ	茶・鶴	乳白	19c前	笠置系	新宿D-1号丁1998	60図-10
8	東京都	麹町区	江戸	麹町町	つづら石55薄削	5.9 3.1 2.3	型抜き・首後合わせ	鶴・茶・黒	白	19c前	笠置系	吉萬E-19号丁1998	450図-734
9	東京都	麹町区	江戸	麹町a	D-1薄削	6.0 3.3 2.3	型抜き・首後合わせ	灰・緑	白	19c前	笠置系	吉萬E-19号丁1998	124図-828
10	東京都	麹町区	江戸	麹町b	94薄削	6.0 3.4 2.3	型抜き・首後合わせ	灰	黃白	19c前	底面彫孔・井ぶち鉢底	吉萬E-19号丁1998	115図-702
11	東京都	麹町区	江戸	末廣新玉	E04薄削	7.5 3.1 2.2	型抜き・首後合わせ	茶・茶・緑	白	19c前	笠置系	東山御用E-1号丁2007	170図-759
12	東京都	麹町区	江戸	東山御用d	E350薄削	6.9 3.4 2.2	型抜き・首後合わせ	茶・茶	白	19c前	笠置系	東山御用E-1号丁2007	194図-1248
13	東京都	麹町区	江戸	沙留	1薄削	6.9 3.0 2.2	型抜き・首後合わせ	鶴・黒	白	19c前	笠置系	沙留1996	63図-63
14	富山県	富山市	富山	富山城下町	SD02-03	6.0 3.2 1.9	型抜き・首後合わせ	鶴・透明・茶	12-3-1-3-3-3	19c前	笠置系	富山市2014	305図-215
15	石川県	金沢市	金沢	庄屋町1丁目	SK1034	6.0 3.3 2.2	型抜き・首後合わせ	鶴・透明・茶	白	19c前	笠置系	金沢市2006	194図-92
16	石川県	金沢市	金沢	丸人	SK262	6.6 3.3 2.0	型抜き・首後合わせ	-	-	19c前	笠置系	石川県選2002	185図-214
17	福岡県	福岡市	早良	福岡城	-	-	-	型抜き・首後合わせ	-	-	-	福岡市2007	国版8-3
18	福岡県	福岡市	早良	福岡城	-	-	-	型抜き・首後合わせ	-	-	-	福岡市1994	21図-200
19	福岡県	福岡市	早良	福岡城	佐吉蟹	8.5 3.1 2.5	型抜き・首後合わせ	-	-	19c前	福岡市1994	31図-101	
20	福岡県	福岡市	早良	福岡城	佐吉蟹	-	-	型抜き・首後合わせ	茶葉	-	-	北原2000	国12
21	福岡県	福岡市	早良	福岡城	椎葉	-	-	型抜き・首後合わせ	梅葉	-	-	北原2000	国12

以上全部のみで、複数人形は省略した。

第64図 主な土人形「紳抱き」と生産地  
(文献4・12・16・20・31・35・44・45・67・71・72から作成)

岡博多出土資料などのように、各地の城下を中心とした窯元で製作されたものに大別できると考えられる。本調査区で出土した「狛抱き」は、新宿区四谷一丁目遺跡や金沢市広坂（1丁目）遺跡出土のものによく似ており、施釉及び胎土から京都・金沢系のものと考えられる。

#### (4) 「狛抱き」の出現と普及・定着

土人形の出現は、17世紀中頃と考えられ、18世紀以降になって各地の城下町から多量に出土する傾向が指摘されている（関西近世考古研2008）。伏見人形に目を向けると、寛文六（1666）年に再版された「ひな人形の古実」にて、「狛抱き」の姿が描かれている（第65図）。伏見人形では、17世紀後半にはその容姿・造形が定着していたことが理解できる。しかしながら、愛玩的な童子人形は、18世紀後半～19世紀前半にかけて、各地の城下町から多く出土する傾向で、この時期に各地の城下町において普及・定着したことを窺い知ることができる。

この背景としては、江戸を中心とした町人文化が最も華やいだ元禄や化政文化の時期に該当することから、節句行事や民間信仰の盛行との結びつきによって、窯元及び商人を媒介とした土人形の生産・販売の増加と、商工人などの町人（民衆）を中心とした購買層の増加が相乗した結果、城下町を中心に土人形の普及・大衆化が進んだことが考えられる。本遺跡出土の土人形も、当該期のものと考えられる。江戸や金沢といった主要な城下町同様に、富山城下町においても、江戸を中心に開花した町人文化の賑わいと繁栄の定着がなされていたことが想像できる。

#### (5) 小 結

最後に、「狛抱き」の意味について考えてまとめたい。「狛抱き」は、福岡博多では、ねぶり（嘗め）人形と呼ばれたようで、子どもが嘗めてしゃぶる人形として扱われてきた（福岡市教委1994・北原2000）。伏見人形での「狛抱き」は、饅頭喰いなどの童子人形の一群に分類される。童子人形は、子どもの成長と健康を祈願するためのものといわれる。一方、狛は、愛嬌ある風貌から、「狛ころ」とも呼ばれたようで、子どものひきつけ防止や守り神としてのご利益があったようである（塙見1967・奥村1976）。

「狛抱き」は、前述のとおり、その形状から子どもを対象として流通した安価な愛玩用であったものと考えられるが、子どもが健康に育つためのお守り的意味を持った存在であったことも考えられる。

（基峰）



第65図 描かれた土人形「狛抱き」  
（文献10から）

## 第5節 本調査の総括と周辺調査との比較

本調査では、富山城下町遺跡主要部における主に町屋に関する遺構を検出した。周辺では近年民間開発に伴う発掘調査が相次ぎ、城下町主要部の様相が明らかになりつつある。過去2回の調査で、武家屋敷地と町屋敷地を分ける背割水路を検出していたが、今回、変遷や構造をより明確にすることができた。本節ではまず主要遺構である背割水路の変遷と構造を考える。さらに、本調査区の性格について触れ、これまでに行われた城下町の他の調査区との比較を行う。

### (1) 背割水路の変遷と構造

**変遷** 背割水路は本調査区(平成25年度調査区)のほかに、約100m東で行った平成17年度調査区、約250m西で行った平成20年度調査区で検出している(富山市教委2006 b・2010)。本章第1節で述べたように本調査区では3時期の変遷を確認した。江戸時代後期の19世紀中頃に埋没したとみられるSD03→幕末頃に造られ近代に埋没したとみられるSD02→戦後の戦災層によって埋没したSD01という変遷である。

平成20年度調査では上層・下層2期の背割水路を検出した。構造と時期から、上層のものは本調査区のSD01、下層のものはSD03に対応するとみてよい。また、平成17年度調査区の背割水路は、本調査区のSD03に対応するとみられる。また、平成17年度調査では、石組みの背割水路の構築前に素掘りの段階があったことが明らかになっている。

以上から背割水路の変遷をまとめると次の4期に分かれる。本章第1節で示した町屋構成遺構の年代とも概ね対応する。

I期：17～18世紀代か。素掘り。幅4m以上、深さ1.4m以上。平成17年度調査区で確認。

II期：～19世紀中頃。石組み。内幅約1.5～2.0m、深さ0.9m～1.0m以上。平成17・20・25年調査区で確認。

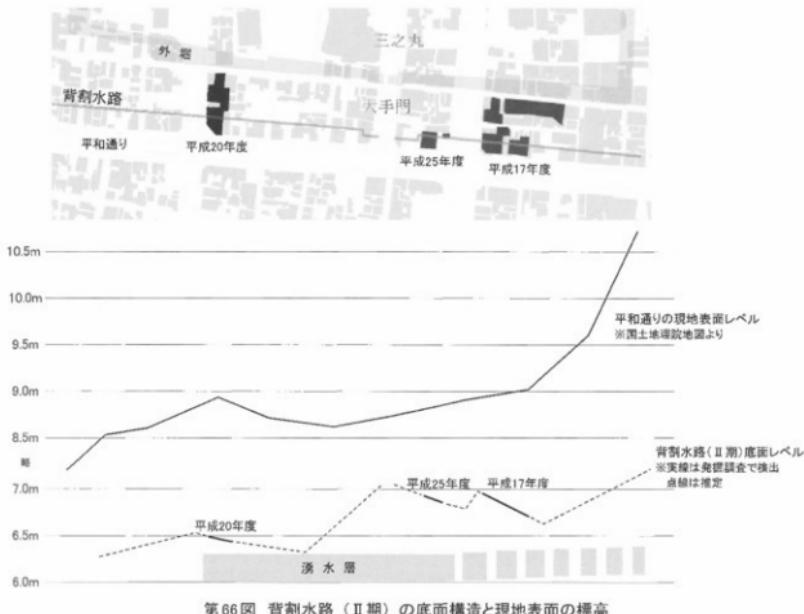
III期：19世紀後半頃か。石組み。内幅約1.2～1.3m以上、深さ0.3m以上。平成25年度調査区で根石付近のみ確認。

IV期：～20世紀前半。石組み(底面も石敷)。内幅0.8～1.7m。深さ0.6～0.8m。平成20・25年度調査区で確認。

II期よりもI期として一括りにしたが、I期は長期に及ぶことから何度も造り替えがあったとみるべきであろう。また、素掘りであるI期は平成17年度調査区のみで見つかり、すぐ西側で行った平成25年度の本調査区では検出していない。同じ規模で延びているなら、本調査区でも掘り方を確認できたはずであるが、そうでなかったのはI期の水路が地点ごとに幅や深さが違っていたためと考えられる。実際I期の背割水路を検出した平成17年度調査でも地点ごとに規模が異なり、最も西側では深さが浅くなる。本調査区付近では規模が小さく、造り替えの際に削平されたことで痕跡が残らなかっただけである。II期は出土遺物から、埋没は19世紀中頃とみられるが、構築時期は判然としない。また、平成20年度の大手門南側の工事立会では、近代とみられる背割水路の一部を検出した(富山市路面電車推進室ほか2009)。割石を使うなど、上記IV期のものとは構造が異なり、近代のなかでも部分的に造り替えを行っていたのかもしれない。

**構造と機能** 3調査区すべてで見つかっているII期の水路について考える。

各調査区での底面の標高と流水方向は次のとおりである。平成20年度調査区は西側が6.48m、中央6.46m、東側6.42m、平成25年度調査区は西側6.92m、中央部6.85m、東側6.83m、平成17年度調査区

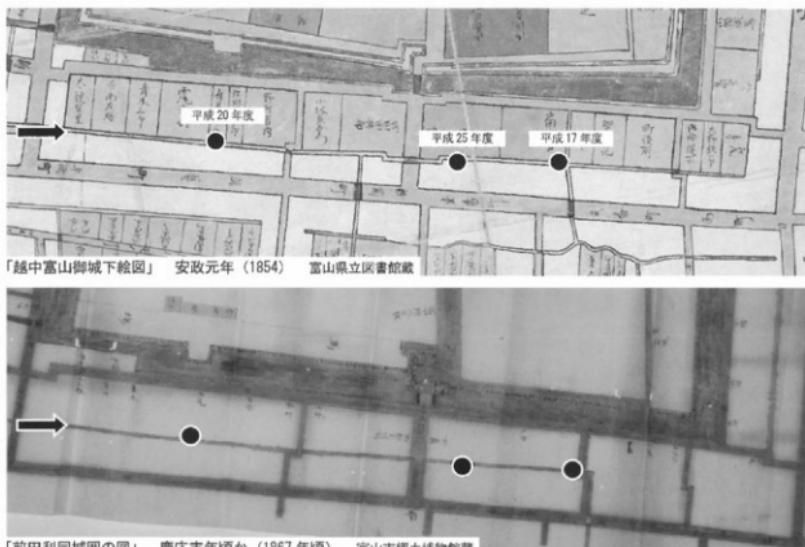


第66図 背割水路（II期）の底面構造と現地表面の標高

は西側6.94m、東側6.70mとなる。いずれも西側が高く東流するが、標高をみると背割水路全体で一定（東）方向に流す構造とはなっておらず（第66図）、東流させる地点と西流させる地点を交互に造つて上り下りのある底面構造をとっていたことが推測できる。谷部になる地点で北に並ぶ武家屋敷地の境に設けた小規模な水路から外堀へ流し込んだのであろう。

こうした構造は地形の影響を受けたためと考えられる。富山城周辺の現況地形を調査した國香正捺氏によると、背割水路周辺の地形は東が高く、西に向かって低くなる（國香1995）。国土地理院地図でより詳しく地形の変化を読み取ると（第66図）、國香氏の指摘どおり東側の西町付近が最も高く全体として西下がりの傾向があるものの、平成25年度の本調査区付近（一番町）で低くなった後、西側の平成20年度調査区付近（旅籠町）ではやや高くなり、さらに西側で再び低くなることがわかる。このような高低差のある地形において、ひとつながらでかつ一定の深さを保持した水路を構築するために、上記のような構造をとったと考えられる。なお、水路の掘削にあたっては湧水層に達しないよう配慮していた可能性がある。調査で検出した井戸から、湧水レベルは標高6.0～6.3m付近とみられる。いずれの時期の水路もこれを超えない深さで掘られている。土壤分析の結果（第4章第2節）では、水路の底面はやや湿っている程度で水の流れはほとんどなかったとされる。生活排水や雨水を流す程度で、湧水や上流（南）からの水が當時流れる状態ではなかったと考えられる。

背割水路北側にある武家屋敷地は、寛文期の前田利次による改修によって外堀を囲うように配置されたものである。外堀の外縁を軍事・警備を専らとする番方によって囲み、軍事的防衛を固めたと考えられる（古川2014）。その武家屋敷を町屋敷と分離する背割水路は、防衛的な観点からも重視され



第67図 絵図にみる背割水路の変化（矢印が背割水路。●は発掘調査地点）

たであろう。城下町の他の東西方向の水路が一部途切れる地点がみられるのに対し、一連で構築された背割水路は、水路（下水）としての機能以上に武家屋敷地と町屋敷地を隔てる意味を強く内包していたと考えられる。I期からIV期にかけての規模の縮小化は、近世から近代にかけてそうした防衛的意識が薄れていくことの反映とも考えられる。

**II期からIII期への造り替えについて** 次にII期の背割水路からIII期へ造り替えを行った理由について考えたい。

平成25年度の本調査区では、背割水路の上面から約50cmまでの層に遺物が集中し、それより下層ではほとんど出土していない。平成20年度調査区は出土状況について記載がないが、平成17年度調査区はやはり下層からの遺物の出土が希薄であるという。こうした遺物出土状況を勘案すると、すべてが同じ時期に人為的に埋められたとは考えにくく、河川の氾濫など広域に及ぶ自然災害によって泥土が下層に堆積し、その後、造り替えにあたり上層を人為的に埋めた可能性が高い。

II期からIII期への造り替えの時期にあたる幕末期は、何度も大規模な水害に見舞われている。このうち埋没の要因となったのは、安政2（1855）年、安政6（1859）年、慶応2（1866）年いずれかの神通川の水害と考える。その理由は次のとおりである。

第67図上段は、安政元（1854）年の「越中富山御城下絵図」である。下段は「前田利同城図」で、富山市郷土博物館の浦畑奈津子氏のご教示によると、富山城最後の状態を描いたものとされる。比較して注目されるのは、前者絵図の中央付近（平成25年度調査区西側）にみられる背割水路のランクが、後者では直線化していることである。すなわち、前者から後者の間に造り替えが行われている可能性が高く、このことから推定すると、上記3つのいずれかの水害が原因となった可能性が高い。これら

の水害は神通川の出水により、古い時期から3500軒、3200軒、3000軒の家屋が浸水したとされる（富山市郷土博1999）。具体的な浸水場所は不明だが、神通川の蛇行地点に近く堤防の決壊が起きやすい城下町周辺は大きな被害を受けたことが推測できる。なお、後者の「前田利同城囲の図」では水路の東部が描かれておらず、復旧の途中段階を表しているのかもしれない。

クランクについては大手筋から東西をみたときの見通しを遮蔽する意味があった可能性を考えたい。城下町の街路の各所にも鈎曲と呼ぶクランクがあり、遠見遮断により敵の攻撃能力を低下させる街路の防御をなしている（古川2014）。このようにⅢ期の造り替えにあたって水路を直線化したこと、上述した規模の縮小化とともに、城郭としての防御意識が失われつつあり、純粹に水路としての機能へ変化したことを見ているのではないか。

## (2) 本調査区の町屋の性格と周辺調査区との比較

本調査区では主に町屋遺構を検出した。まずその性格について検討する。

また、町屋遺構は他に3つの城下町調査で検出している。平成17年度、平成20年度、平成25年度西町（本調査区も平成25年度調査のため区別のためこのように表記する）（第2図）の調査である。これらと比較し各調査区の特徴を検討する。

**本調査区の町屋の性格** 本調査区における生産関連遺物として、SX07・09で出土した鍍の羽口や鉄滓がある。これらは上述したように小鍛冶に関連する遺物とみられる。SX10も覆土に焼土・炭化物や礫を含むことから同じ性格の遺構であった可能性が高い。同じ一番町の平成17年度調査区でも南西部の一角で、羽口や鉄滓を含む鍛冶関連遺構が集中している（富山市教委2006b）。さらに平成25年度西町調査区でも羽口や椀型溝が出土し、生産加工直後とみられる頭部を巻かない釘があることから小鍛冶を行ったことが指摘されている（西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）。平成17年度の調査報告書では、各町屋内で自給自足的に小鍛冶を行っていたことを指摘している（富山市教委2006b）が、平成25年度に行なった2つの調査区でも同様の小鍛冶関連の遺構・遺物を検出していることから、その蓋然性はより高くなつたといえる。各商家で必要とする鉄製道具類のうち少なくとも一部は、外注するのではなく各々が個別に生産していたと考えられる。本調査区に存在した町屋がどのような商品を扱っていたかは不明だが、少なくともある時期には鉄製道具を自給的に生産していくとみられる。

次に遺構の配置からみた土地利用について検討する。本調査区の遺構分布状況をみると、南東側が希薄となる（第5図）。また、井戸は西半部のみに存在する。このように偏在性が認められるのは、同じような土地利用がある程度踏襲され続けたことを示すのではないか。つまり調査区の南東部からその南側にかけて建物が存在し、井戸がある西半部は庭地などとして利用されていたと考えられる。同じような視点で他の調査区をみると、平成17年度調査区では南西部に井戸を含む遺構が密集し、南東部は希薄である。平成25年度西町調査区も南半部に遺構が多く、さらに南半部のなかでも井戸の偏在が認められる。

また、背割水路を横断して武家屋敷と町屋敷をつなぐ上水施設が検出された。高低差から取水口は武家屋敷側とみられる。背割水路SD03の石積みを改修し設置していることから、設置時期はSD03の構築より新しい。19世紀前半～中頃であろうか。町屋敷側にも井戸は存在するためこのような施設を設置して水を引く理由が判然としない。ただ、背割水路周辺は、木戸の設置など武家屋敷と町屋敷を分離する意識が強くみられる（古川2014）にもかかわらず、実際は関係性が認められることである。平成17年度調査でも背割水路に武家屋敷と町屋敷をつなぐ木橋脚と張出しが確認され、行き来が

あったことが明らかになっている。こうした状況は、便宜的・緊急的にとられた措置かもしれないが、前節で指摘した背割水路の規模の縮小化・クランクの消失といった変遷を考慮すると、城下町整備当初（寛文期）にあった武家・町屋の分離意図や防衛意識が、江戸時代末期近くに至り徐々に薄れていくとという時期的な背景を要因とした可能性もある。

**周辺調査区の町屋との比較** 本調査区及び同じ一番町の平成17年度調査区は、上述したように輸の羽口・鉄滓などの小鋳冶遺構にかかる遺物の出土が特に多く、商売に必要な道具を自給的に生産していたとみられる。平成25年度西町調査区は、羽口・鉄滓の出土は上記調査区ほどではないが、加工途中とみられる釘の出土があり、小鋳冶生産を行っていたと考えられる。また、ここでは膨大な木製品、特に曲物の薄い板材・端材が出土し、木材加工施設が存在したとみられている（西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）。釘は木製品の製作のために生産されたものかもしれない。

一方、旅籠町の平成20年度調査区は、遺構密度が高いものの生産関連遺物はほとんど出土していない。これは文字通りこのあたりが「旅籠」すなわち宿場だったことの証左であろう。

これまで城下町の発掘調査は一部を行ったに過ぎないが、各地点において特徴的な遺構・遺物の出土状況が認められ、町屋を推測する手がかりが得られている。

### (3) まとめ

本調査では背割水路の残存状況が比較的良好く、3時期の変遷を確認した。過去の調査成果も含めると、全体としては少なくとも4期の変遷があることが明らかになった。また、水路の構造を推測し、幕末頃になされたⅡ期からⅢ期への造り替えについては河川氾濫による埋没が原因と推測した。

現在でも、ほぼ背割水路が存在した地点を境に、北側は「絶曲輪」という城の外郭を示す地名、南側は「旅籠町」「越前町」「一番町」「西町」など町入地を示す地名が残る。外堀ではなく、背割水路が地名境界となっていることからも重要な意味をもっていたことがうかがえる。

本調査区では町屋遺構のなかに鋳冶関連遺物を多く含むものがあり、当該地の商家において自給的な小鋳冶を行っていたことを推測した。また、これまでの城下町主要部の発掘調査成果を瞥見した結果、地点ごとに認められた異なる遺構・遺物の組成は町屋で行われていた商行為の違いを示すと考えられ、城下町の様相が明らかになりつつある。

今回の調査成果は町屋遺構を主とするものであったが、他の調査区では武家屋敷地について多くの成果が得られている。町屋敷と武家屋敷地を細かく比較検討していくことで生活や土地利用の違いが明らかになると思われる。また、本来隣てられるべき武家屋敷地と町屋敷地の間に、木橋や上水施設など両者が結び付ける遺構が検出されていることに関して、両者がどのような関係にあったのかも今後追求すべき課題であろう。

（野垣）

## 引用・参考文献

### 第1～3・5章

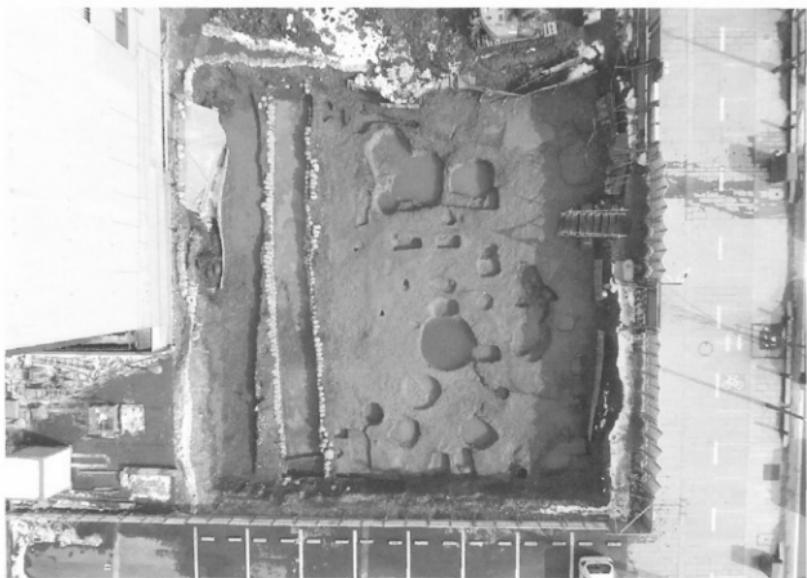
- 1 愛知県陶磁資料館 1990 『越中のやきもの』
- 2 安芸絵子 2000 『掘り出された人形』『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
- 3 安芸絵子 2001 『遊・玩具1 やきもの製人形類』『国説江戸考古学研究事典』 柏書房
- 4 石川県郷土文化財センター 2002 『金沢市木ノ新保遺跡』
- 5 市田京子 2000 『江戸時代の下駄』『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
- 6 伊万里市史編さん委員会 2006 『伊万里市史』陶磁器編（古唐津・鍋島）
- 7 江戸遺跡研究会 2001 『国説江戸考古学研究事典』 柏書房
- 8 大阪市建設局 2007 『太閤（背割）下水』『大阪の下水道』No.26
- 9 大橋康二 1994 『古伊万里の文様－初期肥前鉢器を中心に－』 理工学会
- 10 奥村寛純 1976 『伏見人形の原型』 伏興舎
- 11 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の百年』
- 12 金沢市 2006 『広板遺跡（1丁目）Ⅲ』
- 13 金沢市教育委員会 1992 『金沢の歴史的建築と町並み』
- 14 金沢市教育委員会 1994 『金沢の歴史的建築と町並み－歴史的文脈の再構築に向けて－』
- 15 関西近世考古学研究会 2008 『土人形が見た近世社会』『関西近世考古学研究』16
- 16 北原直喜 2000 『今戸人形論』『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
- 17 木立雅朗 1997 『伏見人形の窯をめぐって－近世京都の窯業についての予察－』『立命館大学考古学論集』I
- 18 木立雅朗 2001 『伏見人形の成立と発展をめぐる二つの背景－近世窯業の発展と精神文化－』『立命館大学考古学論集』II
- 19 岐阜市歴史博物館 2010 『越中と美濃を結ぶ考古展－城と都市－』 城と都市展実行委員会
- 20 京都市郷土文化財研究所 2007 『伏見城跡』
- 21 京都府立総合資料館友の会 1981 『日本の郷土人形』
- 22 久保尚文 1963 『越中中世史の研究 室町・戦国時代』 桂書房
- 23 黒部市教育委員会 2013 『北堀切遺跡Ⅳ－4区発掘調査報告書』
- 24 国香正移 1995 『富山市内の微地形調査』『巡査研究』第3号 富山巡査研究会
- 25 佐賀県立九州磁器文化館 1995 『柴田コレクションIV－古伊万里様式の成立と展開－』
- 26 佐賀県立九州磁器文化館 1997 『柴田コレクション（V）－延宝様式の成立と展開－』
- 27 佐賀県立九州磁器文化館 1998 『柴田コレクション（VI）－江戸の技術と装飾技法－』
- 28 佐賀県立九州磁器文化館 2003 『柴田コレクション総目録』
- 29 佐賀県立九州磁器文化館 2008 『土の美・古唐津・肥前陶器のすべて－』
- 30 定塚武敏 1983 『富山の近世陶磁』『世界陶磁全集』9 小学館
- 31 沙留地区遺跡調査会 1996 『沙留遺跡』
- 32 堀見青嵐 1967 『伏見人形』河原書店
- 33 新越中風土記刊行会編 1978 『新越中風土記』 刊土社
- 34 新宿区教育委員会 1990 『紅葉源遺跡』
- 35 新宿区四谷一丁目遺跡調査団 1998 『四谷一丁目遺跡』
- 36 高岡市教育委員会 2011 『詩物語の町並み 金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』
- 37 高瀬保彌 1987 『富山藩侍領』 越中資料集成1 桂書房
- 38 立山町教育委員会 1994 『芦膳寺室堂遺跡』
- 39 多田敏捷編 1992 『めんこ・ビー玉』『おもちゃ博物館』④ 京都書院
- 40 谷口尚弘 1993 『下水排除施設に関する史的考察』『衛生工学シンポジウム論文集』1 北海道大学
- 41 谷田有史 2000 『江戸時代のたばこ』『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
- 42 俵作編 1978 『日本の土人形』 文化出版局
- 43 東京下水道史探訪会 1995 『江戸・東京の下水道のはなし』
- 44 東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『内藤町遺跡』

- 45 東京都埋蔵文化財センター 2005 「新宿六丁目遺跡」
- 46 研究会 1978 「御祓野遺跡群子爵調査概要」
- 47 研究会 2008 「増山城跡総合調査報告書」
- 48 研究会 2010 「砺波市遺跡詳細分布調査報告書 6 -般若・東較若-」
- 49 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996a 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」
- 50 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996b 「梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告」
- 51 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2009 「竹ノ内II遺跡・柿田遺跡・下山新東遺跡・下山新遺跡発掘調査報告」
- 52 富山市教育委員会 2004 「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 53 富山市教育委員会 2005 「富山城跡発掘調査概要」
- 54 富山市教育委員会 2006a 「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 55 富山市教育委員会 2006b 「富山城跡発掘調査報告書」
- 56 富山市教育委員会 2007 「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 57 富山市教育委員会 2008 「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 58 富山市教育委員会 2009 「富山城跡試掘確認調査報告書」
- 59 富山市教育委員会 2010 「富山城跡発掘調査報告書」
- 60 富山市郷土博物館 1995 「加越能のやきもの展」
- 61 富山市郷土博物館 1999 「地図・大水・大事・富山」
- 62 富山市陶芸館 2013 「越中瀬戸焼-新たな息吹」
- 63 富山市立郷土博物館 1960 「越中瀬戸焼」
- 64 富山市路面電車推進室・富山市教育委員会 2009 「富山城跡発掘調査報告書」
- 65 中野高久 1999 「江戸遺跡における貝殻の利用形態-牡蠣殻瓦屋根と貝杓子を中心に-」『東京考古』17 東京考古談話会
- 66 西町南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会 2014 「富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書」
- 67 東池袋四丁目地区市街地再開発組合・玉川文化財研究所 2007 「東池袋II」
- 68 久田勉 2012 「背割(太閤)下水のはなし」「ちんちょうち」第4号
- 69 深田智恵子 2008 「18世紀における京都・兼仁寺門前町家の粋雅について」『生活科学研究誌』Vol5 大阪市立大学大学院 生活科学研究所・生活科学部
- 70 福井市文化財保護センター 2004 「福井城跡IV」
- 71 福岡市教育委員会 1994 「舞崎遺跡 9」
- 72 福岡市教育委員会 2007 「福岡城跡」
- 73 古川知明 2006 「近世富山城の廃止について」『富山史摘要』第149号 越中史論会
- 74 古川知明 2014 「富山城の廃止と城下町の構造」桂書房
- 75 増尾富弼 2000 「江戸時代の銭貨・寛永通宝」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
- 76 宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯試料(1)」「大境」第12号 富山考古学会
- 77 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」「中・近畿の北窯」桂書房
- 78 宮田慎一 1998 「越中瀬戸の成立と展開」「情報と物流の日本史」雄山閣(株)
- 79 安出良美 1988 「越中瀬戸四百年の変遷」「越中瀬戸-発祥四百年記念誌-」越中瀬戸焼四百年記念顕彰会実行委員会
- 80 山村博美 2000 「江戸時代の化粧」「江戸文化の考古学」吉川弘文館
- 81 山本久作 1934 「越中製陶史稿」岸久幸注

#### 第4章

- 82 相川廣秋・加藤延夫 1938 「魚類の年齢判定(豫報I)」『日本水産学会誌』7-2
- 83 安部みき子編 2009 「鳥の骨探」NTS
- 84 安藤一男 1990 「淡水産糞便による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42a NN.Tohoku Geogr.Assoc.
- 85 石川茂雄 1994 「原色日本植物標本写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会
- 86 伊東隆夫 1995 「日本庭園樹木の解剖学的記載I」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所
- 87 伊東隆夫 1996 「日本庭園樹木の解剖学的記載II」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所
- 88 伊東隆夫 1997 「日本庭園樹木の解剖学的記載III」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所

- 89 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所
- 90 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載V」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所
- 91 伊東隆夫・山田昌久編 2012 「木の考古学」出土木製品用材データベース 海青社
- 92 伊藤良永・堀内誠示 1989 「古環境解析からみた陸生珪藻の検討－陸生珪藻の細分－」『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集』17
- 93 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌』6
- 94 岩田利治・草下正夫 1959 増訂邦彦松柏園説、業業図書
- 95 上野輝弥・山崎京美 2008 「硬骨魚類の額と歯」 アート & サイエンス工房 Talai
- 96 江田真穂・井上貴央 2011 「非計測形質によるキジ科遺存体の同定標準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』28 動物考古学研究会
- 97 奥谷齊司編 2000 「日本近海貝類図鑑」 東海大学出版会
- 98 小杉正人 1986 「熱生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植物史研究』1
- 99 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 (1)
- 100 西中川敬惟 2008 「イヌの骨計測値からの骨長並びに体高の推定法」『動物考古学』25 動物考古学研究会
- 101 納屋内高史 2010 「富山城下町(町人地)出土の動物遺存体」『富山市考古資料館報』No.47 富山市考古資料館
- 102 納屋内高史 2012 「近世富山城下町出土の動物遺存体 - 2006 - 2008 年度調査出土資料の紹介 - 」  
『富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報 富山市の遺跡物語』No.13 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 103 橋本鉄男 1979 「ろくろ」「ものと人間の文化史」31 法政大学出版会
- 104 林明三 1991 「日本産木材 級微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
- 105 パリノ・サーヴェイ(株) 2010 「第IV章 理化学分析」  
『富山城跡発掘調査報告書—絶曲輪四丁目・旅籠町地区優良建築物等整備事業に伴う富山城下町の発掘調査報告』  
富山市埋蔵文化財センター
- 106 藤本利之・小澤智生 2007 「疊球列島底植物花粉図鑑」 アクアコアーラ企画
- 107 藤下典之 1984 「出土遺存よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』  
古文化財編集委員会編・同開會
- 108 松井章 2008 「動物考古学」 京都大学出版会
- 109 Asai,K.& Watanabe,T.1995.Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and saproxenous taxa.Diatom,10.
- 110 Desikachari,T.V.1987,Atlas of Diatoms.Marine Diatoms of the Indian Ocean.Madras science foundation, Madras.Printed at TT,Maps & Publications Private Limited,328,G.S.T.Road,Chromepet,Madras-600044.1-13 Plates:401-621.
- 111 Erdtman G.1952,Pollen morphology and plant taxonomy:Angiosperms (An introduction to palynology.I) . Almqvist & Wiksell,539p.
- 112 Erdtman G.1957,Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy:Gymnospermae,Pteridophyta,Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology.II) .147p.Feagri K.and Iversen Johs.1989.Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 113 Horst Lange-Bertalot,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA:Annotated diatom micrographs.Witkowski A.,Horst Lange-Bertalot,Dittmer Metzeltin,Diatom Flora of Marine Coasts Volume1.219 plets.450figs.925pgs.
- 114 Hustedt, F.1930.Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7.Leipzig,Part1,920p.
- 115 Hustedt,F.1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java,Bali und Sumatra.I-III. Arch.Hydrobiol,Suppl.,15,131-809p,1-155p,274-349p.
- 116 Hustedt,F.1959.Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7.Leipzig,Part2,845p.
- 117 Hustedt,F.1961-1966.Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland Oesterreichs unt der Schweiz,7.Leipzig, Part3,816p.



調査区全景（上から）



調査区全景（西から）



SD 03 [背割水路] 全景 (南西から)



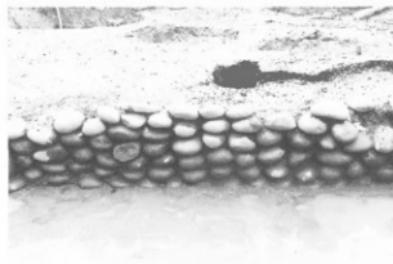
SD 03 北側石積み西部 (南から)



SD 03 北側石積み中央部 (南から)



SD 03 南側石積み中央部 (北から)



SD 03 南側石積み西部 (北から)



SD 01・SD 02・SD 03〔背割水路〕断面（東から）



SD 03内上水施設（東から）



SD 03内上水施設（北から）



上水施設設置によるSD 03石積みの改修（南東から）



SD 02 [背割水路・中央の石列] の検出 (西から)



SE 03 完掘 (東から)



SE 04 下部側板完掘 (南東から)



SE 06 完掘 (東から)



SK 23 断面 (東から)



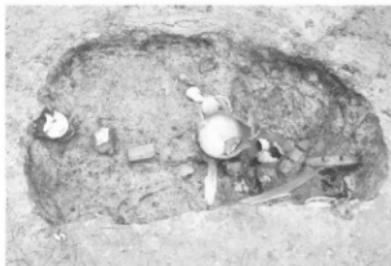
SK 25 断面 (東から)



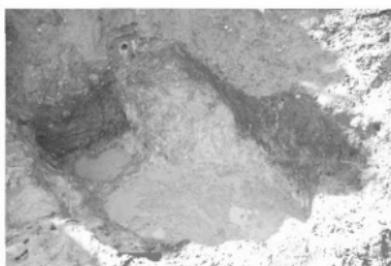
SK 29 断面 (南から)



SK 26 完掘 (東から)



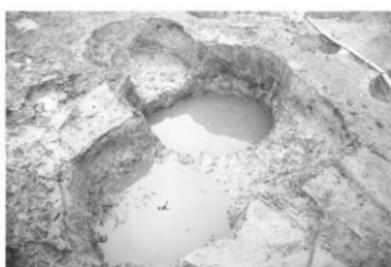
SK 30 遺物出土状況 (南から)



SX 03 完掘 (北から)



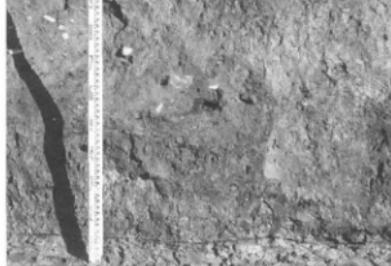
SX 07 完掘 (西から)



SX 10・SK 21 完掘 (南東から)



曲物底板出土状況 (北東から)



調査区北壁層位 (南から)



調査区【B区】全景（西から）



調査区【B区】近景（西から）



SD 03【背割水路】南側石積み根石（西から）



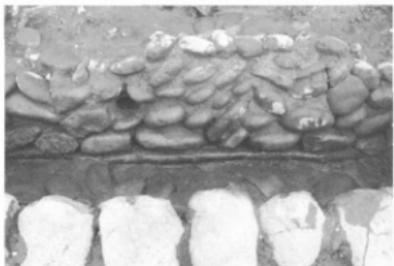
SD 06 完掘（南から）



調査区全景（東から）



SD01 [青割水路] 完掘（東から）



SD01 北側石積み東部・櫛木（南から）



SD01C-C' 断面（東から）



SD 02・03 (1・3・5・6・9・12・14・15) SD 03 (18・20・23・28・35)



29



30



31



40



42



43



46



48



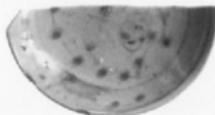
51



50



47



54

SD03 (29~31) SE06 (40) SK16 (42~43) SK18 (46~48) SK25 (50) SK30 (51) SX03 (54)



60



61



65



68



70



74



76



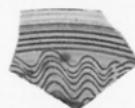
83



87



85



84



90



91



92

SX07 (60·61·83) SX10 (65·84) SD02·03 (68·87·90·91) SD03 (70·74·92) SK30 (76)  
包含層 (85)



95



96



106



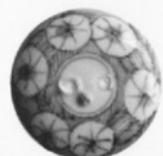
107



108



109



99



102



118



105



122



123



128



116



117



127

SD03 (95・96・99・102・105~109・116~118) SE03 (122・123) SK16 (127) SK18 (128)



134



136



137



138



139



143



147



156



148



158



149



154



155

SK26 (134) SK30 (136~139) SX10 (143) SD02·03 (147~149) SD03 (154~156·158)



SD03 (165~167・177・184・188・189) SK30 (170・171・173) SX04 (174)



SX04 (197) SD03 (198·200·221) SD02·03 (207~209·211·214~216·220)  
包含層 (213·217~219·223)



224



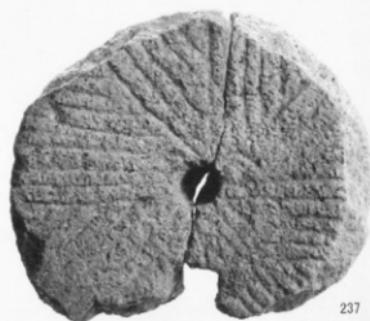
228



230



234



237



235



236



241



242



243



244



245



246



247



248



249



250



251

SX07 (224・228) SX09 (230) SD02 (234) SD02・03 (235・242・249・250) SD03 (236・237・243・251)  
SK29 (244) SX03 (245) 包含層 (241・246) 試掘トレンチ (247) B区捲乱 (248)



254



256



259



255



260



261



262



266



267



—



270



279



280

包含層 (254・255) SD 02 (256) SD 02・03 (259) SD 03 (260・266・267) SK 09 (261) SK 13 (262)  
SK 16 (270) SK 30 (279・280)



290



赤外線



295



赤外線



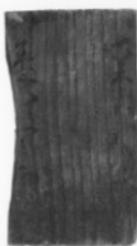
293



292



赤外線



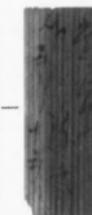
294



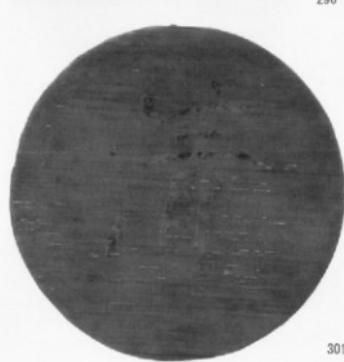
296



300



赤外線



301

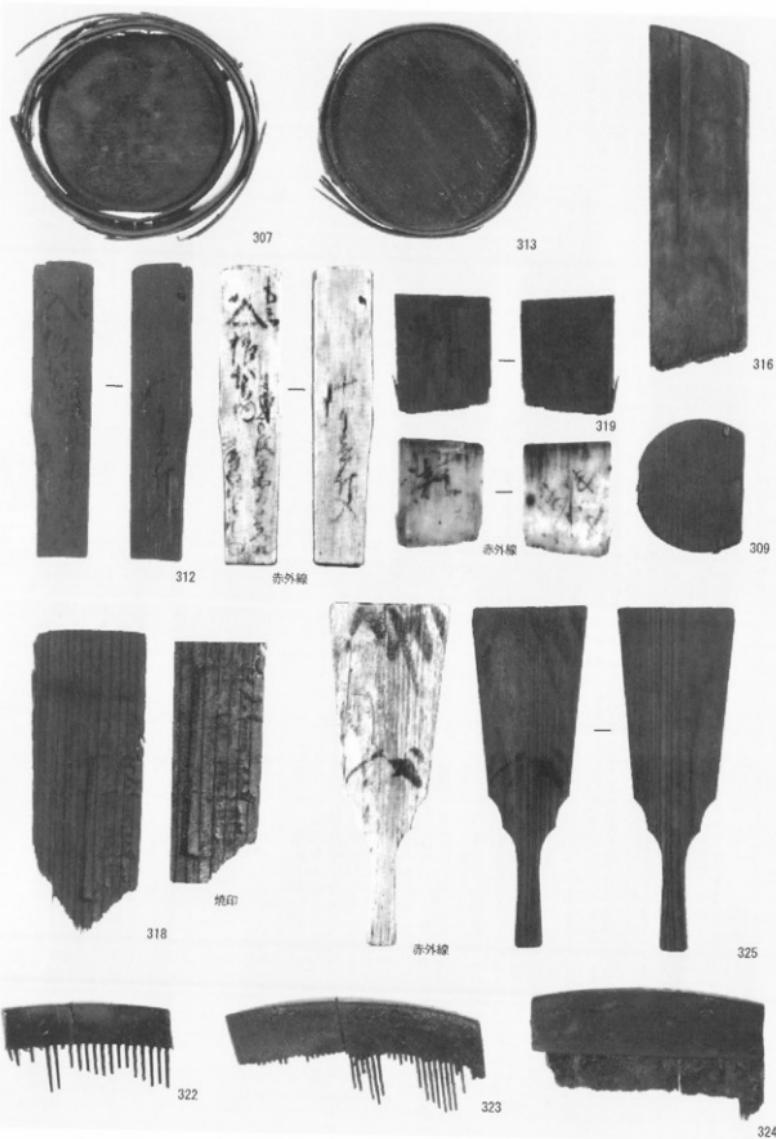


297

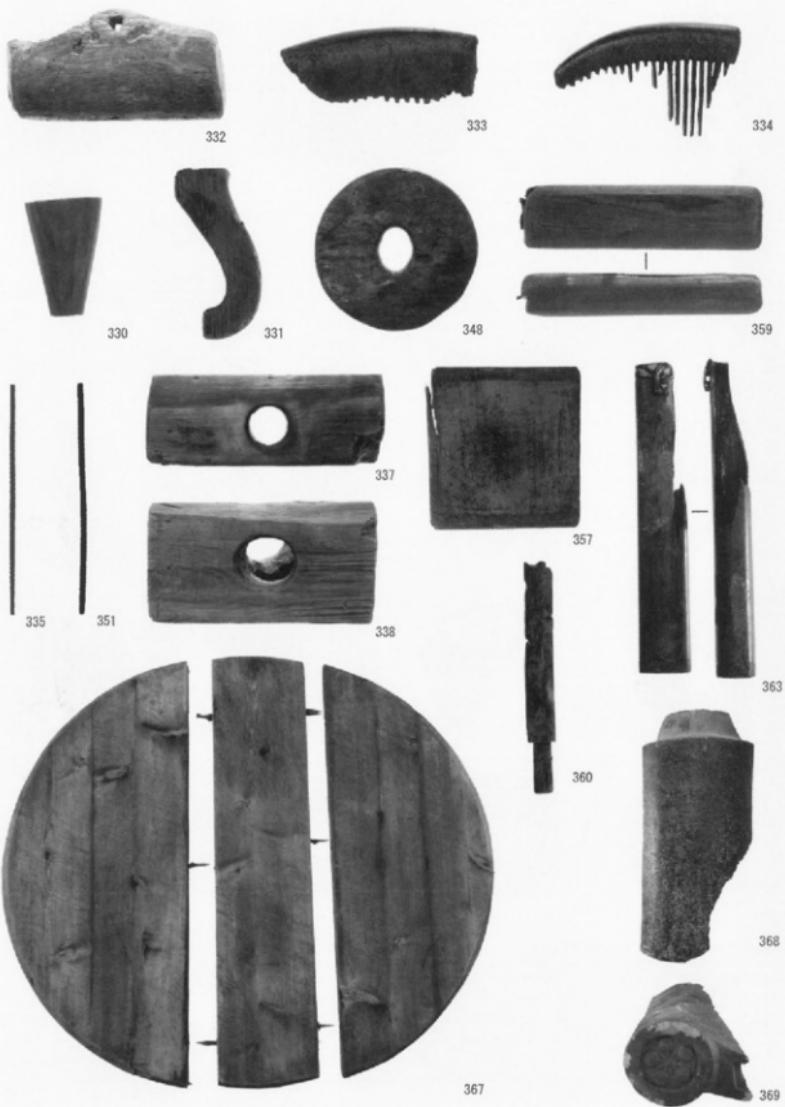


302

SD02 (290) SD02・03 (292~297) SD03 (301・302)



SD05 (307・309) SK25 (312) SK30 (313) 包含層 (318・319) SD02・03 (322～325)



SD 02・03 (330～332) SD 03 (333～335) SD 03内上水施設 (337・338) SK 18 (348) SK 26 (351)  
SX 03 (357) SX 04 (359) SX 07 (360) 包含層 (363・368・369) 曲物底板 (367)



SD01 (370・371・373・376・377・379～381・385～387・391・397) SX01 (394) 包含層 (382・393)

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	とやまじょうかまちいせきしゅようぶはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書							
副書名	一番町共同ビル(仮称)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	70							
編著者名	野垣好史・納屋内高史(富山市教育委員会埋蔵文化財センター) 基峰 修・関 容子(株式会社アーキジオ) 田中義文・齊藤崇人・堀内誠示・高橋 敦・馬場健司・松元美由紀・齊藤紀行(パリノ・サーヴェイ株式会社)							
編集機関	株式会社アーキジオ							
所在地	〒933-0824 富山県高岡市西藤平蔵 581 Tel.0766-63-8850							
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0091 富山県富山市愛宕町 1-2-24 Tel.076-442-4246							
発行年月日	2014年8月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
とやまじょうかまち 富山城下町 いせきしゅようぶ 遺跡主要部	とやまじょうかまち 富山県富山市 いちばんまち 一番町	16201	2011048	36 度 41 分 21 秒	137 度 12 分 43 秒	20131121 ~ 20140228	423m <sup>2</sup>	一番町共同 ビル(仮称) 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
富山城下町 遺跡主要部	城下町	近世	背割水路 上水施設 井戸 土坑 小銀治造構 溝 ピット	肥前、肥前系磁器、唐津、 唐津系磁器、瀬戸系磁器、瀬戸、美濃、越中瀬戸、信楽系磁器、丹波系 陶器、越前、土佐窯(カワラケ)、瓦(賣土器)、輸入陶 磁器、石製品(硯・石臼)、 土製品(土人形・泥面子)、 貝杓子、金属製品(彌管)、 鑿・振り鍼・包丁・刀・把手・ 小判形飾り・錠)、錢貨(寛 永通宝・文久永宝)、漆器 (椀・杓子・和傘)、木製品(下 駄・木札・曲物・横箇・羽 子板・箸・筋か鞘・上水綱 ぎ手・加工板・井戸側板・ 檻)、鐵冶製品(羽口・鉄削)、 瓦(丸瓦・軒棟瓦)	富山城下町の武家屋敷と 町屋敷を区画する石積の 背割水路を良好な状態で 検出し、その構造と変遷 過程を把握した。			
			近代	背割水路 土坑 ピット	統制磁器・人形・九谷、 土製品(鳥形・犬形・林檎 形)、金属製品(コテ)、木 製品(小判状版・栓)、瓦(軒 瓦・軒棟瓦)			
要約	本調査区は、富山城南側の北陸街道沿いの城下町主要部に位置する。18世紀後半から19世紀中頃を主体とする下層面と19世紀後半以降の上層面の2層を検出した。主体となるのは下層面である。 武家屋敷地と町屋敷地を分ける石組みの背割水路を良好な状態で検出し、江戸時代後期頃から昭和初期まで3時期の変遷を確認した。当初約1.5~1.9mの幅があった水路は、徐々に幅を狭くしながら造り替えられた。周辺の発掘調査成果も総合すると、背割水路全体として少なくとも4期の変遷があったことが明らかになった。町屋敷地からは、井戸・土坑等の遺構を検出した。土坑の一部に銀治開造遺物を多く含むものがあり、当該地の商家において自給的な小銀治を行っていたことが推測できる。陶磁器のほか、土人形・下駄・襷・羽子板・傘など多様な遺物の出土があり、町人の暮らししぶりが具体的にわかる良好な資料が得られた。また、自然科学分析から動植物の食物利用や漆器・木製品の素材利用が明らかになった。							

富山市埋蔵文化財調査報告70

**富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書**

-一番町共同ビル(仮称)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

発行日 2014(平成26)年8月29日

編集 株式会社アーキジオ

発行 富山市教育委員会

〒930-0091

富山市愛宕町1-2-24

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

印刷 株式会社トーザワ

